

県道筑紫野・古賀線建設に
伴う発掘調査報告
— 縄文時代・歴史時代の遺跡 —

HARU
原 遺 跡

福岡県文化財調査報告書

第119集

1 9 9 4

福岡県教育委員会

県道筑紫野・古賀線建設に伴う発掘調査報告

— 縄文時代・歴史時代の遺跡 —

HARU
原 遺 跡

福岡県文化財調査報告書

第119集

平成 6 年

福岡県教育委員会



発掘区遠景



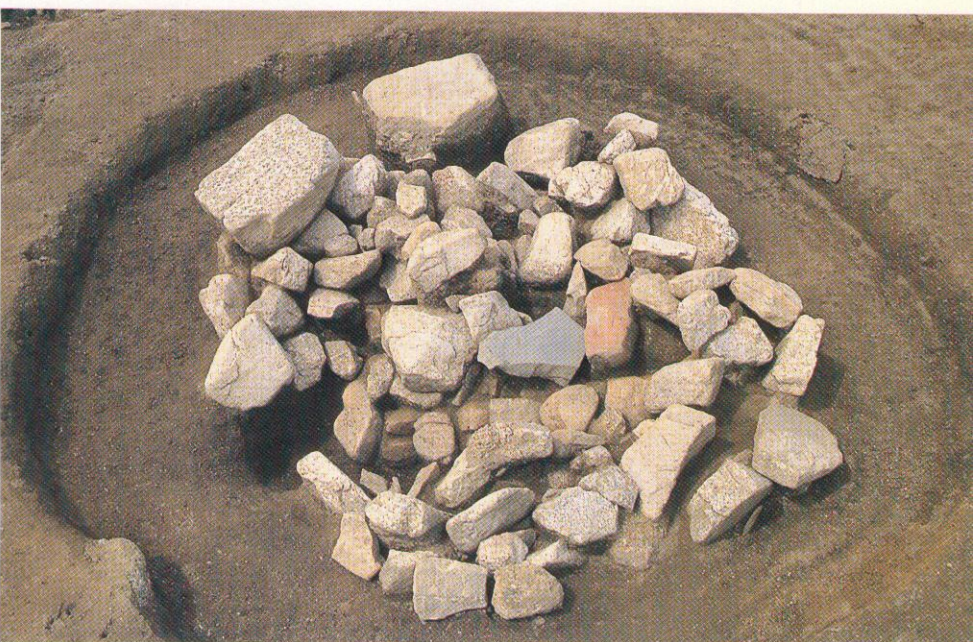
発掘区全景(北から)



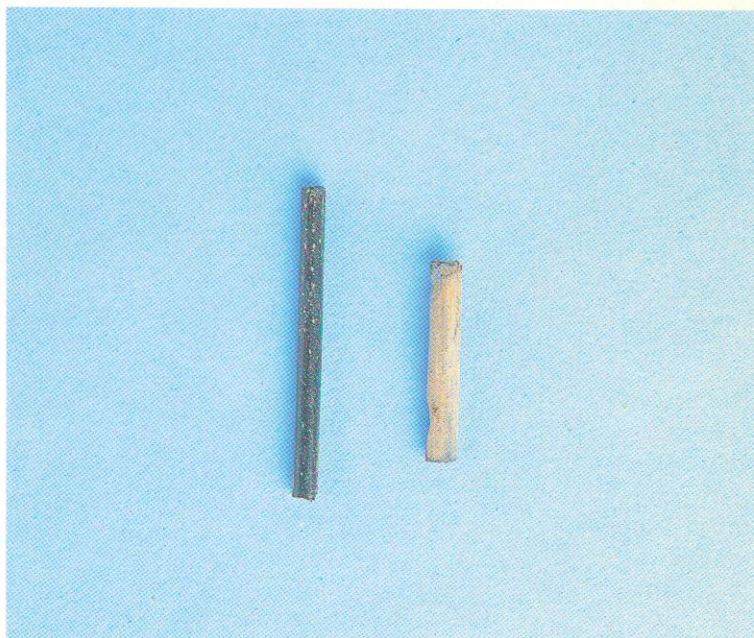
II区 土層堆積状況



Ⅵ区 土層



石組炉検出状況



金属製箸(実寸大)

序

本書は、筑紫野市大字原を經由する県道筑紫野・古賀線の建設工事に先立って発掘調査を実施した原遺跡の調査報告書であります。

この原遺跡は筑紫野市の北東に聳える宝満山の麓に位置しております。宝満山は竈門山、御笠山の名で古来より人々に親しまれて来た山で、その四季を問わず美しい自然は柿本人麿をはじめ数多くの人々によって味わい深い歌が詠まれています。同時にこの宝満山は筑紫の人々にとっては神の山であり、特に大宰府が成立してからは鬼門よけの守護神とされ、その後も修験道の霊山として崇敬されてきた山であります。

こうした豊かな自然と歴史に恵まれた風土を守り、さらに次の世代に伝えていくことこそ現代に生きる私たちの務めであると思います。

今回の発掘調査ではこれまで福岡県内ではあまり調査例の多くない縄文時代早期の集落から多数の土器が出土し、また宝満山の祭祀と深く結びついた平安時代前期の遺物も出土するなど、学術的にも貴重な調査となりました。

この報告書は発掘調査の結果を収録したものでありますが、消え去った原遺跡の姿を後世に伝えるとともに、今後周辺で予想される遺跡の調査や保存に学術資料として利用していただければ幸甚です。

最後になりましたが、この原遺跡の発掘調査に従事していただいた地元の方々をはじめ、報告書作成に御協力いただいた方々、関係各位のご苦勞に感謝いたしますとともに、心よりお礼申し上げます。

平成6年3月31日

福岡県教育委員会
教育長 光安常喜

例 言

1. 本書は、平成4年度と5年度に福岡県教育委員会が福岡県土木部道路建設課（那珂土木事務所）から執行委任を受けて実施した県道筑紫野・古賀線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査記録である。
2. 本調査は原遺跡の第1次調査とする。
3. 本書に掲載した遺構写真は調査担当者が、遺物写真は石丸洋と北岡伸一が撮影した。なお、空中写真についてはフォト大塚に委託した。
4. 出土遺物は岩瀬正信のもとで整理・復原作業を行ない、遺物の実測は主に調査担当者が行い、一部吉田東明・若松三枝子の協力を得た。
5. 遺構・遺物の製図は調査担当者他、豊福弥生・原カヨ子が行った。
6. 火山灰同定のための土壌のサンプリングは九州大学理学部地球物理学教室助手の下山正一先生にお願いした。なお、火山灰そのものの同定と報告については株式会社、京都フィッシュントラックに委託した。
7. 本書の執筆は赤司・水ノ江が担当し赤司以外は目次に記した。尚、火山灰の所見については下山正一先生から玉稿を頂いた。
8. 本書の編集は赤司が担当した。

凡 例

1. 遺構は通し番号を付し、その番号の前に分類記号付けた。ただし、若干の欠番を含む。
2. 発掘区の位置は国土調査法第Ⅱ座標系によって表示する。調査基準点は土木事務所が設置した道路用地内の基準点と、国土調査時の基準点を利用。使用した方位は、座標北（G.N.）である。
3. 遺物注記と報告書記載の遺構番号は一致しないので対照表（別表6）を文中に示した。尚、遺物は報告書記載に従って整理保管し、貸出し及び研究の便宜をはかっている。

本文目次

I	はじめに	1
	調査に至る経過	1
	調査の経過	1
	調査体制	2
II	位置と環境	2
	遺跡の地理的環境	2
	周辺の歴史的環境	4
III	遺構と遺物	7
1	調査の概要	7
	調査の方法	7
	検出遺構の概要	7
2	I区検出遺構	9
	溝状遺構	9
	土壌	10
	遺物集中箇所	11
3	II区検出遺構	12
	竪穴状遺構	13
	溝状遺構	13
	土壌	13
4	III・IV区検出遺構	15
	溝状遺構	15
	土壌	16
	不明遺構	16
5	V区検出遺構	17
	溝状遺構	17
	土壌	17
6	VI区検出遺構	17
	上層遺構	19
	掘立柱建物建物	19
	土壌	19
	炭化物堆積土壌	19
	下層遺構	20
	グリッド調査	20
	検出遺構	23
	石組炉	(水ノ江) 23
	陥し穴	(水ノ江) 24

	土壌	24
7	歴史時代出土遺物	32
	I区出土遺物	32
	II区出土遺物	32
	III・IV区出土遺物	35
	V区出土遺物	47
	VI区出土遺物	49
8	縄文時代出土遺物	49
	縄文土器	(水ノ江) 49
	石器	(水ノ江) 61
9	原遺跡包含土層の観察所見	(下山正一) 76
10	火山灰分析結果報告	(京都フィッシュン・トラック) 77
IV	おわりに	81
1	検出遺構をめぐって	81
2	縄文土器について	(水ノ江) 83
3	S D50出土遺物について	87

図 版 目 次

PL.1	1 発掘区遠景
	2 発掘区全景 南から (空中写真)
	3 発掘区全景 北から (空中写真)
PL.2	1 I区全景 北から
	2 I区全景 南から
	3 S K01
PL.3	1 S K06~13
	2 S K07
	3 S K03
	4 S K08
PL.4	1 S K16
	2 S X20
	3 S X20
PL.5	1 II区全景 北から
	2 II区全景 南から
	3 II区北部分全景 南から
PL.6	1 黄褐色土遺物出土状況
	2 黒褐色土遺物出土状況
	3 土層断面状況

- PL.7 1 IV区全景
- 2 S D50全景東から
- 3 V区全景 南から
- PL.8 1 VI区上層遺構全景 東から
- 2 VI区上層遺構全景 北東から
- PL.9 1 S B150
- 2 S B160
- 3 S B150柱穴断面
- 4 S B150柱穴断面
- PL.10 1 VI区下層遺構全景 北から (空中写真)
- 2 VI区下層遺構検出状況 南半
- 3 VI区下層遺構検出状況 南半
- 4 VI区下層遺構検出状況 西半
- PL.11 1 グリッド全景
- 2 グリッド遺物検出状況
- 3 グリッドH-4区土器1出土状況
- PL.12 1 S X200
- 2 S X100
- 3 S X120
- 4 S K170
- 5 S K180
- PL.13 1 S K190
- 2 S K89
- 3 サヌカイト製礫器 (49) 出土状況
- PL.14 1 西側土層断面
- 2 東側土層断面
- 3 S K97
- PL.15 1 S K119遺物出土状況
- 2 S K161
- 3 S K168
- 4 S K130
- PL.16 I・II区出土土器
- PL.17 III・IV区S D50出土土器
- PL.18 S D50出土土器
- PL.19 S D50出土土器
- PL.20 S D50出土土器
- PL.21 S D50出土土器
- PL.22 S D50出土土器

- PL.23 S D50出土土器
- PL.24 S D50出土土器・陶磁器
- PL.25 IV・V・VI区出土土器・石製品
- PL.26 縄文土器第1類
- PL.27 縄文土器第2 a・2 b・2 c類
- PL.28 縄文土器第2 c・2 d類
- PL.29 縄文土器第3～6類
- PL.30 縄文土器第7～9類
- PL.31 縄文土器第10～17類
- PL.32 縄文時代の石器

挿 図 目 次

Fig.1 原遺跡の位置と周辺遺跡 (1/25,000)	3
Fig.2 調査地点位置図 (1/5,000)	6
Fig.3 路線と発掘区 (1/2,000)	7
Fig.4 I区遺構配置図 (1/300)	8
Fig.5 土壌実測図 (1) (1/60)	9
Fig.6 土壌実測図 (2) (1/60)	10
Fig.7 S X20土器・石器出土分布図 (1/100)	11
Fig.8 II区遺構配置図 (1/300)	12
Fig.9 土壌実測図 (1/60)	13
Fig.10 包含層土器・石器出土分布図 (1/125)	14
Fig.11 III・IV区遺構配置図 (1/300)	15
Fig.12 溝S D50実測図 (1/150)	16
Fig.13 V区遺構配置図 (1/200)	17
Fig.14 VI区遺構配置図 (1/300)	18
Fig.15 掘立柱建物実測図 (1/80)	19
Fig.16 上層土壌実測図 (1/60)	20
Fig.17 炭化物堆積土壌実測図 (1/40)	20
Fig.18 グリッド遺物・礫出土分布図 (1/80)	21
Fig.19 石組炉実測図 (1/30)	22
Fig.20 陥し穴状土壌実測図 (1/40)	23
Fig.21 土壌実測図 (1) (1/60)	25
Fig.22 土壌実測図 (2) (1/60)	26
Fig.23 土壌実測図 (3) (1/60)	27
Fig.24 土壌実測図 (4) (1/60)	28
Fig.25 土壌実測図 (5) (1/60)	29

Fig.26	土壙実測図 (6) (1/60)	30
Fig.27	土壙実測図 (7) (1/60)	31
Fig.28	I区出土土器実測図	32
Fig.29	II区出土土器実測図	33
Fig.30	III・IV区溝S D50出土土器実測図 (1)	36
Fig.31	III・IV区溝S D50出土土器実測図 (2)	37
Fig.32	III・IV区溝S D50出土土器実測図 (3)	38
Fig.33	III・IV区溝S D50出土土器実測図 (4)	40
Fig.34	III・IV区溝S D50出土土器実測図 (5)	41
Fig.35	III・IV区溝S D50出土土器・硯実測図	43
Fig.36	III・IV区溝S D50出土土器・陶磁器実測図	44
Fig.37	III・IV区溝S D50出土土製品・金属製品・瓦実測図	45
Fig.38	IV区その他の遺構出土土器・土製品実測図	46
Fig.39	V区出土土器実測図	46
Fig.40	IV区出土土器・石製品実測図	48
Fig.41	縄文土器第1類土器実測図	51
Fig.42	縄文土器第2a類土器実測図	52
Fig.43	縄文土器第2a・2b類土器実測図	53
Fig.44	縄文土器第2c類土器実測図	54
Fig.45	縄文土器第2d・3類土器実測図	55
Fig.46	縄文土器第3～6類土器実測図	56
Fig.47	縄文土器第7類土器実測図	57
Fig.48	縄文土器第8～10類土器実測図	58
Fig.49	縄文土器第11類土器実測図	59
Fig.50	縄文土器第12～14類土器実測図	60
Fig.51	縄文土器第15～17類土器実測図	61
Fig.52	出土石器実測図 (1)	62
Fig.53	出土石器実測図 (2)	63
Fig.54	出土石器実測図 (3)	64
Fig.55	出土石器実測図 (4)	65
Fig.56	時代別点数表	81
Fig.57	原出土経筒	82
Fig.58	宝満山年表	83
Fig.59	S D50出土個体別総数	87
Fig.60	S D50出土破片総数	87
Fig.61	S D50総破片数の形態別・種別割合	88
Fig.62	S D2340・S X2999・S D50形態別比率	88
Fig.63	S D2340・S X2999・S D50種類別比率	88

別 表

1	S D50出土土器法量表	67
2	遺構別縄文土器出土表	68
3	地区・層位別縄文土器出土表	70
4	掲載縄文土器出土地点表	71
5	掲載縄文石器出土地点表	74
6	原遺跡遺構一覧	75

I はじめに

調査に至る過程

主要地方道筑紫野・古賀線は筑紫野市を起点に、太宰府市・宇美町・須恵町・久山町を通過して古賀町を終点とする全長31.9kmの道路である。近年道路近郊での宅地開発や、工業団地等の開発が進み、この道路の交通量も飛躍的に増加の一途をたどっている。福岡県土木部道路建設課と土木事務事務所は、これらの緩和のために道路の改良工事を進めてきているところである。太宰府市域と筑紫野市域ではその混雑が慢性化しているため、市街地を迂回して、バイパス建設の計画ができた。現在太宰府市域内の建設工事についてはほぼ終了したため、福岡県那珂土木事務所は連続する筑紫野市域内についても早期の開通を目指して、用地買収を開始したところであった。

平成3年4月に那珂土木事務所と福岡県教育庁福岡教育事務所は、工事の概要ならびに用地内の文化財の取り扱いについて協議を実施した。その後、那珂土木事務所より、福岡県教育庁文化課と筑紫野市教育委員会へ埋蔵文化財有無の照会文書が提出された。

平成4年4月25日に福岡教育事務所と筑紫野市教育委員会は当該地の試掘調査を実施した。調査の結果埋蔵文化財が確認できたため、その旨を回答した。筑紫野市教育委員会では本調査の日程がとれないことから、文化課が実施することで協議が整った。平成4年10月7日に土木事務所、文化課、福岡教育事務所の担当者が出席して本調査に向けての協議をおこなった。

調査の経過

調査は平成4年10月27日より重機を用いてI区の表土剥ぎを開始した。11月6日からI区の遺構検出を開始、試掘の結果予想していた歴史時代の遺構は少なく、黄褐色土の埋積したいわゆる風倒木土壌が検出できた。その内の幾つかを試しに掘って見たところ縄文早期の押型文土器が出土。この黄褐色土層は土壌のみでなく発掘区の北側と南側で、後世の削平が比較的免れている場所にはその広がりのあることが判明した。南側の黄褐色土層はさらに西側に広がっており、道路建設に合わせて地下げされる部分と繋がっていることからこれをVI区の調査地点とし、I区を反転した後に調査することにした。11月20からは市道と原川に挟まれたII区の遺構検出に入る。同時にI区の東側に先述の黄褐色土層と遺物に出土状況を観察するために2mグリッドを設定してその掘り下げを行う。12月2日I区の調査を終了。年末年始の休みを挟んで平成5年1月11日II区の下層の調査に入る。1月18日からはIII区の遺構検出を同時に開始する。1月21日、溝SD50の西側を検出。IV区にも延びていることを確認したため合わせてIII・IV区の表土剥ぎを行う。今回最も南側にあたるV区を工事日程の都合で早めに調査を実施してほしいとの申し入れがあったため、1月28・29日の両日で調査を実施した。2月2日、II区の写真撮影と遺構測量を開始する。2月10日、IV区の溝SD50から銅製箸や、越州窯系青磁等が出土する。2月19日には・IV区については補足調査を含めて調査を終了。その後、II区の下層に広がる黄褐色土層を全て除去し、さらに下部に堆積するこく褐色土層を掘り下げたところ、この層中からも縄文土器が出土する事が判明したため、この層を全面的に掘り下げる。2月25日から最後に残されたVI区の遺構検出に入る。3月5日に掘立柱建物等の上層遺構の写真撮影、遺構実測を開始する。3月8日、上層の掘り下げを開始したところ、石組み炉や、多数の土壌を検出。3月19日平成4年度の調査を終了する。

平成5年度は4月6日に調査を再開する。Ⅵ区の下層遺構を精力的に発掘し、平行してⅡ区北側で残されていた畠部分を調査する。中旬には下層遺構の検出を終了する。その後、空中写真撮影を実施し、ただちに遺構図や関連土層図を作成。その後、補足調査を含めて、4月23日には現場での全作業を終了した。

調査体制

発掘調査及び整理・報告書作成の関係者は以下の通りである。

福岡県教育庁	(平成4年度)	(平成5年度)
総括 教育長	光安 常喜	光安 常喜
文化課長	森山 良一	森山 良一
文化財保護室長	柳田 康雄	柳田 康雄
文化財保護室長補佐	井上 裕弘	井上 裕弘
調査班総括	副島 邦弘	橋口 達也
参事補佐	佐々木隆彦	高橋 章
福岡教育事務所技術主査	中間 研志	中間 研志
庶務 文化課管理係長	毛屋 信	毛屋 信
事務主査	富田 浩一	
主任主事		安丸 重喜
調査 主任技師	赤司 善彦	水ノ江和同
筑紫野市教育委員会	奥村 俊久 (試掘調査)	
調査協力者		
	下山 正一 (九州大学) 小林 茂 (九州大学) 磯 望 (西南学院大学)	
	小西 信二 (大宰府天満宮) 横田 義章・倉住 靖彦 (九州歴史資料館)	
	山崎 純男 (福岡市教育委員会) 小西 正捷 (立教大学)	

なお、調査に際しては作業員募集を、原区長阿部久光氏をはじめ周辺の各区長さんの手を煩わせた。また、県文化課の小池史哲氏には一時、調査を担当していただいた。また、文化課・九州歴史資料館・市町村教育委員会文化財担当者の数多くの方に現場や報告書作成の段階で種々の御教示をいただいた。ここでは名前を記さないが、感謝いたします。

Ⅱ 位置と環境

遺跡の地理的環境

遺跡は筑紫野市大字原517他に所在する。筑紫野市は福岡県の南西部に位置し、東は嘉穂郡筑穂町、朝倉郡夜須町と、西は筑紫郡那珂川町と、南は小郡市・佐賀県と、北は大野城市・太宰府市と接する。地形を見ると南西部の脊振山地、北西部の三郡山地の山地帯と、これに挟まれた狭長な平坦部からなり、筑紫平野と福岡平野の接点にあたる。このため古代から交通の要衝として重要な位置を占め、現在も福岡市のベッドタウンとして宅地化が進んでいる。



- | | |
|-------------|-------------------|
| 1 原遺跡(1次) | 10 宝満山旧石器遺跡 |
| 2 宝満山上宮祭祀遺跡 | 11 龍門山寺(大山寺・有智山寺) |
| 3 龍門嶽祭祀遺跡 | 12 宝満山経塚 |
| 4 本谷1号祭祀遺跡 | 13 大宰府天満宮境内地墳墓群 |
| 5 辛野祭祀遺跡 | 14 安楽寺経塚 |
| 6 一の鳥居東祭祀遺跡 | 15 安楽寺(大宰府天満宮) |
| 7 有智山城 | 16 水瓶山経塚 |
| 8 妙見原祭祀遺跡 | 17 原遺跡(原山無量寺・原経塚) |
| 9 中堂跡 | 18 浦ノ城 |

Fig. 1 原遺跡の位置と周辺遺跡(1/25,000)

遺跡はこの筑紫野市と太宰府市にまたがって聳える標高830mの宝満山麓に位置する。宝満山を流下する数多くの小河川は、西麓では御笠川に合流して北の博多湾へと流れ、南麓では宝満川に合流して筑後川に合流し有明海へと注ぐ。この宝満川支流の一つ原川は竈門神社のある内山集落付近に源を発し、水量こそ少ないが概して急勾配の河川でこれまでにいくたびかの氾濫を繰り返し、その侵蝕・運搬作用により河岸段丘を形成している。原遺跡はこの河岸段丘のうち低位段丘に属し、今回の調査地点は標高75m～83mの原川両岸に立地している。当遺跡の段丘面と現河床との比高差は4m前後である。

周辺の歴史的環境

遺跡の所在する旧御笠郡内には枚挙にいとまがないほど数多くの著名な遺跡が知られている。ここではそのうち今回の調査結果と関連する時代と遺跡を中心にみることにする。旧石器時代の遺跡はおもに、大野城（四王寺山）南側の二日市地峡帯で、A Tを含む黒色粘質土層の広がる地域で発見されている。成屋形遺跡^{注1}で縦長剥片のナイフ型石器・ポイント・コアが出土したのを始めをはじめ、条坊第66次調査^{注2}では細石器が発見されている。さらに、遺跡の北東に位置する宝満山遺跡第2次調査地点^{注3}からも横長剥片のナイフ型石器が発見されている。

縄文時代では早期から晩期に至る遺跡が数多く見つかっている。早期の遺跡は明確な遺構の捉えられた例は少ないが、四王寺山山麓や御笠川とその支流周辺からも少なからず押型文土器が出土している。また、1972年頃にはこの原川周辺でも押型文土器が採集されている。前・中・後期は同様に土器の出土する遺跡は少なからずあるが、明確な遺構はないのが現状である。ところが、晩期中頃から遺跡の数は増大する。原口遺跡では炉跡、前田遺跡では土壇・ピットと共に打製石器が出土しており、丘陵裾部でも遺構が確認されるようになる。この動きは弥生時代前期の集落形成へと連続してゆく。

弥生時代はこれまでの伝統の上に、外来の稲作文化の体系を受け入れた農耕社会を特質とする時代である。玄界灘沿岸から内陸に入ったこの地域は、福岡平野に遅れることなく開始され、中期後半には中核的な集落を中心に幾つかのまとまりが成立している。これらの中でも二日市峯遺跡^{注4}や、隈西小田遺跡^{注5}あるいは、道場山遺跡^{注6}は有力者あるいは小地域の首長墓と認められる。また、最近これまで不明な点が多かった四王寺西南麓でも、現在調査中の国分尼寺遺跡で中期後半の環濠集落が発見され注目されているところである。

古墳時代も前代の地域的なまとまりを継承し、さらに発展して古墳群は形成されている。古墳時代前期のものとして乙金古墳群・宮ノ本古墳群・菖蒲浦古墳群・峠山古墳群・阿志岐古墳群などがこうしたまとまりの首長墳と見ることができ、さらに、この地域一帯の盟主的な首長墳はすでに初期の段階で造営された原口古墳に見ることができ、その後は剣塚1号墳へと繋がってゆく。ただ、この両者間の時期的な空白は、まだ埋められていない。こうした墳墓造営の基盤となった集落は御笠地区遺跡^{注7}をはじめ、現在調査例が増加しているところである。また、この時代の生産遺跡として注目されるのは脊振山から福岡平野に向かって派生する丘陵一帯で展開された牛頸古窯跡であろう。畿内の陶邑古窯跡とならぶ西日本最大の須恵器生産地で、6世紀中頃から操業を開始する。

7世紀後半以降、この地域は古代史の表舞台に躍り出てくることになる。それは東アジアの緊迫した国際情勢と絡んで、北部九州がその地理的特質から、国防の最前線となったことによる。663年の白村江の敗戦の翌年、水城を築き、さらに翌年、大野・基肄の2つの山城を築いたことが日本書紀に記されている。こうした防衛施設は天然の要害をなし、この中心的位置にほぼ同時期、大宰府

政庁を設置していたと考えられる。大宰府政庁や諸官衙を含めたいわゆる大宰府は、古代を通じ対外交渉、内政統括、軍事的拠点として重要な役割を果たしている。遺跡近郊では東側の吉木地区で万葉集にのみ登場する「蘆城駅家」に比定できる遺構が見つかった。

また、この時代を通じ今回の遺跡は、宝満山の山麓に位置することから、宝満山の祭祀や信仰と深い関わりを持っている。宝満山は古くは御笠山、竈門山とも称されている。元来、原始的な精霊信仰からやがて、山神・水神信仰に昇格し、神のよりしろである「御笠」山と呼ばれるようになり、さらには、韓系の竈信仰へと習合し、竈門山と変化したと考えられている。この呼称の変化は、竈門神社の縁起では大宰府の鬼門よけのため664年に竈門山頂に八百万神をまつたという伝承として残されている。竈神は古来家族の繁栄を祈念する家神信仰であるが、大宰府設置にさいしての鬼門よけを契機に、大宰府鎮護のための律令的祭祀という役割を担った竈門神へとさらに習合したものと考えられており、山中で出土する遺物はその事を裏付けるものである。『扶桑略記』によれば803年に最澄が渡海四船の平安を祈り、竈門山寺に薬師仏四軀を彫ったという記録があり、この時期竈門山寺と呼ばれる竈門神社の神宮寺が成立していたことが知られる。また、竈門神社は大宰府のもと叙位昇格を重ね、10世紀前半には式内社に列せられている。

さて、先述の神宮寺に関してはその成立や規模については不明な点が多く、同時に宝満山での律令的祭祀の実体も同様である。そこで、宝満山についての総合的な学術調査が企画され、その一貫として発掘調査が実施されたのは1960年から61年にかけてである。この調査では法城窟祭祀遺跡・上宮祭祀遺跡・下宮礎石群が発掘され、また、これまでに宝満山の山中や山麓で収集された各種の考古遺物についても整理され、それらが『宝満山の地宝』として、近年公にされた。^{注8} 調査成果の一端に触れておくと、まず竈門神社下宮横に今も見ることのできる礎石建物群は創建当時の姿をとどめるものではないが、基壇下部から鴻臚館式軒瓦が出土したことから、大宰府色の色濃い建物でしかも8世紀代にまで遡ることが明らかで、史料に現われる竈門山寺の存在が指摘できる。さらに上宮祭祀遺跡からは、8～10世紀にかけての奈良三彩・滑石製有孔円板・皇朝銭など、沖ノ島と共通した遺物内容から、「遣唐使派遣や大宰府管内の重大な政務にかかわるような内外の国家的祭祀が行なわれていたであろうと推察される」と論じられている。事実、皇朝銭の年代は遣唐使派遣の年代と一致する傾向を看取できる。

その後、さらに宝満山遺跡の研究についての基礎資料ともいえる遺跡分布調査報告書^{注9}が纏められている。こうした成果をもとに現在太宰府市教育委員会は、宝満山の山中や山麓で行なわれる各種の開発に対して文化財保存のための現地踏査や事前発掘調査を昭和61年度から実施している。これら一連の調査は現在までに、14次にわたる調査が行なわれ、それらは先述の「宝満山遺跡」や、「太宰府市史資料編」として一部分が刊行されている。古代の祭祀のみならず、中・近世の遺構も検出され、全山遺跡の様相を呈している。

こうした本格調査の蓄積は徐々に宝満山遺跡の実態に迫るもので、今回の調査も、遺跡立地や豊富な出土遺物の内容など着目すべき点が多いのも確かである。

注1 「成屋形遺跡」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 福岡県教育委員会1977

注2 「太宰府市史考古資料編」太宰府市 1992

注3 「宝満山遺跡」太宰府市の文化財第12集 太宰府市教育委員会 1989

注4 「鉢の記」

注5 「弥生の地宝を掘る」筑紫野市立歴史民俗資料館 1988

注6 「道場山遺跡」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 福岡県教育委員会 1978

注7 「御笠地区遺跡」筑紫野市文化財調査報告書代15集 筑紫野市教育委員会 1986

注8 小田富士雄編「宝満山の地宝」財団法人太宰府顕彰会 1982

注9 小西 信二「宝満山及び竈門神社周辺の遺跡分布調査報告書」財団法人太宰府顕彰会 1984

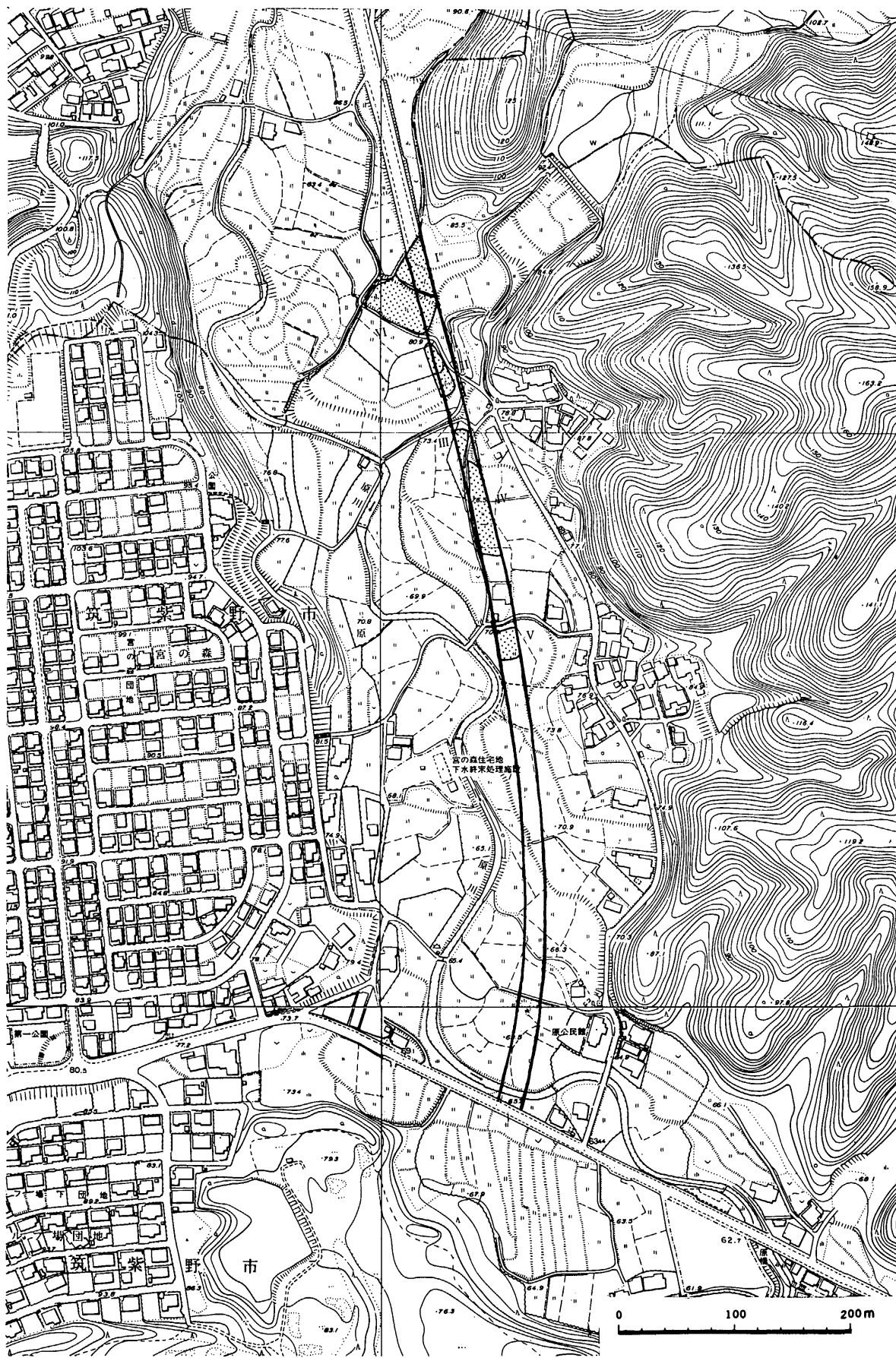


Fig. 2 調査地点位置図(1/5,000)

II 遺構と遺物

1 調査の概要

調査の方法

県道建設予定地の全てを発掘対象地とし全面発掘を実施した。予定地内は範囲内を町道や、原川によって分割されている。そこで、路線内の北側から町道までをⅠ区、町道から原川間をⅡ区、対岸の緩斜面の内町道までをⅢ区、町道と民家の間をⅣ区、さらに、民家南側の発掘区をⅤ区とした。また、Ⅰ区に隣接する水田が道路建設工事に伴って地下げされる為、今回合わせて調査を実施し、この部分をⅥ区とした。なお、Ⅴ区以南の予定地については今回調査と平行して試掘をおこなった。重機で7カ所トレンチを設けた結果、遺構は確認できなかったため全域の調査から除外した。さらに、Ⅱ区とⅣ区については遺構の存在しない箇所を排土置き場として利用した。調査終了面積は約5,000㎡。

現場では遺構全てに通しのS番号を付して遺構実測・遺物取り上げ等の作業を進めた。その後、報告書作成の段階で遺構番号を再度整理している。ここでは遺構番号の冠に平城宮調査に準拠した遺構の性格別に記号をふっている。今回使用した記号は以下の通り。SB=掘立柱建物・SD=溝及び溝状遺構・SK=土壇・SX=その他の遺構

なお、新旧番号の対応は巻末に掲載しているので参考にされたい。

検出遺構の概要

Ⅰ区 縄文時代の土壇・ピット、近世以降の溝状遺構等

Ⅱ区 奈良時代の土壇・溝状遺構、下層に縄文土器包含層

Ⅲ区 奈良・平安時代前期の溝・土壇等

Ⅳ区 奈良・平安時代前期の溝・土壇等

Ⅴ区 平安時代～中世の溝状遺構・土壇

Ⅵ区 平安時代の掘立柱建物・溝状遺構・土壇、下層から縄文時代石組炉・陥し穴状遺構・土壇等

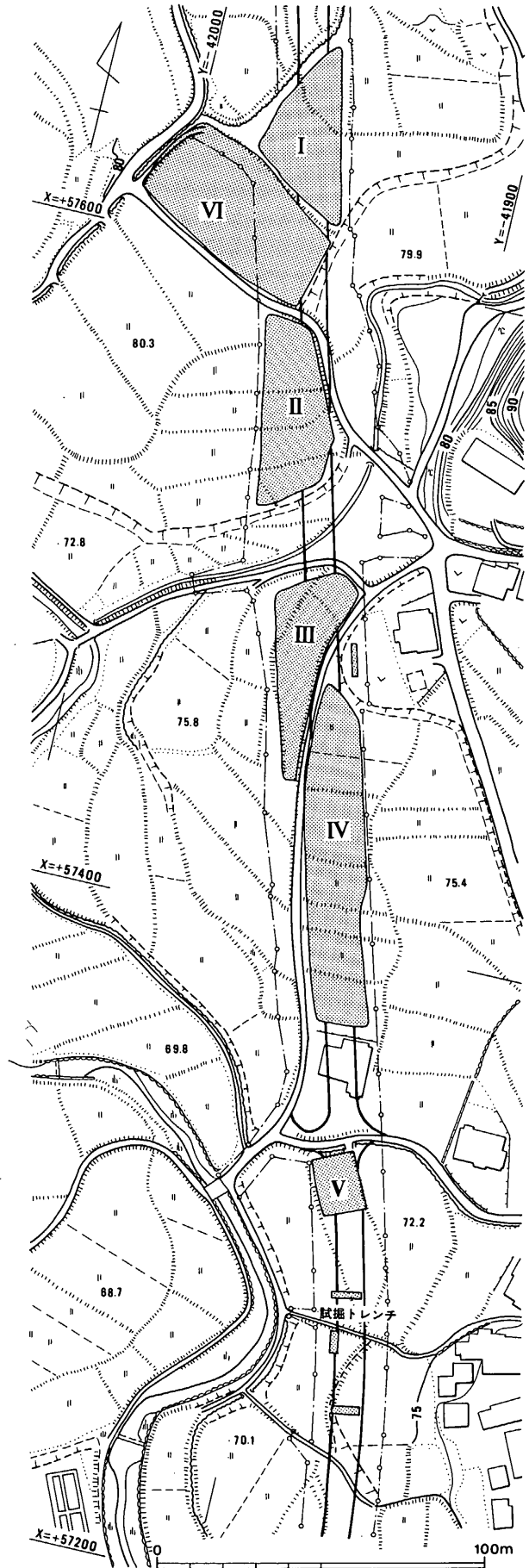


Fig. 3 路線と発掘区(1/2,000)

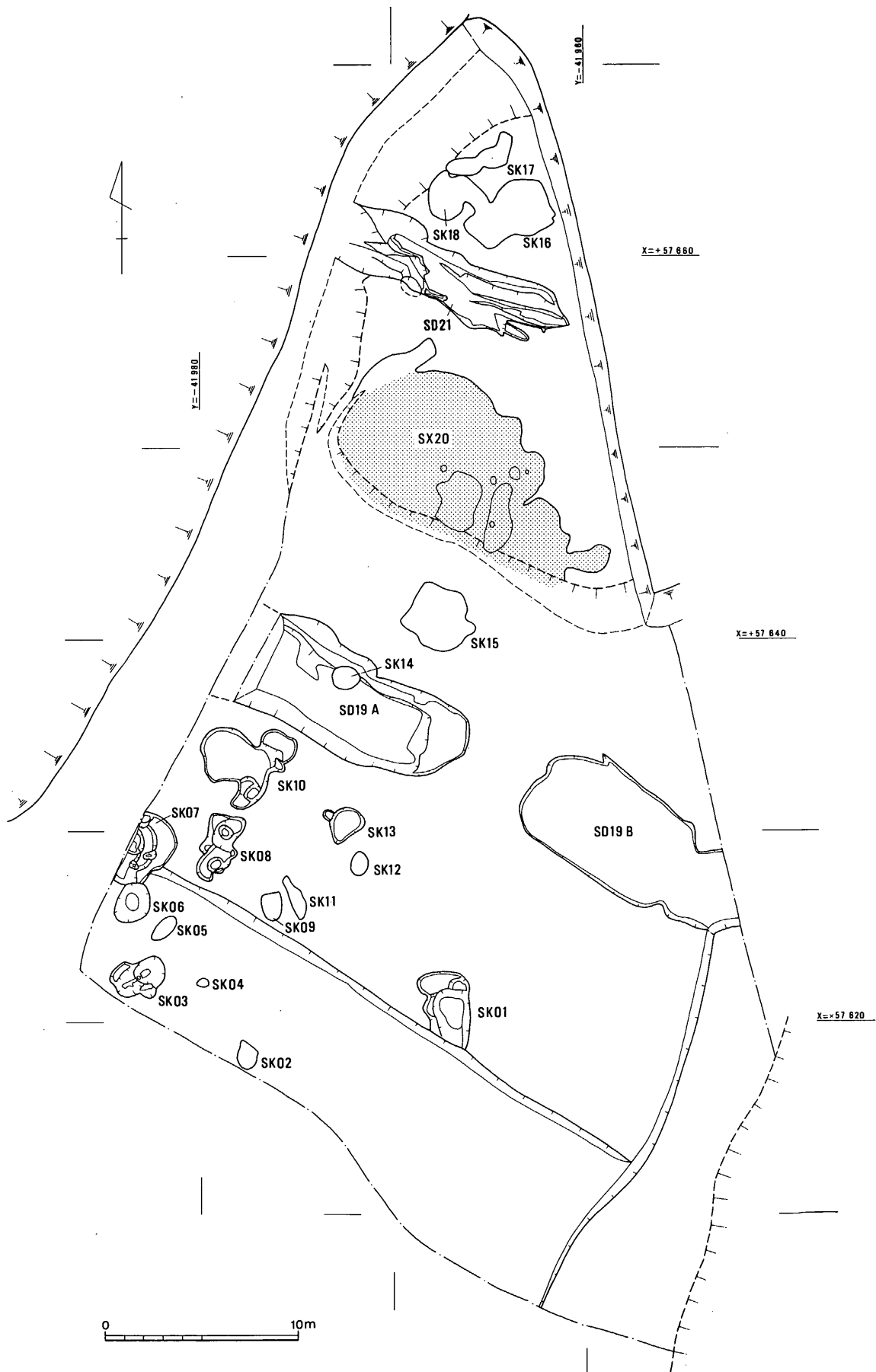


Fig. 4 I区遺構配置図(1/300)

2 I区検出遺構

原川の右岸に位置する標高84m前後の段丘面に展開する。田圃2筆を対象にした。発掘区の層序は表土・床土を除去すると一部で黄褐色土が遺存するが、全体に砂質土に達する。この砂質土が遺構面で、周囲の状況から見て田畑造作時にかなりの削平を受けていたようである。本来緩斜面をなしていた地形を地下げし、平坦な面を作ったため、現状では畦畔に合わせて東西に段が走る。段の下部周囲は上部より、約1m前後下がり、基盤層である砂礫層が露出し、遺構も稀薄になっている。

発掘区の基本層序は床土下部は暗褐色土・黄褐色土（細粒土）・黒褐色土（砂質土）・粗砂あるいは砂質土の順である。このうち黄褐色土はアカホヤ火山灰・大陸起源の黄砂が混合した層で、黒褐色土については腐植を含有するため黒化した層と思われる。

溝状遺構

S D 21 発掘区の北側段の上で検出した溝状遺構。旧地形の鞍部軸線に直交するように掘られる。長さ13m、幅3m前後で出入りが著しい。西側の原川支流に向かって底面は下がる。底面は水が幾筋にも流れたためか凹凸がある。溝としてはなく作業用の路の可能性が高い。近世以降のものであろう。

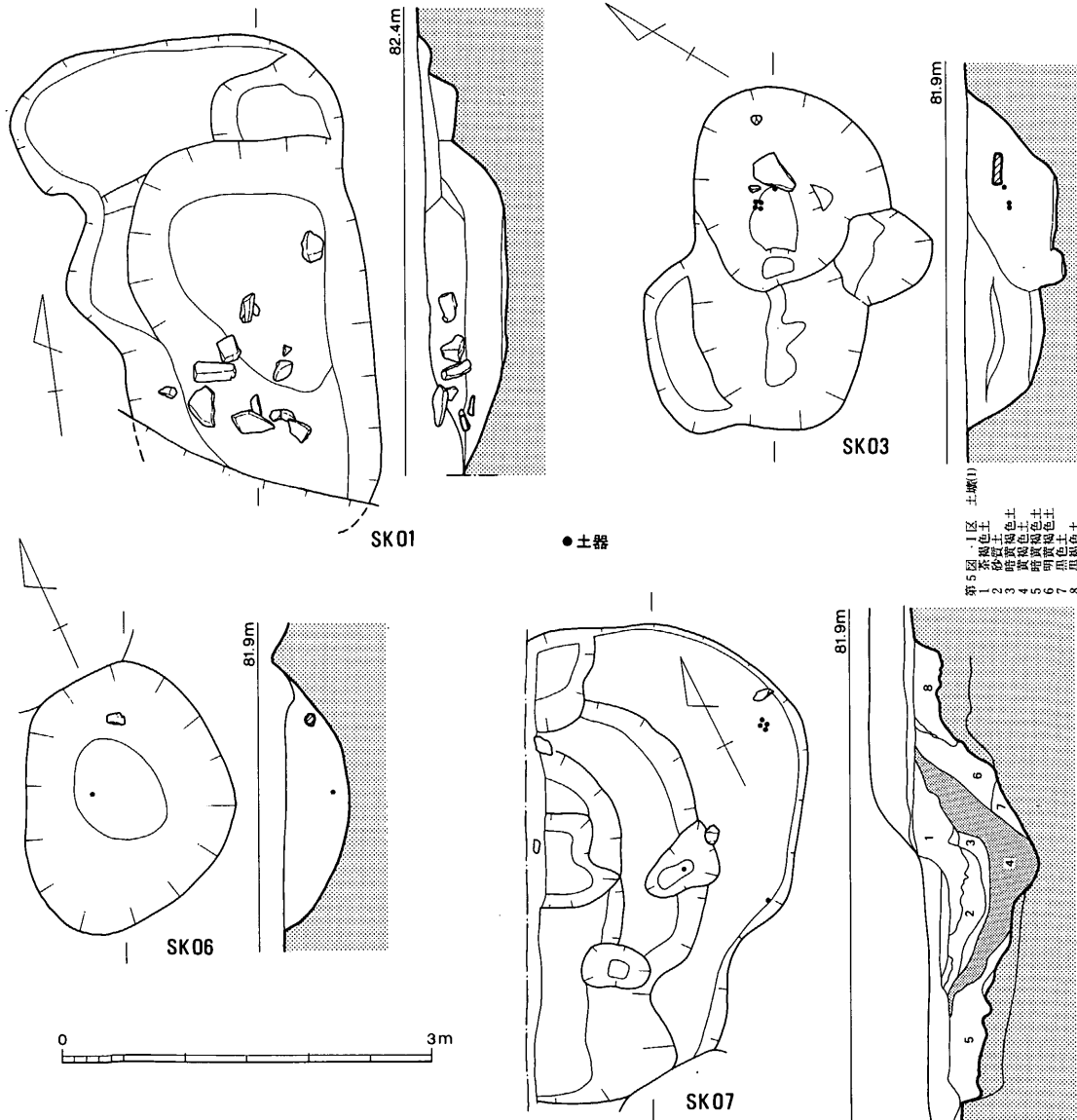


Fig. 5 土層実測図(1)(1/60)

SD19A SD03と同様に西側に向かって底面は落ちる。長さ13m以上、幅5m前後。上部に暗褐色土その下部に茶褐色土が堆積する。水が帯水した痕跡はなく人為的な埋積土である。底面は比較的フラットをなす。埋土中から近世陶器に混じって石鏃・縄文土器等が出土。

SD19B SD19Aの東側で検出した溝状遺構。主軸はSD19Aと合わせる。長さ12m前検出、さらに東へのびる。幅5m前後。深さは0.1センチ前後の浅いもので、底面は平坦程である。現状でSD19Aとの間は4m間隔がある。

土壙 (Fig.5~7, PL2~4)

SK01~SK18 削平をあまり受けなかった上段のテラスと発掘区南側で検出した。基本的には砂質土層上に黄褐色土が堆積したもので、プランは不整円形で、深さは0.3~1.0m。断面計は浅い皿状のもの、中央部が高く周辺が溝状になったもの、播り鉢状になったものがある。

土壙の埋没土層についてはSK07を例に見ると、平面形は発掘区壁際で検出したため全形を知り得ないが、遺構検出の時点で黄褐色土は輪状に観察できた。この輪状の範囲を掘ると、黄褐色土は下部で繋がる同一層であることが判明した。またその上部には基盤層である砂質土が堆積しており、

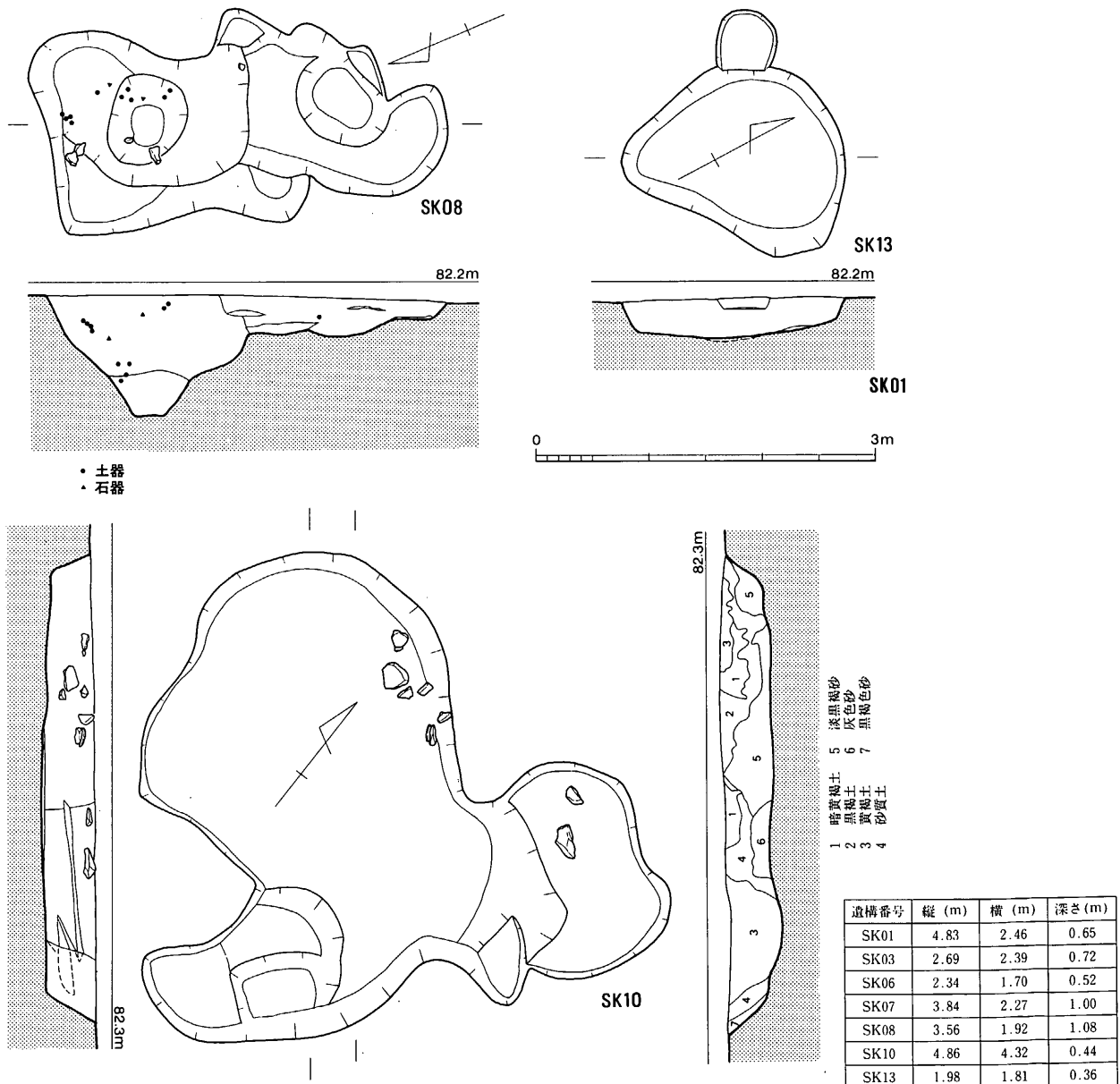


Fig. 6 土壙実測図(2)(1/60)

土層の逆転現象を認めることができる。壁際に周囲から堆積した暗黄褐色土層は二次的な堆積土で、黄褐色土から漸移的に変化する。こうした埋没土層の観察からこれらはいわゆる風倒木に伴うもので、根鉢土壌とでもいうべきものと考えられる。埋土中から縄文早期の土器等が少量出土するものと、全く遺物が出土しなかったものがある。また、SK01では、埋土中に火熱を受けた花崗岩質の平石が割れた状況で出土した。配石遺構の廃棄かもしれない。

遺物集中箇所 (Fig.7, PL4)

SX20 発掘区の上端テラスで検出した黄褐色土の広がりである。本来全域に堆積していたと思われるが、この部分だけ削平を免れたものであろう。範囲は略東西が16m、南北7.5mを測る。215点の土器や石器・自然の小礫が出土した。調査は中央に土層観察用の土畔を設け黄褐色土層を掘り下げて行き、出土する個々の遺物をドットで記入し、遺物番号の厚さで黄褐色土が堆積し、その下部に黒褐色砂質土が堆積している。これより下層にを付して、エレベーションと土層を注記した。堆積土層は上部に0.1~0.7mは礫を含む黒褐色土・淡灰色砂質土・淡黄褐色シルト層が堆積している。黄褐色土は、火山灰や黄砂を含むものであることは先述したが、この下面は不安定に攪乱され小規模のインボリューションになっている。なお、観察用の土手からサンプル採取した黄褐色土については土壌分析を実施した。

土器や石器類はこの黄褐色土層中

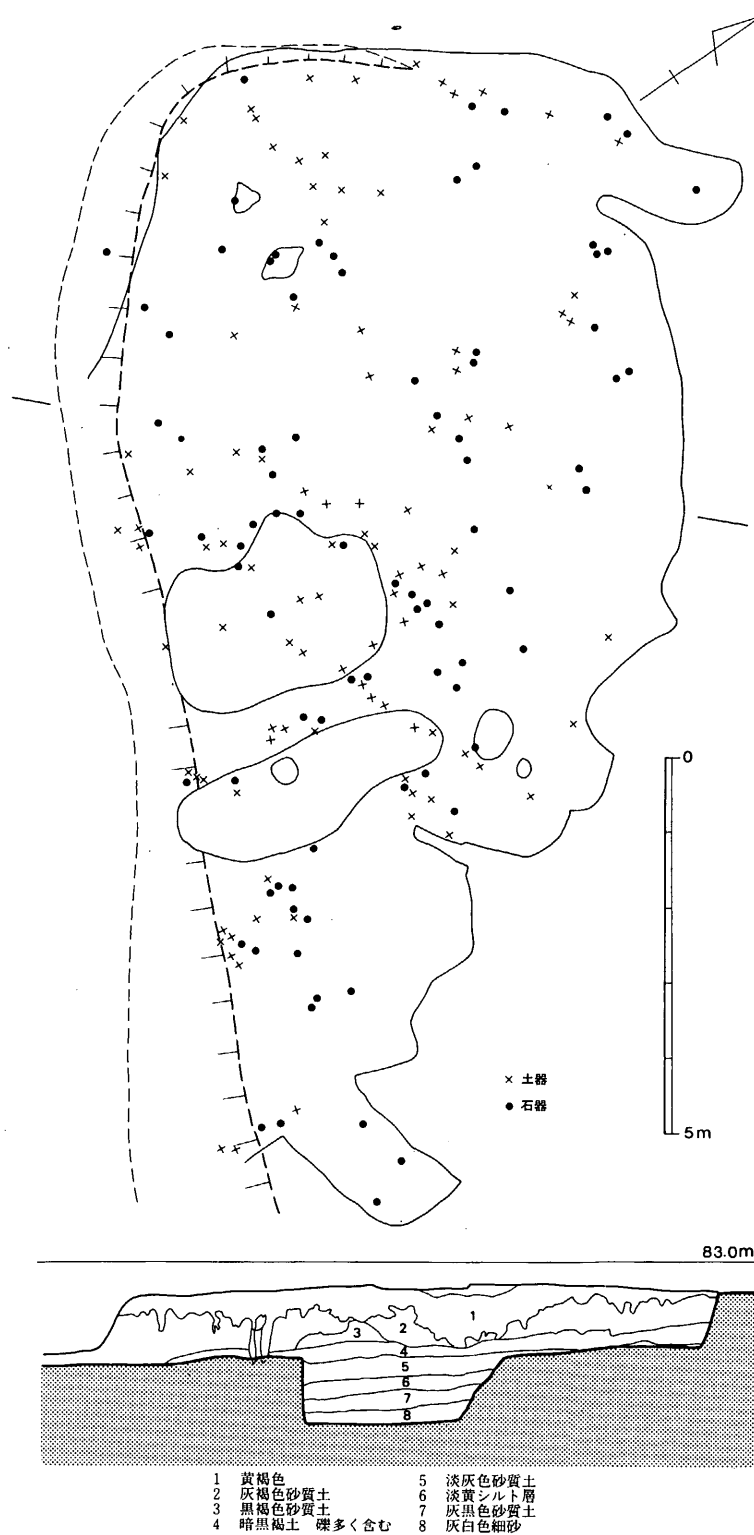


Fig. 7 SX20土器・石器出土分布図(1/100)

からのみ出土した。その分布は全域に及び、微視的に見るとまず第一に中央部分での集中が認められ、興味深いことに土器11片が直列して出土した例がある。さらに北西部では中央を空白にして稀薄だが、環状に石器が集中する箇所がある。凹石や石屑等がほぼ同一レベルから出土しており、一時的な作業場の可能性もある。

3 II区検出遺構

原川の右岸にあって標高77~80mの緩斜面に位置する。田圃5筆を縦断して発掘区を設定。このうち最上段の田圃は、調査開始時点では未だ畠として作物が育てられていたため、翌年度に調査した。発掘区内は畦畔の名残を残し、5つの段で区切られている。

発掘区の層序は以下の通り。比較的層序の追える畦畔2段目付近を見ると、耕作土・床土下部に0.4m前後の盛土がなされ、その下部は暗褐色土・淡暗褐色土が広がる。この層中から奈良・平安時代の遺物が出土する。さらに下部にはI区でも認められた黄褐色土が0.3m前後堆積し、奈良・平安時代の遺構はこの黄褐色土層に切り込んでいることが判明した。さらに下層は黒灰色土が薄く堆積し、この下部はI区同様の黒褐色砂質土に達する。さらに掘り下げると灰褐色砂礫層にいたる。斜面の3段目より下部は花崗岩巨礫を含む砂礫層で、河川の氾濫によって形成されたもので、遺跡の基盤層として最上段まで連続する。

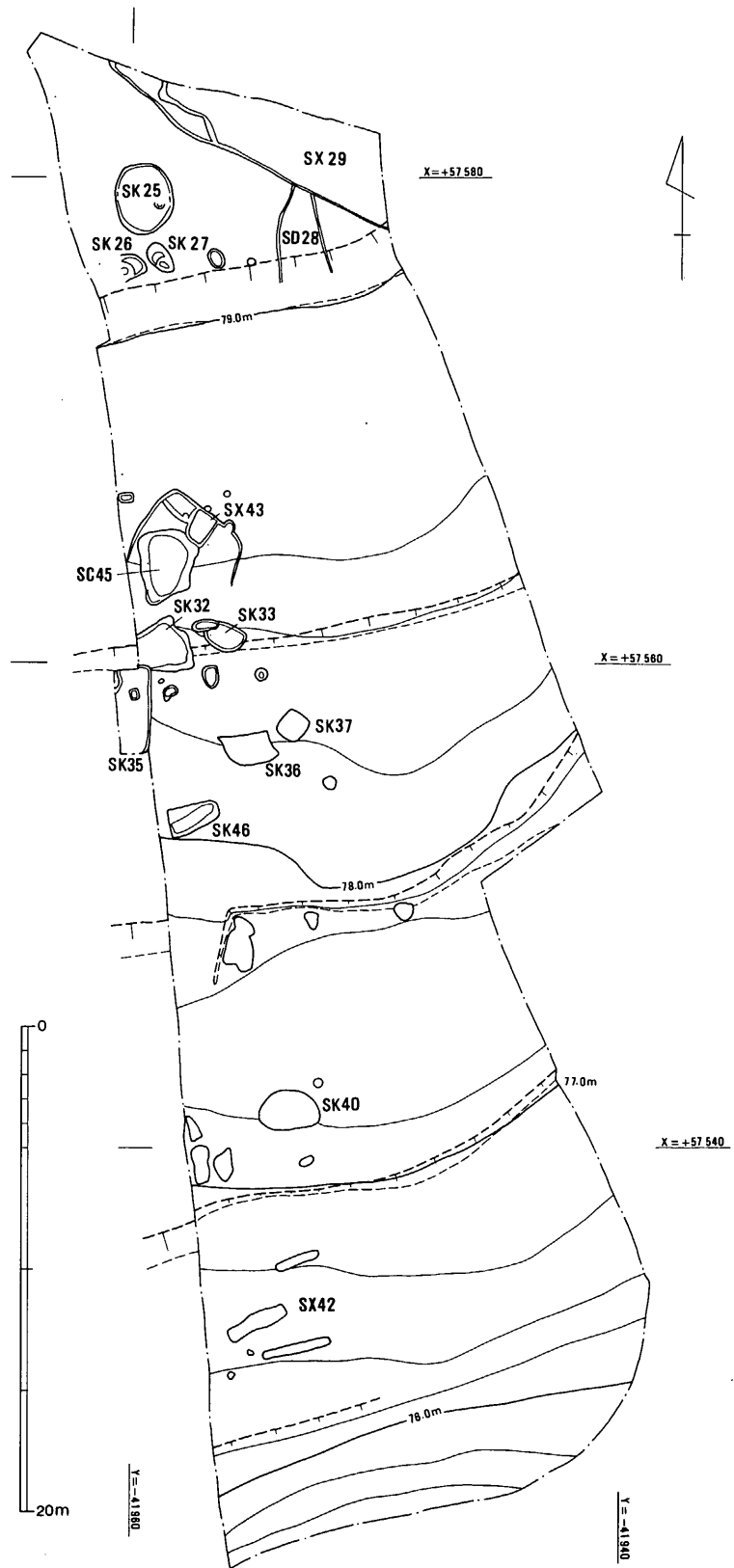


Fig. 8 II区遺構配置図(1/300)

下層の黄褐色土層と黒灰色土層からは押型文土器が少なからず出土した。その範囲は畦畔の範囲である。ただしこの範囲内でも土層の逆転現象が起きているため、必ずしも遺物2段目を中心とする標高78.25~78.90mの出土状況はプライマリーとは認定できない。

竪穴状遺構 (Fig.9)

S C 35 3段目テラスの西側にあつて発掘区に接してた状態で検出。竪穴住居跡の可能性が考えられたため、隣接地を約1m程拡張して調査した。南北3.5m以上、東西1.5m以上。深さ0.15mを残すのみである。床面は凹凸が著しい。北東隅近くに柱穴の可能性あるピットを確認した。深さ0.25m。埋土中から奈良時代後半の土器が出土。住居とは断定できない。

S C 45 2段目テラスの西寄りで検出した竪穴住居状の遺構である。平面プランは略東西4.30m略南北は4.30mの不整な隅丸方形をなす。深さは北側で0.2m前後、南側は徐々に浅くなり東西の壁面は途中で消滅する。床面はやや南側に降り、中央付近に径1.6m、深さ0.25mの断面が浅い皿状をなす土壇を伴う。また、北東隅部にも0.5mの深さの小土壇を伴う。埋土中や土壇内から多量の須恵器・土師器が出土した。柱穴や竈等検出しておらず、S C 35と同じく住居として確実ではない。主軸方位は北から東に30° 近く振れる。

溝状遺構

S D 28 最上段のテラスで検出した溝状の掘込みで等高線に直交して走る。長さ4m程を検出、北側は旧道路の遺構S X 29に切られ不明。南側は畦畔の段落ちがあり、不明である。最大幅2.0m深さ0.3mで南に落ちる。埋土中から土師器甕が出土している。

土壇 (Fig.9)

S K 25 最上段テラスの西側で検出した楕円形土壇。長軸2.9m、短軸2.4m、深さ0.2mを測る。倒木に伴う根鉢土壇か。

S K 26 最上段テラスの西側で発掘区壁に接して検出。畦1m前後の不整円形をなし、深さ0.4m。

S K 27 S K 26のすぐ東側で検出した不整円形の土壇。長軸1.3m、短軸0.85m、深0.6mで、底面

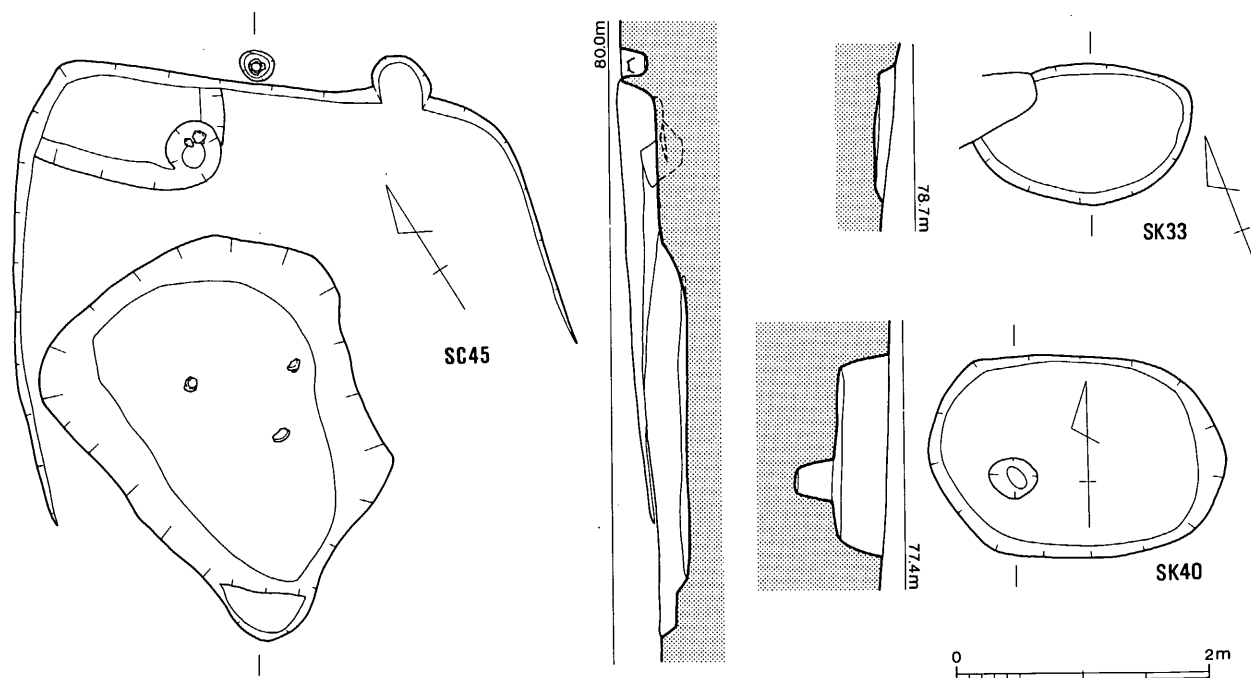


Fig. 9 土壇実測図 (1/60)

は2段になっている。

S K 40 4段目テラスの西寄りで検出した楕円形土坑。長軸2.35m、短軸1.6m、深さ0.2mを測る。底面はフラットをなし、西寄りに径0.3m、深さ0.3mの小ピットがある。主軸はほぼ東西に置く。

S X 42 最下段のテラス西側に纏まる3つの溝状遺構。長さ2~3m、幅0.35~0.7m、深さ0.15m前後。埋土は暗褐色土単一で、自然の落ち込みと考えられる。この暗褐色土層から製塩土器や土師器等が出土している。

S X 43 S C 45の北側に接した位置で検出した径0.25m、深さ0.15mのピット。内部に須恵器杯が被さるようにして遺存していた。

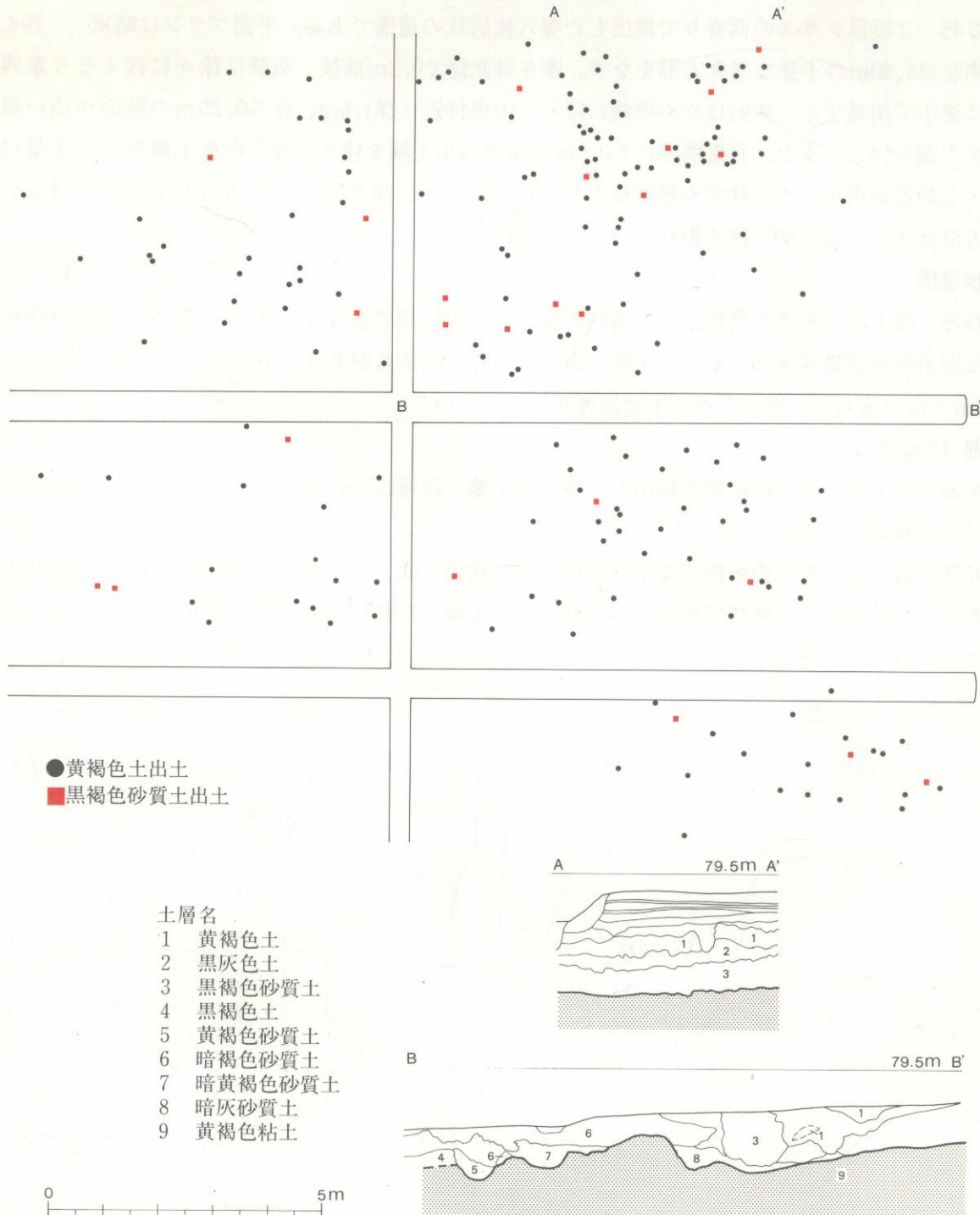


Fig.10 包含層土器・石器出土分布図(1/125)

下層包含層

SC45付近に広がる黄褐色土層から縄文土器等が出土したためこの部分に5mグリッドを設定して掘り下げた。グリッドは黄褐色土の認められる東西15m、南北20mを範囲とした。前述したように黄褐色土は中央付近では南北土層図に見られるように本来下部の黒褐色土と逆転して堆積している。また、この部分では西側グリッドで見られる黒灰色土は堆積していない。比較的プライマリーな状態で観察できた西側壁面の土層では、黄褐色土と黒灰色土は南側に斜面に沿って緩く傾斜している。両土層の下面は出入りが著しく小規模なインボリューションをなしている。遺物の出土状況は、黄褐色土層からは押型文土器や石器を主体に数点の土師器が出土し、下層の黒灰色土層からは押型文土器や石器のみが出土した。

4 III・IV区検出遺構

Ⅲ区は原川左岸に接する標高74m前後の段丘面で、東南は丘陵から張り出した微高地へと続き、Ⅳ区の調査区に至る。原川に接する北半部分では遺構は存在しなかった。南半では溝・小土壙を検出したのみである。Ⅳ区はⅢ区とは市道を挟んで東側に位置する微高地面。検出したのはⅢ区から延びる溝、土壙・ピット等である。層序は単純で耕作土・床土下部に0.15m程の茶褐色土が堆積し淡茶灰色砂質土に達する。この面が遺構面となる。標高76.3~75.0の緩斜面をなす。

溝状遺構 (Fig.12)

SD50 Ⅲ区とⅣ区の境をなす市道を横断して検出した素堀の溝。北東から始まり幾分蛇行しながら南東へ向かう。北西端から約32mを確認したが、東側はさらに南東へ延びてゆく。上端幅は北西が狭く、市道を境に南東側は幅広くなっていく。2.2~5.0m。底幅1.7~2.5m。深さは北西が浅く、0.25m、南東の発掘区壁際で1.55mと深くなっている。溝底はⅢ区では徐々に傾斜して行くが、Ⅳ区側はほと

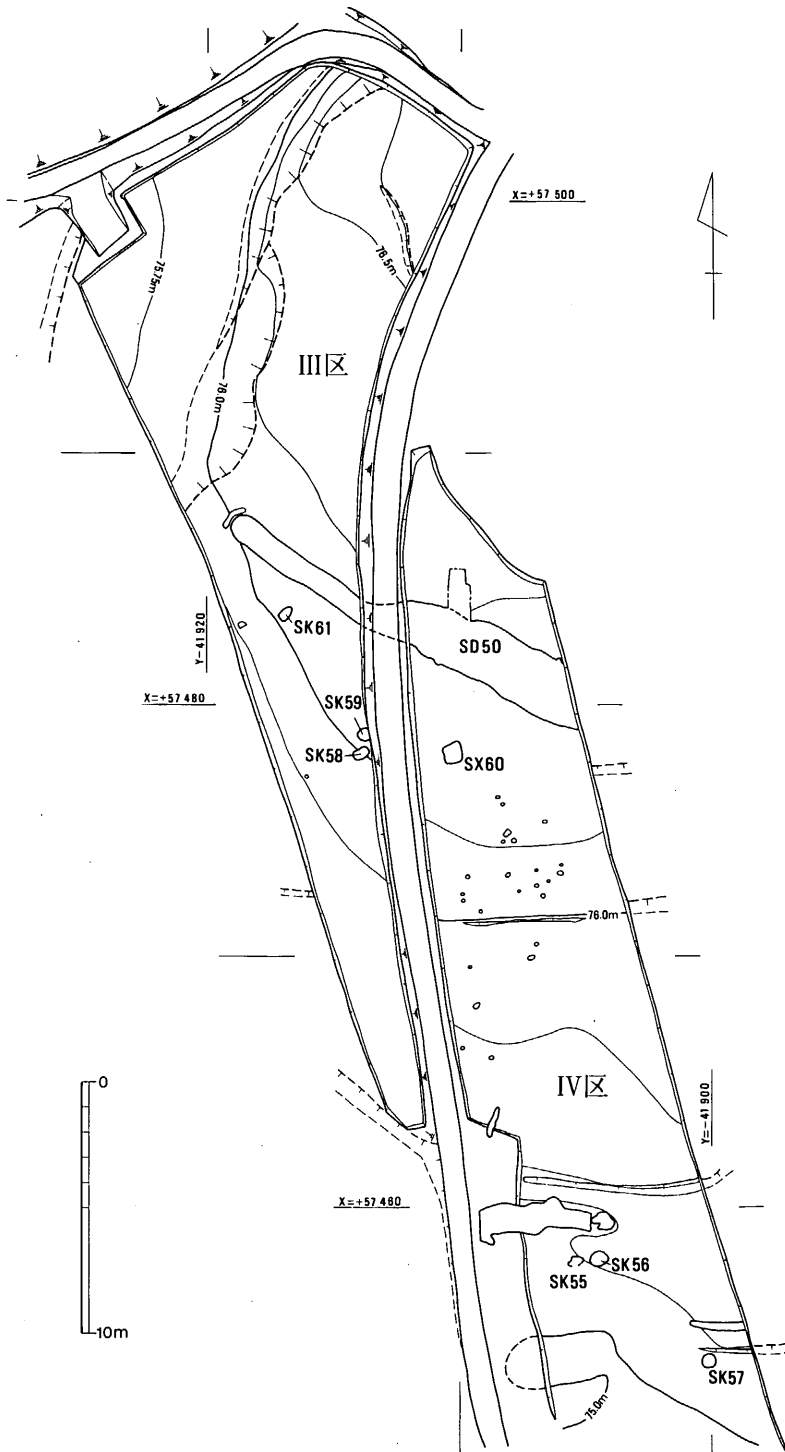


Fig.11 III・IV区遺構配置図(1/300)

んど傾斜が認められない。市道を境になぜこのような違いがあるのか明白でない。別の溝として重複しているのか、あるいは何らかの施設が市道の地下に存在するのかもしれない。

土層は自然堆積して埋没した過程を示し、最下部に砂質土、その上部にIV区側では帯水した状態を残す茶褐色粘質土や砂と粘土の互層が認めうる。また、溝はある程度埋没した状態で使用されていたのか上層に黒灰色土が凹状に埋積している。遺物はおもにIV区の東側発掘区の壁際で出土した。その際多量の花崗岩自然石も出土している。出土状況が南側に寄っていたため、南側には石垣を築いていた可能性もある。遺物は土器・陶磁器・金属製品など豊富に出土している。溝の埋没は9世紀中頃と考えられる。

土壌

S K 56 IV区の南側で検出した楕円形土壌。長軸1.32m、短軸1.2m、深さ0.57m。北側のみ2段掘りとなっている。埋土は淡灰褐色粘質土が堆積していた。

S K 58 III区の溝S D 50南側で検出した小土壌、不整楕円形を呈し、長軸1.3m、短軸0.8m、深さ0.2m。茶褐色土の単一層。

S K 59 S K 58の北側で検出した円形に近い土壌。東側の一部は市道の下部に延びる。径1.05m、深さ0.25m。茶褐色土の単一層

不明遺構

S X 61 S D 50の南側で確認した黄褐色土の広がり。約2m四方の範囲で認められ厚さ0.02m前後。この整地層中から置き竈が出土した。

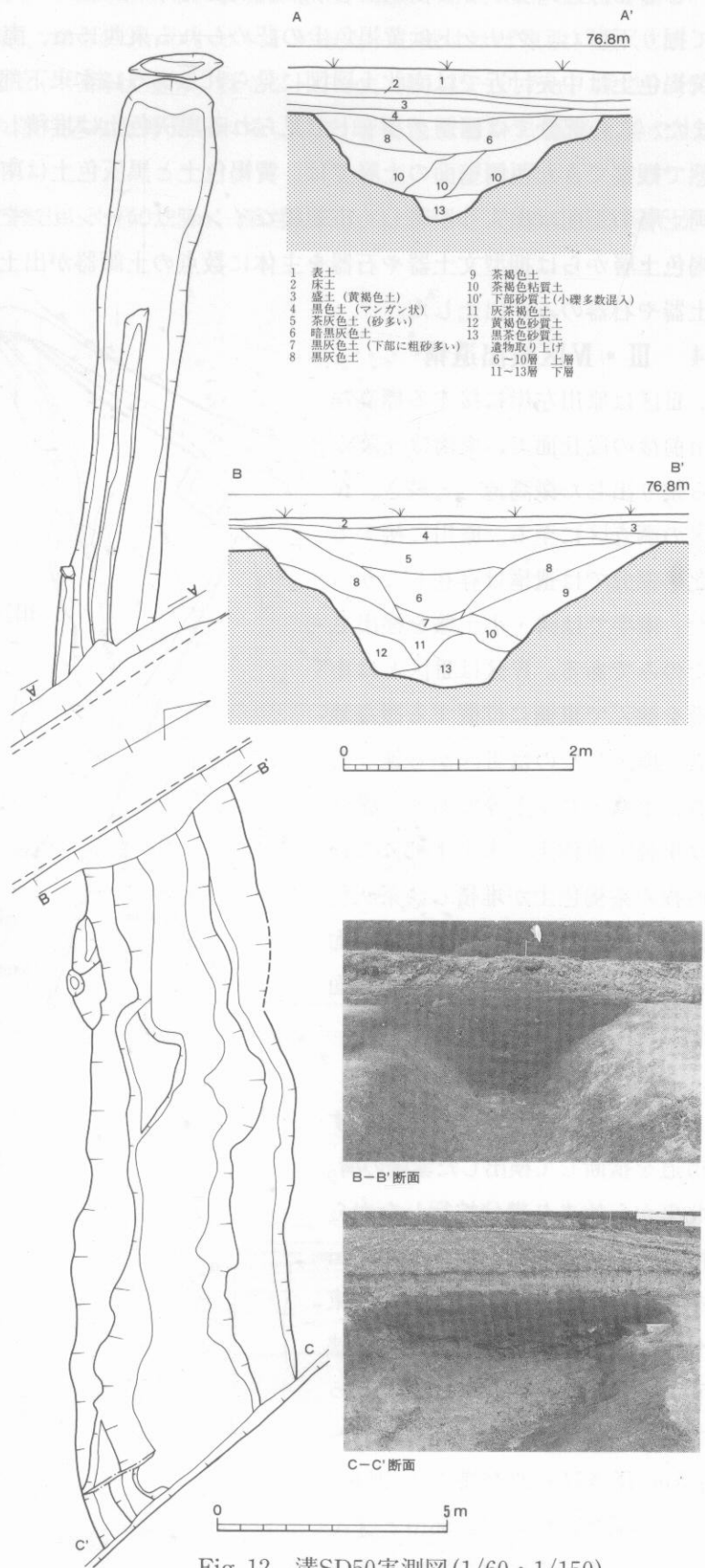


Fig.12 溝SD50実測図 (1/60・1/150)

5 V区検出遺構

IV区の南側で、原川左岸の低位段丘上に立地する。標高71m前後。調査面積は約500㎡、発掘区の中央に東西に延びる段がある。この段より下のテラスには遺構が存在しないことが判明したので、南半分は土捨て場とした。遺跡の層位は表土・床土の下部には0.2～1.2mの客土がなされ、南側ほど厚く堆積している。上段のテラスには地山の上に暗褐色土層が薄く堆積していた。検出したのは不定形な溝状遺構と、ピットである。

溝状遺構

SD70 段落ちの下テラスで検出した東西の不定形な溝、長さ6.5mを検出さらに、発掘区の西に延びる。幅0.95～0.45m。深さ0.15mをはかる。奈良時代後半の土師器が出土。

SD75 上段のテラス西寄りで検出した不整形な溝状遺構。北東部は二股に分かれ、合流して西南方向へ向かう。長さ8.65m、幅1.35～3.25m、深さ0.1m前後を測る。奈良～平安時代の土器が少量出土した。

土壌

SK71 発掘区の北西隅部で検出した細長い溝状の土壌。長さ4.6m、幅1.15m、深さ0.1m前後。確実な遺構ではなく、地形の窪みかもしれない。

SK72 SK71の東側で検出した不定形な落ち込み。埋土は暗褐色土層で、地山の落ち込みと思われる。平安時代の土師器が出土した。長さ5.95m、西南部が窄まる。幅0.5～1.95m深さ0.15m前後を測る。

SK74 発掘区の北東部で検出した不整形な土壌。略東西方向に長軸を持ち、その長さ7.35mを測る。幅2.05～3.15m。深さ0.1m前後。

SK76 発掘区中央部の段落ちで検出した落ち込み。西側は上端が消滅する。長さ3.5m、幅2m前後、深さ0.1m前後。土師器・黒色土器が出土した。

6 VI区検出遺構

現況はI区から連続する原川右岸の平坦な水田1筆で、道路建設のため地下げが予定され、道路部分の調査終了後、引き続いて調査を開始した。標高82m前後で、旧地形は北から南へ向かって緩やかに傾斜し、この為水田は北側を削り、南側に盛土して平坦面を造成している。また、西側には小河川が流れ、これに沿って市道が通っているので、段落ちとなり、南側も市道部分で一段下がっている。

発掘区の基本的な層位はI区と同じである。ここでの土層は耕作土・床土を除去すると南側に行くに従って茶褐色土が厚く堆積している。これは水田造作時の盛土で特に西南部分では0.7m近く堆積している。ただし、北側では削平の為、床土下部で基盤層の砂質土がすでに露出している。盛土の認められる範囲では下層に茶褐色土・暗褐色土が0.1m程度堆積していた。この層中からは奈良～

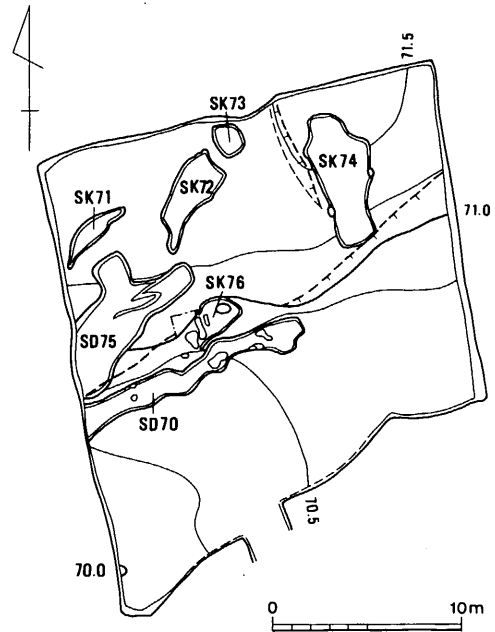


Fig.13 V区遺構配置図(1/200)

平安時代の土器と、中世の土器陶磁器が出土した。この下層には北と東では砂質土に達し、南と西側には黄褐色土の広がり認められる。この層の上面で検出した遺構を上層遺構とした。掘立柱建物や溝状遺構があるが、それ以外の土壌はプランの識別が非常に困難で、確実にプランを把握できたものが少なかった。さらに、黄褐色土層を掘り下げると、石組み遺構が検出できた。この面を下層の遺構面として黄褐色土を主体とする土層が埋没したものを遺構と認識し、下層遺構として纏めた黄褐色土層は厚く堆積した部分で0.5m程で、特に南側で顕著に認められた。黄褐色土の下層には黒色土や砂質土が複雑に堆積し、不安定な基盤層を形成している。

尚、上層遺構の内一部分に下層遺構の埋土の落ち込みに起因する土層の違いが存在する可能性があるがここでは、調査時の遺構検出面の違いをもとに区別して概要を記述することにする。



Fig.14 VI区遺構配置図(1/300)

上層遺構

掘立柱建物建物 (Fig.15, PL9)

S B 150 発掘区の西寄りで見出した2×3間の南北棟建物。柱間は桁行1.8m(6尺)等間、梁行が1.7m(5.5尺)等間でやや短い。建物主軸は北に対し約29°東へ振れる。柱掘形は径が0.4~0.6mの円形に近い形状をなす。柱痕跡は抜き取りの為不明なものが多く、東側柱列の柱穴で唯一確認できたものは径が15"前後のものである。

S B 160 S B 150から約4m離れた南側で見出した2×2間の建物で規模が小さい。柱間は東西1.3m、南北1.65mを測り、規模からすると南北が桁行方向となる可能性が高い。柱穴の規模はばらつきがあり、0.3~0.6mで、平面形も円形に近いものから北西隅柱穴のように四角形を呈するものまである。深さは0.5m近く残存しているが、柱痕跡は検出していない。建物は北に対し21.5°前後東へ振れる。S B 150とは建物方位が一致していないが、近接した位置関係からみて密接なつながりがあるのは間違いない。

土壌 (Fig.16)

黄褐色土層の上面で見出した土壌はかなりの数にのぼる。この内の多くはS K 220に代表されるようなプランが円形に近いもので、底が浅く、茶褐色系統の埋没土が認められた。

S K 218 発掘区の北西部で見出した土壌。長軸2.58m、短軸0.93mで、平面形は長楕円形をなす。断面は逆台形に近い形状で、底面は西に向かって傾斜している。埋土は茶褐色土の単一層であり、土壌墓の可能性もある。

S K 219 発掘区の西南隅部で見出した不整形な落ち込み。南北長5m以上、東西3.5m。深さは0.2m前後で南半が下層の落ち込みで失われている。東南部の埋土中から押型文土器片が7点出土した。北半の底面中央付近で2つのピットを検出。

S K 220 S K 219と切り合って検出した円形に近い形状の土壌。径1.44m深さ0.13mで底面は平坦である。埋土は淡茶褐色土である。

S K 230 発掘区の北西部で見出した溝状の土壌。長さ6.2m、幅0.5m前後、深さは0.2m程である。
炭化物堆積土壌 (Fig.17, PL12)

発掘区の東南寄りで見出し、平面形が楕円形に近い形状のもので、内部に炭化物が充満している。S K 240はグリッド調査地点で見出し、S K 130・140は黄褐色土を10cmほど掘り下げた時点で検出し、両者は1.5m程の近接した位置にある。長さ1.02m~1.35m、幅0.85m前後、深さ0.1~0.25m。断面

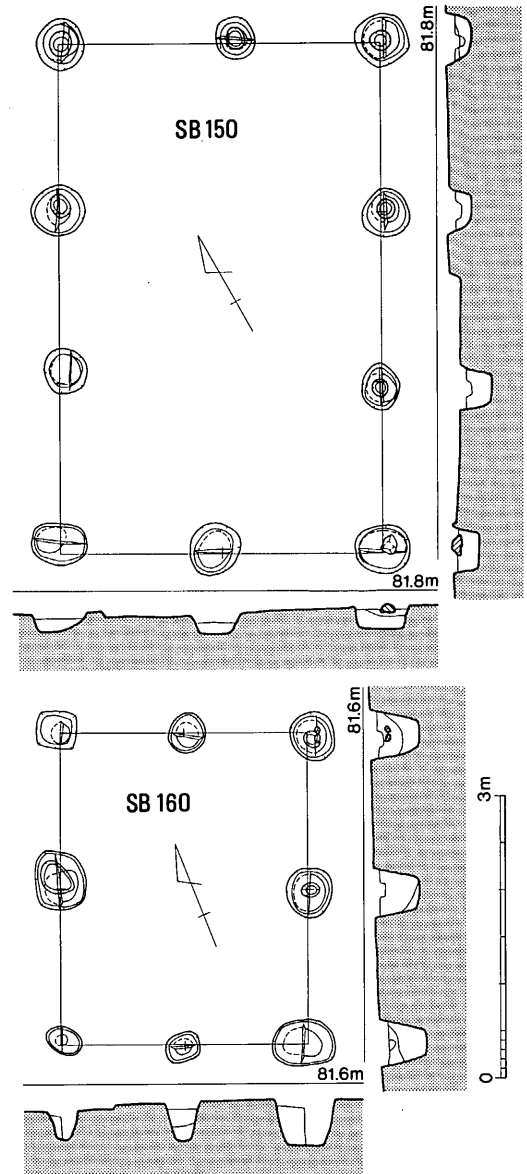


Fig.15 掘立柱建物実測図(1/80)

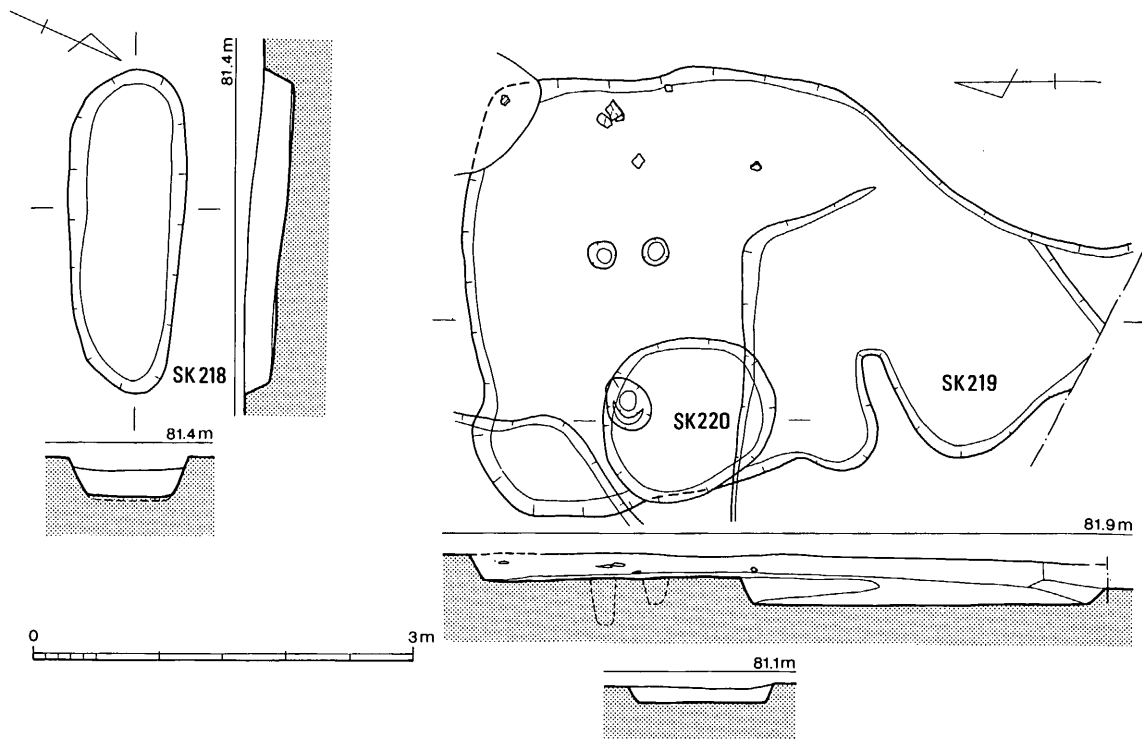


Fig.16 上層土壌実測図(1/60)

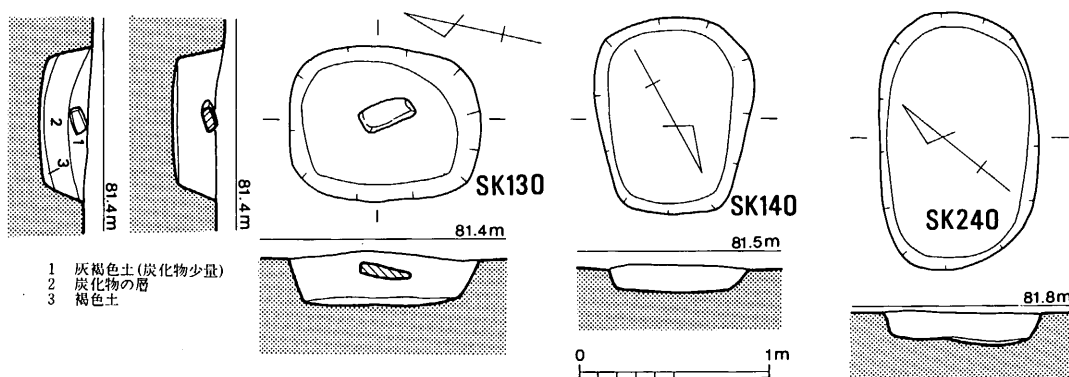


Fig.17 炭化物堆積土壌実測図(1/40)

形は逆台形を呈す。比較的残りの良いSK130で土層を見ると、上部に炭化物が混入する灰褐色土が埋没し、その下層に炭化物層が10cm程堆積している。最下層には褐色土が薄く堆積し、壁面の一部が焼けて赤変していた。内部から縄文土器が少量出土しているが、後世の炭焼き土壌の可能性が高い。

下層遺構

グリッド調査 (Fig.18, PL11)

VI区の南半には黄褐色土(砂粒土)の広がりがあり、この層中から押型文土器が出土している。発掘を開始した段階ではこの黄褐色土層と北側の一部で露出していた砂質土層中からも土器片が出土したため、まず発掘区東南部で土層と土器の出土状況を検討する目的で、小グリッドを設定して土層を掘り下げた。

調査は東西6m南北14mの範囲で、2m四方のグリッドを設定し東南隅より北へアルファベット記号を、西へ整数番号を振り、各グリッド毎に出土レベルの測定を加へ、土層を注記し遺物を取り上げた。

Fig.18はその遺物出土状態と土層の状況を示したものである。遺物は主に1層黄褐色土からまと

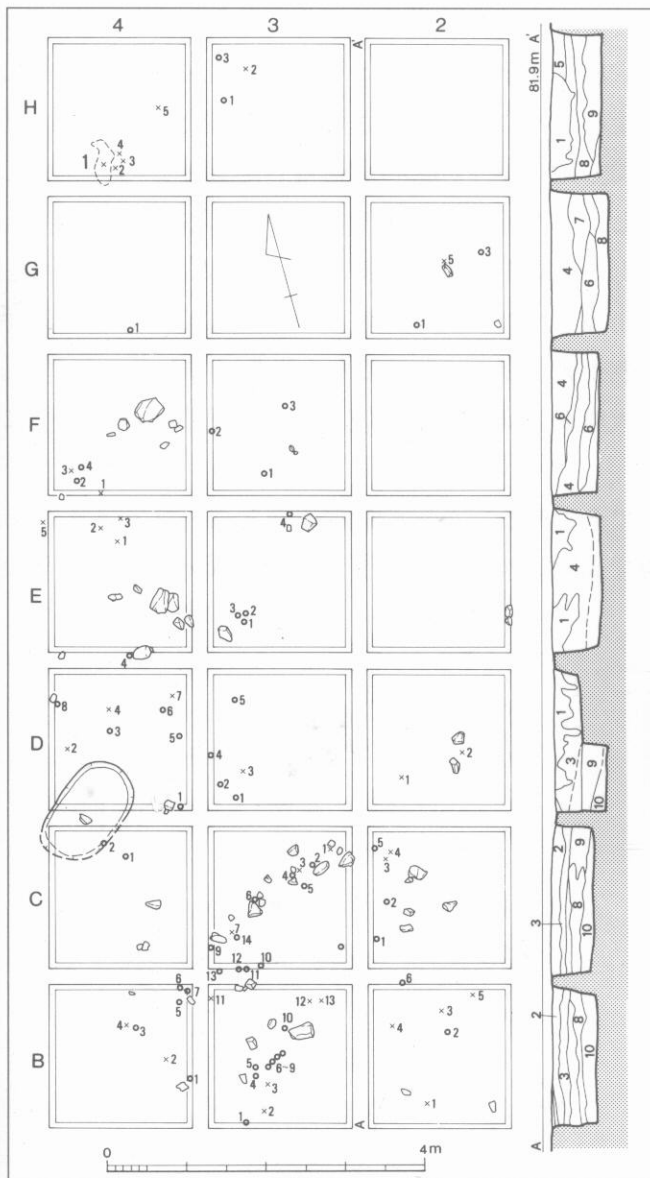
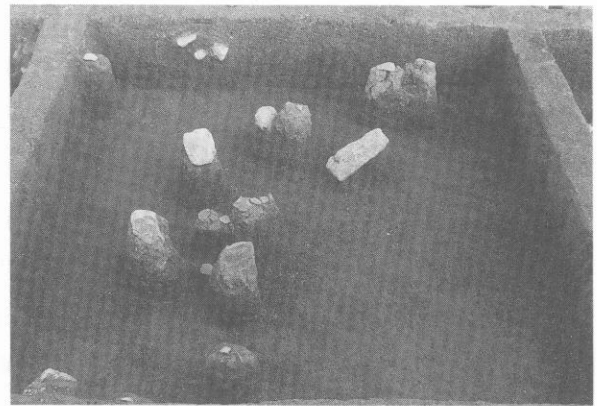
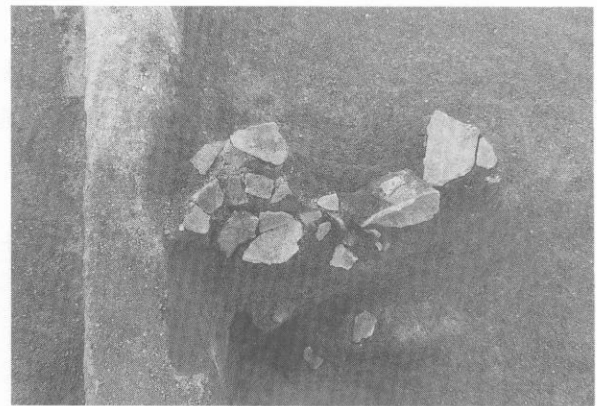


Fig.18 グリッド遺物・礫出土分布図(1/80)



B-3 遺物出土状況



H-4-1 出土状況

- 1 黄褐色土
- 2 灰褐色砂質土
- 3 暗褐色砂質土
- 4 黒褐色砂質土
- 5 灰褐色砂質土
- 6 暗黒褐色砂質土
- 7 灰黒色砂質土
- 8 灰白色粗砂質土
- 9 灰白色粗質土
- 10 灰褐色細砂質土(礫含む)

グリット		
遺物番号	土層番号	標高(m)

B-2			13 1	81.706	4 1	81.595	3 2	81.562	3 1	81.77	H-3	
1 1	81.731	B-4			5 2	81.607	4 2	81.719	4 1	81.708	1 1	81.76
2 2	81.602	1 1	81.683	6 1	81.595	5 1	81.646	5 1	81.745	2 1	81.72	
3 2	81.657	2 1	81.652	7 1	81.668	D-4			G-3			
4 1	81.695	3 1	81.658	8 2	81.675	1 1	81.53	1 1	81.76	H-4		
5 2	81.648	4 1	81.646	9 2	81.654	2 1	81.45	2 6	81.64	1 5	81.788上	
6 2	81.713	5 2	81.637	10 2	81.647	3 1	81.750	3 1	81.64	8	81.567下	
B-3			6 2	81.602	11 2	81.662	4 1	81.774	4 1	81.77	2 8	81.392
1 1	81.633	7 2	81.628	12 2	81.662	5 1	81.73	5 1	81.7	3 8	81.256	
2 1	81.602	8 2	81.631	13 1	81.412	6 1	81.465	G-4			4 8	81.448
3 1	81.666	C-2			14 1	81.716	7 1	81.626	1 1	81.71	5 5	81.526
4 2	81.454	1 1	81.733	C-4			8 1	81.364	F-3			
5 1	81.579	2 1	81.492	1 1	81.550	E-3			1 1	81.82		
6 1	81.628	3 1	81.746	2 1	81.596	1 1	81.63	2 1	81.77			
7 1	81.618	4 1	81.752	D-2			2 1	81.63	3 1	81.49		
8 1	81.575	5 1	81.528	1 1	81.725	3 1	81.63	F-4				
9 1	81.566	C-3			2 1	81.671	4 1	81.57	1 1	81.683		
10 1	81.648	1 1	81.548	D-3			E-4			2 1	81.623石器	
11 1	81.658	2 3	81.472	1 1	81.673	1 1	81.71	3 1	81.72			
12 1	81.651	3 1	81.425	2 1	81.565	2 1	81.761	4 1	81.72			

まっけて出土し、その下層の2層黒褐色土（砂粒土）や砂質土細砂層からも出土した。1層は全域に及んではおらず、2層に掘り込むようにして小竪穴状に堆積している。下面は攪乱され凹凸が激しくインボリューションを呈している。2層黒褐色土層はほぼ全域に広がりを見せるものである時期の基盤層を成していたと考えられる。これはI区でも見たように植物腐植等に起因するものかもしれない。南側ではこの上部に灰褐色砂質土が堆積し、この層は1層から漸移的に変化する層である。この下部は砂質土と砂層が基本的には水平に堆積した互層をなす。2次的に生成された土層である。

各グリッドからは縄文土器や石器類、自然石が出土したが、主に西南半分に分布している。削平を免れたことが主な要因であるが、ほとんど黄褐色土層が竪穴状に分布する範囲内に限られている。また、出土した自然石はすべて花崗岩製で一部に火熱を受け赤変しているものも見受けられた。これらは石組み炉の残滓かもしれない。

さらに、H-4グリッドからは完形に近く復元できる押型文土器の破片がまとまって出土した。この部分は黄褐色土も黒褐色土も見られない地点で周囲は砂質土と砂層が互層になっていた。出土位置を精査したが上部からの掘り込みは認

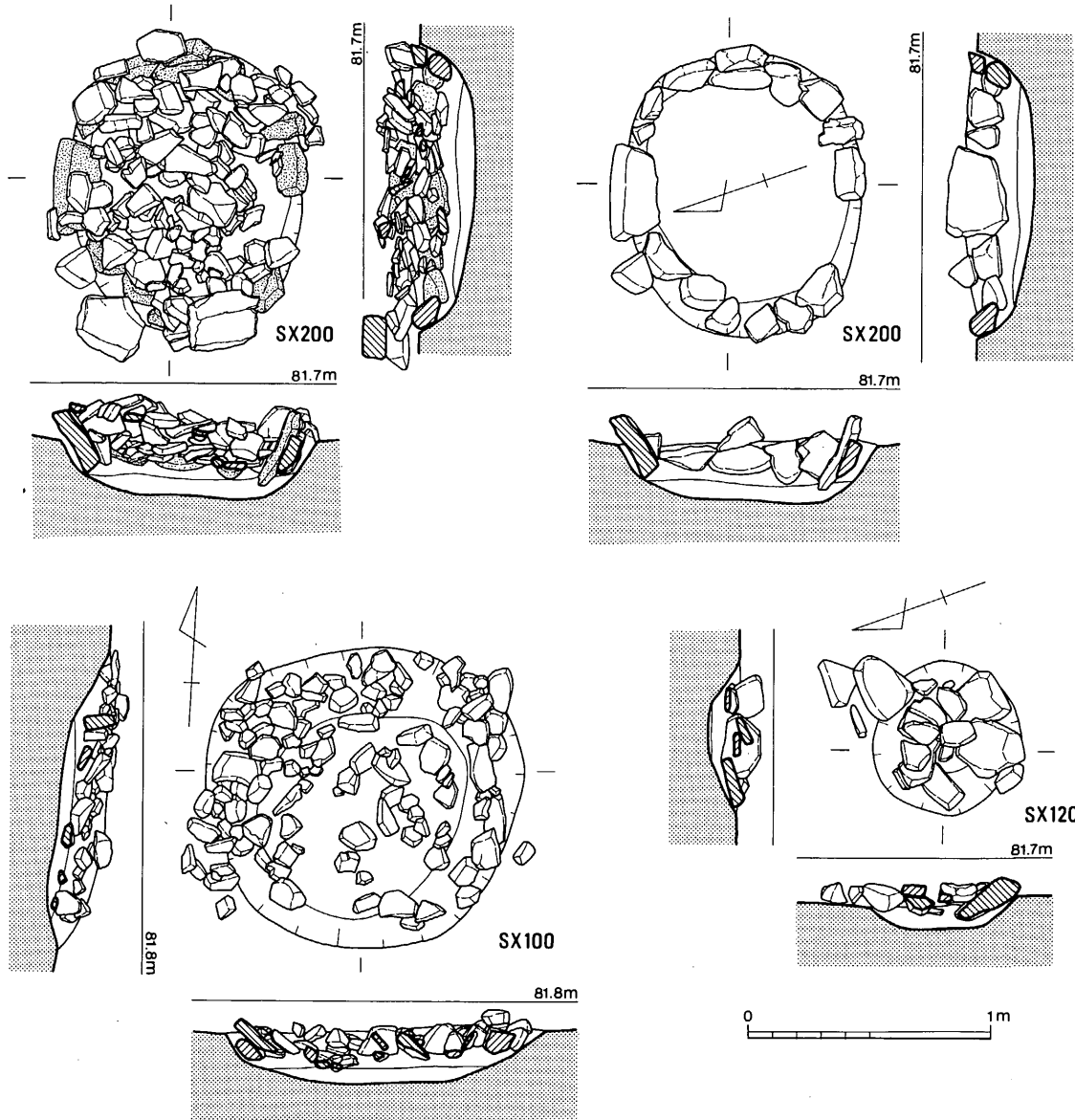


Fig.19 石組炉実測図(1/30)

められず、出土状態の垂直分布は4層にわたり、その高低幅は約40cmを測った。

ここでの調査結果を踏まえ、VI区は上層遺構の調査を終了した後に、黄褐色土を10～20cm掘り下げ、黄褐色土が堅穴状にまとまったものを含めて、遺構の確認を実施した。

検出遺構

発掘区の南半に広がる黄褐色土層を掘り下げると、石組み遺構が検出できた。この検出面を全域に広げ黄褐色土が土壙あるいは小堅穴状等に認められるものを発掘した。

石組炉 (Fig19, PL12)

石組炉はVI区のほぼ中央部で3基を検出した。ほぼ5m間隔で並ぶが、これらの南側には焼礫が多量に纏まることなく広がっており、本来は3基以外にも石組炉が存在していたものと考えられる。

SX200 SX100の西5mに位置する。検出時点では1.35×1.15mの範囲で焼けた礫がかなり密集した状態であったが、これらを取り除くと1.20×1.05×0.25mの範囲で比較的扁平な自然礫17個が楕円形に組み立てていた。いずれも掘りかたに接しており、浦込めとしての粘土などは確認できなかった。埋土は黄褐色の砂質土で炭化物は存在しないが、底面に近づくにつれ黒くなる。焼けた礫群の中央付近には、焼けていないサヌカイト塊 (Fig54-50) が置かれていた。

SX100 SX200の東5m、SX120の北西5mに位置する。検出時点では1.45×1.25mの範囲で焼けた礫が広がっていたが、SX200ほど密集しておらず、またこの下部に石組も存在しないし抜いた痕跡も窺えない。掘りかたは1.35×1.25×0.25m。埋土は灰褐色砂質土で炭化物は含まれない。炉の南側

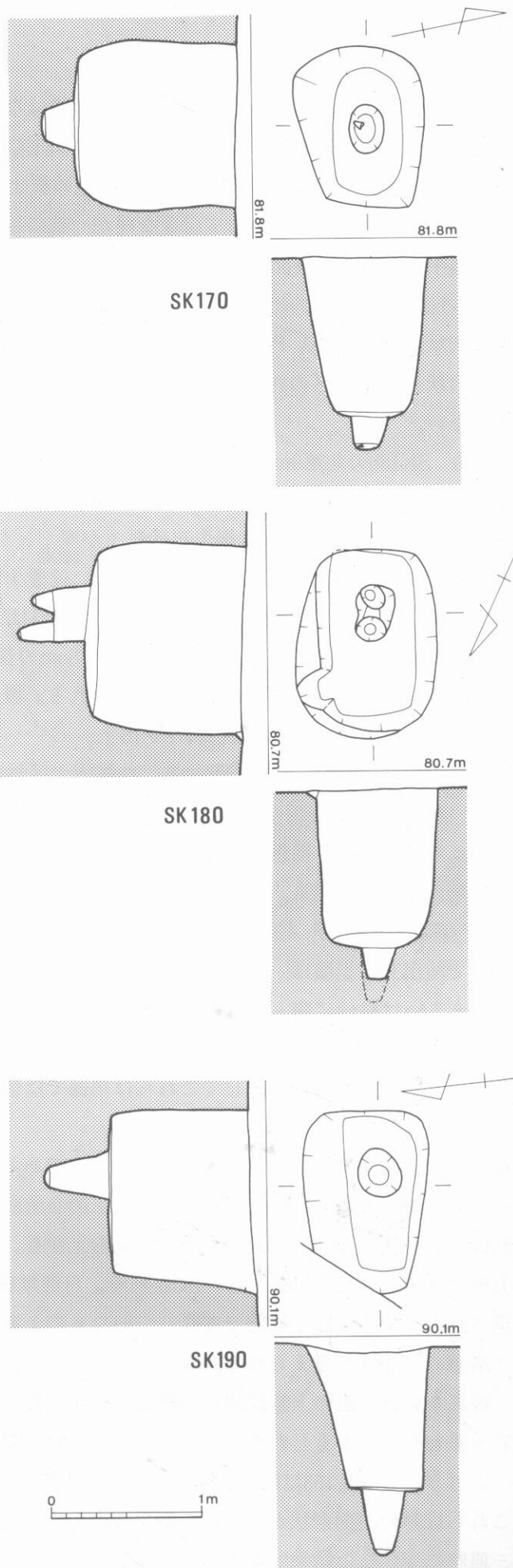


Fig.20 陥し穴状土壙実測図(1/40)

半分には礫が疎らだが、これは削平によるものではなく、底面の南側への傾斜から考えても、斜面にこの炉を設定したためと考えられる。遺物の出土はない。

SX120 SX100の南東5mに位置する。黄褐色砂質土を埋土とする65×62×11cmの掘りかたが検出され、またこの掘りかたに接して扁平な礫が一部に組まれる。本来はSX200のような石組炉であったのが、削平によりその底部付近のみが残存したものと考えられる。埋土からはFig45-59の押型文土器が1点だけ出土した。

陥し穴状遺構 (Fig20, PL12~13)

陥し穴状遺構はVI区の西端に、9mの間隔で北東—南西の直線上に並ぶが、長軸方向はかならずしも揃わない。

SK170 SK180の北東9mに位置する。平面プランは106×87cmの南西部に広がる隅丸長方形で、深さ107cmの底面は85×47cmの長楕円形を呈する。底面中央部には34×22×23cmのピットが掘られ、その底には小礫が1個ある。黄褐色粗砂質土が埋土となる。

SK180 SK170の南西9m、SK190の北東9mに位置する。検出時点では北側がわずかに張り出しすが、3cmほど掘り下げるとなくなる。北隅の突出部は、後世のピットである。平面プランは123×79cmの隅丸長方形で、深さ105cmの底面は118×58cmの長方形を呈する。底面中央部には40×27cmの範囲に、深さ45cmと38cmの2つのピットが掘られる。埋土は黄褐色粗砂質土で、その中位からサヌカイト製石鏟 (Fig52-20) や黒曜石剥片が出土。

SK190 SK180の南西9mに位置する。一部調査区外に延びるが、平面プランは121×82cmの隅丸長方形で、深さ92cmの底面は103×46cmの長楕円形を呈する。底面中央部には31×29×42cmのピットが掘られる。埋土は黄褐色粗砂質土で、その中位から出土した無文土器片は胎土や器厚は本遺跡の縄文早期土器に類似する。

土壌 (Fig.21~27, PL13~15)

VI区で検出した土壌は一括して纏めたが、平面プランが円形に近いもの、溝状のもの、不整形なもの、あるいは輪状に窪んだものなど各種のバラエティに富み、大きさも径が0.3m~5m以上のものまで存在し、断面が皿状あるいは掘り鉢状を呈すものなどが見受けられる。また、底面や壁面も凹凸が著しいものもある。そしてこれらは南側では複雑に重複し、プランの確定が困難な状況にあった。

これらの土壌が人工的に掘り窪められたものであるか否かの判断は付きにくいだが、平面形状、壁面の立ち上がり、埋土の状況等から見て人工的な所産と認定しうるものがある。それらは平面が長方形に近い形状をなし、壁面が直線的に立ち上がり、底面が平坦なもので、埋積土が黄褐色単一層のものである。SK82・86・95・153がある。自然堆積で埋没したものではなく、時を置かずして埋め戻された結果、良好な状態で残存していたものと考えられるからである。これらは、形状から見て土壌墓の可能性が考えられる。特にSK95は押型文深鉢が半分近くまとまった破片の状態出土し、特異な点は上面の上端周囲に小礫を方形状に配している。これらは土壌墓マウンドの土止めと標石を兼ねたものかもしれない。また、すぐ東側で叩き石と凹み石が出土している。安置されたものであろうか。SK153は底面に穿たれたピットの存在を考慮すると陥し穴ともとれる。

これら以外の平面形状が不整形な形状のものは、遺構が廃棄された後、自然の営力で徐々に崩壊し、皿状に変化した結果と考えられないこともないが、積極的な根拠が見いだせない。遺構の埋没

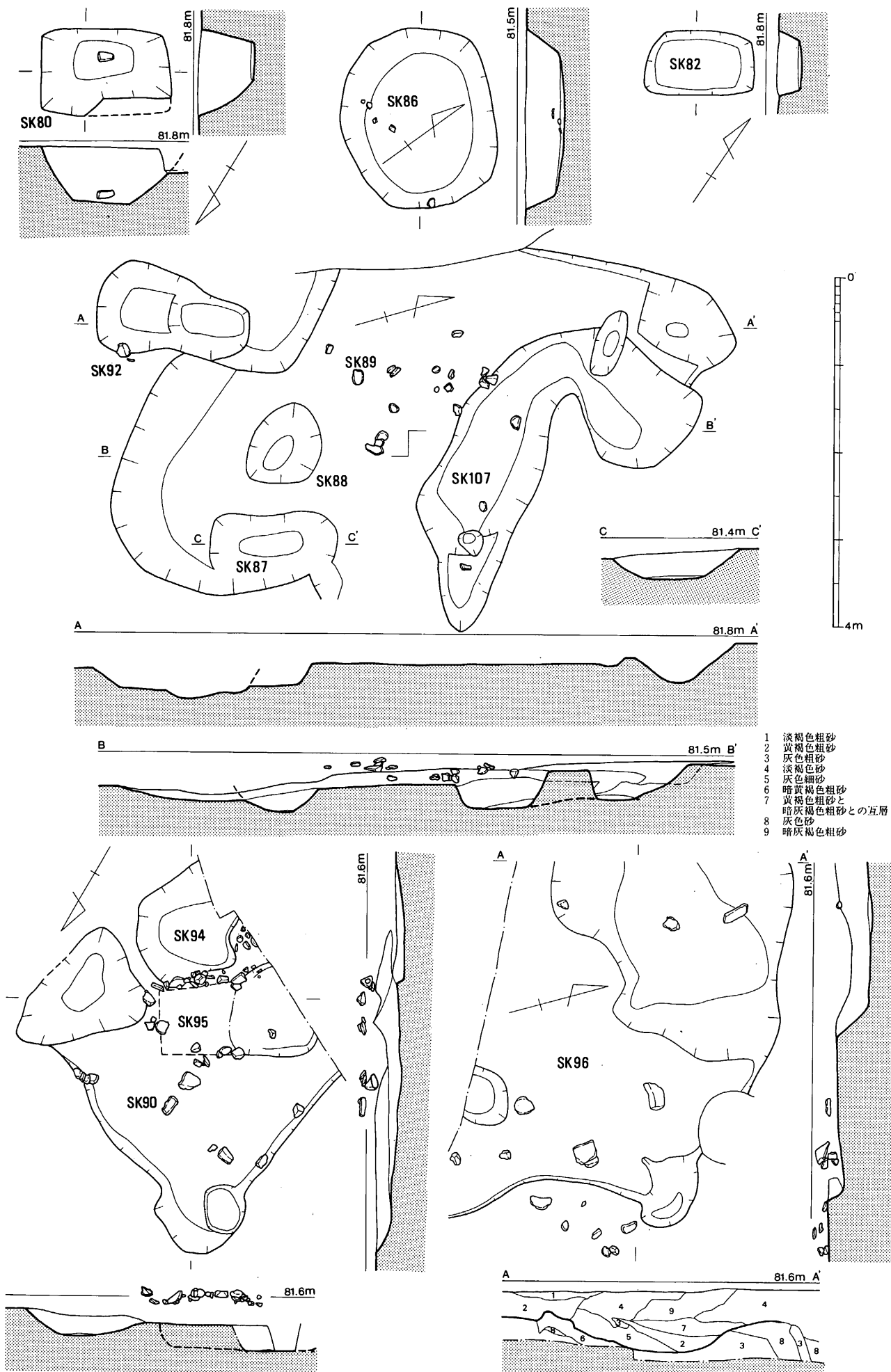


Fig. 21 土壤実測図(1)(1/60)

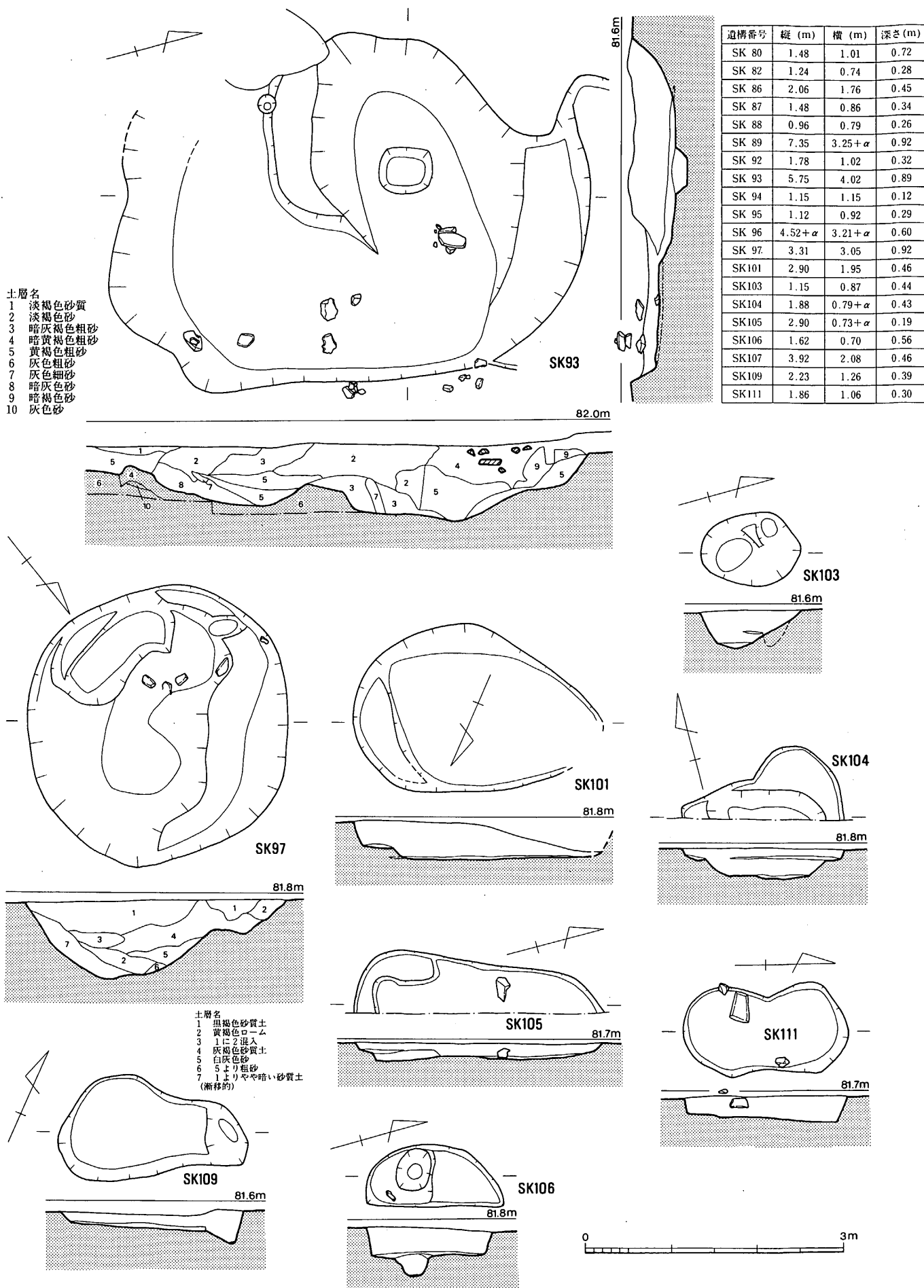


Fig.22 土壌実測図(2)(1/60)

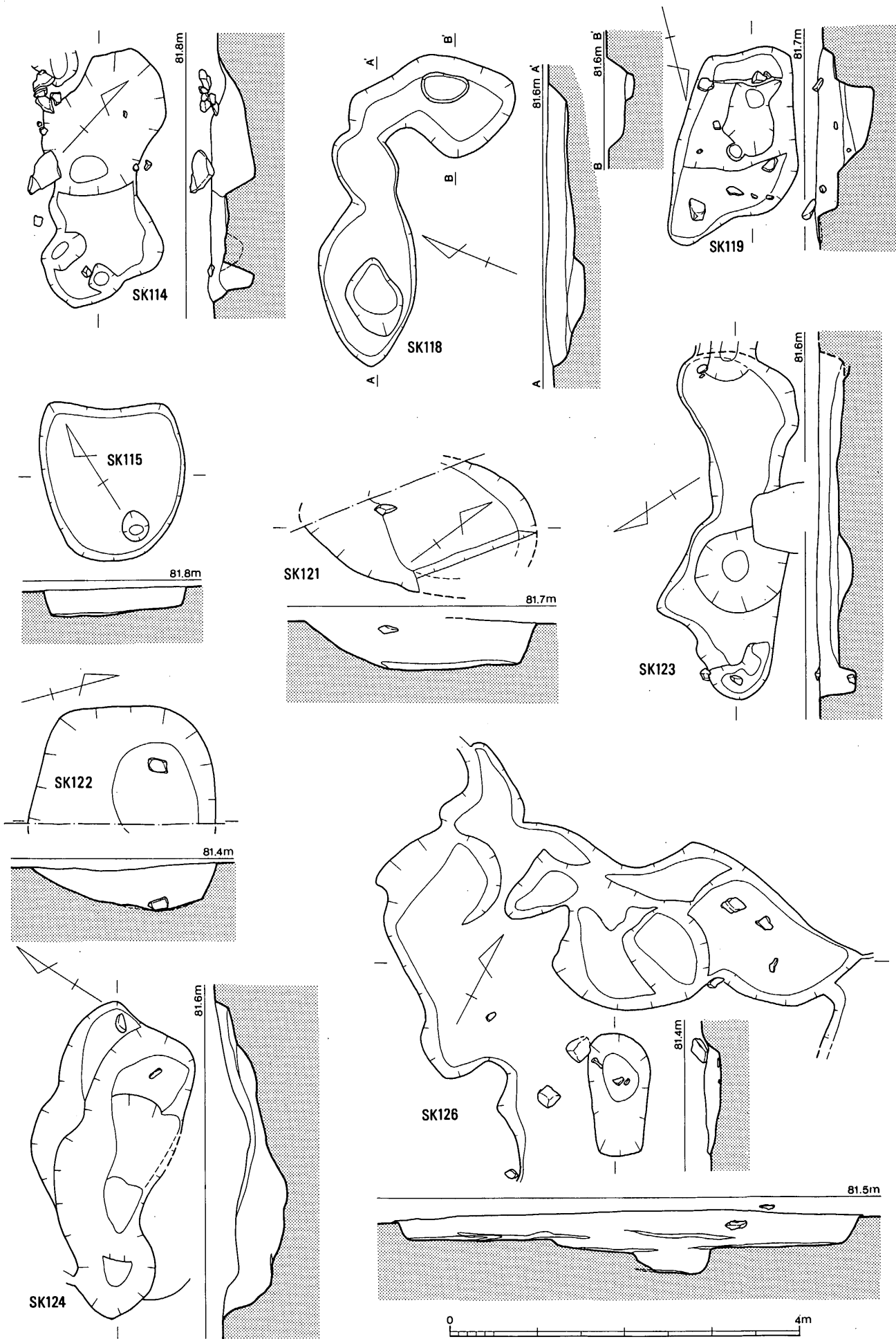


Fig. 23 土塘実測図(3)(1/60)

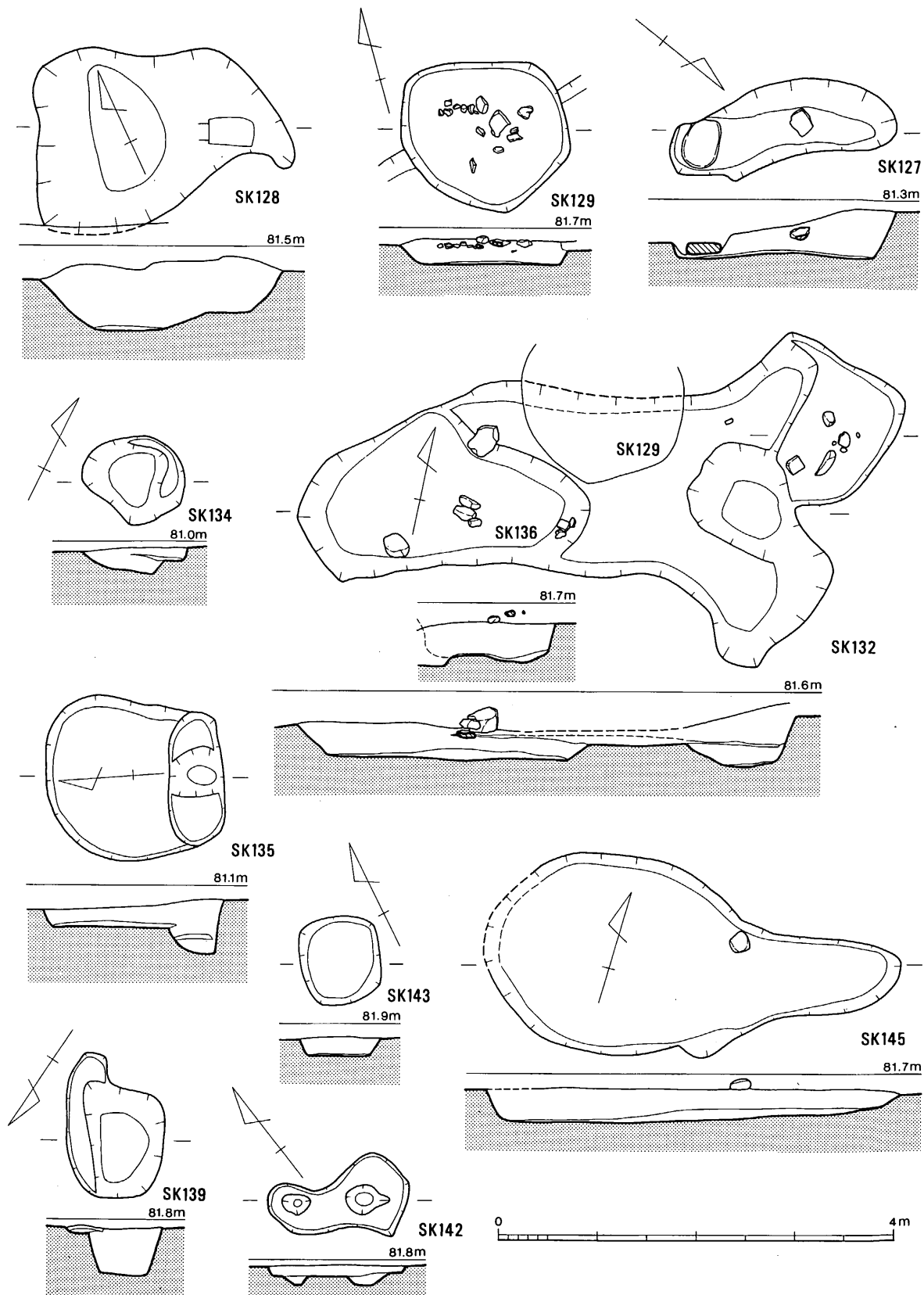


Fig.24 土壌実測図(4)(1/60)

遺構番号	縦 (m)	横 (m)	深さ (m)	遺構番号	縦 (m)	横 (m)	深さ (m)	遺構番号	縦 (m)	横 (m)	深さ (m)
SK114	3.04	1.40	0.48	SK124	3.65	1.66+ α	0.57	SK135	1.80	1.58	0.55
SK115	1.75	1.61	0.30	SK126	5.52	5.10	0.73	SK136	2.95	1.75	0.41
SK118	3.77	1.68	0.46	SK127	2.28	0.76	0.49	SK139	1.54	1.01	0.46
SK119	2.53	1.40	0.62	SK128	2.71	1.89	0.69	SK142	1.42	0.83	0.21
SK121	2.55+ α	1.66	0.57	SK129	1.69	1.54	0.25	SK143	0.90	0.85	0.20
SK122	2.15+ α	1.38	0.50	SK132	2.91	1.60	0.58				
SK123	4.03	1.66	0.42	SK134	1.02	0.91	0.29				

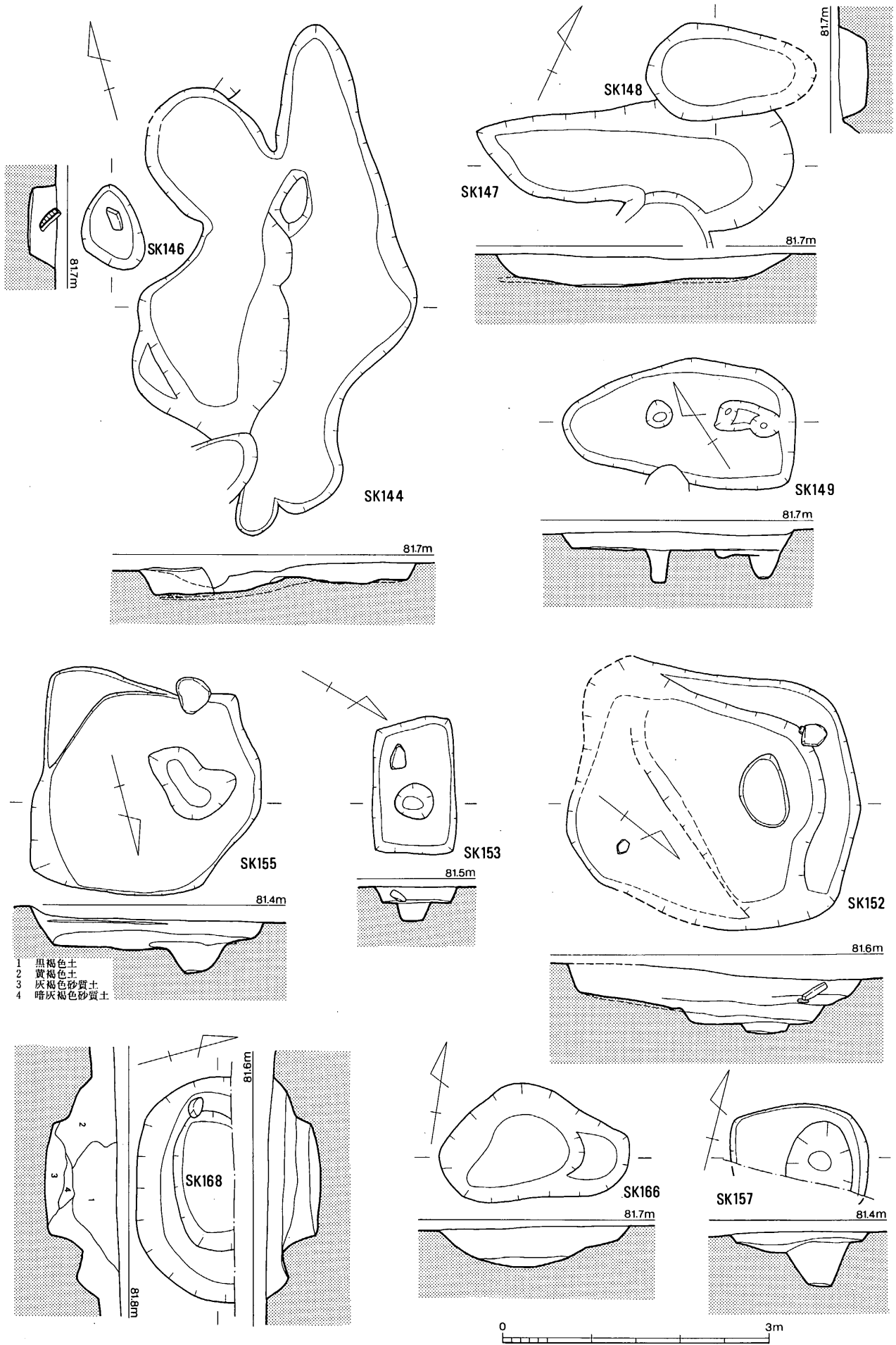


Fig. 25 土壤実測図(5)(1/60)

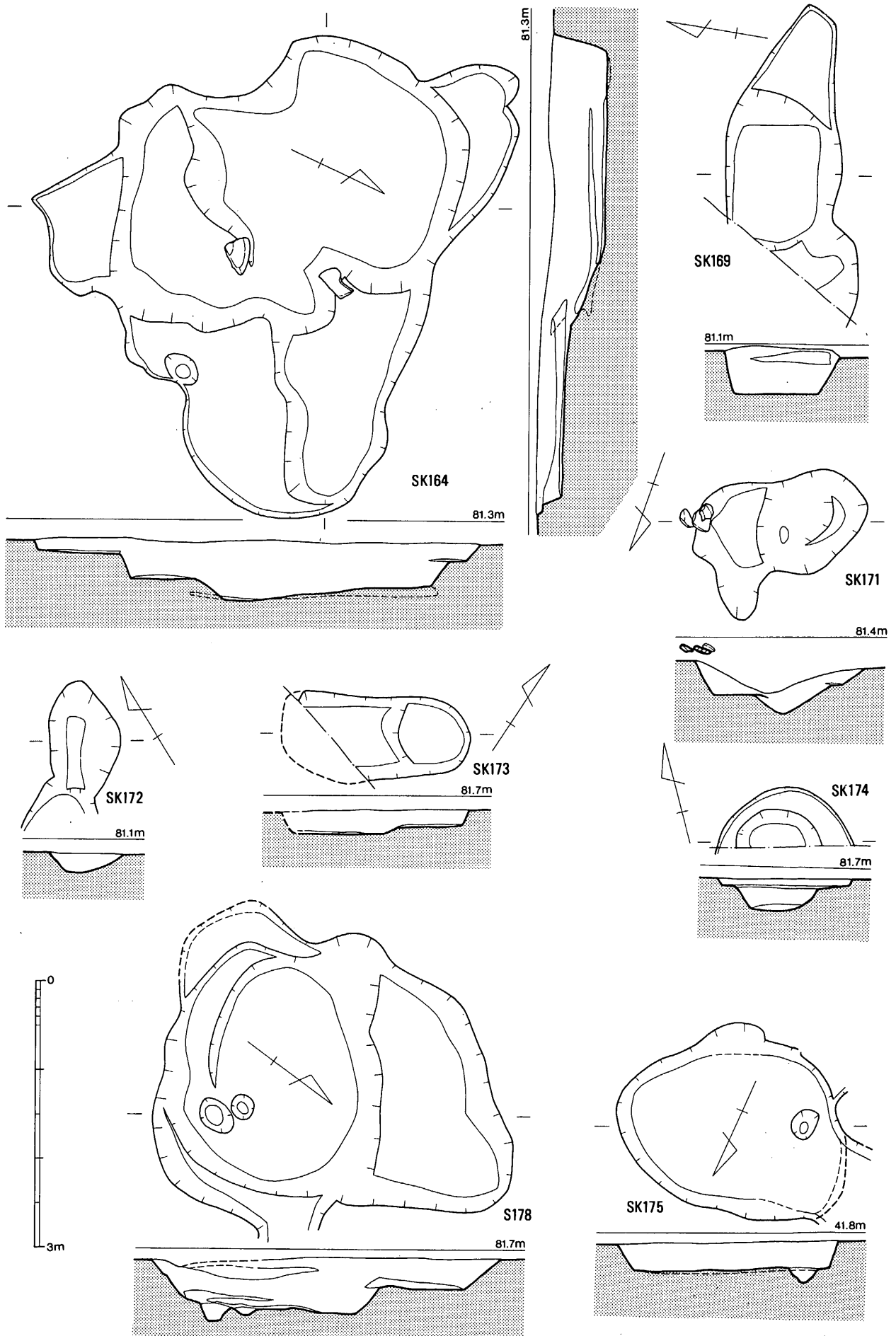
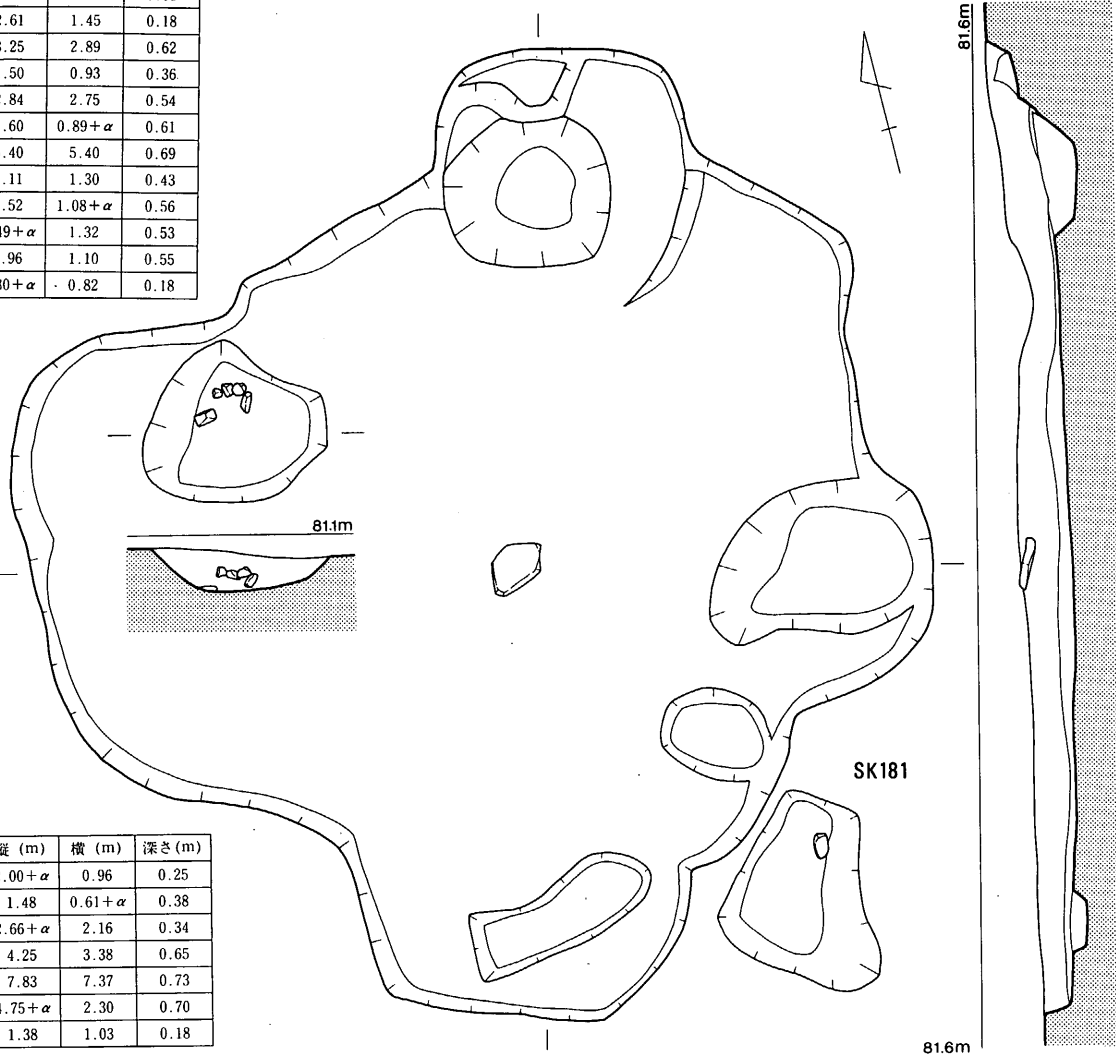


Fig. 26 土坑実測図(6)(1/60)

遺構番号	縦 (m)	横 (m)	深さ (m)
SK144	5.85	3.15	0.34
SK145	4.28	2.03	0.35
SK147	3.44	1.64	0.30
SK148	1.32	1.10	0.31
SK149	2.61	1.45	0.18
SK152	3.25	2.89	0.62
SK153	1.50	0.93	0.36
SK155	2.84	2.75	0.54
SK157	1.60	0.89+ α	0.61
SK164	5.40	5.40	0.69
SK166	2.11	1.30	0.43
SK168	2.52	1.08+ α	0.56
SK169	3.49+ α	1.32	0.53
SK171	1.96	1.10	0.55
SK172	1.80+ α	0.82	0.18



遺構番号	縦 (m)	横 (m)	深さ (m)
SK173	2.00+ α	0.96	0.25
SK174	1.48	0.61+ α	0.38
SK175	2.66+ α	2.16	0.34
SK178	4.25	3.38	0.65
SK180	7.83	7.37	0.73
SK185	4.75+ α	2.30	0.70
SK215	1.38	1.03	0.18

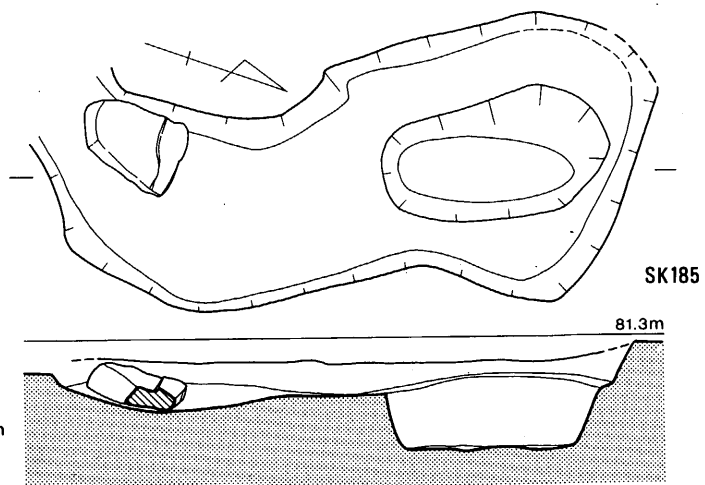
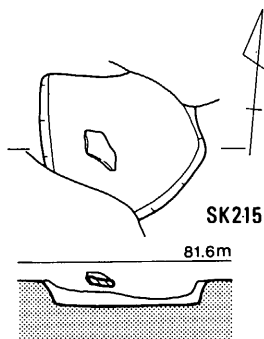
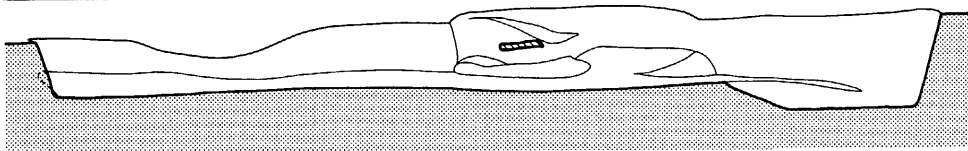


Fig.27 土坑実測図(7)(1/60)

過程を土層断面から見ると、大半が黄褐色土の単一層ではなく複雑な様相をみせている。土層図を付したS K 93・96・97・168を例に見ると、S K 93・96では基盤の淡灰色砂が斜めに並列して堆積し、S K 97・168では上部を被う黄褐色土と基盤土（黒褐色砂質土・細砂系統等）が反転し、黄褐色土がこれら基盤土の下部に潜り込んだ状態にある。とくにS K 168は平面的に黄褐色土が輪状に認められた。こうした埋没土層のあり方は、I区でも指摘したように、風倒木に伴う根鉢へ黄褐色土が流入した状況と考えた方が理にかなっているように思える。断面形状や壁面・底面の凹凸、あるいは遺物が出土するものもあれば、皆無のものもある点が説明できると考える。

これらから出土した遺物は、主に押型文土器で、その他、晩期までの土器も見受けられ、一部には平安時代の土器片も混入していた。

7. 歴史時代出土遺物

I区出土遺物 (Fig28, Pl16)

S D 21出土土器

須恵器

甕 (1) 外面に格子状の叩き、内面に波状の当具痕を有す。復元口径18.2cm。

S D 19A出土土器

皿 (2) 底の浅いもので、口径8.8cm、器高1.0cm。外底部糸切りのまま。

II区出土遺物 (Fig29, Pl16)

S D 28出土土器

土師器

甕 (1) 胴部下半を欠損する。復元口径29.3cm。口縁部の内外面を横ナデする他は、横位の刷毛目を施す。特に外面は凹凸が著しい。

S K 35出土土器

須恵器

杯 (2・3) いずれも高台を備えるものである。2は比較的底が深い器形で、体部下半が丸みを有す。3の高台は底端部が外開きし、外底部に回転ヘラ削りを施すなど、8世紀半ばの特徴が認められる。2は口径11.0cm、赤褐色に発色する。3は口径13.5cm、器高4.2cm。

S K 45出土土器

土師器

甕 (4) 口縁部の破片資料。口縁部の開きが弱い。古墳時代のものか。

S K 45出土土器

土師器

杯 (5) 8世紀後半代の大宰府で通有のタイプ。平底の底部から丸味を持って体部が開く。体部下半から底部を回転ヘラ削りする。内外面に横ナデし、さらに、回転ヘラ磨きを加える。復元口径14.0cm、器高3.0cm。胎土は精良で橙褐色を呈す。

皿 (6) 体部と底部の境は削って丸味を有す。口縁部の内外面横ナデ、外底部はヘラ切り未調

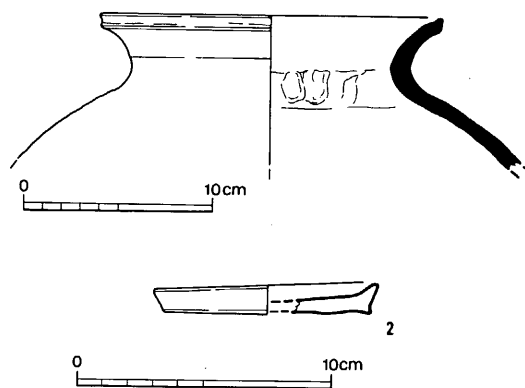
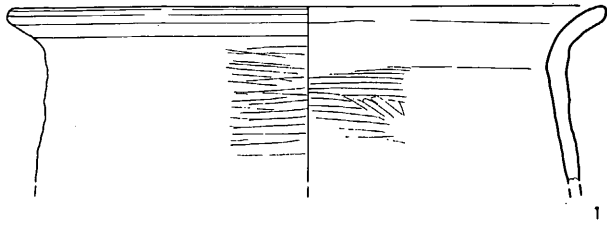
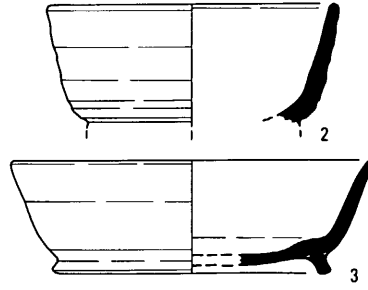


Fig. 28 I区出土土器実測図(1/3・1/4)

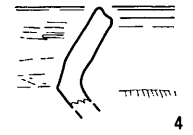
SD28



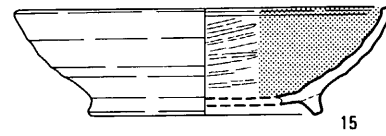
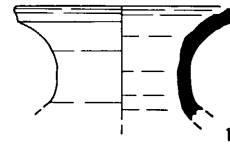
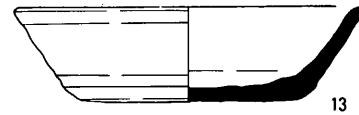
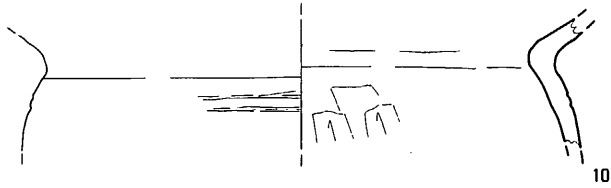
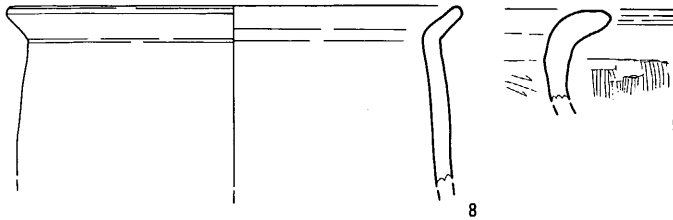
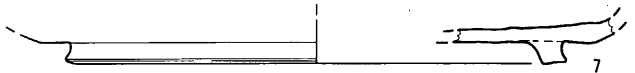
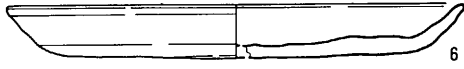
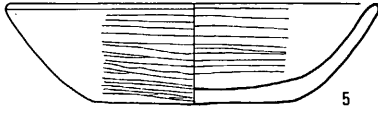
SK35



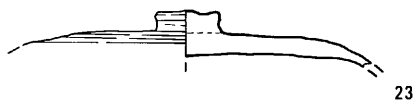
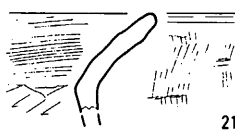
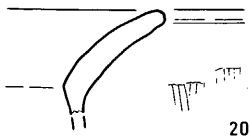
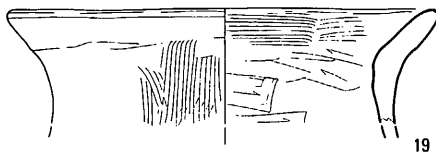
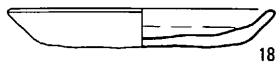
SK40



SK45



SX43



SK40

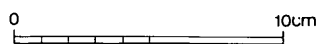
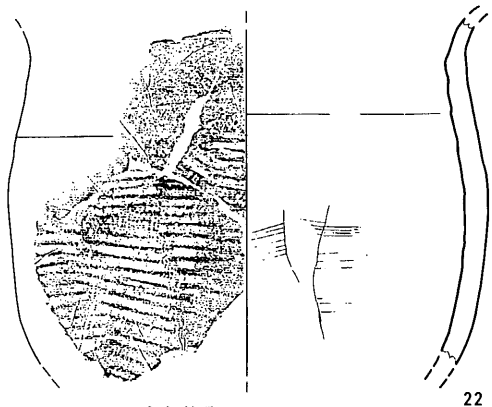
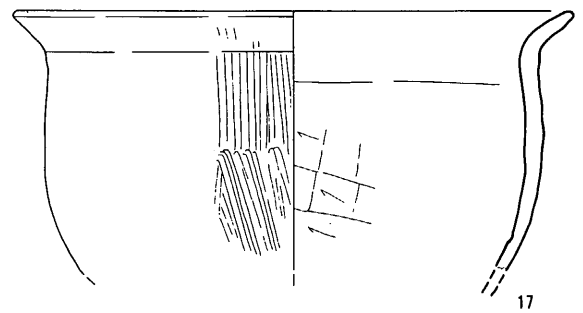


Fig.29 II区出土土器实测图

整板状圧痕を伴う。胎土は精良で黄褐色を呈し、畿内産土師器の発色に近い。復元口径17、2cm、器高2.0cm。

盤（7） 幅広の高台は外縁部内側に貼付される。外底部回転ヘラ削り。内底部にヘラ磨きの痕跡が窺える。高台径18.8cm。

甕（8～10） 8は口縁部が短く屈曲する。内外面にナデを施すという例の少ないもの。復元口径17.0cm。内外面に煤が付着する。9は口縁部を肥厚し胴の張りが弱い。胴部の内面ヘラ削り、外面刷毛目を施す。10は口縁部が胴部の厚さが同じもので、くの字に開く。胴部の内面ヘラ削りする。外面に沈線状の段が認められるが磨滅し不明な点が多い。

須恵器

蓋（11・12）ともに復元口径16.0cm。外天井部は回転ヘラ削りする。

杯（13） 体部と底部の境をヘラ削りして面取りする。外底部はヘラ切り未調整。口径13.0cm、器高3.5cm。胎土に白色粒子を多く含み、発色も灰白色に近く大宰府での通有のものとは異なる。

壺（14） 口縁部は外反して開き端部を上へつまみ出す。同時期の蓋に見られる処理である。内外面に横ナデを施す。復元口径8、2cm。内外面に灰を被る。

黒色土器A

椀（15） 丸味を有す体部に外開きの高台をそなえる。口端部内面に段が巡る。外面は横ナデ、内面は横方向にヘラ研磨する。内面はよく燻され黒化する。外面は淡橙褐色を呈す。復元口径14.0cm、器高4.0cm。この時期の黒色土器は土師器と同器形であるが、これは土師器に見ない器形である。搬入品か。

S X 43出土土器

須恵器

杯（16） S K 45すぐ北側のピットで内面を下に向けた状態で出土。体部状半を欠損する。外面は回転ヘラ削り、内面には横ナデを施す。底径7.0cm。

S K 40出土土器

土師器

甕（17） 口径に比べて器高の短いタイプ。口縁部は体部と同じ厚さで緩く外反する。体部外面刷毛目、内面ヘラ削りする。内面の口縁部との境は横ナデで稜を消す。復元口径21.2cm。口縁部内面にまで煤が付着する。

暗褐色土出土土器

発掘区の斜面下の方で主に出土し、特に19～23は溝状遺構 S X 42から出土している。

土師器

蓋（23） 撮を有すもので外天井部に回転ヘラ削りを施し、内外面に回転ヘラ研磨を施す。

皿（18） 口径8.0cm、器高1.4cm。外底部ヘラ切りし、板状圧痕を伴う。12世紀代のもの。

甕（19～22） 19は小型の甕で体部内面ヘラ削り、外面刷毛目を施す。口縁部内面には刷毛目のまま。復元口径16.0cm。外面に煤が付着。20・21は大型甕の口縁部破片。体部内面にヘラ削り、外面に刷毛目を施す。21は口縁部内外面に刷毛目を残す。22は器形と製作技法の特徴から見て玄海灘式製塩土器と思われる。口縁部と底部を欠損する。体部外面に横位の平行叩きを施す。柁目材に直行する平行刻みを叩き板とする。内面には一部当具痕を有すが、板小口による粗い削りがなされている。赤褐色を呈す。胴部最大径18.0cmに復元できる。宝満山の祭祀遺跡で出土例が多く見られる。内陸で出土する理由として藻塩焼きが考えられている。

Ⅲ・Ⅳ区出土遺物 (Fig30~37, PL16~24、別表1)

溝S D50出土土器・陶磁器

土師器

杯 (1~23) 8世紀後半から9世紀半ば前後のものが出土している。遺構の年代を考える時、土師器杯類は編年の指標として有効な資料と考えられているため、ここでは器形の特徴から便宜的に大きく3種類に分け、さらに製作技法の特徴から一部を小区分して説明する。A類は平底の底部から体部が丸味を持って開くもの。このうちA1類は体部下半と外底部は回転ヘラ削りし、内外面に回転ヘラ研磨を施すもので、10・21・22・23がある。A2類は外底部のみ回転ヘラ削りを加え、体部内外面は横ナデするもの。5・17がある。A3類は、外底部ヘラ切り未調整、体部を内外面横ナデするもので、1・7・9・12・14・15がある。B類は平底の底部から体部がほぼ直線的に開くもの。3・8・11・16・18・19・24がある。C類は底部がやや丸味を帯び、体部から口縁部にかけて外反するもの。外底部はヘラ切り未調整、体部内外面は横ナデを施す。2・4・6・13・20が該当する。器面の発色はA類が赤褐色～橙褐色、B・C類は灰黄色～白灰色の傾向がある。

また、2・4・5・7・9・12・13・16・18・19・20・21と5割以上の高い頻度で体部の一面もしくは両面に煤が付着している。この煤はよく見られる灯火器の油煙の痕跡ではない。

さらに、外底部への墨書は、「菌」と判読できるものが3点、他に「寺」、「輔」がある。刻書も認められ、13の外底部には数であろうか「卅」が刻まれ、11には「×」の記号が刻まれている。

椀 (25~41) 底部の資料が多いが、残りのよいものを見ると体部が直線的に立ち上がる29・30と、丸味を持つ25~28に分けられる。なお、30のようにこれほど底の深い椀は通常希である。外底部をみると、まず回転ヘラ削りするものは、29・37・41があり、このうち41は内底部から体部外面にヘラ研磨を施す。また、25・27・33・35・40は丁寧にナデ仕上げし、その他はすべてヘラ切りのままであり、体部内外面は横ナデを施す。色調は25・33・40が黄褐色、27~30が赤褐色系統で他は白灰色である。31・40の外底部にはヘラ記号風の刻線が認められる。37の外面には煤が付着する。29の内底部には固形物が凝固している。

皿 (42~47) 口径が18cm前後のものと26cmの2つに分けられる。調整は外底部回転ヘラ削りするものが43・44・46・47でこのうち44・46は横ナデ後回転ヘラ研磨を施す。42・45はヘラ切り未調整の新しいもの。43の口縁部内面に油煙が付着する。46の外底部には墨書があり「木」のみ判読できる。また、47の外底部には刻線の記号を伴う。

盤 (48) 低い高台を外底縁部の内側に貼付する。外底部は回転ヘラ削り調整。

焼塩壺 (49~51) まとまった量の破片が出土。図示したものはすべて砲弾状に胴が長いタイプ。外面に指押の痕跡、内面に布痕が認められる。49の布地は粗く糸は1cmに5~6本、50・51は1cmに10~12本通る。木綿か。内外面とも赤褐色である。

鉢 (52~56) 52・53は口縁部を屈曲させるもので、内外面に横ナデ・ナデを施す。54は内面ヘラ削りをほどこす。これらは煤が付着し、鍋として煮炊きに使用されていたことが解る。54・56は精製の鉢、底部を欠損するが高台を備えるもので、体部から口縁部が大きく外反する。口端部は上へ突出する。体部下位から回転ヘラ削りし、内外面に丁寧な回転ヘラ研磨を加える。54は磨滅が著しい。この精製の鉢はこれまでのところ、観世音寺・国分尼寺と宝満山祭祀遺跡等で出土例がある。限定された遺跡から出土しており、祭祀的な用途を持つものであろう。

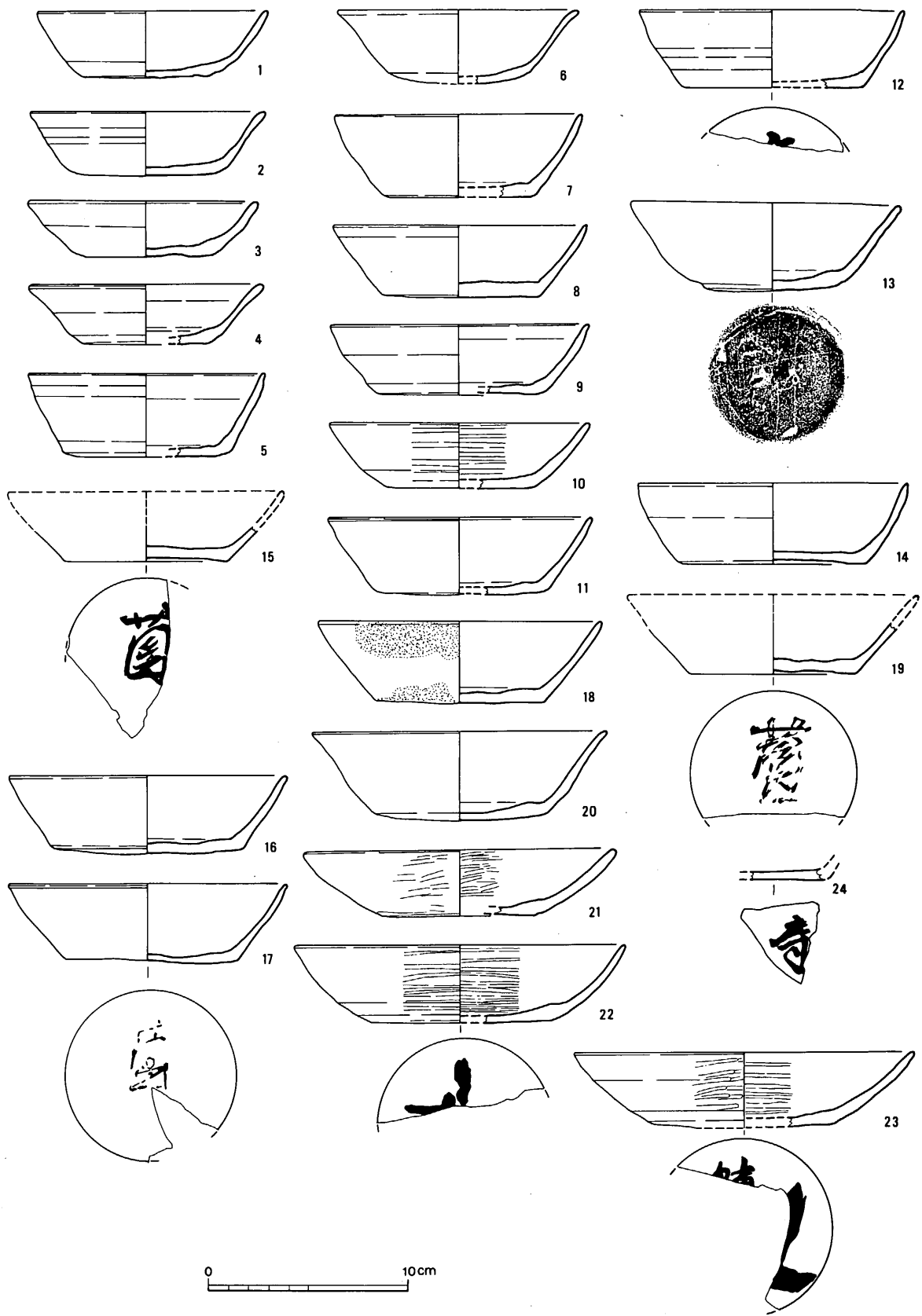


Fig.30 III·IV区溝SD50出土土器実測図(1)(1/3)

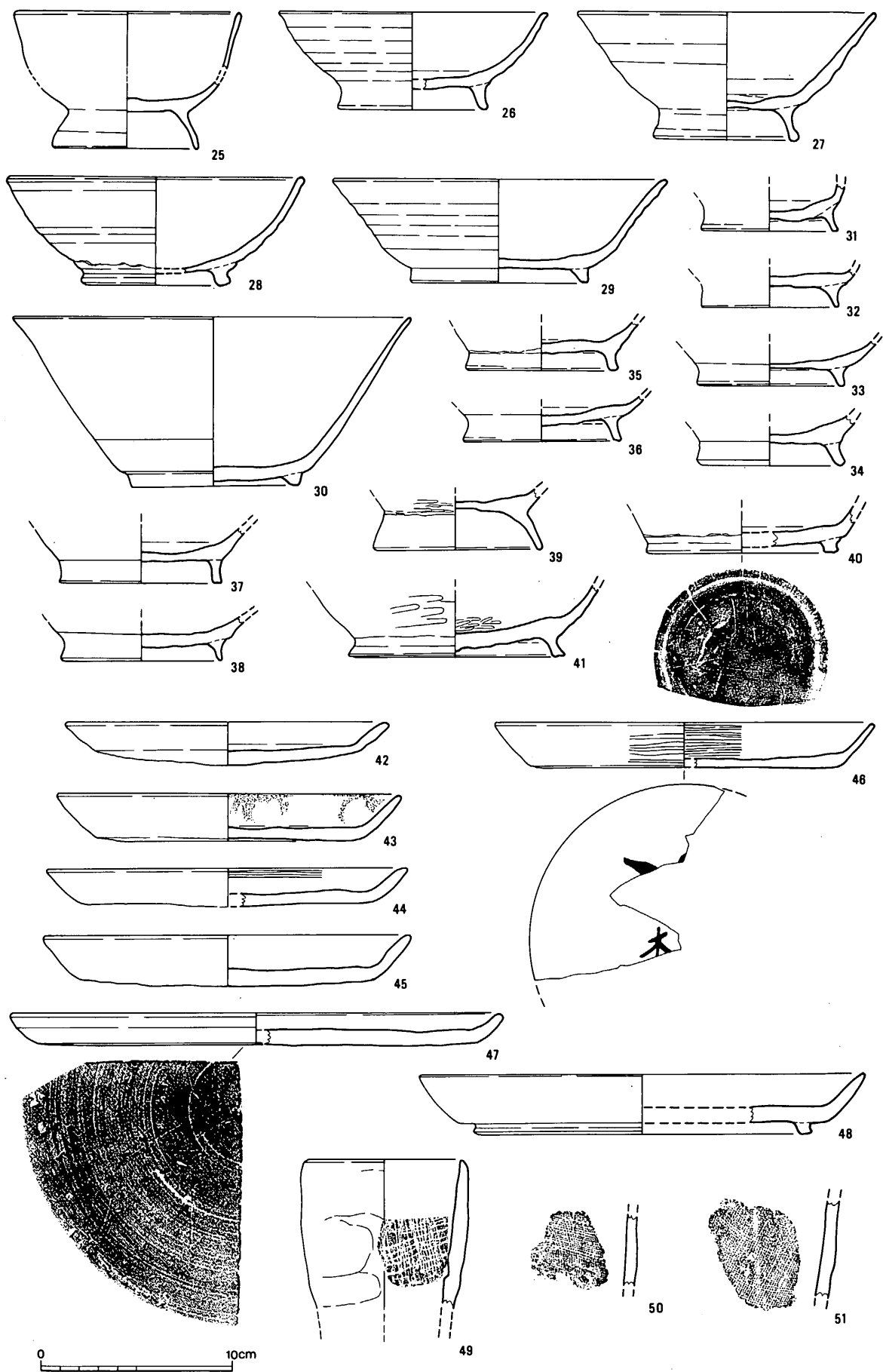


Fig.31 III·IV区溝SD50出土土器実測図(2)(1/3)

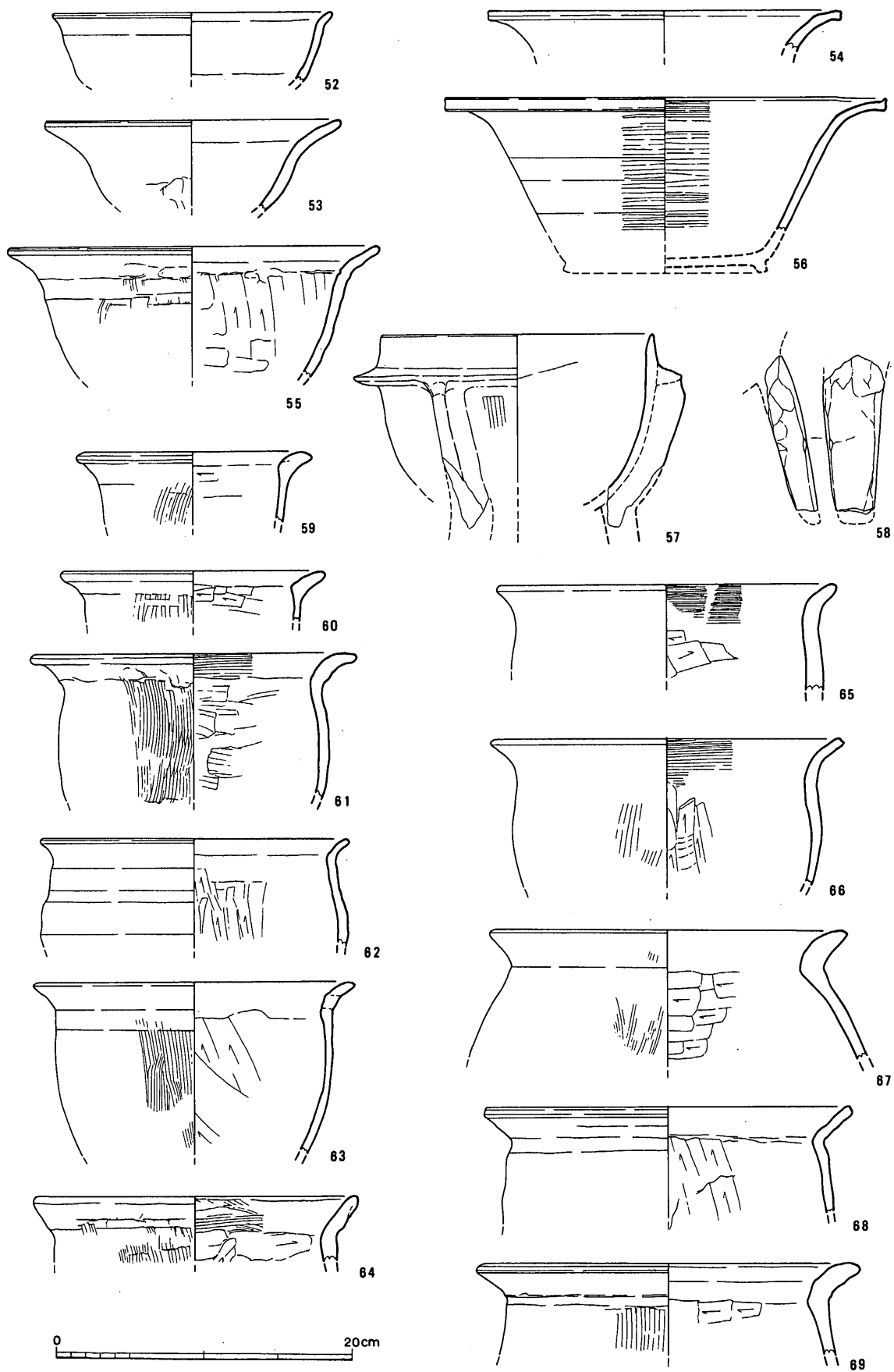


Fig. 32 · III · IV区溝SD50出土土器実測図(3)(1/4)

足釜 (57) 釜部は底が丸い半球形のもので、口縁部下に鏝を巡らす。脚は鏝の直下から連続してのびる。外面に一部刷毛目が認められ、内面は板状工具による擦痕がある。外面には煤が付着し、また、一部赤変する。通常足釜は12世紀代から出土例が増加する。中世の例では、口縁部時代が降るにつれ口縁部内傾化の度合いを強め、また、釜部も球形から扁平化する傾向にある。本例はそうした点では形式的に古く位置づけられるが、管見では古代の出土例を確認していない。

支脚 (58) 指押さえ・ナデで調整される。外面は火熱を受け赤変する。

カマド (a) 廂部分のみ出土。

甕 (59~83) 口径が16cmの小型から30cmを越える大型のものまで各種出土している。器形と調整手法から大きく4種類に分けることができる。次のように便宜的に分けて説明することにする。A類は口縁部の器肉が胴部に比べて厚みを増し、調整は外面縦刷毛目、内面横方向のヘラ削りを施すもので、59・60・61・67・69・72・73・76・77・83がある。B類はA類のように口縁部が厚みを増さず、胴部の張りが少ないもので、調整は外面縦刷毛目、内面の削りが縦方向となるもの。66・68・75・78・79・80・82がある。C類はA・B類のいずれかの特徴をも有するもの。口縁部は厚みを持ち、内面縦方向のヘラ削りをなすもの。63・71・81が該当し、さらに、逆の特徴を有すもの。64・65・70・74がある。D類はB類と同じ形態だが、外面が叩き痕をそのまま残すもので、最も少なく62のみ1点がある。型式変化としてはA類からC類、B類、D類へと考えられ、調整手法上内面ヘラ削りの横から縦への変化は、胴部の張りとは強く関連することが予想される。胴部の張りを強くするためには横方向のヘラ削りが必要だからである。もちろんこうした変化は当然竈の構造変化たとえば、掛け口と支脚の関連性と強く結びついているものであろう。D類は調整手法の簡略化と考えられ、9世紀後半以降顕在化する現象である。

この他、76の口縁部には焼成前の穿孔が現状で2孔認められる。口径を復元すると四方に設けていたものか。なお、全て火熱で赤変もしくは煤が付着する。

須恵器

蓋 (84~86) 口径14cm前後と20. cmの二種が出土。84は撮を持たないタイプ、口縁部が屈曲し、85・86は口端部内側に沈線状の段を有す。全て、外天井部はヘラ切り未調整。

杯 (87~93) すべて外縁部に低く断面四角形の高台を備えるものである。体部はほぼ直線的にのびる。外底部はすべてヘラ切り未調整。

皿 (94・95) 大小2つが出土。ともに外底部はヘラ切り未調整。94は内底部にまで自然釉がかかる。95は口縁端部と、体部外面が黒灰色を呈しており、重ね焼きされたことがよく解る。

壺 (96~101) 96は頸部が締まる小壺で、口縁部と体部下半を欠損する。横ナデを施し、体部に凹線状の段が巡る。残存する破片を観察すると、下部が丸味を持たないことから、底部は平底になるものと思われ、重心の低い器形となる。このような器形を類例と照らし合わせると、牛頸ハセムシ窯跡出土例に近い短頸壺唾壺になると思われる。体部最大径8.0cm。体部上面に灰を被る。97は外底部不調整。体部内外面を横ナデする。96に比べて器肉が厚い。底部径6.0cm。98は体部上半を欠損するが、内底部付近の灰の被り方から見て横瓶と見て間違いなからう。体部の下方から外底部は回転ヘラ削り、内外面とも横ナデで、内面は轆轤目が顕著に認められる。99~101は長胴の壺で99は体部下半から外底部を回転ヘラ削りする。外面に粗いヘラ研磨を施し、肩部に2条の凹線をめぐらす。98は外面に斜位の長方形格子叩きを残すもの。肥後系のもの。101は小片であるため傾き、復元径に

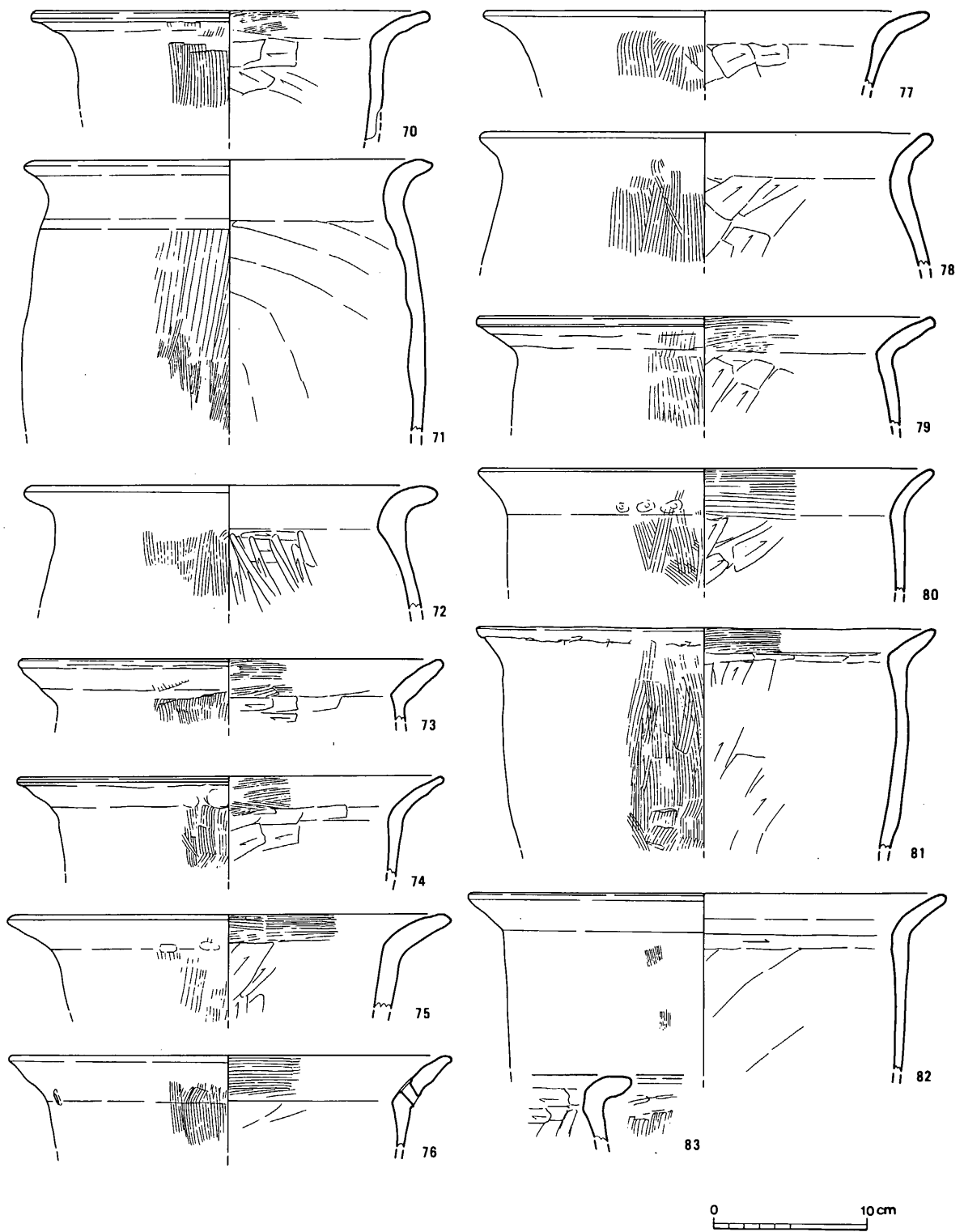


Fig. 33 III·IV区溝SD50出土土器実測図(4)

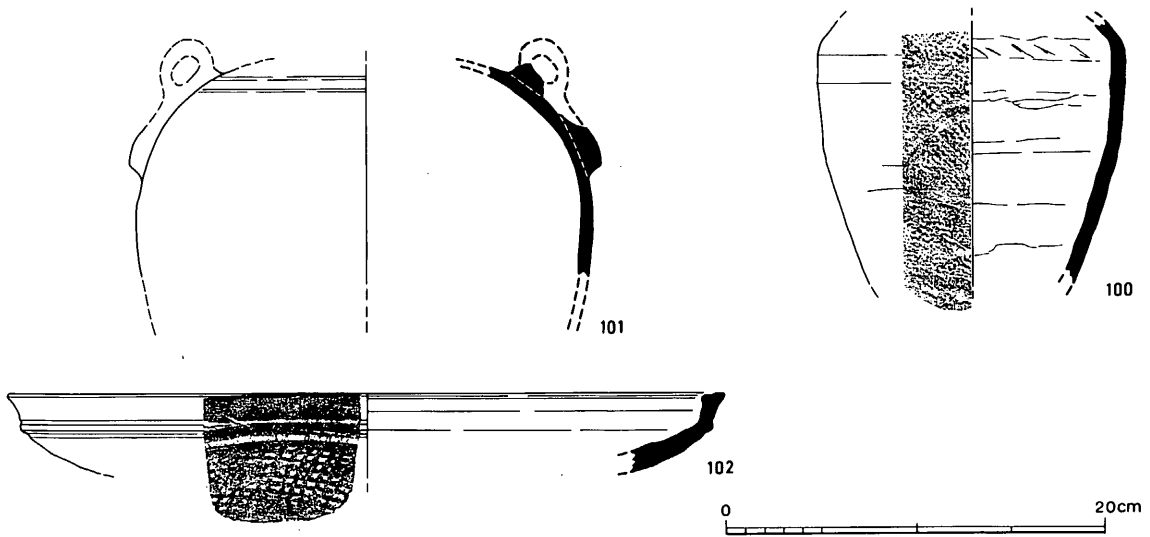
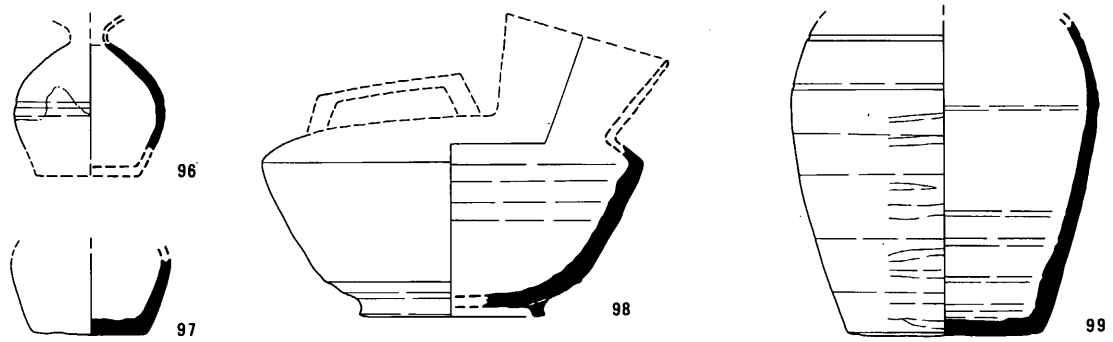
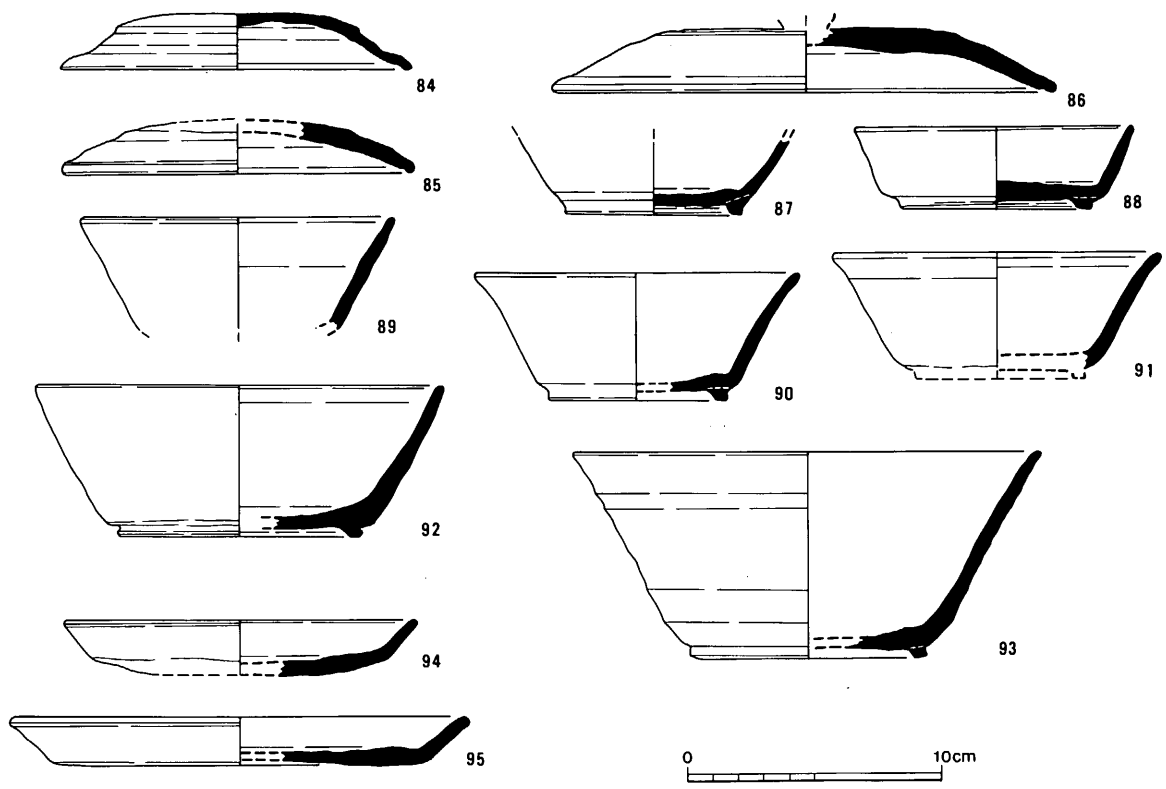


Fig.34 III·IV区溝SD50出土土器实测图(5)(1/3·1/4)

は難があるかもしれない。肩部に耳状把手を貼付する。内面下部1/3にプaster状の白色物質が付着する。

鉢 (102) 体部から口縁部が屈曲して直立するもので、底は浅めである。口端部を肥厚させ上面は平坦部をつくる。外面に擬格子の叩きを有す。

甕 (103~107) 口縁部は短く反転し、端面が右下がりの形態をなす。103・104は外面に横位の板目平行叩きを施し、内面に同心円の当具痕を有す。105は縦位の平行叩き、内面には青海波当具を有す。106は縦位の平行叩き、内面の上半は同心円、下半は平行当具を施す。107は胴部下半の資料。外面に木目直交の平行叩き(擬格子)、内面に同心円の当具を残す。104は器面が赤褐色に胎土は灰褐色に焼成。他は淡青灰色を呈す。

陶硯 (108) 須恵器甕の転用で、破片の周囲を丁寧に打欠いて長方形に整える。一方の端を欠損する。内面は良く摺れており、その痕跡が明瞭である。外面に擬格子の叩き痕、内面は整然とした同心円当具痕がある。

黒色土器

椀 (109~116) 109は小型のもので、土師器と同器形である。内外面を燻したB類。磨滅が著しく調整不明。110から116は内面のみ燻したA類。体部が丸味を帯びている。外底部はヘラ切り後、ナデたものとそのままのものがある。内面の磨きは横方向のジグザグに幾つか分割して行なう。116の外底部に「高」と読める墨書がある。

鉢 (117) 内面のみ燻したA類。体部から口縁部まで丸味を帯び、端部を丸めて納める。磨きは約1/8に分割し、手持ちでジグザグに施す。外底部は剥離しており、高台が備わっていたとも考えられるが確証はない。胎土に赤色粒子を交え、比較的砂粒の少ない精良なもの。

陶磁器

越州窯系青磁

破片点数は50点以上出土している。図示できるものの内特徴的なものを挙げて説明する。

椀 (118~128) 118はきめの細かい胎土を用いた精製のもので、口縁部が内湾し、底部は蛇ノ目高台となるもの。内外面に光沢のあるオリブ釉を施す。119は口縁部を外反させる。黄色味の強いオリブ釉を施す。口端部に輪花とも思われる凹部があるが定かでない。胎土は不純物を含む粗製のもの。水注かもしれない。120は蛇ノ目高台風に削ったもので、外面露胎、内面にオリブ釉を薄く施す。目止めの胎は白色で、削らずそのまま残る。5から6個。121・122は輪高台のもので、オリブ釉を全面施釉する。目止めは121が18~20ヶ、122が10ヶ前後とに復元できる。また、122は目止めの胎を削って仕上げるが、121はそのまま残されている。122は大椀の部類に入れておく。123~125は円盤状高台をなし、外面半釉のもの。露胎部分は茶褐色に発色する。123はやや上げ底気味、灰褐色の胎土にオリブ釉を施す。現状で目跡は認められない。124は光沢のある薄い釉を施す。目止めは残したまま。125は同一個体の2破片である。貫入の入った緑灰色釉を施す。外底部は糸切り。126~128は平底で大型品のもの。126・128は外縁部を削って段を有し、円盤状に近く整えたもの。126は灰白色釉を施し、露胎部分は赤褐色、目跡は青灰色を呈す。128はオリブ釉を施し、目止めの砂は大きくまた、削らずにそのまま残す。露胎部分は灰白色、目跡は赤褐色に変色する。127は外縁部を斜めに削っただけのもの。胎土は精良なものを用い、オリブ釉を薄く施す。露胎部分は灰白色、目跡周辺のみ赤褐色を呈す。内底の目跡は5ヶに復元できる。そのまま削らずに残す。

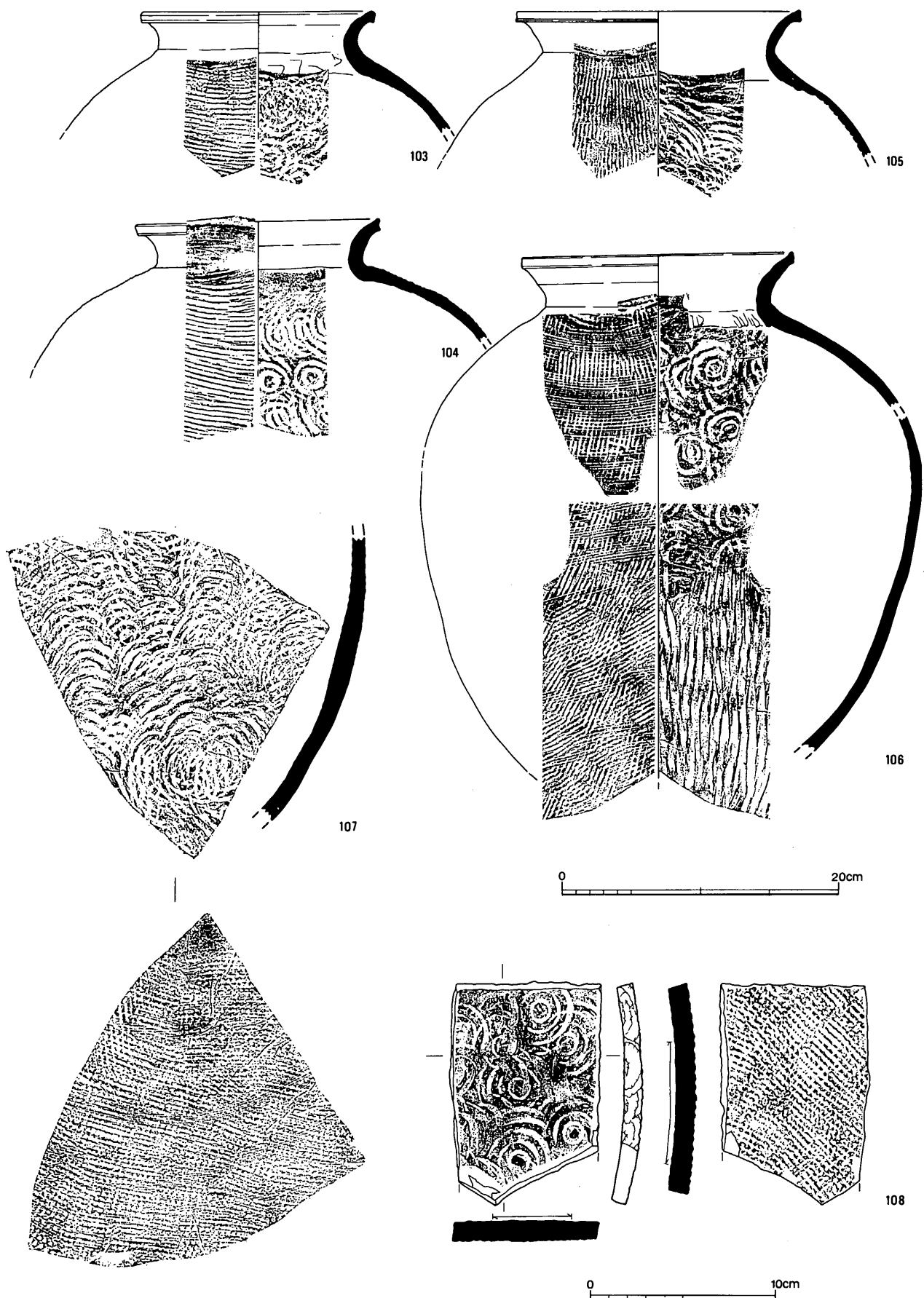


Fig. 35 III·IV区溝SD50出土土器・硯実測図(1/3·1/4)

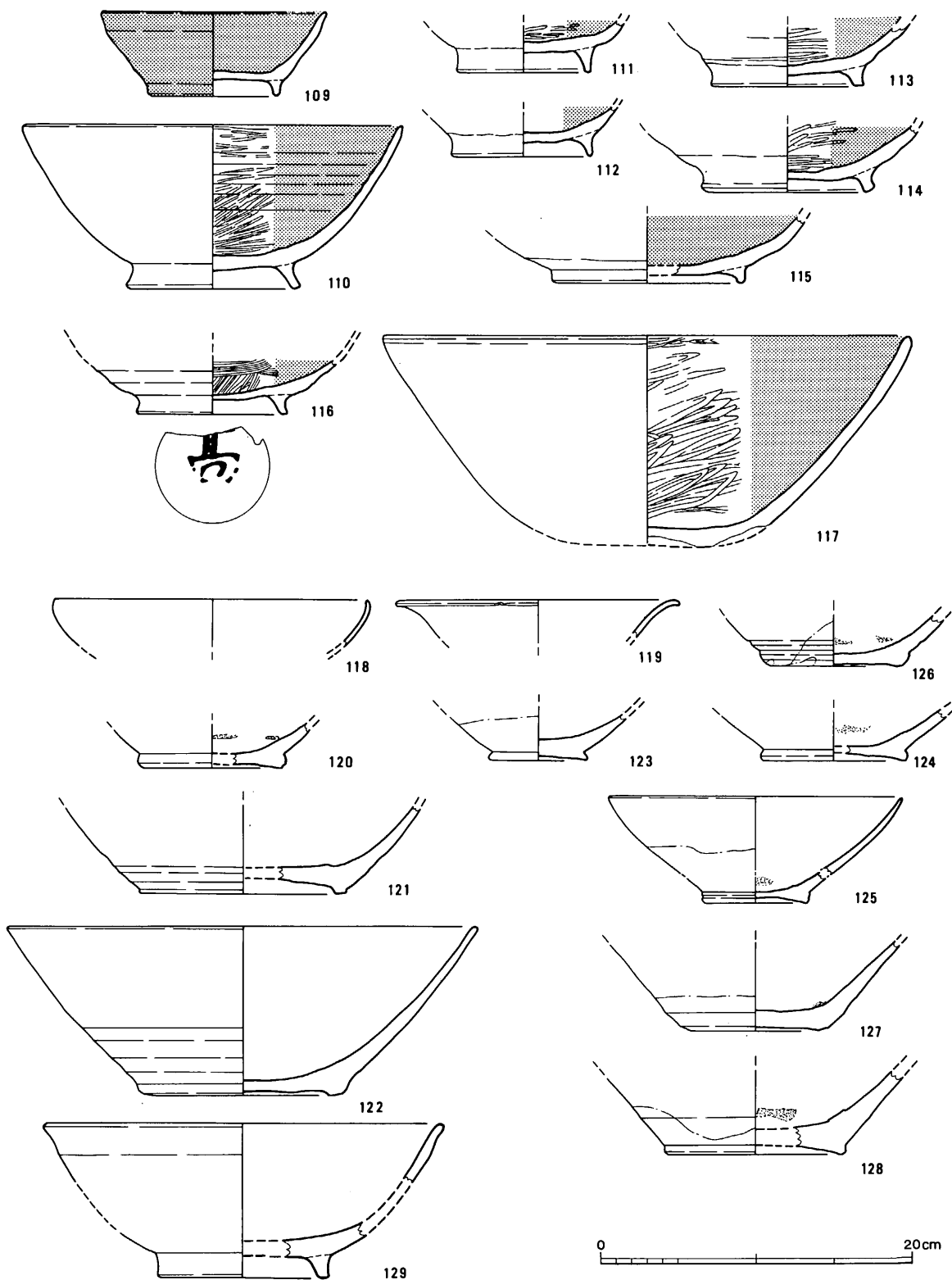


Fig. 36 III・IV区溝SD50出土土器・陶磁器実測図(1/4)

大宰府出土陶磁器の型式分類【森田・横田1978】では118がⅠ-1類、121・122がⅠ-2類、120がⅡ-1類、119・123~125がⅡ-2類、126~128がⅡ-3類となる。また、最近、田中克子氏が鴻臚館出土越州窯系青磁を詳細に観察し、主に胎土の違いを大分類の基準にして、型式分類を試みている。【田中1994】

(胎土)

A類 色調は灰白色から淡灰褐色のものが多い。緻密で精良。

B類 色調は灰白色から灰色で、中に白色の細かな砂粒を含む。A・C類に比べると、細かな空隙が多く、緻密でない。

C類 色調は灰色のものが多い。緻密ではあるが、中に黒班が多く入るのが特徴で、これをカバーするために化粧土を施す。

この分類にしたがえば、118はA-1b類、119はC-3a類、120はC-1類、121はA-2類、122はA-4b類、123～125はC-2類、126・128はB-3類、127はA-3類となる。

緑釉陶器

椀(129) 同一個体と思われる2片から復元した。胎土は白灰色の土師質の胎土に、淡緑色の釉を全面に施す。長門産。

石製品 (Fig-37, PL25)

石鍋(1) 復元口径18.2cm。口縁部約1/4が残存する。口縁下に突起状の把手をつくる。把手は出が、2.2cm、幅3.2cmを測る。角は丁寧な面取りする。外面は口縁部付近に削り痕を残す他は、平滑に仕上げる。内面はノミ痕のままである。外面に煤が付着し、黒色化する。出土例としては最も古い。この他にもう1点、別個体の底部付近の破片が出土。

砥石(2) 頁岩質のもので、破損と剥離が著しい。上面と両側面は良く擦れている。

金属製品 (巻頭PL2-3)

箸(3・4) 3は残存長2、65cm、径0、46cm。一方の端と裏面の一部を欠損する。残された一方の端には長さ1.5cm程の稜線をつくっている。この部分の断面は四角形に近い形状をなし、他は円形である。銹化が著しく灰緑色を呈す。4は残存長4.15cm。両端を欠損する。断面は円形。質の良いもので、黒緑色を呈す。分析していないが、肉眼で見ると限り佐波理(響銅)製の可能性が高い。

瓦類

10点ほどの瓦片が出土。軒瓦・道具瓦等は出土していない。

丸瓦(5) 玉縁をつくるもので、凹面に布目痕を残し、凸面に不整形な正格子叩きを施す。

平瓦(6～8) 6は縁部付近を残したものの。凹面は布目のまま、凸面はヘラ削り調整する。側面に分割見切り線を残したままである。7は凹面が磨滅、凸面は5よりさらに崩れた格子状の叩きを施す。8は凹面に布目痕、凸面は均整のとれた斜格子の叩き痕を有す。5・7は軟質、6・8は須恵質である。

その他の遺構・層位出土遺物

S X 60出土土器・土製品

土製品

竈(1) 置竈の上部資料で、曲げ底系統のもの。庇縁部は欠損する。掛け口が高くつくられ、復元口径21.0cm程となる。口縁部周縁のみ黒色化し、また、内面には煤状のものが付着する。

土師品

甕(2) 口縁部はあまり開かないもので、器肉が薄い。体部外面に縦方向の刷毛目を施し、内面はヘラ削りするが方向は定かでない。

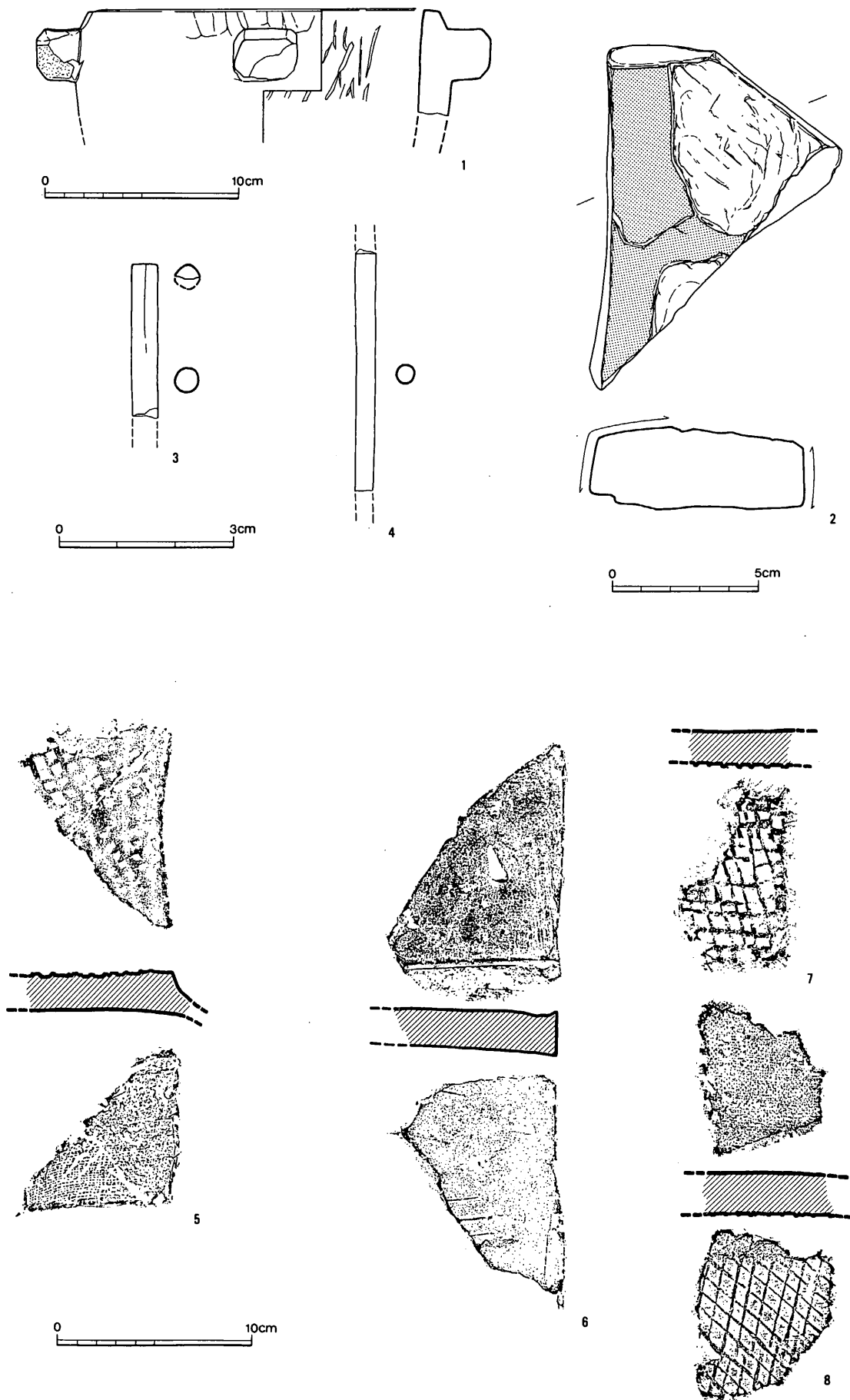


Fig.37 III·IV区溝SD50出土石製品・金属製品・瓦実測図(1/1·1/2·1/3)

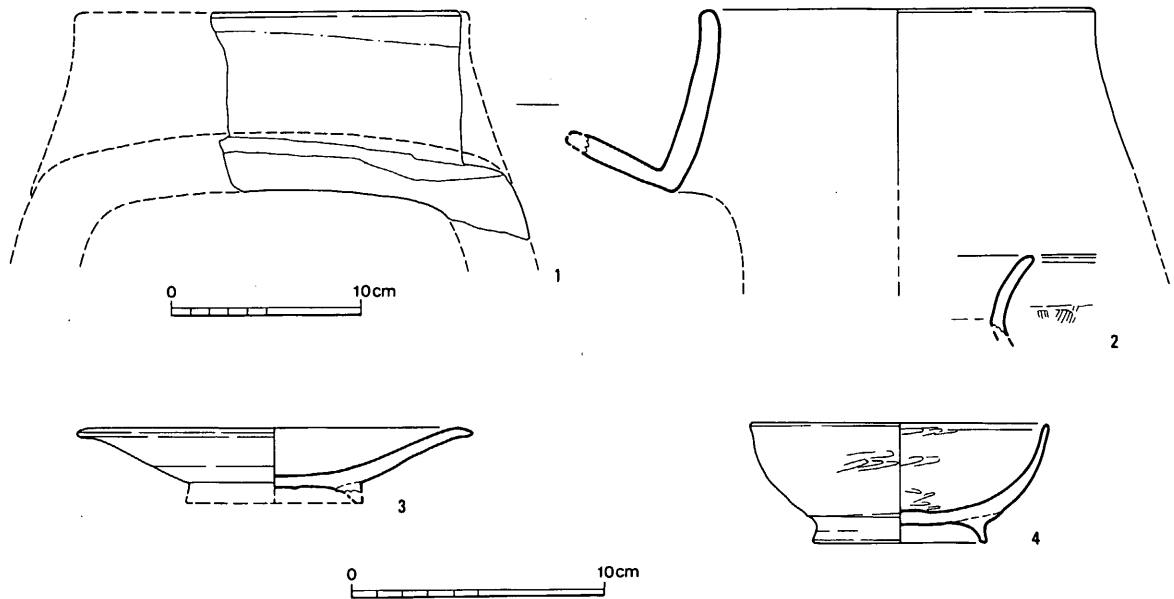


Fig. 38 IV区その他の遺構出土土器・土製品実測図(1/3・1/4)

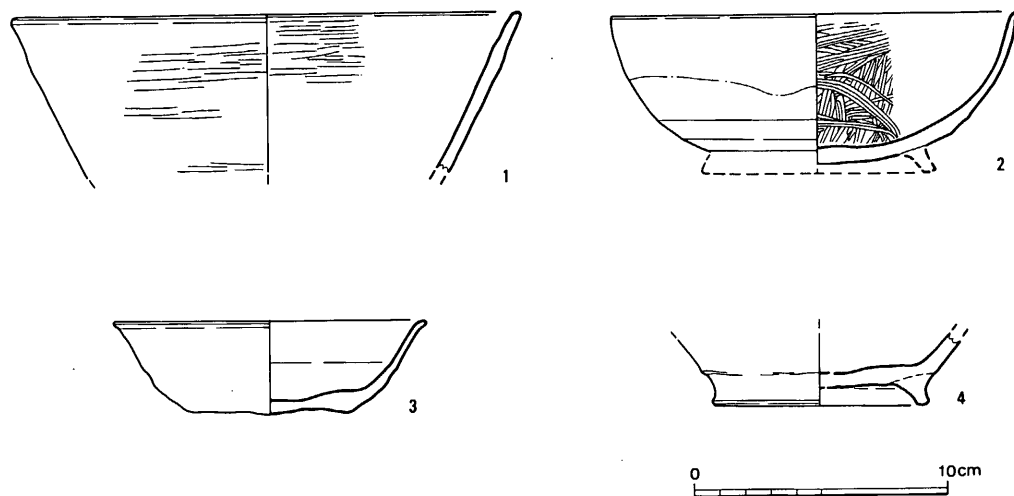


Fig. 39 V区出土土器実測図(1/3)

S K 61出土土器

土師器

皿（3）復元口径15.6cm。口縁端部を屈曲させる。底部に輪高台を貼付する。灰釉陶器を模倣したものであろう。外面下半を回転ヘラ削り、上半を横ナデする。内面は磨滅し不明。

黄褐色土出土土器

土師器

碗（4） 体部に丸味を有すもので、口縁端部を欠損する。外開きの高台を付す。内外面にヘラ研磨を加えた精製品。外底部はヘラ切り後、ナデを施す。

V区出土遺物 (Fig39, PL25)

S D 70出土土器

土師器

大椀（1） 体部は直線的に立ち上がる。内外面に回転ヘラ研磨を施す。8世紀後半。

S K 76出土土器

黒色土器（2） 体部が丸味を有すもので、高台を剥離する。内面のみを燻すA類だが、体部上半も黒化している。内面体部は横位にジグザグに研磨され、底部付近は同方向に研磨される。

暗褐色土出土土器

土師器

杯（3） 復元口径12.4cm、器高3.7cm。体部下半に丸味を持ち、口端部を外反させる。外底部ヘラ切り未調整。灰褐色。

椀（4） 底部付近を残す。底部周縁に高台を付す。底部ヘラ切り後ナデを施す。外底部に×状のヘラ記号を入れる。淡橙褐色を呈す。

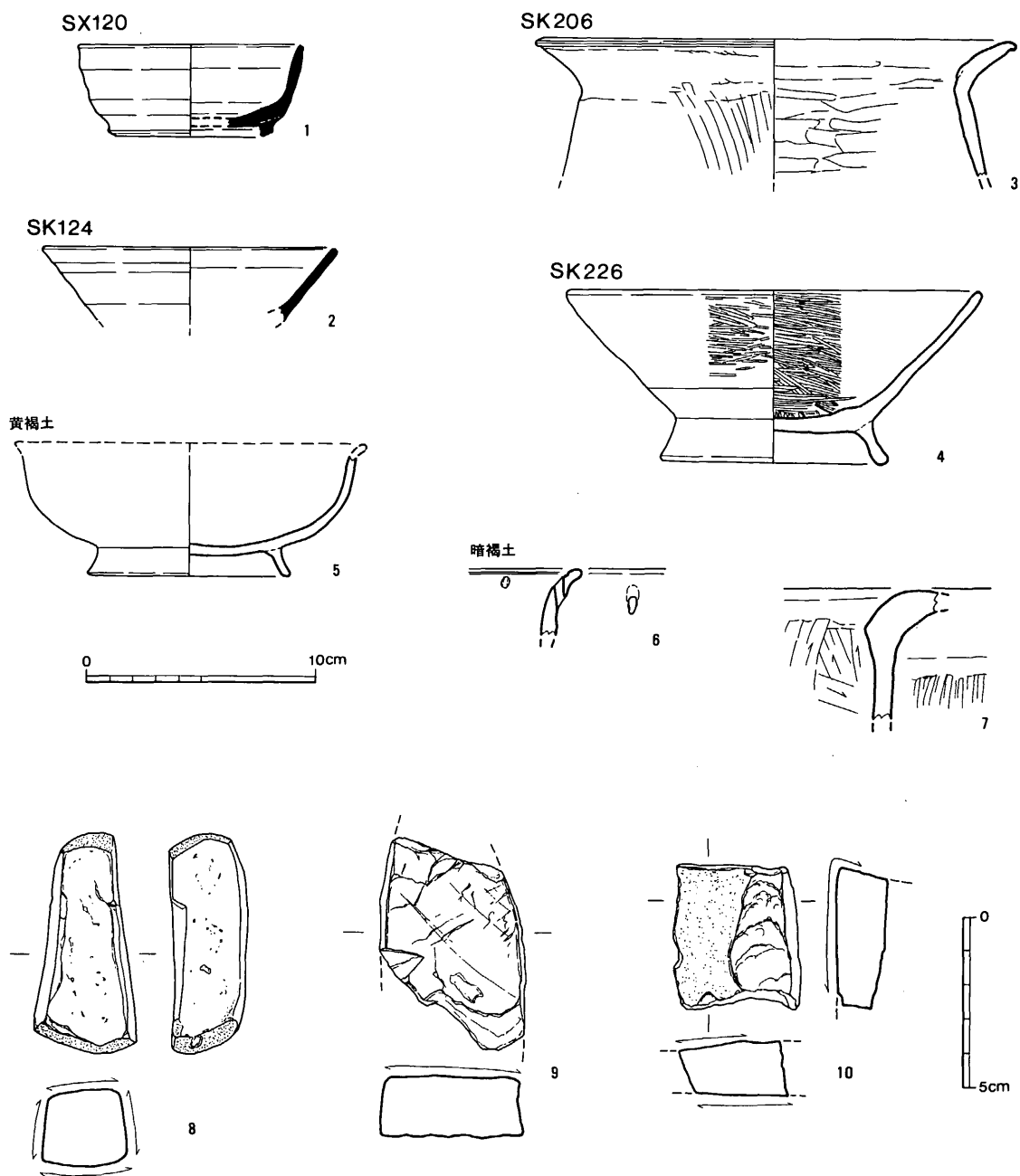


Fig. 40 VI区出土土器・石製品 I 実測図(1/3・1/2)

VI区出土遺物 (Fig40, PL25)

主に上層遺構と層位から出土。

S X 120出土土器

須恵器

杯 (1) 復元口径10.0cm、器高4.0cm。外底部ヘラ切り後ナデを施す。焼成は軟質。

S K 124出土土器

須恵器

杯 (2) 高台付杯の体部破片。復元口径12.8cm。内外面横ナデ調整。器形から見る限り、S X 120出土土器と同様9世紀前半のもの。

S K 126出土土器

土師器

甕 (3) 復元口径21.0cm。口縁部は体部に比べて比較的厚い。体部外面粗い刷毛目、内面横位のヘラ削り。

S K 226出土土器

黒色土器

椀 (4) 内面のみ燻したA類。9世紀前半の土師器と同様の器形をなす。内面の磨きは5分割して横位にジグザグと交差する磨き。体部外面にも磨きを施す。外底部ヘラ切り未調整。

黄褐色土層出土土器

出土した土器は細片が多く図示しなかった。主に8・9世紀代のものが出土。

土師器

椀 (5) 体部が丸味を帯び、外開きの高台を付す。器面が磨滅気味で単位は不明だが内面はヘラ磨きか。体部及び外底部に横ナデを施す。底径8.9cm。

暗褐色土層出土土器

甕 (6・7) 6は口縁部のみであるが、口端部下に穿孔が認められる。径0.5cm、内面上部から穿つ。7は口端部を欠損する。口縁部が体部に比べて肉厚。体部外面縦刷毛目、内面縦ヘラ削り。

石製品

砥石 (8~10) 8は立岩製石包丁と良く似た茶褐色凝灰岩質のもの。断面四角形状で、四面を研ぎ面とする。両端面には敲打痕と擦痕が認められる。黄褐色土層出土。9は頁岩質で、上面のみ研ぎ面として利用。両端を欠損する。10は砂岩質で、側面と下端を欠損。3面を研ぎ面とする。いずれも暗褐色土層から出土した。

参考文献

横田賢次郎・森田勉 『大宰府出土の輸入陶磁器について』九州歴史資料館研究論集4 1978

田中克子『北部九州における越州窯系青磁粗製品について—鴻臚館出土遺物を中心として—』先史学・考古学論究 龍田考古学1994

8. 縄文時代出土遺物

縄文土器

原遺跡ではVI区を中心に1266点の縄文土器が出土した。その内訳は、草創期16点、早期1212点（押型文期1203点）、前期21点、中期2点、後期4点、晩期11点である。土壙から出土したものも少なくな

いが、各時期の縄文土器や9世紀代の土器との混在という状況が認められた。また、包含層中においても特定の類型の土器が部分的に集中する傾向も観察されなかった。したがって、遺構別とくに纏めるのではなく、時期別（類型別）に纏めて実測図を提示することにした。なお、第1類は縄文草創期、第2～11類は基本的に早期押型文土器期のヴァリエーション、第12類は早期でも押型文土器に後出するであろう一群、第13類は前期、第14類が中期、第15・16類が後期、第17類が晩期、にそれぞれ属する。

第1類 (PL26 Fig41) 第1類は続円孔文土器「柏原式」といわれる土器群で、縄文草創期末（後半）に位置づけられる。器厚は7～9mmとやや厚手で、器面調整は二枚貝腹縁による貝殻条痕文。器形は緩やかに開きながら立ち上がり、口縁部がわずかに外反して端部は舌状に丸く作られる。底部はおそらく丸底。口径は17～20cm程度と、30cm程度のものとに分れる。文様は先の尖った工具による刺突文が口縁部下に普通1条施されるが、4のように3条のものもある。この刺突文はかなり深く、多くの場合内面に粘土の盛り上がりが見られるものの、貫通することはない。そしてその下に、径1cm、高さ5mm程度の瘤状の突起が普通1個付くが、3や15のように2～4個付くものもある。1/2以上遺存する個体がないので確定できないが、この突起はおそらく2ないし4方向に付くものであろう。口縁部付近は内外面ともナデが施され二枚貝の貝殻条痕文が消されている。しかし、瘤状の突起まではナデが及ばず、この突起は貝殻条痕文の上に直接貼り付けられている。

第2類 楕円押型文土器を一括して第2類とし、a) 横位施文のみ、b) 横位施文+原体条痕、c) 縦位施文、d) 大型楕円文に分類した。

第2a類 (PL27 Fig42・43-17～36) 楕円押型文だけを内外面とも横位に施す一群。多くの場合、口縁部内面にも原体幅分の押型文が施される。外面の口縁部下2～3cm分は無文のものもあるが、これは押型文をナデ消すのではなく、もともと施文していない部分である。29は口縁部付近が縦位施文だが、内面の状況から本類に含めた。30～36については第2b類の可能性もあるが、概して第2a類では楕円のサイズが小さいのでこれも本類に含めた。本類は所謂「稻荷山式」に相当する。32と33は同一個体である。

第2b類 (PL27 Fig43-37～47) 外面には横位の楕円押型文が、内面には原体条痕やそれに楕円・山形の押型文が伴い施される一群。口縁部の開きかたが第2a類より大きくなり、また中には強く外反（屈折）したり、端部に刻みの施されるものもある。45は楕円文のサイズの大きさから本類に含めた。38は原体条痕ではなく刺突文に近い。本類は所謂「早水台式」に相当する。

第2c類 (PL27・24 Fig44) 楕円押型文が縦位に施される一群。口縁部の開きは大きく、強く外反するものもある。内面には主に原体条痕が施されるが、楕円文や山形文だけのものもある。48は復原口径約34cm 復原器高約24cmで、ほぼ完形近くにまで復原できた。器面調整はナデ。本類は所謂「下菅生B式」に相当する。

第2d類 (PL28 Fig45-59～62) 楕円文が8～10mmの大型になる一群。施文方向に規則性は窺えず、底部は丸底に近くなる。内面の原体条痕は粗く、普通斜位に施される。器厚も12mm程度と厚くなる。本類は所謂「田村式」に相当する。

第3類 (PL29 Fig45・46-63～86) 山形押型文だけが施される一群で、施文方向はすべて横位。外面に山形文が施される土器の場合、内面はすべて同じ原体の山形文が施され、原体条痕等が施されることはない。63～65の口縁部直下には断面形態の丸い工具で刺突文が施されるが、第1類の刺突

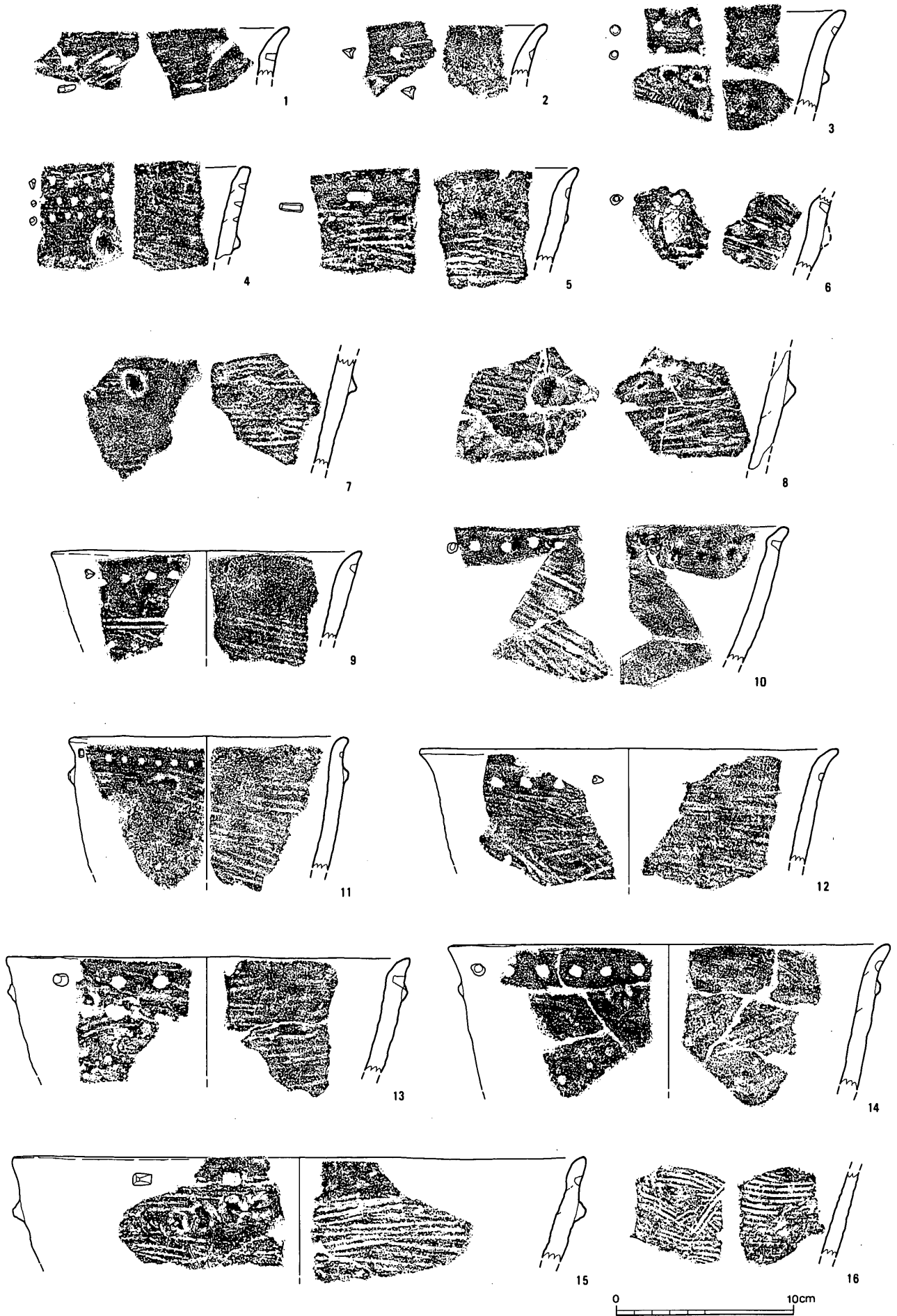


Fig. 41 縄文土器第1類土器実測図(1/3)

柏原式

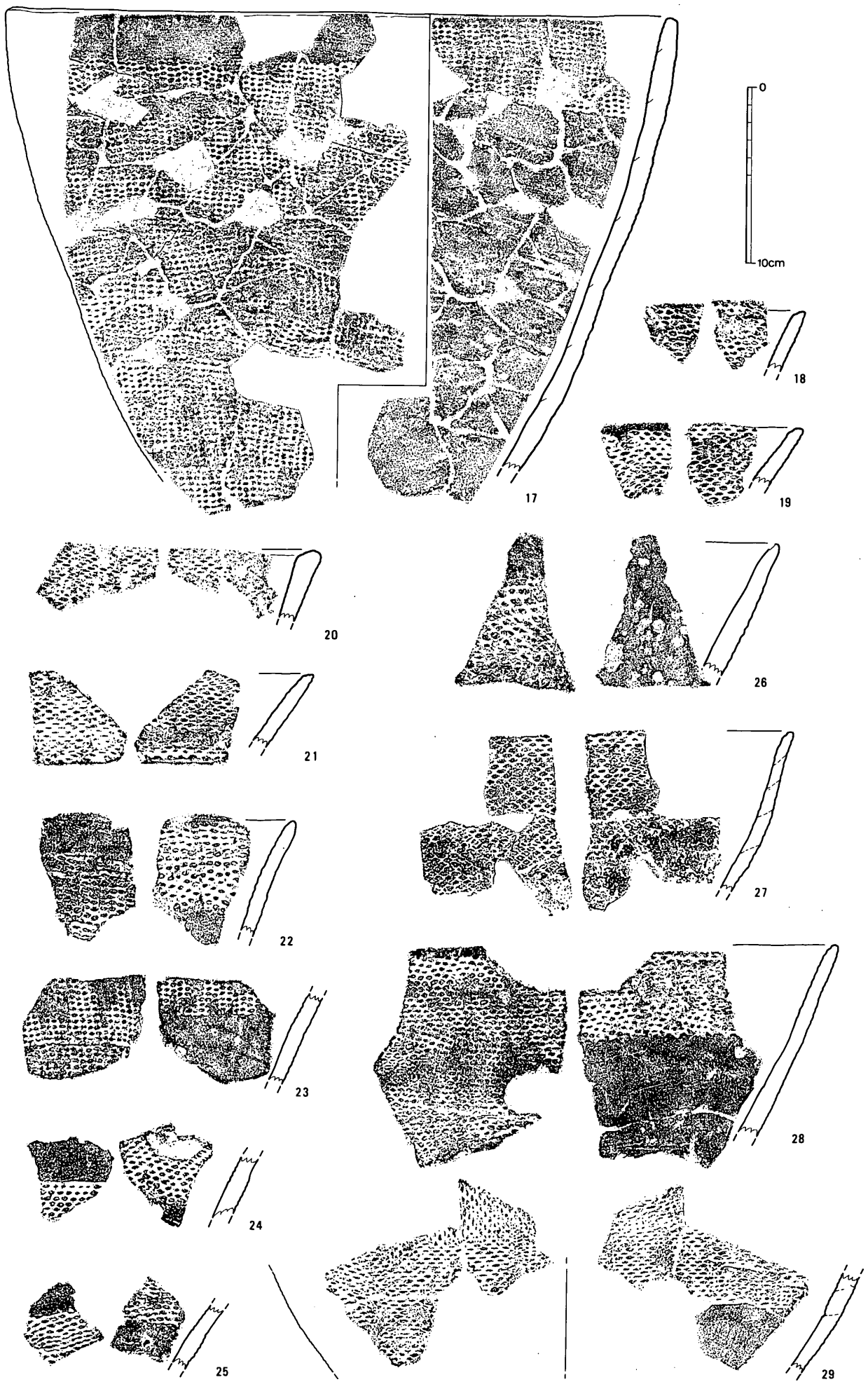


Fig. 42 縄文土器第2a類土器実測図(1/3)

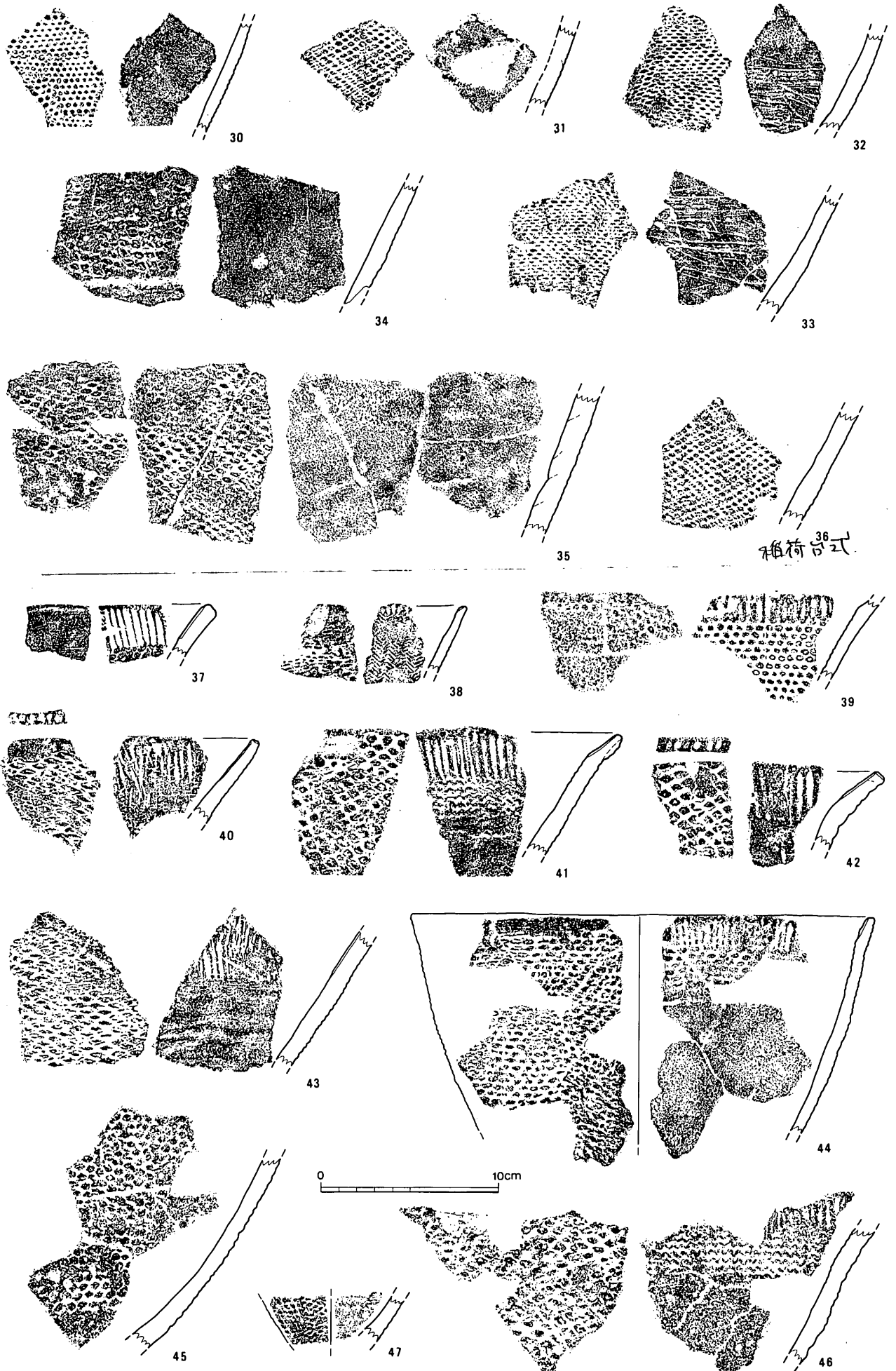


Fig.43 縄文土器第2a・2b類土器実測図(1/3)

早水台式

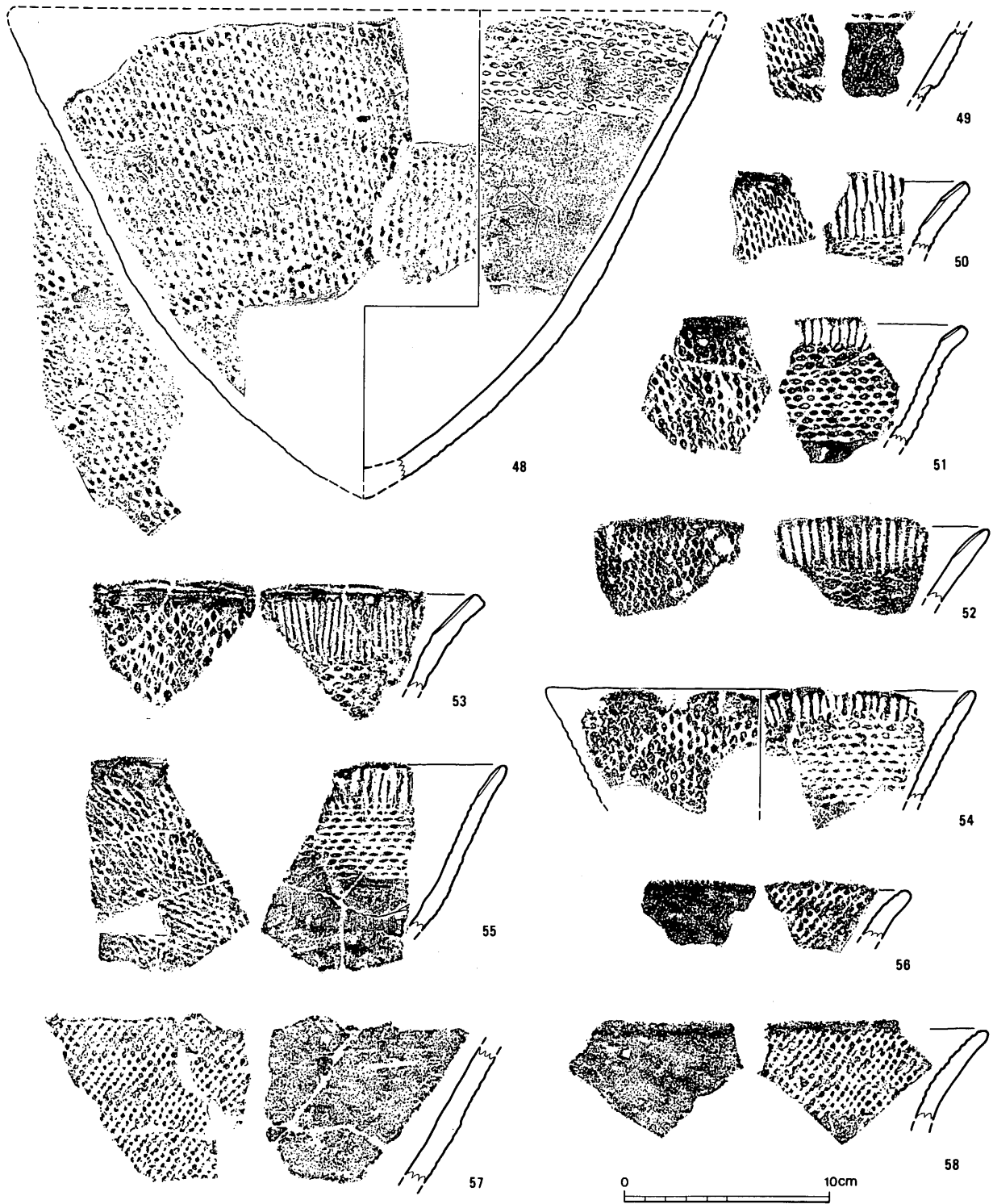


Fig. 44 縄文土器第2c類土器実測図(1/3) 下巻生B

文とは工具・サイズ・間隔・角度等が異なる。この種の刺突文は山形文のもの以外には見られない。66は補修孔。山形文にもいくつかのサイズが存在し、それぞれに第2a・2b・2c類のいずれかに共伴するはずであるが、どれがどれに対応するのか判然とせず、第3類としてとりあえず一括した。ただし、横位施文を重視すれば第2a・2b類に、内面に原体条痕が存在しないことを重視すれば第2a類に共伴することになるが、いかがであろうか。

第4類 (PL29 Fig46-87~89) 格子目の押型文が施される一群。施文方向はすべて横位。内面の

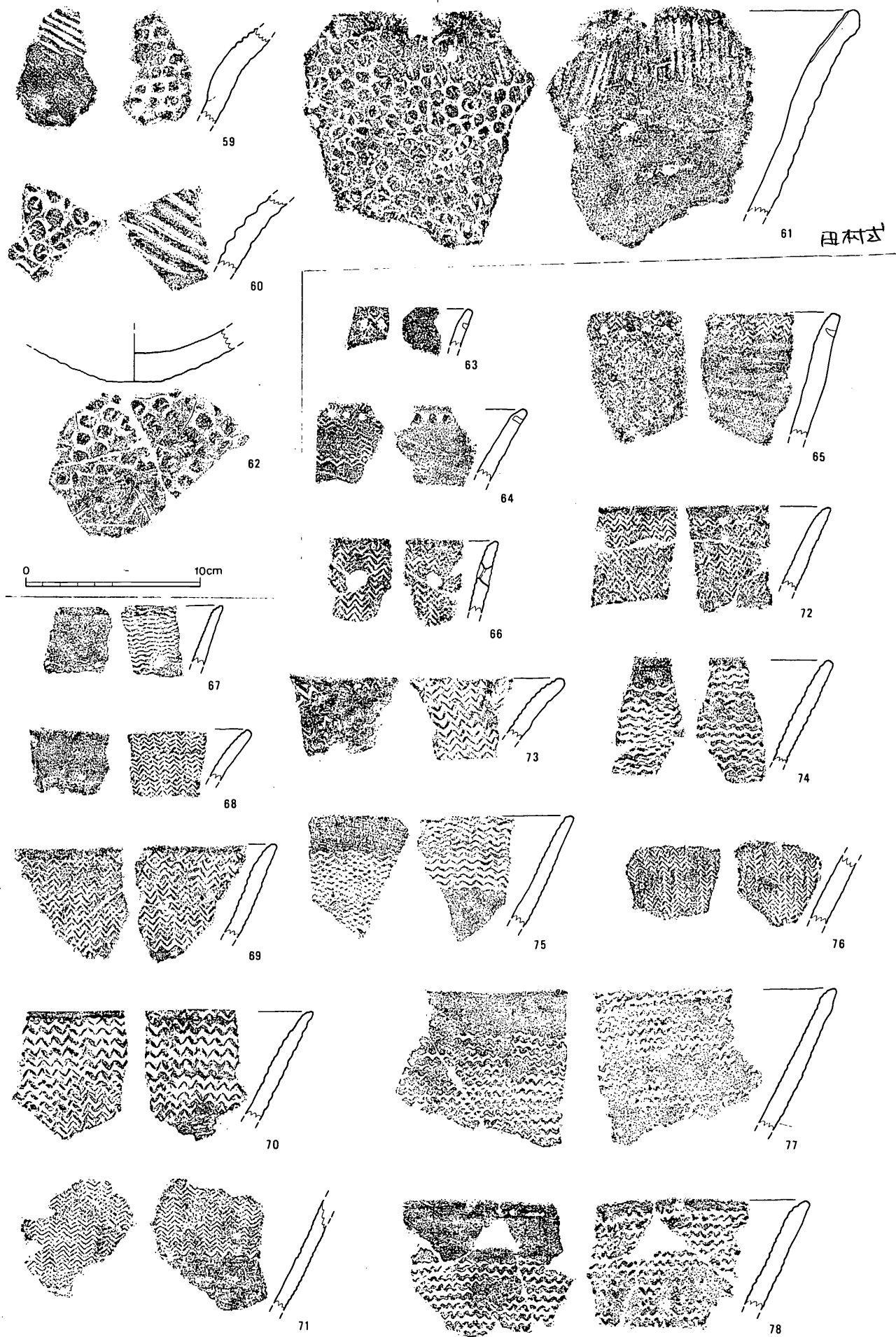


Fig. 45 縄文土器第2d・3類土器実測図(1/3)

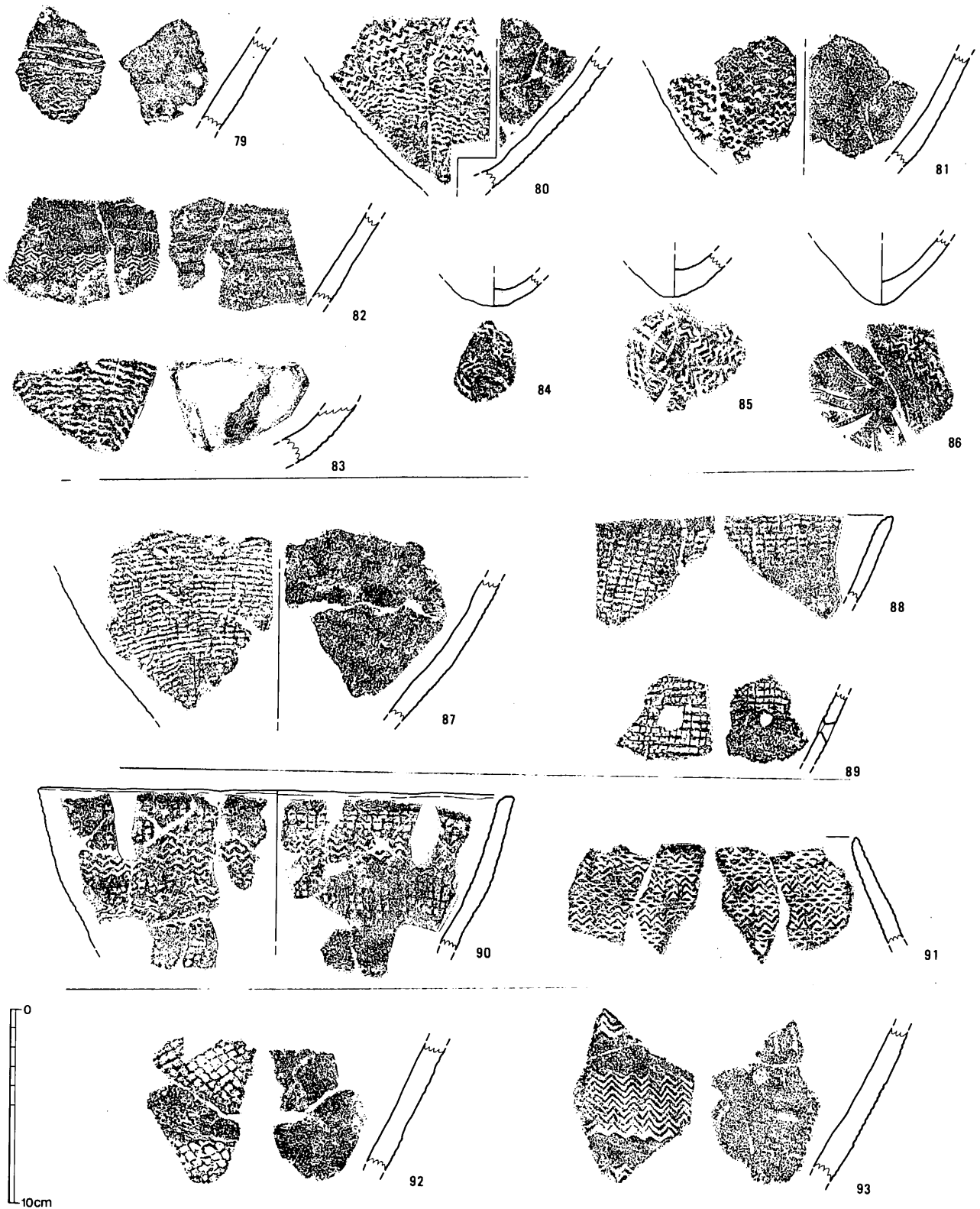


Fig. 46 縄文土器第3～6類土器実測図(1/3)

原体条痕は存在しない。格子目のサイズも小さい。89は穿孔による粘土の盛り上がりを押型文が潰していることから、補修孔ではなく、焼成前に穿孔されたものと考えられる。ただし、紐等を通して擦れた痕跡はなく、器形的にも他の土器と大差ないことから、この穿孔が何の目的によるものかは不明である。

第5類 (PL29 Fig46-90・91) いくつかの文様が組み合わさる一群。90は格子目文と山形文を、91は楕円文と山形文を、内外面共に交互に施す。91は明かに内傾し、無頸壺のような特殊な器形にな

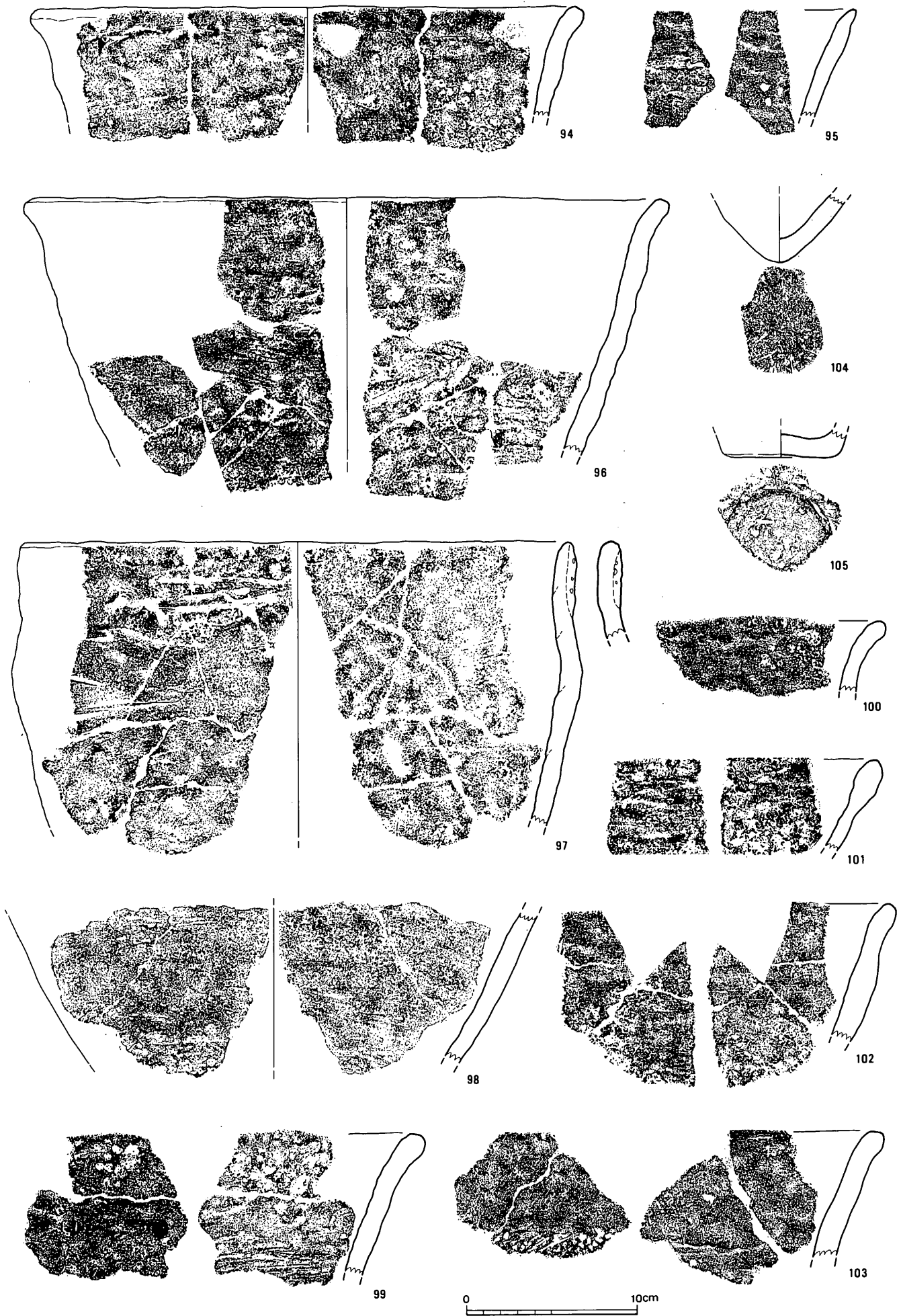


Fig. 47 縄文土器第7類土器実測図(1/3)

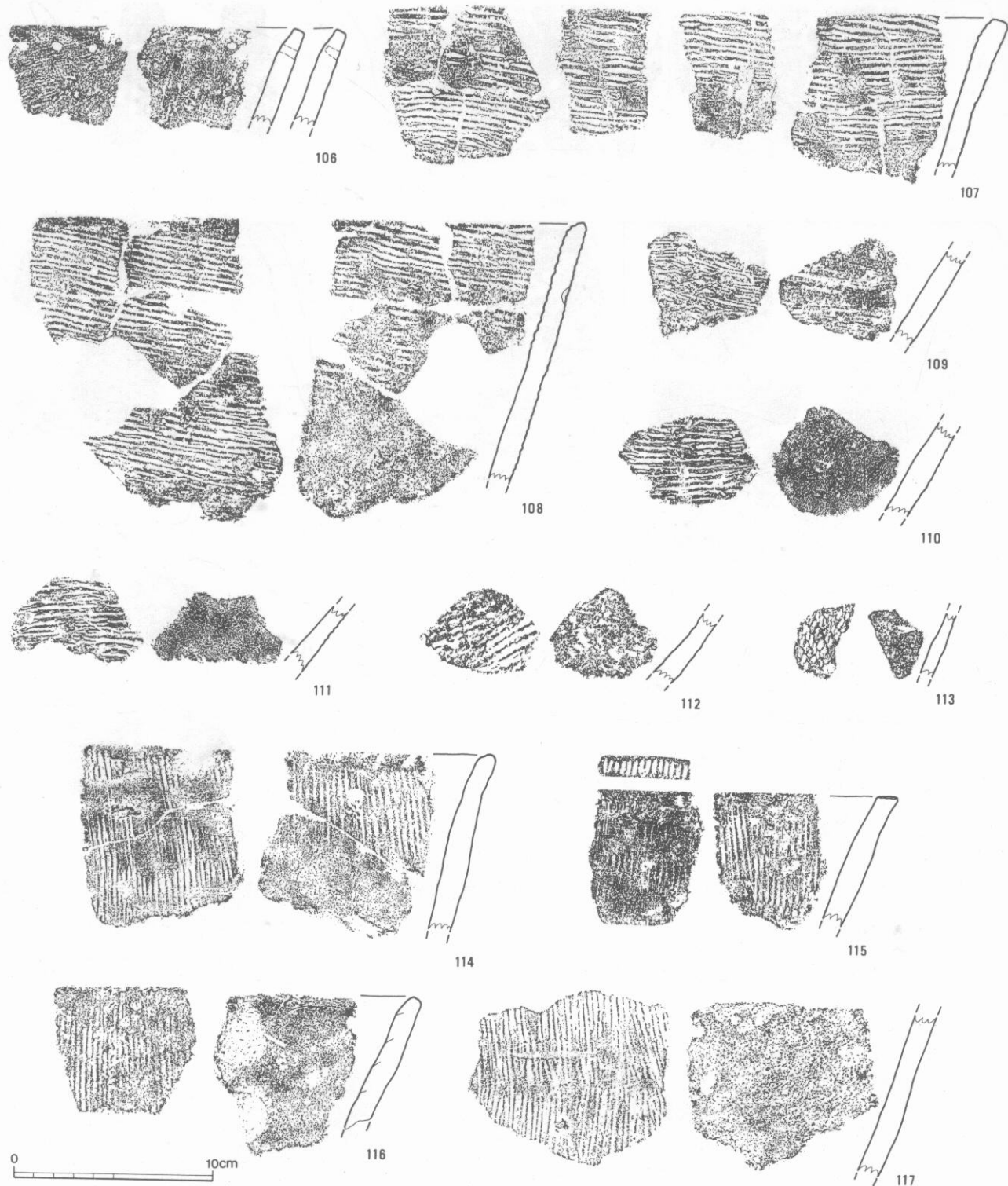


Fig. 48 縄文土器第8～10類土器実測図(1/3)

ると考えられる。

第6類 (PL29 Fig46-92・93) 带状施文の押型文土器を一括した。92は格子目文の、93は山形文の带状施文である。器厚はいずれも10mmと厚い。

第7類 (PL30 Fig47) 無文土器を一括して本類とした。復原口径は33～38cmと大きく、器厚も10～13mmと厚い。器形は緩やかに開き、口縁部はやや外反する。器面調整はナデ。底部には104のような尖底と105のような平底がある。平底についてはどの器形の底部に当たるのか判然としないが、胎土は早期のものに類似しているため本類に含めた。形態的にも、前期以降の底部とは考えられない。97は屈曲してやや内傾するが、口縁部の粘土剥落部分には紐状の植物質圧痕(蔓?)が3本観察

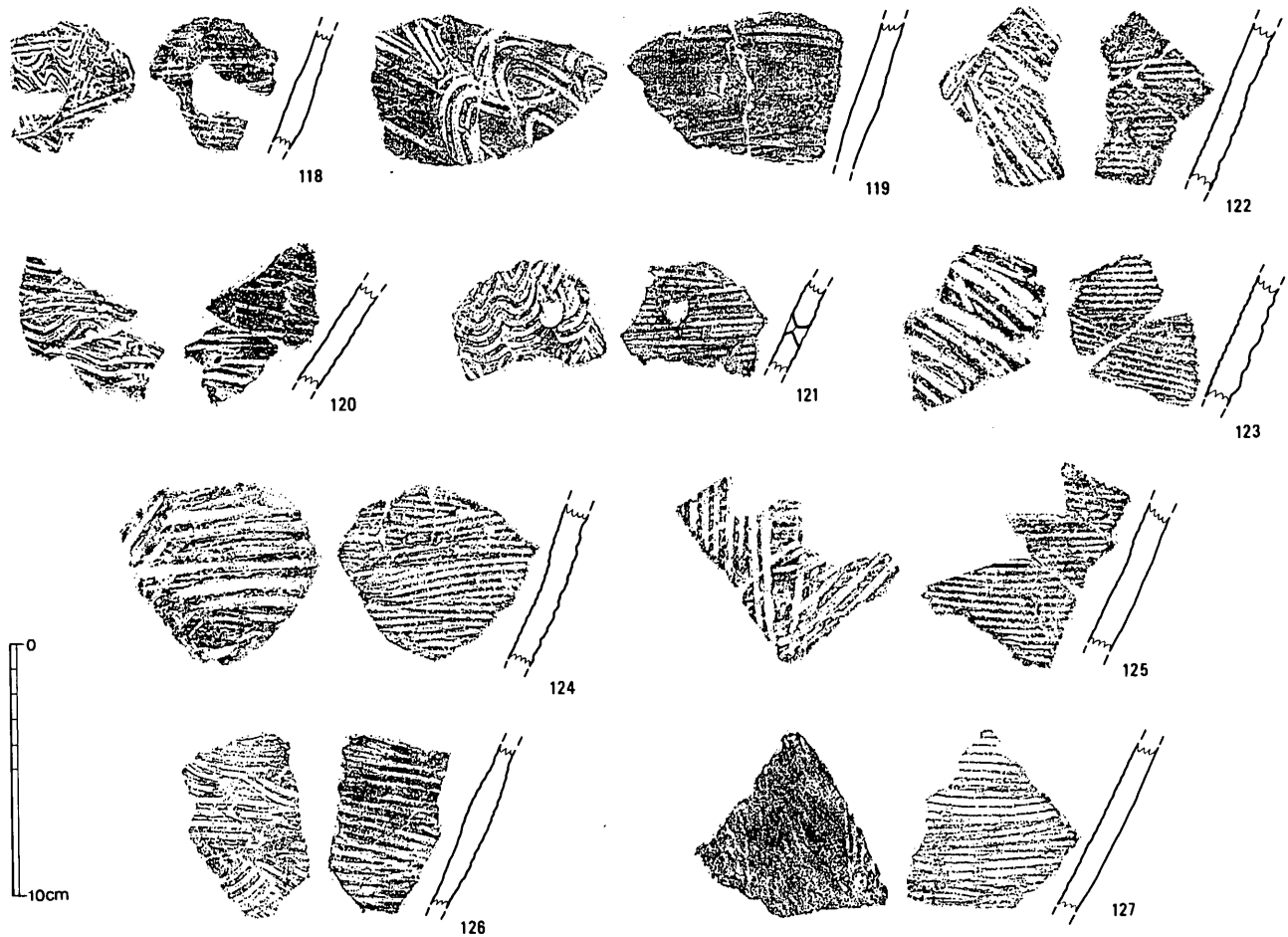


Fig. 49 縄文土器第11類土器実測図(1/3)

され、土器製作時に口縁部補強のため蔓のようなものが巻かれていたと考えられる。

第8類 (PL30 Fig48-106~112) 撚糸文が施される一群。107・108は内面にも施され、押型文土器と同じ文様構成を見せる。106には断面形態が丸い工具による刺突文が施されるが、貫通するものとしないものがある。器面調整はナデ。施文方向は若干斜位になるものもあるが、基本的には横位に統一される。

第9類 (PL30 Fig48-113) 縄文が施される土器で、113の1点だけである。原体はRL。

第10類 (PL31 Fig48-114~117) 条痕文を文様とし、それが口縁部内面にも施され、押型文土器と同じ文様構成を見せる。施文方向はすべて縦位に統一される。口縁部内面の条痕文は押型文土器の原体条痕とほぼ同じで、したがって外面の原体条痕も押型文原体によるものである可能性が高い。

第11類 (PL31 Fig49) 二枚貝腹縁や植物質原体による条痕を器面調整とし、場合によってはそれ自体に文様の効果(波状文や波状文と直線文との組み合わせ等)を出させ、他に文様を施さない一群。口縁部が確認できていないので確信は持てないが、本類の多くは押型文土器に伴うと考えられる。中には、それに先行するものが存在する可能性もあながち否定できない。121は補修孔。122~125は同一個体である。

第12類 (PL31 Fig50-128~136) 本類は縄文早期でも押型文土器に後出する一群で、「平椀式」や「塞ノ神式」に含まれよう。128~130は少なくとも縄文前期以降に位置づけられるものではなく、取り敢えず本類に含めた。沈線文や刺突文によって文様が構成されるが、小破片であるため器形や全体の文様構成は不明。129については壺になるのかもしれない。131~136は塞ノ神式で、131~135

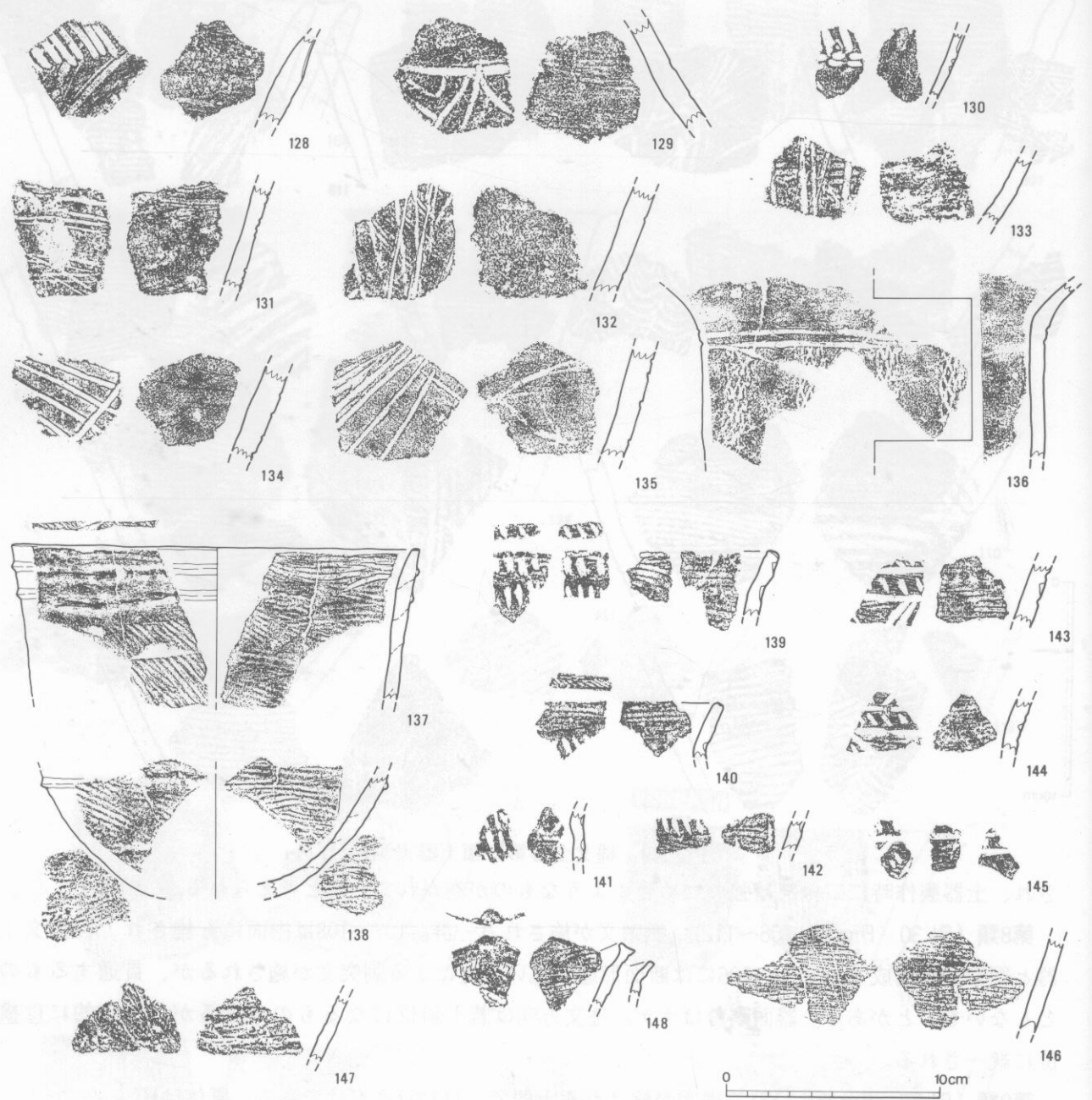


Fig.50 縄文土器第12~14類土器実測図(1/3)

は二枚貝条痕を地文調整とし、沈線文によって文様が構成される。136は撚糸文系の塞ノ神式で、復原胴部径は約16cmと小さい。

第13類 (PL31 Fig50-137~146) 縄文前期の土器を一括して第13類とした。137・138は同一個体の「轟B式」である。二枚貝腹縁による条痕を器面調整とし、舌状の口縁端部にも同一原体によって押圧状の刻みを施す。139~146は「曾畑式」で、139と140~142と143~146の3個体からなる。器面調整は二枚貝腹縁による条痕調整で、刺突文や沈線文によって文様を構成し、口縁端部には刻みが施される。胎土に滑石は含まれない、口縁部内面に文様を持たない、胴部下半は無文、といった諸特徴より曾畑式でも比較的新しい段階のものと考えられる。

第14類 (PL31 Fig50-147・148) 本類は縄文中期に位置づけられる一群。147の胎土には多量の滑石が含まれ、内面に条痕調整が窺える。曾畑式の可能性も完全には否定できないが、器厚や土器片の部位から「並木式」と考えられる。148は二枚貝殻頂部の押圧文のある突起を持った口縁波頂部

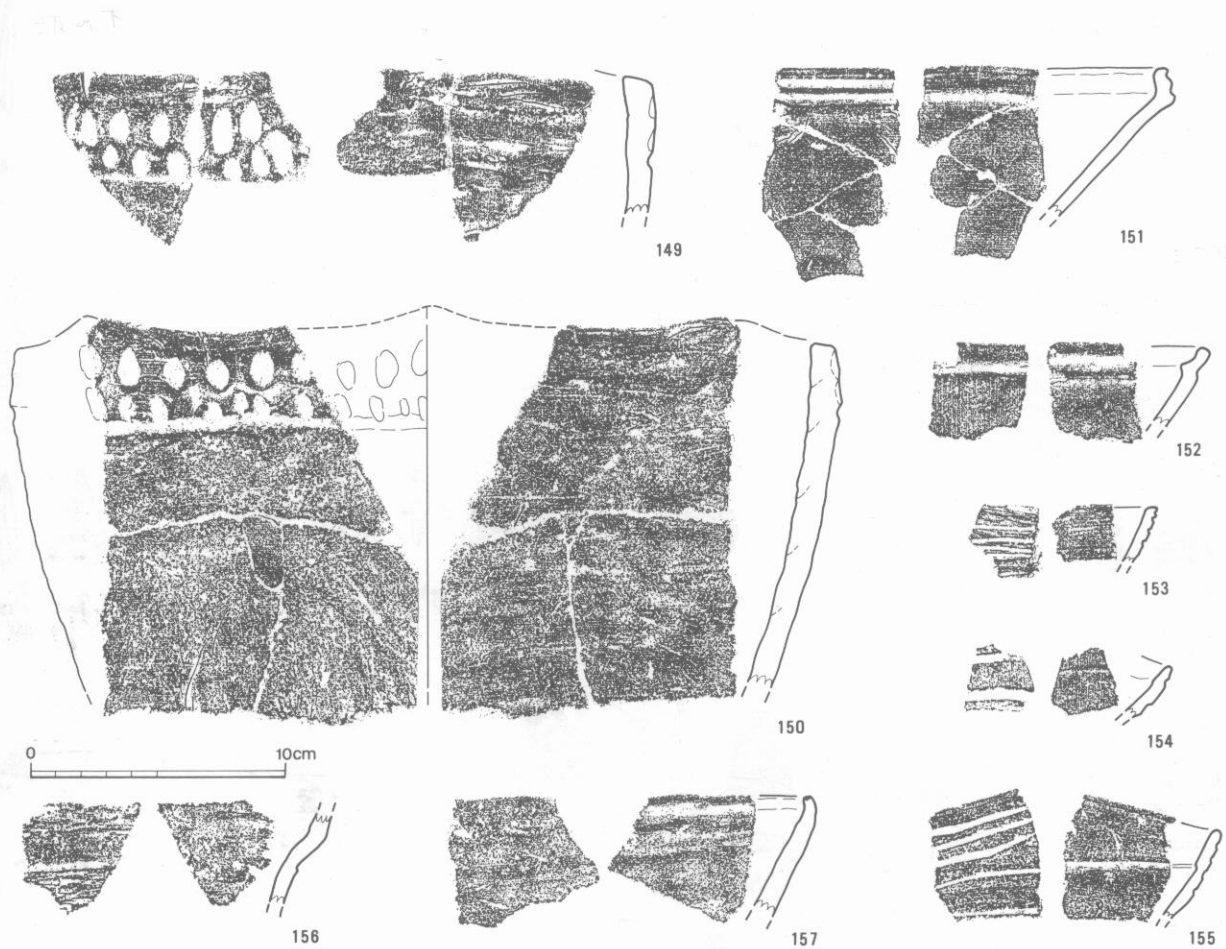


Fig.51 縄文土器第15～17類土器実測図(1/3)

で、その下には押引文が施される。器面調整は二枚貝腹縁条痕で、このような土器が中期以外に位置づけられるとは今のところ考えられない。

第15類 (PL31 Fig51-149・150) 縄文後期初頭の「坂の下式」といわれる土器で、149・150は同一個体。緩やかな波状口縁で、凹線文を引いた後に2条の凹点文を施す。凹点文の中央には爪の跡が残る。削りに近い条痕の後に、ナデを施す。

第16類 (PL31 Fig51-151) 151は縄文後期後半の「三万田式」(厳密には「鳥井原式」)。内外面とも丁寧な研磨が施され、屈折した口縁部にはシャープな凹線文が2条引かれる。

第17類 (PL31 Fig51-152～157) 本類は縄文晩期の土器を一括した。152～155は丁寧な研磨が内外面に施される精製の鉢もしくは浅鉢、156・157は粗い条痕調整の粗製深鉢である。いずれも晩期前半に位置づけられよう。

縄文時代の石器 (PL32 Fig52～55)

縄文時代の石器もかなり纏まって出土した。しかし、縄文土器の遺存状況が良好でないだけに、石器も当然各時期のものが混在していると考えられよう。ただし、縄文土器の95%が早期の押型文土器期のものであるだけに、多くの石器もそれに伴う可能性が極めて高い。以下では器種ごとに説明を行なう。

石鏃 (Fig52-1～36) 総数36点が出土。石質は1がチャート、2～8がサヌカイト、9～34が黒曜石である。黒曜石は腰岳産と考えられるが、その割にはやや透明感に欠け、不純物も多いようである。

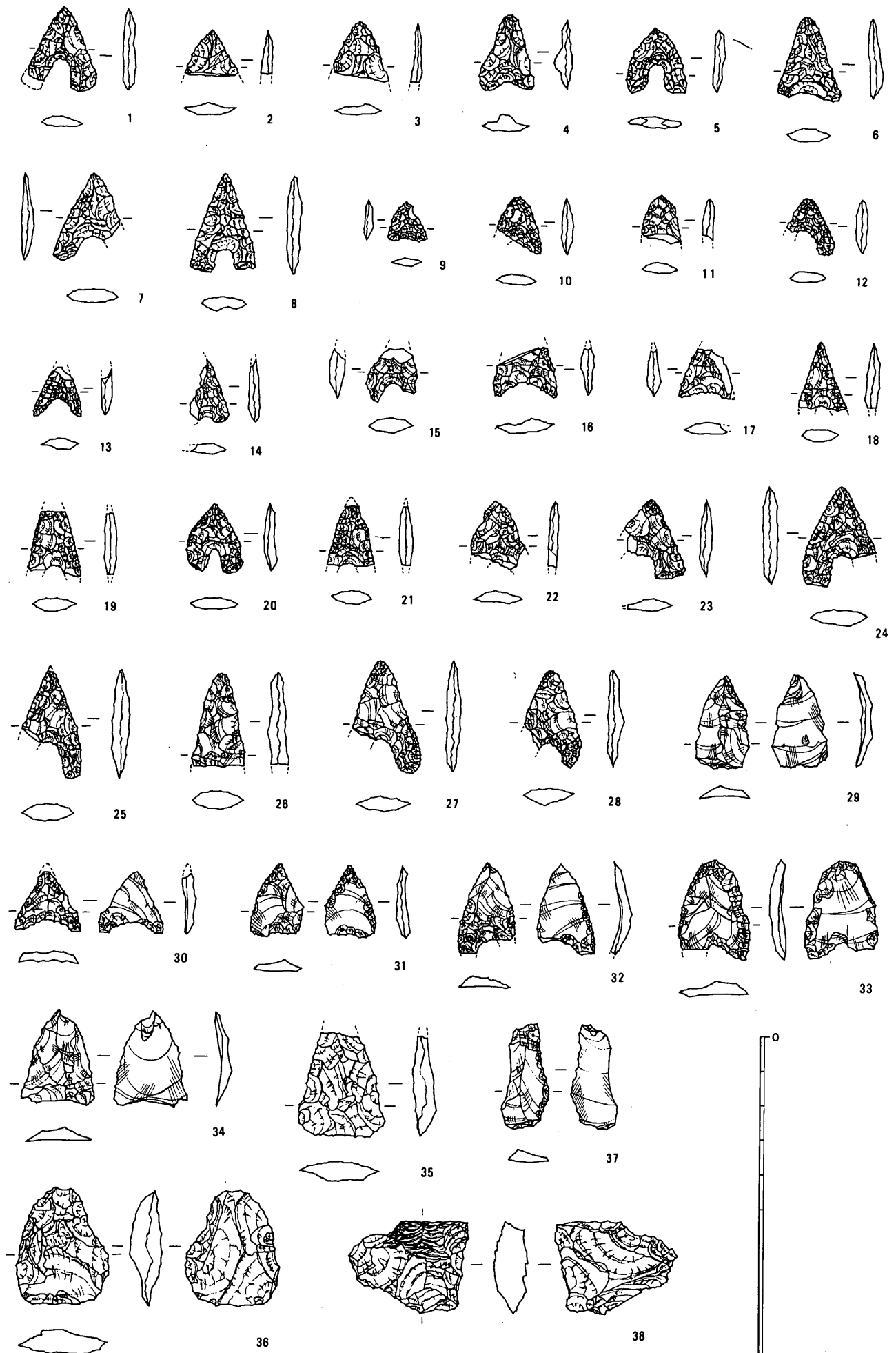


Fig. 52 出土石器实测图(1)(2/3)

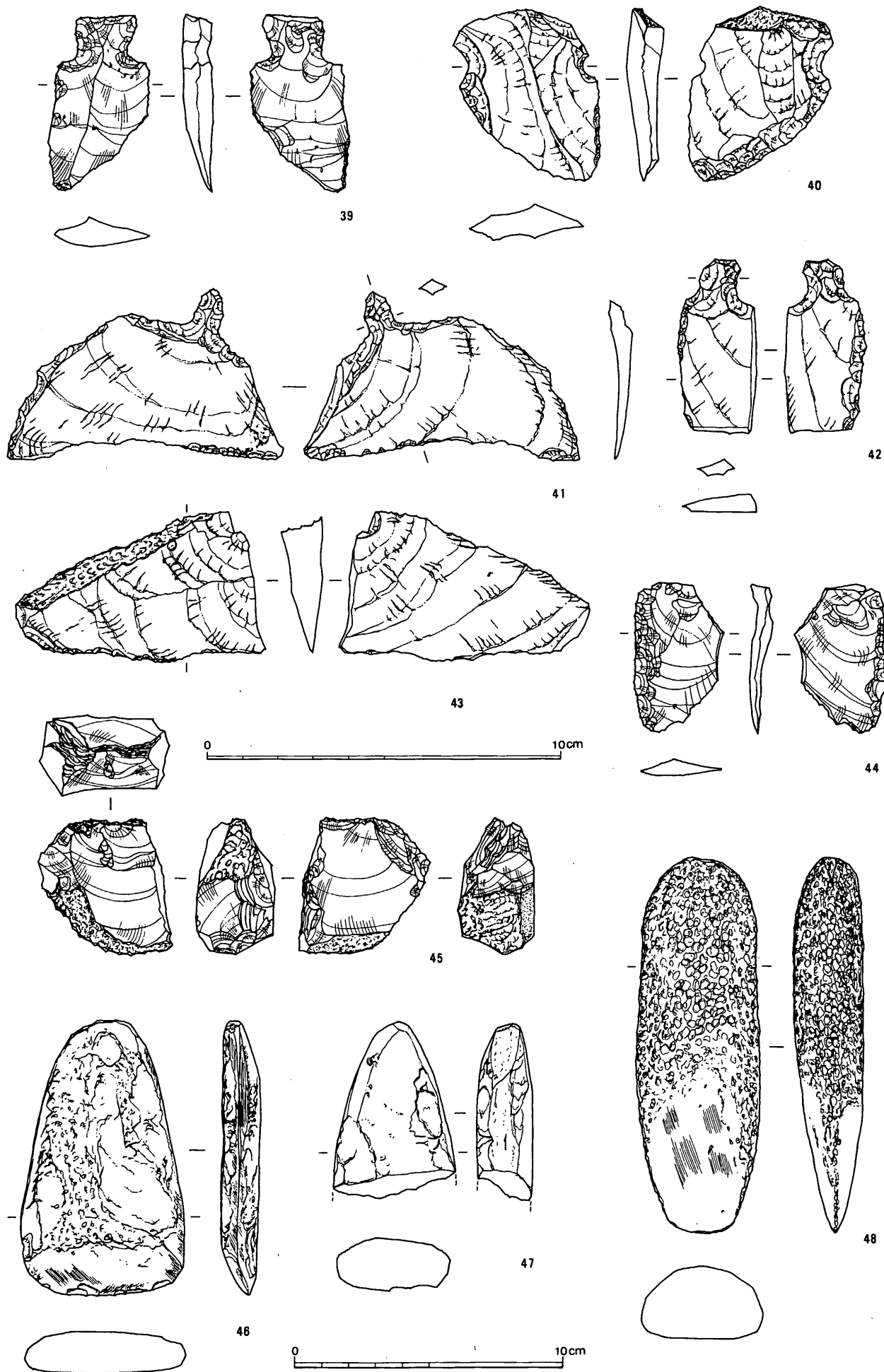


Fig.53 出土石器实测图(2)(2/3 · 1/2)

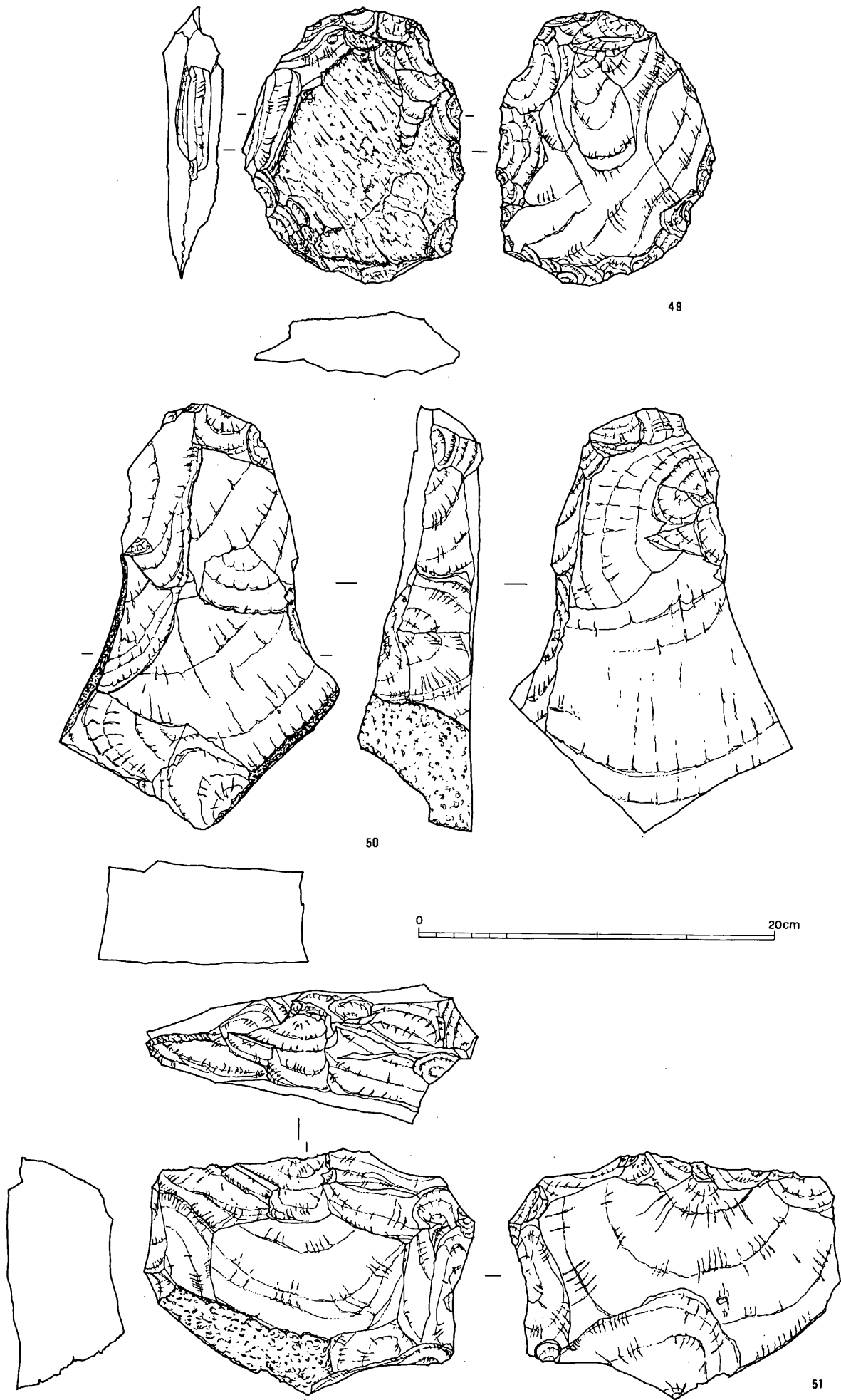


Fig.54 出土石器实测图(3)(1/3)

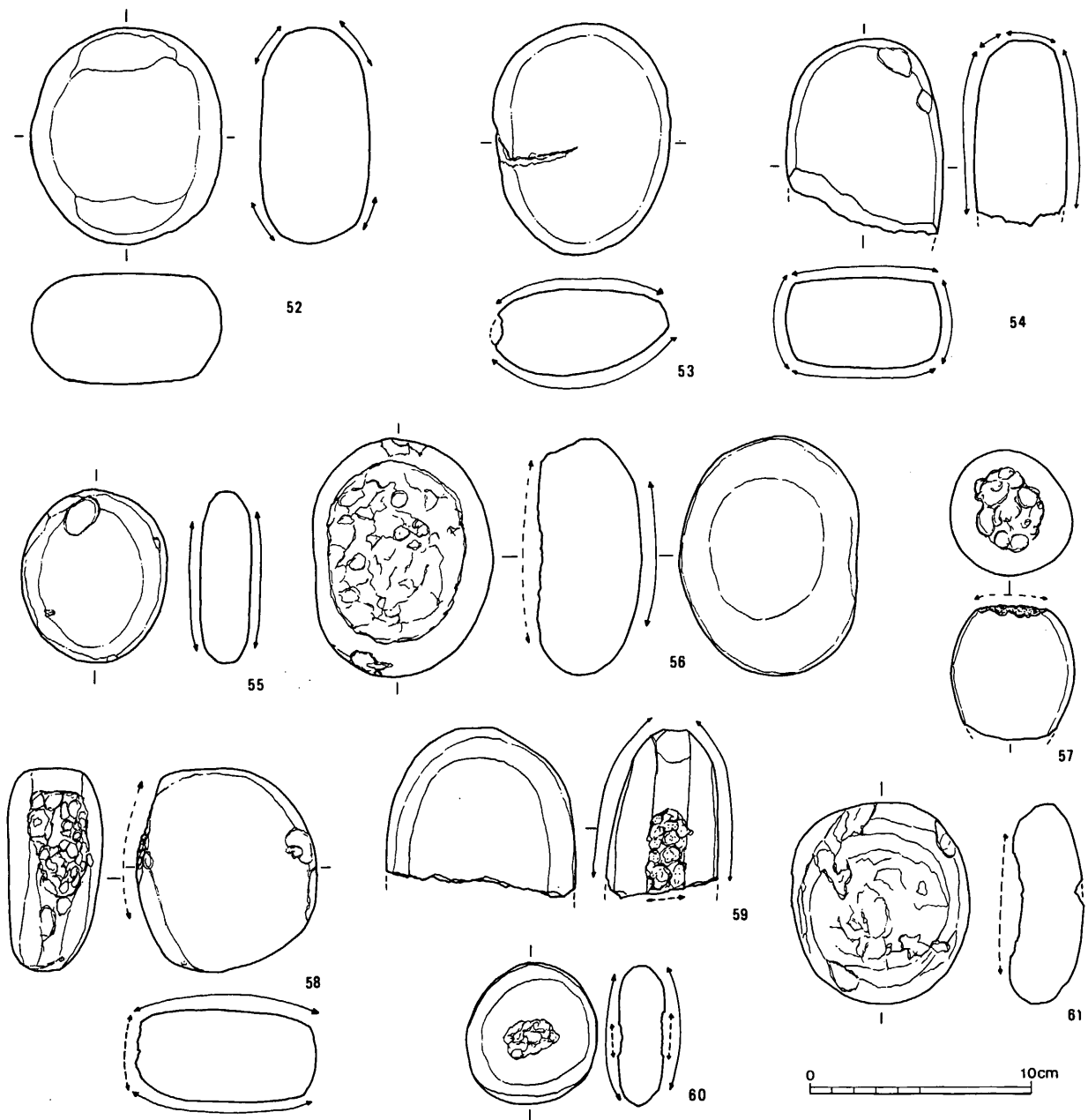


Fig.55 出土石器実測図(4)(1/3)

29～34の剥片鏃はすべて黒曜石製で、縄文後期によく見られる鈴桶技法によって作出された縦長剥片によるものではない。35・36はサヌカイト製で、しばしば早期の不定形石器として紹介されるが、三角形という形、細かい調整がない、大きくて厚い、といった特徴から石鏃の未製品と考えられる。使用痕のある剥片 (Fig52-37) 黒曜石の縦長剥片で、使用による微細剥離痕が窺える。

楔形石器 (Fig52-38) サヌカイト製。両端に階段状剥離が観察されることから楔形石器と考えられる。

石匙 (Fig53-39~42) 39は黒曜石製、40~42はサヌカイト製の石匙である。40・41には自然面が残る。42は先端部欠損。なお、39は他の黒曜石に比べて風化が著しい、調整剥離も使用による微細剥離もない、稜を意識した縦長剥片が剥ぎ取られる、といった特徴より旧石器時代の剥片尖頭器である可能性も捨てきれない。

スクレイパー (Fig53-43・44) 43はサヌカイト製の、44は黒曜石製のスクレイパーである。43は

一部に自然面を残す。

石核 (Fig53-45 54-50・51) 45は黒曜石製の石核で、一部に階段状剥離が窺え、また自然面を残す。これほど小さくなるまで剥片を採って作る石器は石鏃以外に考えられない。ただし、定型的な技法が存在した痕跡はない。50・51はいずれもサヌカイトで、自然面を残す。51については打面調整が観察される。50は石組炉 (SX-200) の上部の焼礫群に含まれていたが、これ自体に焼けた痕跡は窺えない。

磨製石斧 (Fig53-46~48) 46は安山岩質、47・48は砂岩質の磨製石斧である。46は扁平な片刃石斧で、あるいは縄文前期以降のものかもしれない。48は基部全面に丁寧な敲打が施される。刃部形態は両刃だが、基部の1面は平坦に加工されていることから、膝柄横斧として使用されたものであろう。

礫器 (Fig54-49) 49は背面に大きく自然面を残すサヌカイト製の礫器で、先端部を加工して尖らす。

磨石・敲石・凹石 (Fig55) 52~55は花崗岩の磨石。56は玄武岩で、一面は磨石として使用されるが、もう一面は凹石となる。57は玄武岩製の敲石。58・59は玄武岩の磨石で、敲石としても使用される。60・61は花崗岩の凹石。

別表2 遺構別縄文土器出土表(1)

	報告書番号	調査時点	押型文	無文	条痕文	撚糸文	柏原式	合計	その他	
I区	SD-03	S-01	—	4	—	—	—	4		
	SD-19	S-10	1	12	3	11	—	27		
	SK-01	S-06	3	38	18	—	—	59		
	SK-02	S-28	1	—	—	—	—	1		
	SK-03	S-27	7	7	1	—	—	15		
	SK-06	S-26	1	14	2	—	—	17		
	SK-07	S-11	5	3	—	—	—	8		
	SK-08	S-12	4	6	—	—	2	12		
	SK-09	S-13	—	1	—	—	—	1		
	SK-10	S-09	—	2	—	1	—	3		
	SX-20	S-05	3	—	—	3	—	6		
	SK-23	S-16	1	—	—	—	—	1		
	SD-50	S-70	2	5	—	—	—	7	晩期1	
	II区	SK-32	S-35	3	1	—	—	—	4	
		SK-33	S-36	1	—	—	—	—	1	
SK-35		S-40	1	3	2	—	—	6		
SK-46		S-50	2	7	—	—	—	9	後期1	
SX-30		S-45	1	—	—	—	—	1		
SX-41		S-43	—	—	—	1	—	1	後・晩期6	
SX-43		S-46	—	1	1	—	—	2	後・晩期2	
SK-46		S-50	2	7	—	—	—	9	後期1	
VI区	SK-25	S-213	2	1	—	—	—	3		
	SK-81	S-187	—	3	—	—	—	3		
	SK-83	S-188	4	2	—	—	—	6		
	SK-86	S-189	2	3	1	—	—	6		
	SK-87	S-206	—	2	—	—	—	2		
	SK-93	S-212	5	16	—	1	—	22		
	SK-96	S-147	1	—	—	—	—	1		
	SK-108	S-205	1	—	—	—	—	1		
	SK-110	S-200	6	2	—	—	—	8		
	SK-112	S-182	—	1	—	—	—	1		
	SK-113	S-145	1	—	—	1	—	2		
	SK-114	S-146	6	10	—	—	—	16		
	SK-115	S-181	2	—	—	—	—	2		
	SK-116	S-144	8	1	—	—	—	9		
	SK-118	S-143	2	—	—	—	—	2		
	SK-119	S-137	9	17	4	—	1	31		
	SK-121	S-138	1	5	—	—	—	6		
	SK-122	S-141	3	1	—	—	—	4		
	SK-123	S-140	2	8	—	—	—	10		
	SK-124	S-139	—	8	—	—	—	8	晩期1	
	SK-126	S-152	2	8	—	—	—	10		
	SK-128	S-216	3	3	—	—	—	6		
	SK-129	S-126	30	16	—	—	—	46		
	SK-131	S-149	—	2	2	—	—	4		
	SK-132	S-148	4	5	1	—	—	10		
	SK-133	S-119	1	2	1	—	—	4		
	SK-137	S-183	1	—	—	—	—	1		
	SK-144	S-175	4	—	—	—	—	4		
	SK-145	S-176	—	8	1	—	—	9		
	SK-146	S-177	3	1	—	—	—	4		
	SK-147	S-174	—	1	—	—	—	1		
SK-148	S-173	2	—	—	—	—	2			
SK-152	S-154	2	3	—	—	1	6			
SK-153	S-156	—	—	—	—	1	1			
SK-154	S-157	—	—	2	—	—	2			
SK-155	S-158	—	1	—	—	1	2			

別表2 遺構別縄文土器出土表(2)

	SK-157	S-159	—	1	—	—	—	1	
	SK-161	S-162	2	9	1	1	1	14	晩期1
	SK-162	S-208	—	2	—	—	—	2	
	SK-168	S-164	—	1	—	—	—	1	
	SK-169	S-163	—	1	—	—	—	1	
	SK-171	S-161	—	7	—	—	—	7	
	SK-175	S-169	2	3	—	—	—	5	
	SK-176	S-168	—	2	—	—	—	2	
	SK-177	S-167	1	1	—	—	—	2	
	SK-179	S-151	1	4	—	—	—	5	
	SK-190	S-180	—	3	—	—	—	3	
	SK-202	S-114	4	—	—	—	—	4	
	SK-206	S-124	—	3	—	1	—	4	後期1
	SK-209	S-123	1	—	—	—	—	1	
	SK-211	S-122	2	—	—	—	—	2	
	SK-214	S-209	9	5	1	—	—	15	
	SK-215	S-118	2	—	—	—	—	2	
	SK-218	S-127	—	3	—	—	—	3	
	SK-219	S-128	—	4	—	—	—	4	
	SK-221	S-121	3	3	—	1	—	7	
	SK-227	S-116	—	1	—	—	—	1	
	SX-92	S-204	1	1	2	—	1	5	
	SX-93	S-136	8	9	1	1	—	19	
	SX-95	S-135	31	20	—	—	—	51	
	SX-97	S-186	—	3	—	—	—	3	
	SX-100	S-150	3	8	—	—	—	11	
	SX-120	S-100	14	29	1	—	—	44	
	SX-140	S-170	1	1	—	1	—	3	
	SX-182	S-201	3	3	—	—	—	7	
	グリッド.B2	S-192	1	2	1	1	—	5	
	グリッド.B3	S-193	4	9	—	—	—	11	
	グリッド.B4	S-196	1	—	—	—	—	1	
	グリッド.C4	S-197	—	1	—	1	—	2	
	グリッド.F2	S-191	1	5	1	—	—	7	
	グリッド.F4	S-199	—	—	1	1	—	2	早期1
合計			242	373	50	26	8	699	

別表3 地区・層位別縄文土器出土表

	押型文	無文	条痕文	撚糸文	縄文	柏原式	合計	その他
II区.黒褐土	147	17	16	13	—	5	198	早5.前2.後2.晩3
II-G区.暗黄褐土	1	—	—	—	—	—	1	
II-H区.黄褐土	1	—	—	—	—	—	1	
II-H区.黒褐土	1	—	—	—	—	—	1	
II-J区.暗黄褐土	—	1	1	—	—	—	2	中期1
VI区.暗褐土	—	1	—	—	—	—	1	
VI区.黄褐土	5	4	1	1	—	—	11	
VI-A区.黄褐土	2	7	—	—	—	—	9	早期1
VI-B区.黄褐土	24	32	5	—	—	—	61	後・晩期1
VI-D区.暗褐土	8	12	1	—	—	1	22	
VI-D区.黄褐土	32	106	—	2	2	2	144	早期1.後期2
VI-D区.暗黄褐土	2	2	—	—	—	—	4	早期1
VI-E区.黄褐土	26	48	15	7	—	—	96	
VI-F区.暗褐土	4	3	—	1	—	—	8	
VI-F区.黄褐土	34	48	—	1	—	1	84	後・晩期2
VI-G区.暗褐土	1	5	—	1	—	—	7	
VI-G区.黄褐土	2	8	—	—	—	—	10	
VI-H区.暗褐土	2	2	—	1	—	—	5	
VI-K区.暗褐土	—	1	—	—	—	—	1	
VI-K区.黄褐土	1	15	—	—	—	—	16	
VI-LM区.黄褐土	2	18	—	—	—	—	20	
VI-P区.暗褐土	1	2	2	—	—	—	5	
合計	146	314	24	14	2	4	504	

別表4 掲載縄文土器出土地点表(1)

No	出土地点(報告書対応)	遺物への注記(取上注記)	備考
1	VI-F区.黄褐色土	VI-F区.黄褐色土	
2	I区.SX-20	S-5.222	
3	VI-D区.黄褐色土	VI-D区.黄褐色土	
4	VI-M区.SK-162	VI-M区.S-162	
5	II区.黒褐色土	II区.黒褐色土-516	
6	VI-L区.S-153	VI-L区.S-156	
7	VI-L区.S-152	VI-L区.S-154	
8	I区.SX-20	S-5.10	
9	VI-D区.黄褐色土	VI-D区.黄褐色土	
10	II区.黒褐色土	II区.黒褐色土-306	
11	I区.SK-8	S-12.2	
12	グリッド.D-4.2	グリッド.D-4.2	
13	I区.SK-8	S-12.1	
14	VI-B区.黄褐色土	VI-B区.黄褐色土	
15	VI-E区.S-119	VI-E区.S-137	
16	SX-92	S-204	
17	VI-B区.SX-95	VI-B区.S-135	
18	II区.黒褐色土	II区.黒褐色土-292	
19	II区.黒褐色土	II区.黒褐色土-504	
20	VI-J区.SK-115	VI-J区.S-181	
21	VI-F区.SK-129	VI-F区.S-126	
22	II区	II区.S-30	
23	VI-B区.黄褐色土	VI-B区.黄褐色土	
24	II区.黒褐色土	II区.黒褐色土-491	
25	VI-D区.暗黄褐色土	VI-D区.暗黄褐色土	
26	II区.黒褐色土	II区.黒褐色土-231	
27	II区.SK-3	S-27	
28	II区.黒褐色土	II区.黒褐色土-536	
29	グリッド.B-2.3 C-3.3	グリッド.B-2.3 C-3.3	
30	VI区.SK-93	S-212	
31	II区.黒褐色土	II区.黒褐色土-467	
32	II区.黒褐色土	II区.黒褐色土-28	33と同一個体
33	VI-K区.黄褐色土	VI-K区.黄褐色土	32と同一個体
34	II-H区.黄褐色土	II-H区.黄褐色土	
35	I区.SK-8	S-12.3	
36	VI区.SK-214	S-209	
37	II区.黒褐色土	II区.黒褐色土-485	
38	II区.黒褐色土	II区.黒褐色土-239	
39	I区.SK-16	S-3.3	
40	VI-F区.SK-128	VI-F区.S-216	
41	VI-F区.SK-133	VI-F区.S-119	
42	VI区.SK-214	S-209	
43	グリッド.B-4	S-196	
44	VI-D区.黄褐色土	VI-D区.黄褐色土	
45	VI区.SK-81	S-187	
46	VI-F区.S-121	VI-F区.S-121	
47	表採	表採	
48	グリッド.H-4.2	グリッド.H-4.2	
49	VI-D区.黄褐色土	VI-D区.黄褐色土	
50	グリッド.C-3.1	グリッド.C-3.1	
51	I区.SX-20	S-5.94	
52	I区.SK-16	S-3.12	
53	VI-P区.黄褐色土	VI-P区.黄褐色土	
54	VI-D区.黄褐色土	VI-D区.黄褐色土	
55	VI-B区.SX-95	VI-B区.S-135	
56	VI-B区.SX-93	VI-B区.S-136	
57	VI-E区.黄褐色土	VI-E区.黄褐色土	

別表4 掲載縄文土器出土地点表(2)

58	VI-E区.黄褐土	VI-E区.黄褐土	
59	VI-E区.SX-120	VI-E区.S-100	
60	II区.SD-28	II区.S-215	
61	VI-D区.黄褐土	VI-D区.黄褐土	
62	II区.黒褐土	II区.黒褐土-271	
63	VI-F区.SK-126	VI-F区.S-152	
64	I区.SK-7	S-11.1	
65	VI-L区.SK-155	VI-L区.S-158	
66	VI-F区.SK-129	VI-F区.S-126	
67	II区.黒褐土	II区.黒褐土-298	
68	VI-F区.黄褐土	VI-F区.黄褐土	
69	VI-F区.SK-132	VI-F区.S-148	
70	II-H区.黒色土	II-H区.黒色土	
71	II区.黒褐土	II区.黒褐土-533	
72	VI-F区.SK-215	VI-F区.暗褐土.S-118	
73	I区.SX-20	S-5.109	
74	VI-LM区.黄褐土	VI-LM区.黄褐土	
75	II区.黒褐土	II区.黒褐土-355	
76	VI-K区.SK-146	VI-K区.S-177	
77	I区.SK-13	S-2.3	
78	VI-B区.SK-95	VI-B区.S-135	
79	VI-B区.SK-95	VI-B区.S-135	
80	VI-F区.黄褐土	VI-F区.黄褐土	
81	グリッド.G-2.4	グリッド.G-2.4	
82	II区.黒褐土	II区.黒褐土-500	
83	IV区.SX-140	IV区.S-170	
84	VI-F区.黄褐土	VI-F区.黄褐土	
85	II区.黒褐土	II区.黒褐土-450	
86	VI区.SK-93	S-212	
87	グリッド.B-3	S-193	
88	I区.SK-7	S-11	
89	II区.黒褐土	II区.黒褐土	
90	VI-F区.SK-129	VI-F区.S-126	
91	VI-F区.SK-129	VI-F区.S-126	
92	VI-F区.黄褐土	VI-F区.黄褐土	
93	I区.SX-20	S-5	
94	グリッド.D-1・2	グリッド.D-1・2	
95	II-J区.暗褐土	II-J区.暗褐土	
96	VI-M区.SK-161	VI-M区.S-162	
97	VI-H区.SK-219	VI-H区.S-128	
98	II区.黒褐土	II区.黒褐土-288	
99	VI-D区.黄褐土	VI-D区.黄褐土	
100	VI-D区.黄褐土	VI-D区.黄褐土	
101	VI-D区.暗黄褐土	VI-D区.暗黄褐土	
102	VI-D区.黄褐土	VI-D区.黄褐土	
103	VI-F区.黄褐土	VI-F区.黄褐土	
104	VI-E区.SK-121	VI-E区.S-138	
105	VI-F区.SK-131	VI-F区.S-149	
106	I区.SK-10	S-9.1	
107	I区.SX-20	S-5.103・104	
108	VI-F区.黄褐土	VI-F区.黄褐土	
109	VI区.SK-93	S-212	
110	IV区.SX-140	IV区.S-170	
111	II区.黒褐土	II区.黒褐土-263	
112	VI-B区.黄褐土	VI-B区.黄褐土	
113	II-K区.暗褐土	II-K区.暗褐土	
114	I区.SX-20	S-5.114	
115	VI区.SX-221	S-121	

別表4 掲載縄文土器出土地点表(3)

116	II区.黒褐土	II区.黒褐土-273	
117	II区.黒褐土	II区.黒褐土-297	
118	VI区.SX-92	S-204	
119	I区.SX-6	I区.S-26	
120	VI-E区.黄褐土	VI-E区.黄褐土	
121	グリッド.H-4.5	グリッド.H-4.5	
122	VI-E区.黄褐土	VI-E区.黄褐土	123・124・125と同一個体
123	VI-E区.黄褐土	VI-E区.黄褐土	122・124・125と同一個体
124	VI-E区.黄褐土	VI-E区.黄褐土	122・123・125と同一個体
125	VI-E区.黄褐土	VI-E区.黄褐土	122・123・124と同一個体
126	グリッド.F-4.4	グリッド.F-4.4	
127	I区.SK-1	I区.S-6	
128	VI-D区.黄褐土	VI-D区.黄褐土	
129	VI-M区.暗褐土	VI-M区.暗褐土	
130	II区.SX-41	II区.S-43	
131	VI-D区.黄褐土	VI-D区.黄褐土	
132	グリッド.F-4	S-199	
133	VI-B区.黄褐土	VI-B区.黄褐土	
134	II区.黒褐土	II区.黒褐土-322	
135	II区	II区	
136	II区.黒褐土	II区.黒褐土-327~330	
137	II区.黒褐土	II区.黒褐土-308	138と同一個体
138	II区.黒褐土	II区.黒褐土-308	137と同一個体
139	I区.SX-1	I区.S-6	
140	I区.SX-1	I区.S-6	141・142と同一個体
141	I区.SX-1	I区.S-6	140・142と同一個体
142	I区.SX-1	I区.S-6	140・141と同一個体
143	I区.SX-1	I区.S-6	144・145・146と同一個体
144	I区.SX-1	I区.S-6	143・145・146と同一個体
145	I区.SX-1	I区.S-6	143・144・146と同一個体
146	I区.SX-1	I区.S-6	143・144・145と同一個体
147	II-J区.暗褐土	II-J区.暗褐土	
148	I区.SX-1	I区.S-6	
149	II-D区.黄褐土	II-D区.黄褐土	150と同一個体
150	II区.SK-46	II区.S-50	149と同一個体
151	V区.暗褐土	V区.暗褐土	
152	IV区.SD-50	IV区.S-70.下層	
153	VI-M区.SK-161	VI-M区.S-162	
154	I区.SK-13	I区.S-8	
155	VI区.SK-124	VI区.S-139.上層	
156	II-J区.暗褐土	II-J区.暗褐土	
157	II-J区.暗褐土	II-J区.暗褐土	

別表5 掲載石器出土地点表

No	出土地点(報告書対応)	遺物への注記(取り上げ)	石材	重量.g
1	グリッド.B-3	S-193	チャート	0.9
2	V区.SK-224	V区.S-105	サヌカイト	0.5
3	VI-F区.SK-129	VI-F区.S-126	サヌカイト	0.6
4	VI-K区.SK-145	VI-K区.S-176	サヌカイト	0.9
5	II区.SK-33	S-36	サヌカイト	0.7
6	II区.黒褐土	II区.黒褐土-261	サヌカイト	1.2
7	VI区.SK-97	S-186	サヌカイト	1.3
8	I区.SX-20	S-5.40	サヌカイト	1.6
9	II-B区.砂質土	II-B区.砂質土	黒曜石	0.2
10	II区.黒褐土	II区.黒褐土-499	黒曜石	0.2
11	II-H区.黒色土	II-H区.黒色土	黒曜石	0.2
12	VI-K区.黄褐土	VI-K区.黄褐土	黒曜石	0.4
13	VI区.SX-20	S-5.12	黒曜石	0.4
14	VI-F区.SK-132	VI-F区.S-148	黒曜石	0.5
15	IV区.SX-120横	IV区.S-100横	黒曜石	0.6
16	I区.SX-1	I区.S-6	黒曜石	0.6
17	II区.黒褐土-400	II区.黒褐土-400	黒曜石	0.5
18	V区.SK-205	V区.S-113	黒曜石	0.7
19	VI-K区.SK-144	VI-K区.S-175	黒曜石	0.9
20	VI区.SK-180	S-185	黒曜石	0.8
21	VI-F区.黄褐土	VI-F区.黄褐土	黒曜石	0.9
22	VI区.SK-214	S-209	黒曜石	0.9
23	VI区.黄褐土	VI区.黄褐土	黒曜石	1.0
24	VI-F区.暗褐土	VI-F区.暗褐土	黒曜石	1.5
25	I区.SX-20	S-5.59	黒曜石	1.6
26	I区.SX-1	I区.S-6	黒曜石	1.7
27	VI-D区.暗黄褐土	VI-D区.暗黄褐土	黒曜石	1.8
28	VI-D区.黄褐土	VI-D区.黄褐土	黒曜石	1.1
29	VI区.SK-124	S-139上層	黒曜石	1.1
30	V区.SK-205	V区.S-113	黒曜石	1.0
31	VI-F区.SK-7	VI-F区.S-11	黒曜石	0.8
32	I区.SX-20	S-5.115	黒曜石	1.1
33	II区.黒褐土	II区.黒褐土-459	黒曜石	2.6
34	II区.黒褐土	II区.黒褐土-187	黒曜石	1.3
35	I区.SD-19	S-20	サヌカイト	4.5
36	VI-F区.SK-162	VI-F区.S-169	サヌカイト	6.7
37	I区.SK-1	I区.S-6	黒曜石	1.3
38	V区.暗褐土	V区.暗褐土	サヌカイト	
39	VI-LM区	VI-LM区	黒曜石	
40	I区.SX-20	S-5.102	サヌカイト	
41	グリッド.F-4.2	グリッド.F-4.2	サヌカイト	
42	IV区.SD-50	IV区.S-70	サヌカイト	
43	IV区.SD-50下層	IV区.S-70下層	サヌカイト	
44	I区.SK-7	I区.S-11	黒曜石	
45	VI-F区.SK-110	VI-F区.S-200	黒曜石	
46	VI-F区.SK-126	VI-F区.S-152.1	安山岩	
47	II区.黒褐土	II区.黒褐土-307	砂岩	
48	VI-F区.黄褐土	VI-F区.黄褐土	砂岩	
49	VI-F区.SK-131	VI-F区.S-117	サヌカイト	
50	VI-F区.SK-110	VI-F区.S-200	サヌカイト	
51	VI-B区.下層	VI-B区.下層.1	サヌカイト	
52	II区.黒褐土	II区.黒褐土-359	花崗岩	
53	VI-F区.黄褐色土	VI-F区.S-102	花崗岩	
54	V区.黄褐土	V区.黄褐土	花崗岩	
55	IV区.SD-50	IV区.S-70下層	花崗岩	
56	I区.SX-20	S-5.50	玄武岩	
57	I区.黄褐土	I区.黄褐土	玄武岩	
58	VI-H区.黄褐土	VI-H区.黄褐土	玄武岩	
59	VI-G区.黄褐色土	VI-G区.S-219	玄武岩	
60	VI-P区.黄褐土	VI-P区.黄褐土	花崗岩	
61	I区.SX-20	S-5.3	花崗岩	

別表6 原遺跡遺構一覽

遺構番号	S番号
SK01	S-06
SK02	S-28
SK03	S-27
SK04	S-15
SK05	S-14
SK06	S-26
SK07	S-11
SK08	S-12
SK09	S-13
SK10	S-09
SK11	
SK12	S-07
SK13	S-02
SK14	S-29
SK15	
SK16	
SK17	
SK18	
SD19	S-10
SX20	S-05
SD21	S-1
SX24	
SK25	S-213
SK26	
SK27	
SD28	S-215
SX29	S-214
SX30	S-45
SX31	
SK32	S-35
SK33	S-36
SX34	S-49
SK35	S-40
SK36	
SK37	
SX38	
SX39	
SK40	S-47
SX41	
SX42	
SX43	S-46
SK44	
SK45	S-44
SK46	S-50
SK80	S-185
SK81	S-187
SK82	
SK83	S-188
SK84	
SK85	
SK86	S-189
SK87	S-206
SK88	
SK89	
SX90	
SX91	
SX92	S-204
SX93	S-136
SX94	
SX95	S-135
SX96	
SX97	S-186
SX98	

遺構番号	S番号
SX99	
SX100	S-150
SK101	S-184
SK102	
SK103	
SK104	
SK105	
SK106	
SK107	
SK108	S-205
SK109	
SK110	S-200
SK111	
SP112	S-182
SK113	S-145
SK114	S-146
SK115	S-181
SK116	S-144
SK117	
SK118	S-143
SK119	S-137
SX120	S-100
SK121	S-138
SK122	S-141
SK123	S-131
SK124	S-139
SK125	
SK126	S-152
SK127	S-153
SK128	S-216
SK129	S-126
SX130	S-160
SK131	S-149
SK132	S-148
SK133	S-119
SK134	
SK135	
SK136	
SK137	S-183
SK138	
SK139	
SX140	S-170
SK141	S-179
SK142	
SK143	
SK144	S-175
SK145	S-176
SK146	S-177
SK147	S-174
SK148	S-173
SK149	
SB150	SB01
SK151	
SK152	S-154
SK153	S-156
SK154	S-157
SK155	S-158
SK156	
SK157	S-159
SK158	
SK159	
SB160	SB02
SK161	S-162

遺構番号	S番号
SK162	S-208
SK163	
SK164	
SK165	
SK166	
SK167	
SK168	
SK169	S-163
SK170	
SK171	S-161
SK172	
SK173	S-172
SK174	
SK175	S-169
SK176	S-168
SK177	S-167
SK178	S-166
SK179	
SK180	
SK181	
SK182	
SK183	
SK184	
SK185	
SK186	
SK187	
SK188	
SK190	S-180
SK201	S-115
SK202	S-114
SK203	
SK204	S-132
SK205	S-113
SK206	S-124
SK207	
SK208	
SK209	S-123
SK210	
SK211	S-122
SK212	S-125
SK213	S-134
SK214	S-209
SK215	S-118
SK216	S-120
SK217	S-112
SK218	S-127
SK219	S-128
SK220	
SK221	S-121
SK222	S-178
SK223	
SK224	S-105
SK225	S-130
SK226	S-103
SK227	S-101
SK228	S-104
SK229	S-109
SK230	S-106
SD50	S-70
SX60	S-72
SD70	S-60
SX76	S-61

9. 原遺跡土器包含土層の観察所見

下山正一
(九州大学理学部)

原遺跡は西側の現河床と東側の支流の合流点の山側に位置し、沖積面から1段高い低位段丘面上に立地している。低位段丘は基本的には川によって運び込まれて堆積した砂礫層からなる。原遺跡の低位段丘も砂礫層を主体としているが、砂礫層の上面には深さ数10cm程度の多くの穴が見られ、粘土混じり砂質土が落ち込んだように穴を充填している。粘土混じり砂質土には暗褐色部分と黄褐色部分が識別され、黄褐色部分が穴の中央部分を充填している。黄褐色部分より上位が原遺跡の文化層部分であり、黄褐色土は押型文土器の包含層である。重量比でみると、この黄褐色土壌は粗粒砂分52.3%、中粒砂分4.0%、細粒分6.4%から構成され、粗砂と細砂の2端成分が混合している。つまり主体を占めるのは淡黄灰色粗粒砂で、これに黄褐色の細粒砂サイズの土が混入したとみられる。黄褐色土の細粒部分から多くの火山ガラスが検出された。火山ガラスは土層の上位ほど濃集している。このようなことから、黄褐色土の粗粒砂部分は砂礫層から、細粒部分は段丘面上にたまった風積土から由来したと考えられる。

京都フィッシュントラック(株)の鑑定によると、黄褐色土の細粒部分に含まれている火山ガラスの屈折率の範囲は火山ガラス粒子の60%が1.510~1.512のレンジにあり、ごく僅かに1.498のガラスが認められる。火山ガラスの屈折率のレンジと形態的特徴から、前者は鬼界-アカホヤ火山灰(K-Ah: ca 6,300y.B.P. 町田・新井, 1992)、後者は始良-Tn火山灰(AT: Ca 22,000y.B.P.; 町田・新井, 1992)に由来する火山ガラスに間違いない。粒度組成から、上位の火山灰降灰層位につもった黄砂が土器を含む下位の粗粒砂と垂直混合したと見られる。したがって、押型文土器包含層主部の形成時期はAT降灰(2万2000年前)のかなりあと、かつK-Ah降灰(6,300年前)の直前である。この見解は押型文土器包含層の年代(7~8千年)とも矛盾はない。

引用文献

町田洋・新井房夫1992 火山灰アトラス [日本列島とその周辺] . 東大出版会 279pp.

10. 火山灰分析結果報告

株式会社 京都フィッション・トラック

試料の分析方法

次に処理工程について説明を加える。

(1) 前処理

まず半湿潤状態の生試料を30.0g秤量し、50℃で15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、2σピーカー中で数回水替えしながら水洗し、超音波洗滌を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を液濃度1～2%程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗滌水の交換を繰り返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、8段階の篩別(60, 120, 250mesh)を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120～250mesh(1/8～1/16mm)粒径試料を比重分別処理等を加えることなく、封入剤(Nd=1.54)を用いて岩石用薄片を作成した。

(2) 火山ガラス形態分類

前処理で作成した検鏡用薄片に含まれる火山ガラス形態を、吉川(1976)に準拠して識別・分類した。なお含有率を測定するため200個の粒子を測定した。

(3) 火山ガラスの屈折率測定

前処理により調整・保存された120～250mesh(1/8～1/16mm)粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置(RIMS)※(1)を用い火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては、精度を高めるため原則として1試料あたり30個の火山ガラス片を測定するが、火山ガラス含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

なお具体的に測定データは巻末にデータシートとしてまとめられ、次に延べるように表示されている。まず最上位に試料名(SeriesおよびSample Name)が印刷され、Immersion Oilは測定に使用した浸液の種類を示す。Ndの式はその浸液温度から屈折率を換算するもの、Ndは屈折率、tは温度を示す。この式は一次式であり火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度が測定によって得られるので、この式から火山ガラスの屈折率が計算される。

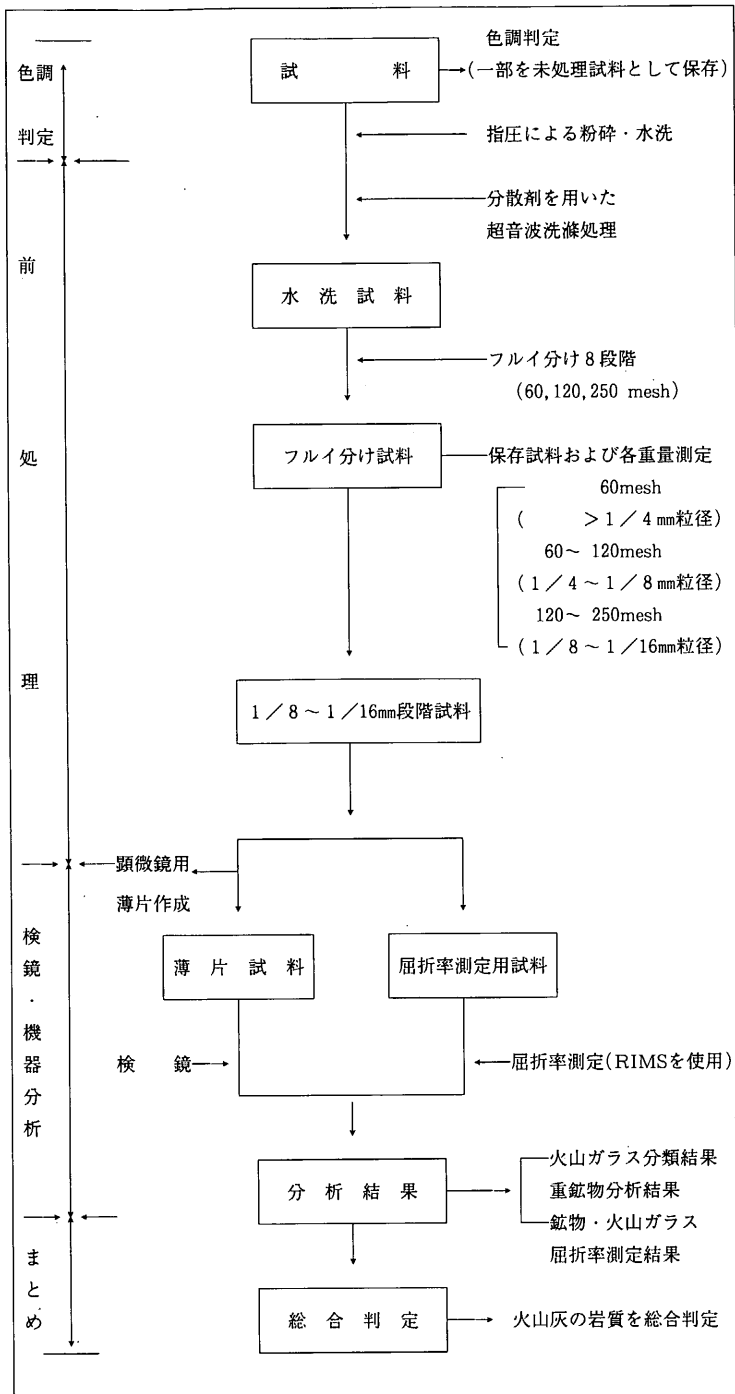
(As. + De.) / 2 は合致温度を上昇させた時(Ascent)と下降(Descent)の平均値として求めた時の意味であるが、複雑さを避けるため測定温度は表示せず、各火山ガラス片毎の屈折率のみが表示されている。測定された屈折率値は最終的にTotalの項にまとめられる。

count, min, max, range, mean, st, dev, skewnessはそれぞれ屈折率の測定個数、最小値、最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして歪度である。屈折率のhistogramの図は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現される。

*一つが1個の火山ガラスである。

注) ※(1) 横山卓雄・檀原 徹・山下 透(1986): 温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定. 第四紀研究, 25(1), 21-30.

Danhara T., Yamashita T., Iwano H. and Kasuya M. (1992): An improved system for measuring refractive index using the thermal immersion method, Quaternary International, 13/14, 89-91.



保存用試料一覧表

No.	試料名	処理生試料 乾燥重量 (g)	篩別試料重量 (g)			色調判定	備考
			> 1/4 mm	1/4 ~ 1/8 mm	1/8 ~ 1/16 mm		
1	原遺跡火山灰	14.7	7.69	0.59	0.94		黄褐色、砂粒質

- 注. 1) 表中の数字は保存試料の重量を示す。
 2) 1/8 ~ 1/16段階の保存試料は、一部岩石薄片作成に使用したため実際よりわずかに少なくなっている。
 3) 色調判定は、新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修，1970）による。

火山ガラス形態分類一覧表

No.	試料名	火山ガラス形態 ※(1)							合計	色付 gl	備考
		Ha	Hb	Ca	Cb	Ta	Tb	It			
1	原遺跡	41	94	1	58	0	4	2	200	+	babble wallガラスを 主とし特徴的な濃い色 付ガラスも微量（1～ 2%）含む。しばしば ガラス中にhydration rindが観察される。
		20.5	47.0	0.5	29.0	0.0	2.0	1.0	100.0		

- ※(1) 上段は計測粒子数，下段は%を示します。
 なお、火山ガラス型とその略称は以下のように対応します。
 Ha, Hb: 扁平型（バブル・ウォール型） Ca, Cb: 中間型
 Ta, Tb: 多孔質型（軽石型，繊維状型） It: 不規則型

火山ガラス屈折率測定結果一覧表

No.	試料名 (sample name)	屈折率範囲(range)		屈折率 平均値 (mean)	測定 固体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
		最少	最大				
1	筑紫野市 原遺跡	1,498	1,499	1.4986	1	1.510 ≤ Nd < 1.512 *66%	H, C型
		1,509	1,515	1.5115	29		

*全火山ガラスに対する，mode 範囲中にある火山ガラスの含有%を示す

※ H: 扁平型
 C: 中間型
 T: 多孔質型

*** Grouping Data Sheet ***

93/02/03
16:59:35

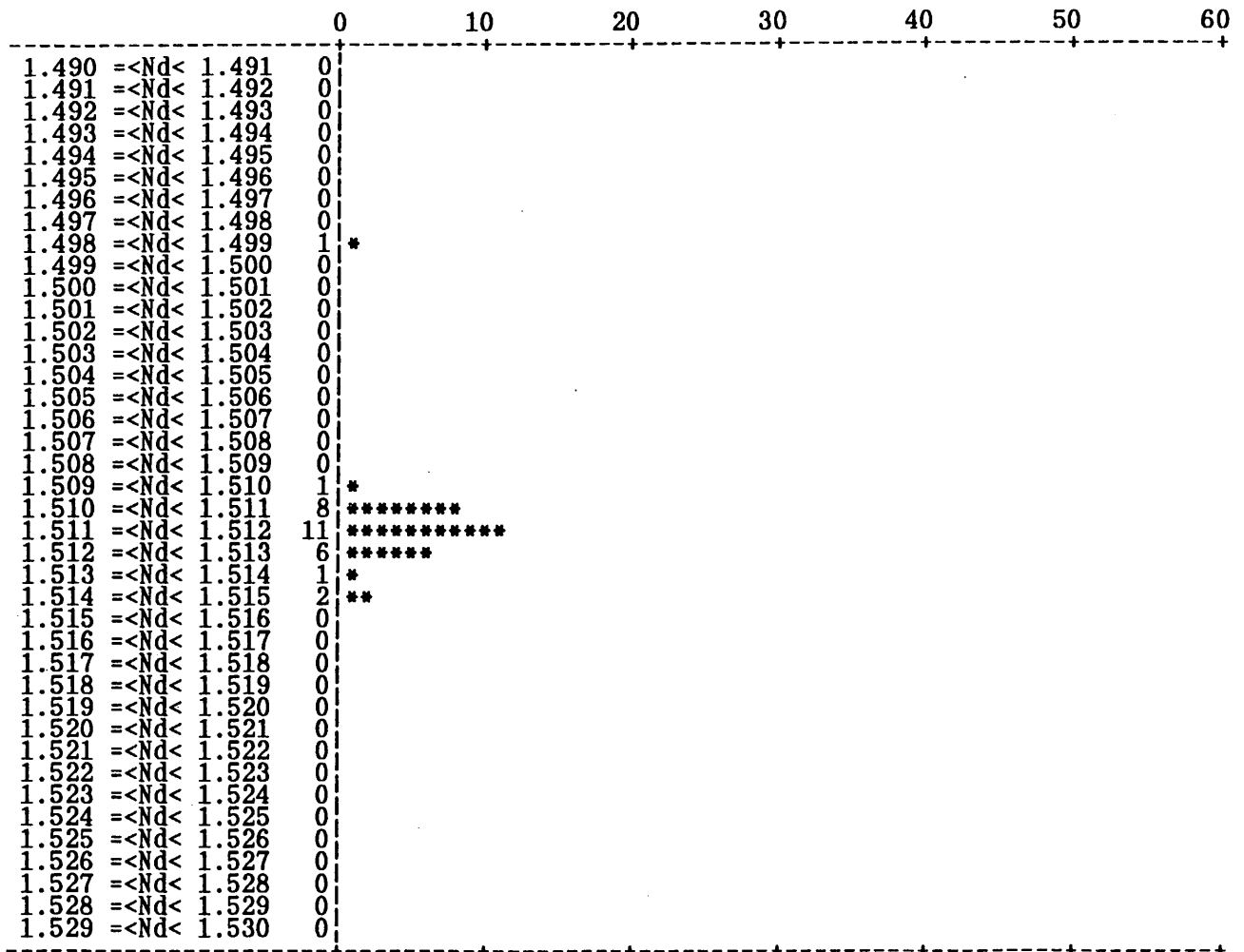
Series Name : Kyushu Univ.(Shimoyama)
 Sample Name : ハライセキ ツクシノシ
 Analist : Yamashita
 Material : VG
 Immersion Oil: No.3.8 (Nd=1.51907-0.000393·t)

(Ascent+Descent)/2

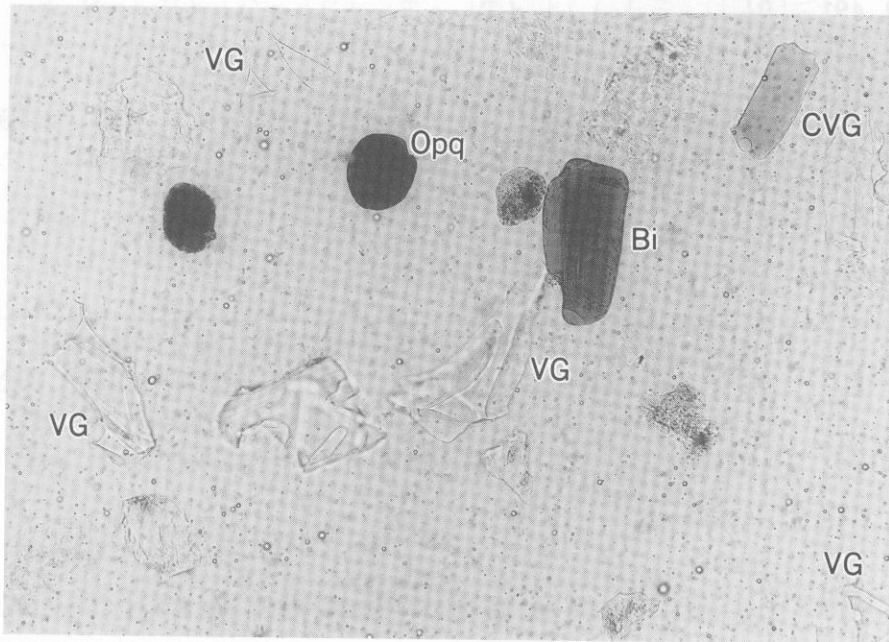
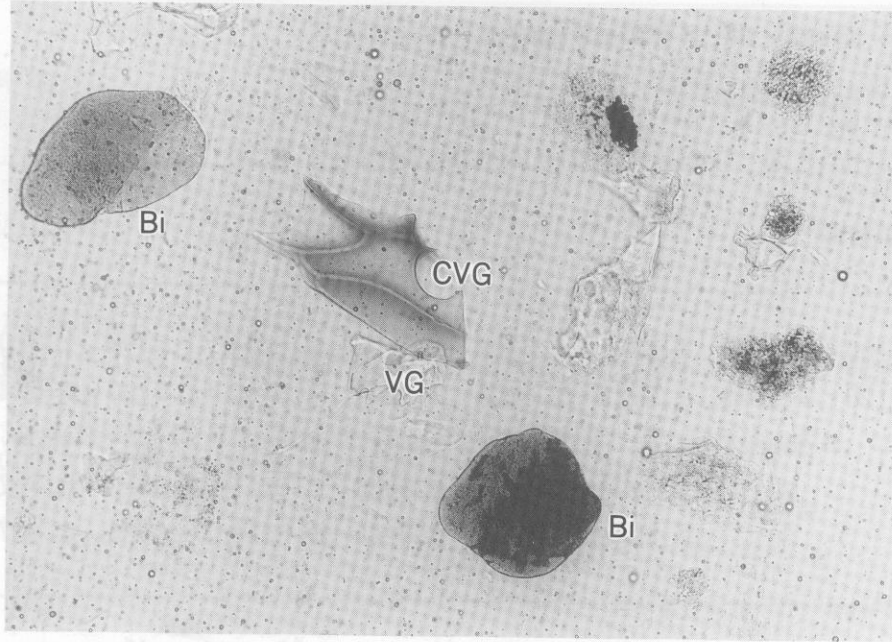
Group. 1
1.4986
 Group. 2
 1.5090 1.5100 1.5101 1.5101 1.5102 1.5103 1.5104 1.5108 1.5108 1.5110
 1.5111 1.5112 1.5113 1.5114 1.5114 1.5115 1.5115 1.5116 1.5117 1.5119
 1.5120 1.5120 1.5123 1.5123 1.5123 1.5124 1.5130 1.5140 1.5146

	count	min.	max.	range	mean	st.dev.	skew.
Group. 1 :	1	1.4986	1.4986	0.0000	1.4986	0.0000	0.0000
Group. 2 :	29	1.5090	1.5146	0.0056	1.5115	0.0012	0.5378
Total :	30	1.4986	1.5146	0.0160	1.5110	0.0026	-3.4074

*** Histogram *** * = 1



顕微鏡写真



写真図版の凡例

重 鉍 物

O I : カンラン石	I d : イディングサイト
O p x : 斜方輝石	Z r : ジルコン
C p x : 単斜輝石	B i : 黒雲母
G H o : 緑色普通角閃石	A p : アパタイト
B H o : 褐色普通角閃石	G a r : ザクロ石
O p q : 不透明鉍物	

そ の 他

V G : 火山ガラス	C V G : 色付火山ガラス
P o : プラント・オパール	

*但し、写真倍率は焼付ごとに毎回多少のちがいが生じるが、およそ90~93倍程度である。

Ⅳ お わ り に

1 検出遺構をめぐる

今回の調査では、主に縄文時代から奈良・平安時代までの遺構を検出したが、出土土器の量と種類の割には、住居跡等の明確な遺構の数が少ない。その為、それぞれの時期における遺跡の構成や変遷過程を検出遺構から検討するには資料が不足がちではあるが、以下概略的に遺跡の展開と性格について、得られた知見から整理することにする。

この地域での展開は縄文時代に始まり、草創期（約10,000年前）から晩期まで連綿と続いている。遺構としては、石組炉・陥し穴状遺構・各種の土壇を検出した。主にⅠ・Ⅵ区の位置する原川と小支流に挟まれた緩斜面に高い密度で分布しており、さらに発掘区に隣接した同一段丘上に密度濃く広がることは間違いなからう。

ところでこれらが出土土器の示す長い存続時期の中で、果たしてどの時期に属するのか問題が残る。このことは出土した各種の石器についても同様である。それは遺構に伴う確実な土器の認定が困難であったことに起因し、Ⅰ・Ⅵ区において、遺構の埋没土層や、上部を被う黄褐色土層とが複雑な堆積状況を示していることが主な要因であった。特にこの黄褐色土層は、アカホヤ火山灰（約6,300年前）を多量に含んでいたことから、層位的に遺構を捉える指標になるものと発掘当初は期待していた。ところがこの層中より出土した歴史時代の土器片（奈良・平安）は、単に局所的な流れ込みと判断するには少なからぬ量であったことも事実である。この土壌中に含まれた火山ガラスは、降灰の1次的な堆積ではなく2次的な粗粒砂への吸着に因るとする下山先生の所見とも一致している。

Fig.56は、出土土器のうち型式が判明するものについて、その時期別出土量を示したものである。ここで状況証拠から遺構の年代を判定しようとするものである。遺構と遺物の関連性から見れば、残された土器出土量の多寡はその地点での活動を間違いなく反映していると考えられるからである。グラフに示されるようにその96%の土器が早期で占めており、その圧倒的な比率からすれば、遺構の形成と出土土器の使用時期がこの時期の所産であると判断してよいだろう。

続いてこの時期の遺跡の性格について触れてみる。他の縄文早期の遺跡調査例からすると、先述したように明確な遺構の数が少ないことが特徴として挙げられる。これについては数多く検出した土壇群の性格をどのように捉えるかに関わる問題でもある。当初は明確であった遺構がその後の自然的諸条件によって姿を変えたとする見方もできるが、検出遺構の項で各論的に述べたように埋没土層の観察からして、その大半が風倒木に伴う根鉢痕土壇と判断している。縄文早期の集落の実態が良く知られている中部・南部九州の調査例と比較すると、本遺跡例は極めて小規模なものといえよう。

次に出土土器は石鏃・石匙・スクレイパー・磨製石斧・礫器・磨石・敲石・凹石・楔形石器などある程度の種類が出土している。ただし決して豊富とはいえず、むしろ他の遺跡例と比較すれば、

	個体数	出土比率
縄文時代		
草創期	16	1%
早期	1212	96%
前期	21	2%
中期	2	0%
後期	4	0%
晩期	11	1%
合計	1266	100%
歴史時代		
8世紀後半～末	25	25%
9世紀前半	50	50%
9世紀中頃	25	25%
合計	100	100%

Fig. 56 時代別点数

あまりにも僅かであり、石器組成について言及するに足りる量とはいいがたい。比率の上では石鏃が半数以上を占め、食物加工のスクレイパーや敲石等に対して優位である。この比率がただちに生業活動を反映しているとはいいがたいが、確実な遺構が少ないこととあわせると、遺跡の性格としては一時的な生業活動の拠点（ワークキャンプ）の色彩が濃いものと思われる。これはまた、早期以外の各型式が継続して認めうるが、数量が僅かであることも、定着には適さない場であったことの証左かもしれない。

次に奈良・平安時代の遺構について触れてみる。現在宝満山の麓には竈門神社が鎮座するが、その信仰は原始的な山岳信仰に始まり、古代には大陸系竈神信仰が将来され国家的祭祀への道が開かれることになり、竈門神社が創始され、奈良時代の末には神宮寺が創建している。その後も元来の山岳信仰は修験へも継承され、近世には宝満修験として活発な活動を行なっている。このように宝満山の信仰は連綿と絶えることなく受け継がれているわけであるが、本遺跡で確認した律令期の遺構もこうした宝満山の歴史的な事象と深い関連にあることは間違いないであろう。現在、宝満山の盛況は、山頂から山麓まで随所に広がる種々の遺跡となつてしのおことができる。それらは今までのところ大きく上宮・下宮・辛野・本谷等幾つかの地域に区分されている。このうち本調査地点から竈門神社下宮までの約800㎡四方は、宝満山遺跡群下宮地区にあたり、現在まで数次にわたる発掘調査が実施されている。

これまでの知見では、下宮社殿の参道隣接地に7×5間の総柱礎石遺構が確認され、これが8世紀末まで遡る神宮寺たる「竈門山寺」・「大山寺」の一部であることが明らかとなった。また、近年太宰府市教育委員会によるこの内の第12次調査地点は当遺跡から谷筋を200㎡ほど登った位置にあり、宝満山遺跡第12次調査として実施された。この調査では12世紀代を中心とする掘立柱建物や石組みの手洗施設も確認されている。さらに、当遺跡裏手の丘陵から古く経塚が発見され、銅経筒1口と経巻残欠、平瓦3枚が出土している。この経筒に刻まれた銘文には天永元年(1110)と年号があり、また、僧が大南毘沙門堂で宿泊しながら経を唱えたことが記されている。丘陵下部の田圃はホノケをピシヤモンと称し、韻を同じくすること、さらには、そばの溜池が改修された折、この田圃で瓦や土器類が出土していることから、この位置に経筒に記された毘沙門堂の存在した可能性が高い。これと関連して第12次調査検出の掘立柱建物跡はお堂周辺に設けられた坊舎の可能性もたれている。(注1) このように当地を含む一帯は、近年の考古学的調査により宝満山信仰を知る上で重要な地域となってきたのである。

さて、こうした神宮寺に関する確実な史料の初見は『扶桑略記』にみえる。「延暦二十二年閏十月二十三日最澄和尚於太宰府竈門山寺、為す渡海四船平達、敬造檀薬師仏四軀、……」と記述され、802年に最澄が遣唐使の渡海平安を祈願して竈門山寺に薬師仏をつくったのである。その後も円仁の名が史料の事績にみえるように、渡唐僧の崇敬を集めまた、神社も位階昇進するなど、9世紀に入って神宮寺は活発な動きを見せ、有力な寺院となっている。

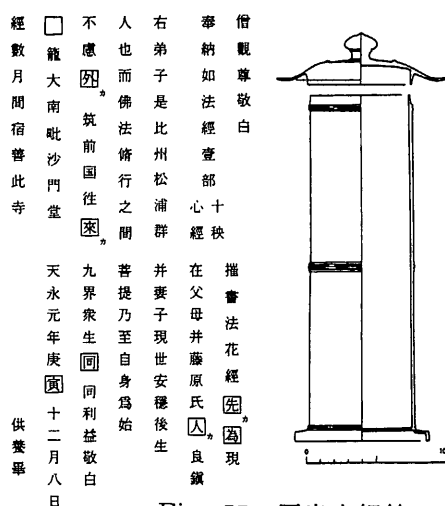


Fig. 57 原出土経筒

の状況や型式学的な変遷の方向性を考慮すれば、大筋としてかなり蓋然性の高いものである。最近では、後続するとされる平椀式との関連から、手向山式に関する研究が南九州で行なわれている。南九州では押型文土器以前に貝殻文円筒形土器が存在して、早期前半の状況もある程度整理されている。また、サツマ火山灰層の下位から多量の隆起線文土器が出土することで、草創期の状況も判明しつつあり、早期への移行を連続的に把握しようとする気運も見える。

これに対し北部九州では、押型文土器以前の状況は未だ十分に整理されていない。最古の押型文土器とされるベルト状施文の川原田式は、大分県山香町川原田洞穴において早水台式の下位から層位的に出土したとされるが、報告文による限り所謂川原田式が全く単独でなおかつ量的にも安定したものなのか今一つ明確でない。しかし、福岡県福岡市柏原K遺跡では、山形押型文（1点だけ楕円文）による横位ベルト状施文の土器群が、層位的に他の押型文土器の下位から出土しており、九州最古の押型文土器としての可能性が高まりつつある。ただし、ネガティブ押型文土器が出土しない九州においては近畿地域とは必ずしも同じような変遷を辿っているわけではなく、西日本全体の押型文土器変遷の流れからみれば、その出現経緯に問題点が残るのもまた事実である。

では、北部九州で押型文土器に先行する土器群は何であろうか。川原田遺跡では押型文土器の下位層より厚手無文土器が出土、大分県九重町二日市洞穴では押型文土器層から下位へ厚手無文尖底→厚手無文丸底→厚手二枚貝条痕文丸底→薄手二枚貝条痕文丸底という層位的状況が確認されている。また、柏原遺跡では層位的な出土状況から、撚糸文土器→刺突文土器（柏原式）→条痕文土器→無文土器→押型文土器という序列が得られている。長崎県多良見町伊木力遺跡でも、轟B式土器の下位からではあるが厚手無文土器が出土している（ただし平底）。このように、北部九州では押型文土器以前（あるいは直前）に無文土器だけで一時期が形成されそうだが、広島県東城町帝釈峡馬渡岩陰や愛媛県美川村上黒岩岩陰等でも層位的に押型文土器に先行するものとしての無文土器が確認されており、中・四国をも含めた状況としても注目される。ところで、南九州では押型文土器に先行するものとして、無文土器を含まない貝殻文円筒形土器が存在する。北部九州や中・四国の状況とは全く異なった様相を呈するだけに、当該期の九州がどのような状況（例えば文化的な性格の違い）にあったのかが今後大いに問題になろう。

北部九州における草創期の研究は、長崎県吉井町福井洞穴や同県佐世保市泉福寺洞穴に終始するといっても過言ではない。これら以外に草創期の遺跡といえば、福岡県那珂川町門田遺跡くらいしか最近まで確認されていなかったからである。福井洞穴では隆帯文土器→細隆文土器→爪形文土器という変遷が、泉福寺洞穴では隆起線文土器（豆粒文土器）→爪形文土器→押引文土器→条痕文土器→押型文土器という変遷が、それぞれ層位的に辿れるとされる。近年、大塚達朗によって泉福寺洞穴の再検討が行なわれる中で、九州の草創期土器研究の方向づけがなされた。それによると、隆起線文土器群は泉福寺下層式→西ノ園式→大平式→堂地西式に細分編年され、この後に福井2層・泉福寺6b層→泉福寺5層・柏原式を位置づける。福井2層とは爪形文土器のことでこれを「福井式」とするが、門田遺跡の爪形文土器もこれに属するものである。泉福寺6b層はその報告で爪形文とされた土器であるが、大塚は口縁部に円形の刺突文や貫通孔が1列巡る特徴から、新潟県中里村壬遺跡で最初に認識された円孔文土器であるとした。泉福寺5層はやはりその報告で押引文土器とされているが、口縁部の円形でない工具による刺突文や、福井式を出土しない柏原遺跡の事例から、円孔文土器に後出するものとしての続円孔文土器「柏原式」が設定された。なお、大塚は九州の福井式や円

孔文土器が東日本の多縄文土器と年代的に併行関係にあるとしており、そうすると柏原式は草創期末くらいに位置づけられそうである。

さて、このように従来までの研究の動向を概観してみると、原遺跡第1類土器は柏原遺跡の層位的事例より押型文土器やそれに先行する厚手無文土器や条痕文土器よりもさらに先行し、また大塚の研究により福井式爪形文土器や円孔文土器に後出するものとして位置づけることが可能である。なお、大塚も柏原遺跡の報告者である山崎純男も、柏原式を草創期としている。

原遺跡第1類土器の特徴を今一度ここで纏めてみると以下ようになる。〔器厚は7～9mmで器面調整は二枚貝腹縁による貝殻条痕文。器形は緩やかに開きながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反して端部は舌状に丸く作られる。底部はおそらく丸底。文様は先端が尖ったかまたは多少幅のある工具によって刺突文が普通口縁部下に1条巡らせられ、その内面はわずかに盛り上がる。刺突文の下には径1cm、高さ5mmの瘤状の突起が普通1個貼り付けられるが、2～4個の場合も稀にある。〕この特徴はまさに柏原式であるが、筆者の知る柏原式の類例は大分県川原田洞穴・福岡県北九州市貫川遺跡・福岡県築城町大坪遺跡といった九州の北東部にも見られ、柏原遺跡や原遺跡や泉福寺洞穴をも含めると、未だ類例は少ないながらも北部九州で広く分布することになる。なお、原遺跡第1類土器をはじめ川原田洞穴・貫川・大坪の柏原式は、柏原遺跡F地区のものではなく、柏原遺跡E・K地区のものと同類である。

先述したように、押型文土器以前の南九州では、貝殻文円筒形土器が濃密に分布しているが、これらの中でも古い段階のものは柏原式と同様に器面調整は二枚貝腹縁による貝殻条痕文であり、文様は口縁部に刺突文が集約されるという特徴を有する。確かに、底部形態や器形においては両者間に相違点も決して少なくない。しかし、両者は間違いなく隆起線文土器以降で押型文土器以前の間位置づけられるものであり、器面調整・文様・分布といった諸特徴を重視して、両者の関連性がある程度積極的に評価することも重要なことであろう。なお、仮に両者に関連性が存在するのなら、貝殻文円筒形土器の古い段階のものは草創期の新しい部分に位置づけられようか。

今回、原遺跡の調査で纏まった柏原式を得ることができ、北部九州の当該期の状況を概観する機会を得た。北部九州では、隆起線文土器以降～押型文土器以前の状況が未だ十分に整理されてなく、未確認の型式も少なくないと考えられる。南九州との関係や押型文土器の出現過程など問題点も多いが、当該期はかなり広域に分布する土器が多く存在する時期だけに、北部九州という地域研究は勿論、日本列島全体をも視野に入れた研究が今後特に望まれよう。

[参考文献]

- 麻生 優他編 1985『泉福寺洞穴の発掘調査』築地書館
雨宮瑞生 1992「南九州縄文草創期資料の新旧関係」『古文化談叢』28
井上裕弘編 1979『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告. 第11集 門田遺跡谷地区』福岡県教育委員会
岩尾松美・酒匂義明 1964「速見郡山香町大字広瀬川原田洞穴の調査」『大分県地方史』34
江坂輝彌・西田 学 1972「愛媛県上黒岩岩陰」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会
大塚達朗 1989「草創期の土器」『縄文土器大観』1 小学館
大塚達朗 1991「九州地方の縄紋草創期編年と泉福寺洞穴」『縄文時代』2 縄文時代文化研究会
賀川光夫 1965「九州東南部」『日本の考古学』II
賀川光夫 1972「大分県川原田洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会

- 鎌木義昌・芹沢長介 1972「長崎県福井洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会
- 河瀬正利 1970「中国山地帝釈峡遺跡群における縄文早期文化の二、三の問題」『松崎寿和先生退官記念論集』
- 新東晃一 1987「同心円文押型文土器」『南九州縄文通信』1
- 新東晃一 1988「南九州の円筒土器と角筒土器—前平式土器と吉田式土器の型式概念をめぐる諸問題」『鎌木義昌先生古稀記念論集 考古学と関連科学』
- 新東晃一 1989「早期九州貝殻文系土器様式」『縄文土器大観』1
- 新東晃一 1991「縄文早期の壺形土器」『南九州縄文通信』4
- 高橋信武 1990「南の有舌尖頭器」『考古学ジャーナル』324
- 橋 昌信 1969「九州の押型文土器について—分類と編年—」『史学論叢』4
- 橋 昌信編 1980『大分県二日市洞穴』別府大学付属博物館
- 前田義人編 1989『貫川遺跡2』(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 前田義人編 1991『貫川遺跡4』(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 松藤和人編 1990『伊木力遺跡』多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室
- 山崎純男編 1983『柏原遺跡群I』福岡市教育委員会
- 山崎純男・平川祐介「九州の押型文土器」『考古学ジャーナル』267
- 山崎純男編 1987『柏原遺跡群IV』福岡市教育委員会
- 山崎純男編 1988『柏原遺跡群V』福岡市教育委員会

川原田洞穴の資料については橋昌信先生（別府大学教授）から、大坪遺跡の資料については高尾栄市氏（築城町教育委員会）がそれぞれ御教示を賜わり、また実見させていただきました。心からお礼申し上げます。

3. 溝SD50出土遺物について

SD50は僅かな調査範囲にもかかわらず、ある程度まとまった量の土器や陶磁器等が出土した。出土土器の年代では8世紀後半から9世紀中頃までを含んでいる。出土遺物の資料的な取り扱いからすると、溝の場合、最初の掘削からその役目を終えて埋没するまでの間に幾度かの清掃（底さらえ）が当然考えられ、果たして一括出土資料と呼べるものであるのか疑問もある。今回の出土状態は、遺物の8割以上が東壁際からまとまって出土している。埋没土層は上下の2層に分けることができた。しかし、土器は上下ともに接合するものもあり、また、土器の時期も上下層で明確に差があるわけではない。その為、厳密な意味での一括資料とは呼ばないことにする。特に、今回の時期幅が認められ、各器種によっては形態や製作手法上の変化があり、大きく3群に分けられることは遺物各論で述べた。ここではそうした形態変化ではなく、土器群の器種構成に注目してみることにする。

これまでも大宰府跡の発掘調査で出土した土器のうち、時期幅が比較的限定された資料については器種別の数量を集計し、構成比率について検討を重ねてきている。これは遺跡の性格が器種構成に反映されるからである。今回のSD50についても今

後の検討資料とするために機種別の数量を算出し、構成比率について簡単に言及してみたい。SD50については出土した土器・陶磁器の細片を含めて総破片点数を集計している。個体数の算出にあたっては接合資料も接合前の状態で数量化した。また、構成比率の特徴を考える上で他の例とも比較してみた。比較の対象としたものはこれまでに器種の構成比率が知られる大宰府政庁前面の溝SD2340と政庁後背地の土壙SX2999である。前者は8世紀中頃、後者は8世紀後半から末頃の標識遺構で、ともに大宰府の官衙的な色彩を色濃く反映したものである。

さて、それぞれの器種はその用途や機能から、小型食器類や高杯等の供膳形態・鉢や壺類の貯蔵形態・甑や土師器甕類に代表する調理用の煮沸形態に大別される。一般に官衙遺跡の中核部では公的な場で使用されることから供膳形態が高い比率を示し、煮沸形態が低率である。SD2340は79.5%、SX2999は79.8%といずれの場合も供膳形態は8割を占め、煮沸形態は14.9%、11.1%と低率である。これにくらべて今回のSD50は供膳形態が51.2%と低く、逆に煮沸形態が41.3%と高率を占め、対照的な構成比率となっている。こうした供膳形態が低率で、煮沸形態が高率にあるのは、一般の集落

土師器	供膳形態	杯	29
		椀	17
		皿	8
		鉢	4
	煮沸形態	甕	30
		釜	2
		製塩土器	1
土製品		焼塩壺	5
須恵器	供膳形態	置竈	1
		蓋	6
		杯	
		椀	7
	貯蔵形態	皿	1
		硯	
		壺	7
黒色土器	供膳形態	鉢	1
		椀	9
		鉢	1
緑釉陶器	供膳形態	椀	1
輸入陶磁器	供膳形態	椀	59
石製品		鍋	2
		砥石	1
金属製品		箸	2
合計			199

Fig.59 個体別総数

	土師器	須恵器	黒色土器	越州窯系青磁	緑釉陶器	石製品	合計
供膳形態	1696	113	227	81	3		2120
貯蔵形態	0	285	23				308
煮沸形態	1710					3	1713
合計	3406	398	250	81	3	3	4141

Fig.60 破片総数

に見られる傾向である。例えば同時期の一般集落である小郡市干潟遺跡の土壌（土器溜）では煮沸形態が50%前後を示している。今回のSD50は構成比率の上で集落出土に近い傾向が指摘できよう。周辺に厨的性格の施設が存在したのか、あるいは一般の集落に近い生活様式をとる施設があったのかも知れない。

次に、SD2340・SX2999・SD

50出土土器群の種別の構成比率をみてみよう。SD50では、黒色土器が5.4%、輸入陶磁器も僅かではあるが2%を占めている。また、新たに緑釉陶器が登場している。また、須恵器の構成比率はSD2340が80%に近く、SX2999では23.7%にまで減少し、さらに、SD50では9.6%にまで低下している。この現象は供膳形態において顕著であり、少なくとも時期が降るにつれて供膳形態のうち小型食器類から須恵器が撤退してゆく傾向を指摘できる。特に、SD50の場合9世紀中頃の須恵器小型食器類は認められず、肥後系の壺が存在するのみであり、牛頸窯跡群の消長と深く関連するのは間違いなからう。

今回の構成比率は、8世紀後半から9世紀中頃にかけての大宰府の縁辺部のあり方として、今後の比較検討に資するものと考えられる。

参考文献

- 「大宰府史跡」 平成2年度発掘調査概報 九州歴史資料館 1991
- 「干潟遺跡Ⅰ」 福岡県文化財調査報告書第59集 福岡県教育委員会 1980
- 「大宰府出土土器の検討」 九州歴史資料館研究論集14 九州歴史資料館 1989

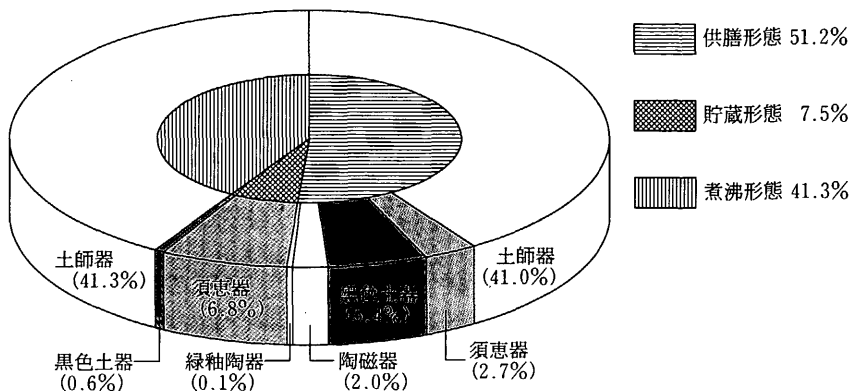


Fig. 61 SD50総破片数の形態別・種別割合

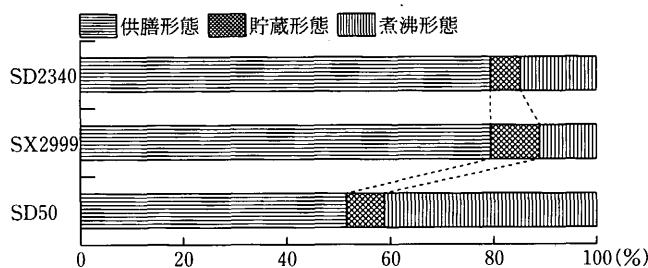


Fig. 62 SD2340・SX2999・SD50形態別比率

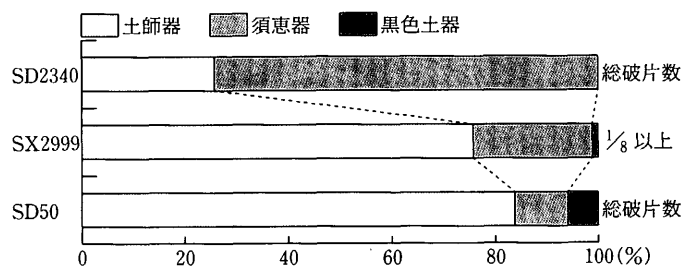


Fig. 63 SD2340・SX2999・SD50種類別比率

圖 版



1 発掘区遠景



2 発掘区遠景



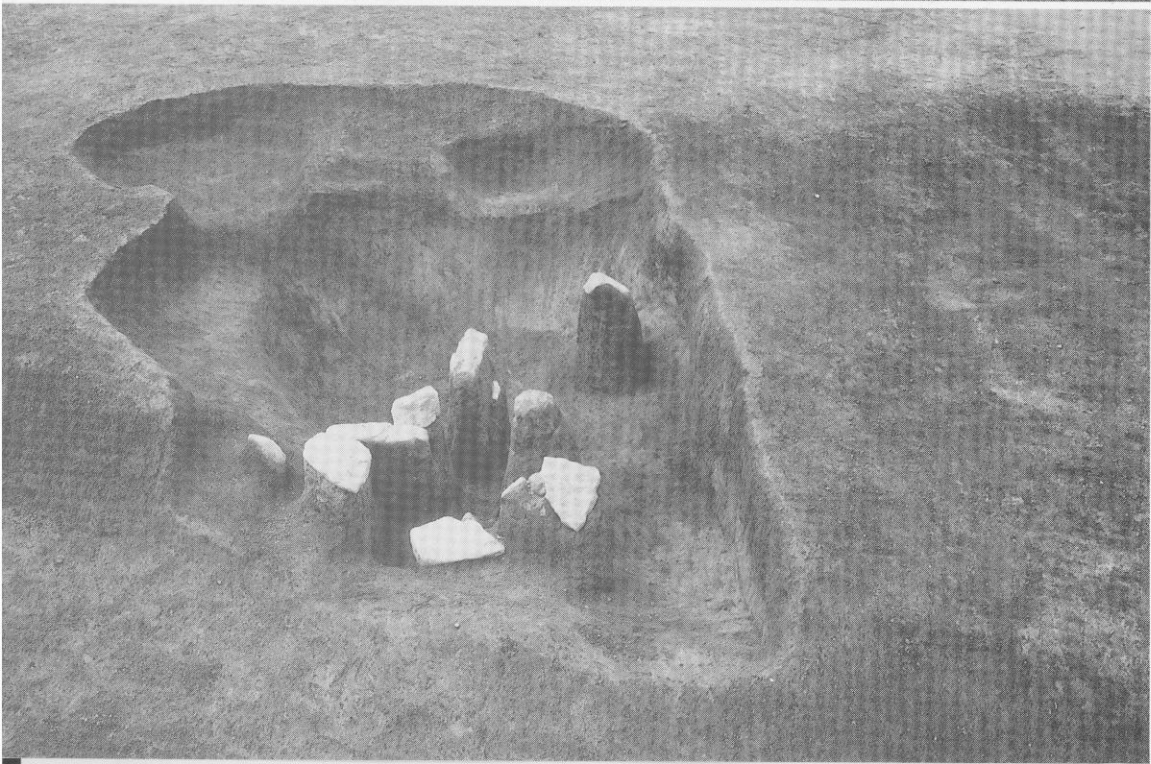
3 発掘区遠景



1 I区全景



2 I区全景



3 SK01

1 I区西半全景
SK06~13



2 SK07



3 SK03



4 SK08





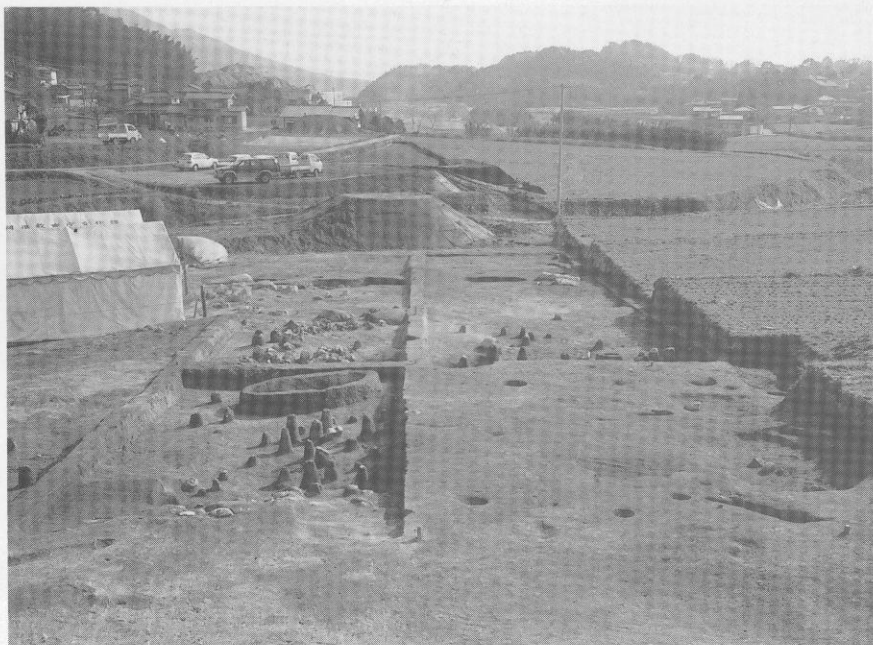
1 SK16



2 SX20



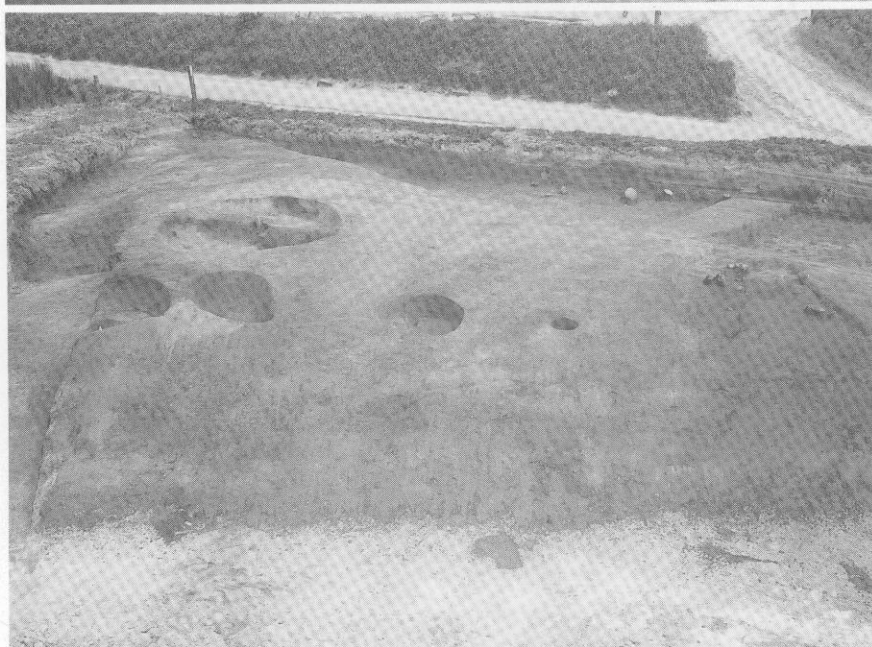
3 SX20



1 II区全景(北から)



2 II区全景(南から)



3 II区北部分全景(南から)



1
II区
黄褐色土遺物出土状況



2
II区
黒褐色土遺物出土状況



3
II区 土層断面状況

1 IV区全景(北から)



2 SD050全景(東から)



3 V区全景(南から)

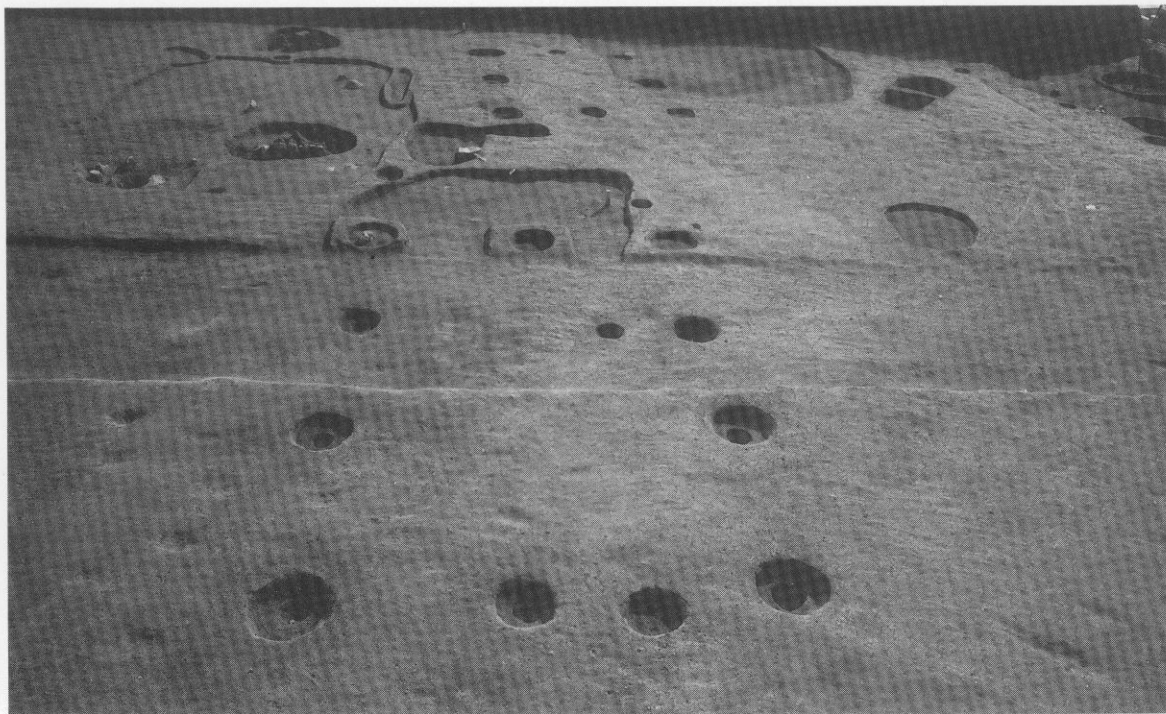




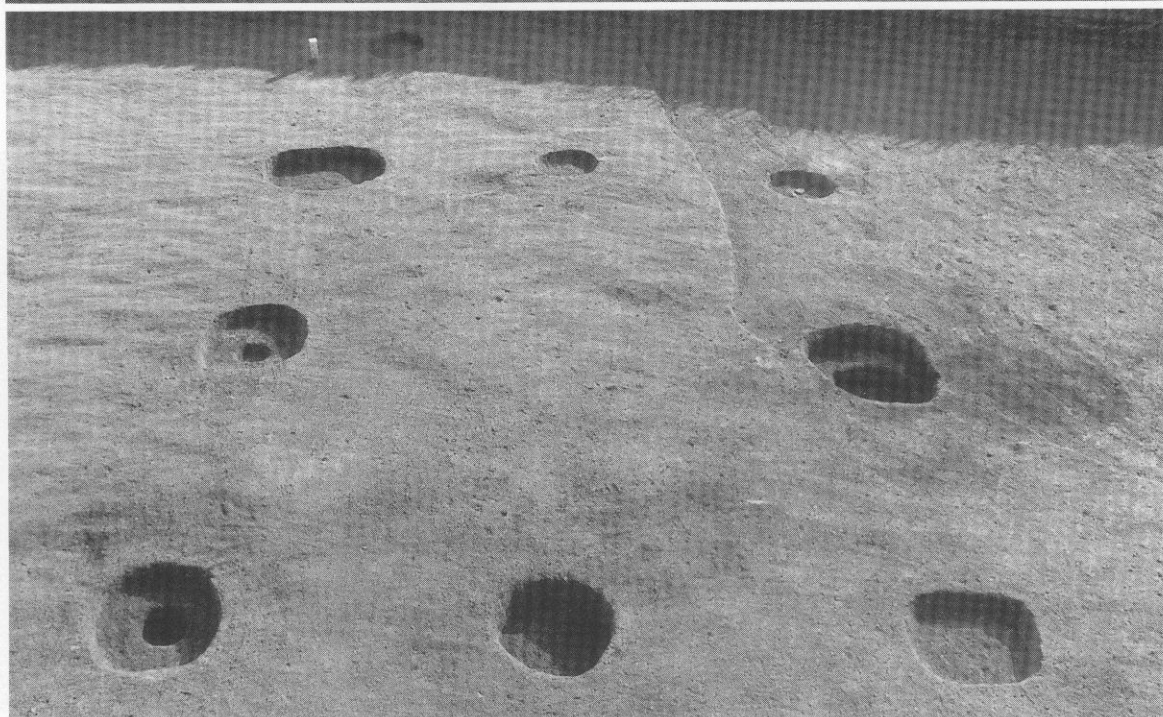
1
VI区
上層遺構全景
(東から)



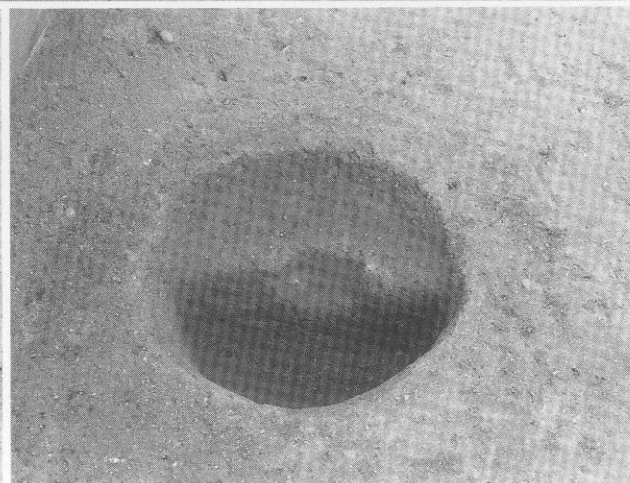
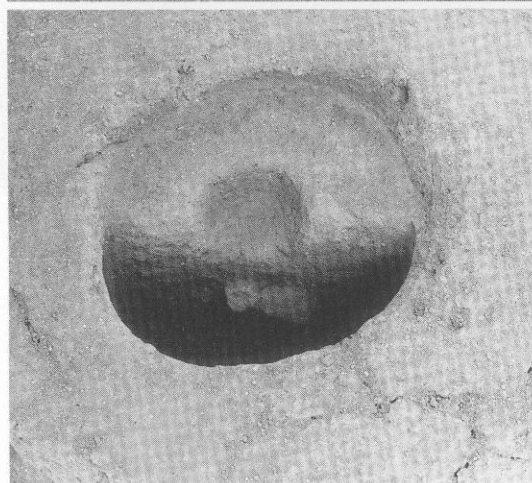
2
VI区
上層遺構全景
(北東から)



1 SB150



2 SB160



3 SB150
柱穴断面



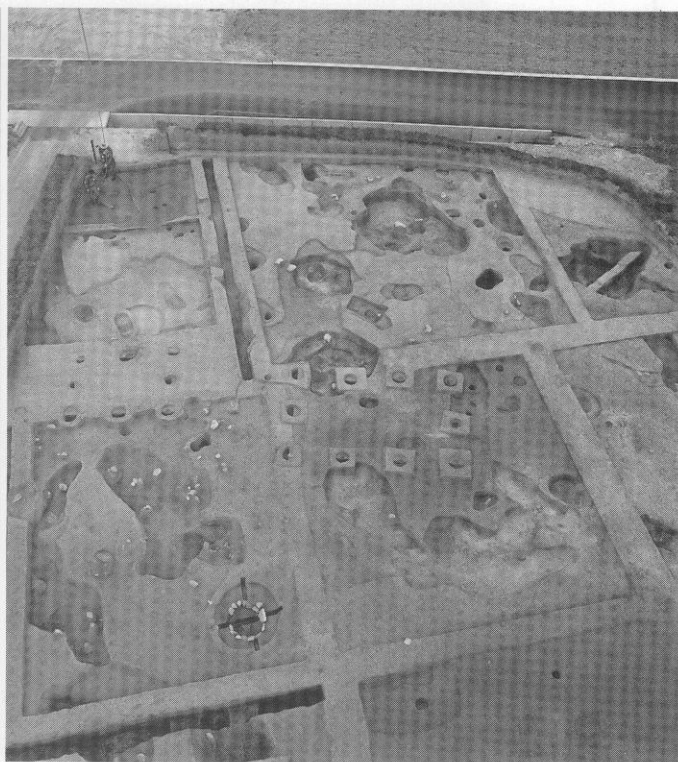
1 VI区下層遺構全景(北から)



2 VI区下層遺構検出状況(南半)



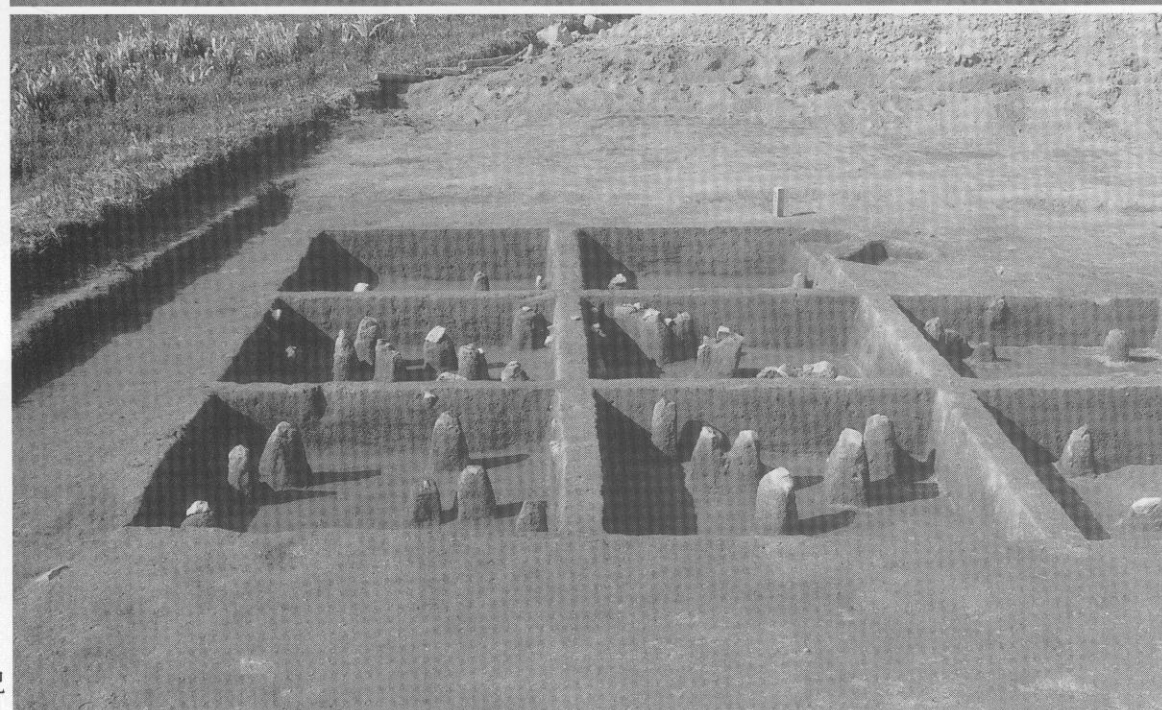
3 VI区南半下層遺構検出状況



4 VI区西半下層遺構検出状況



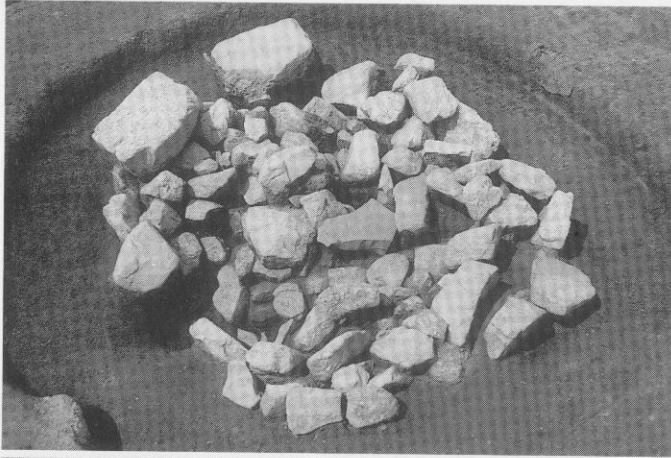
1 VI区グリッド全景



2 グリッド遺物出土状況



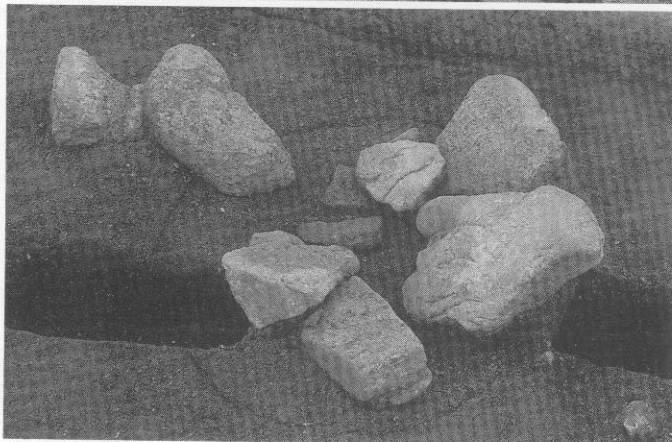
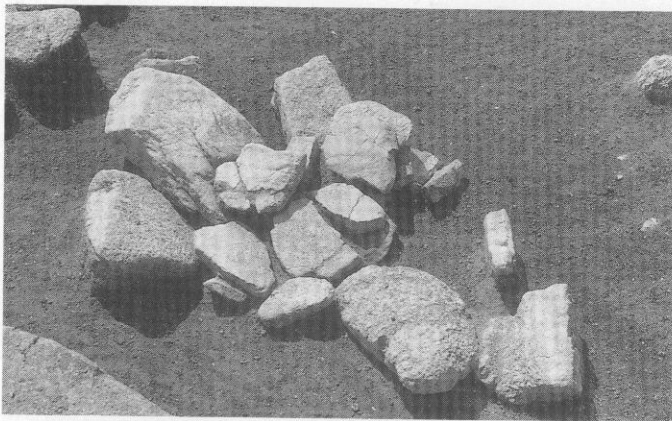
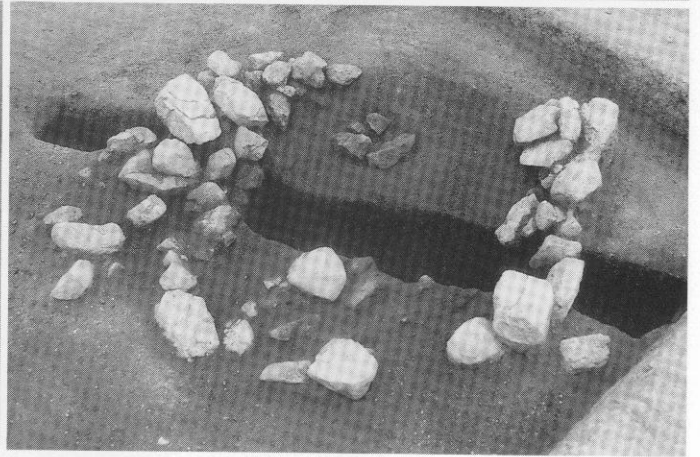
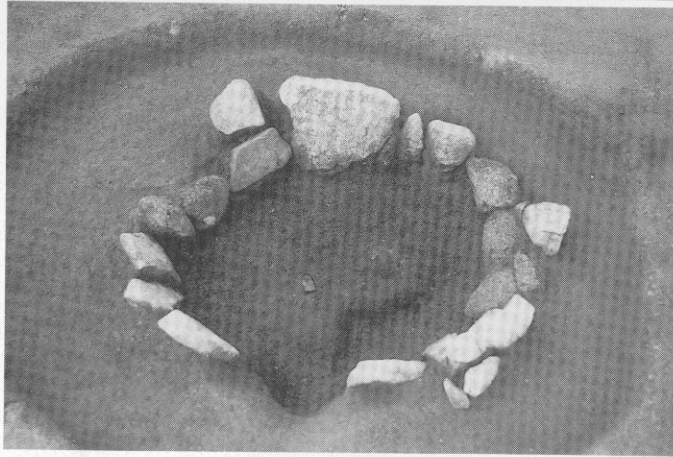
3 グリッドH-4区
土器1出土状況



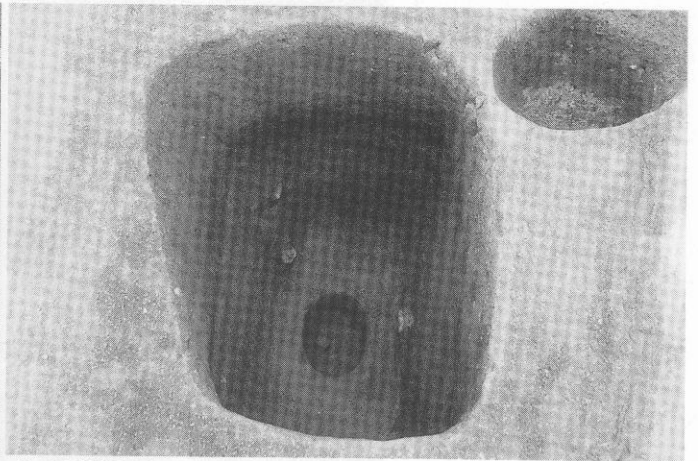
1 SX200



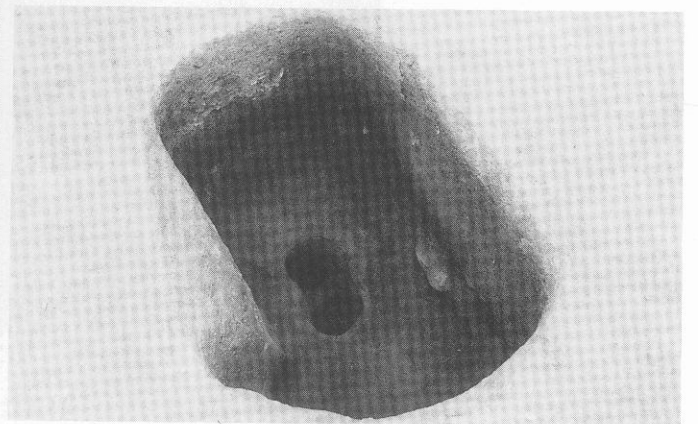
2 SX100



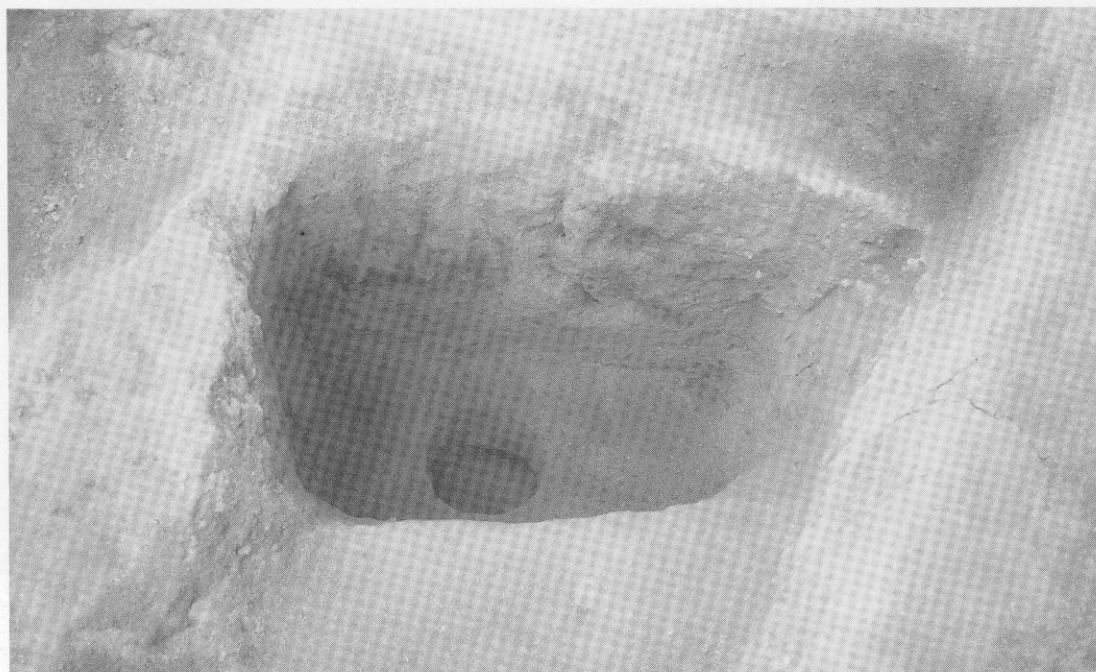
3 SK170



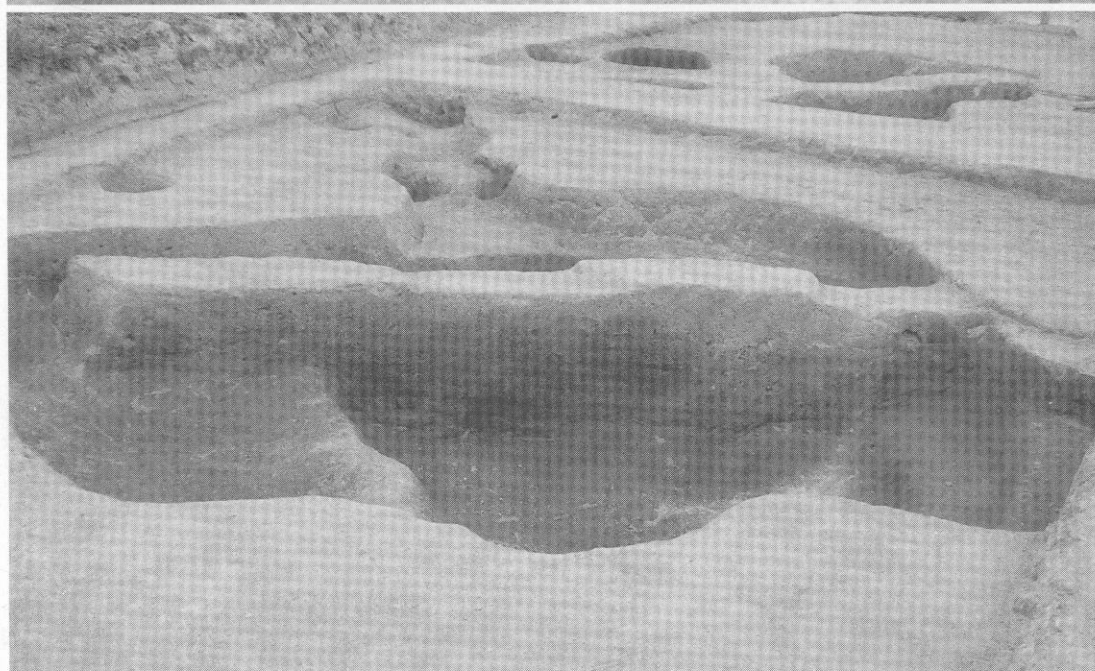
4 SX120



5 SK180



1 SK190



2 SK89



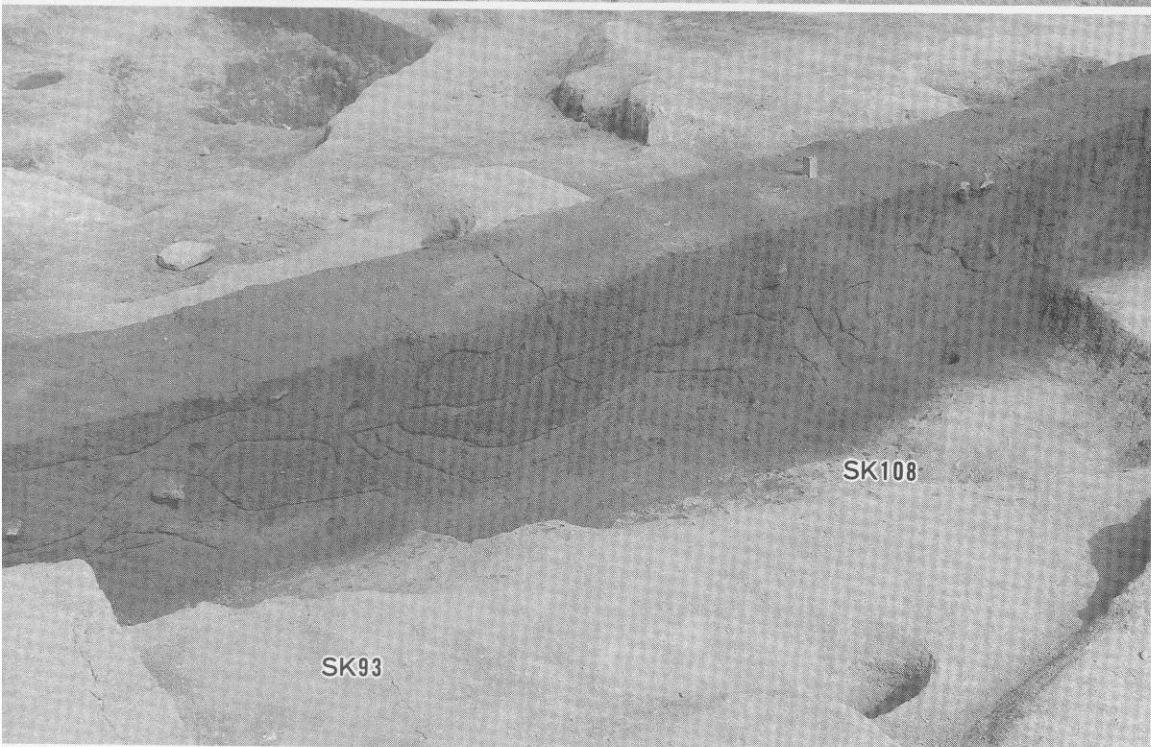
3 サヌカイト製礫器(49)
出土状況

PL.14



SK122

1 西側土層断面



SK108

SK93

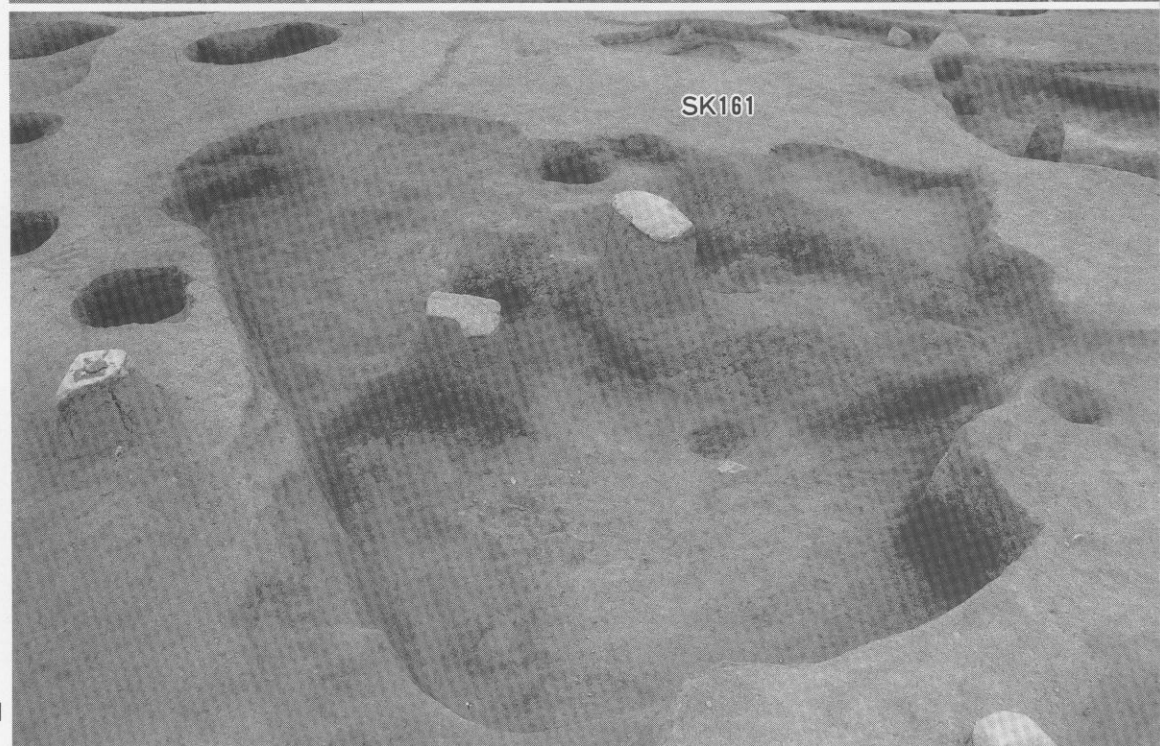
2 東側土層断面



3 SK97



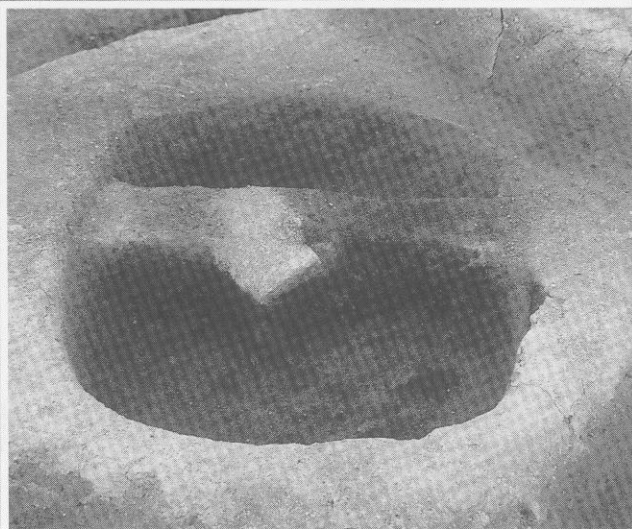
1 SK119遺物出土状況



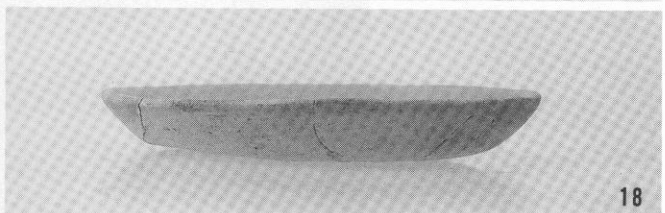
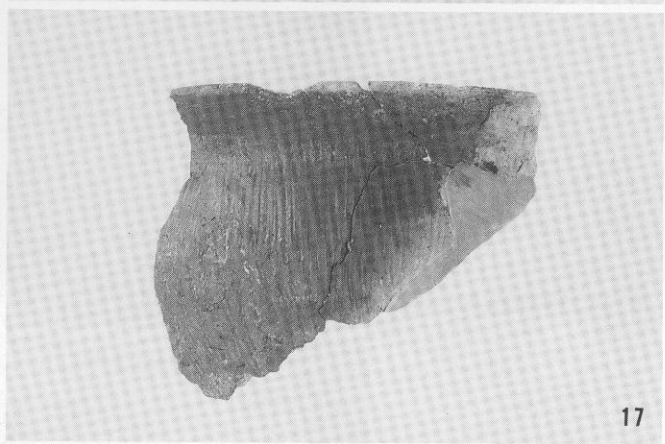
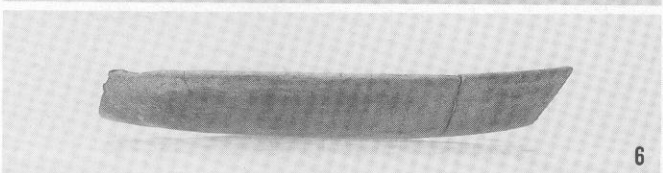
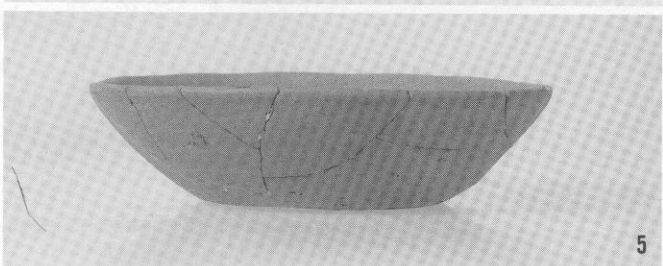
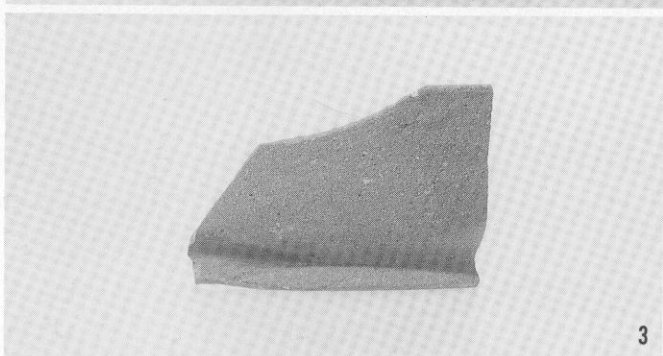
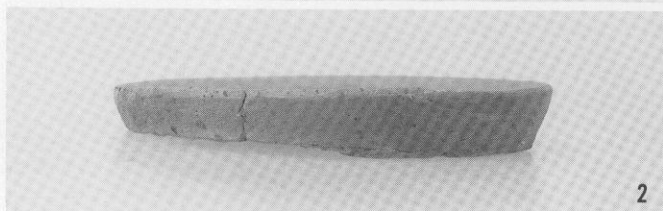
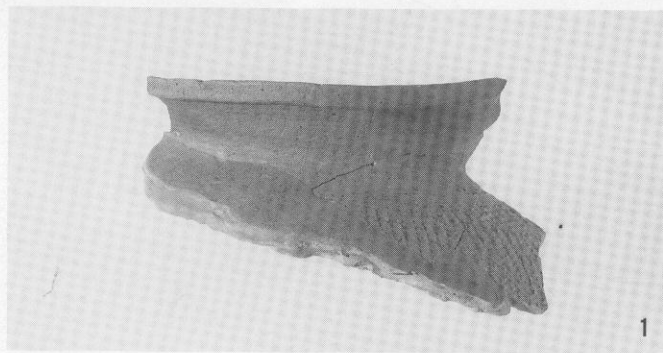
2 SK161



3 SK168



4 SK130

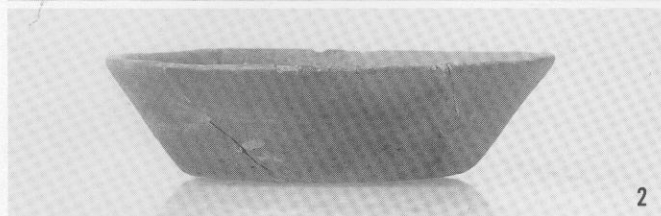




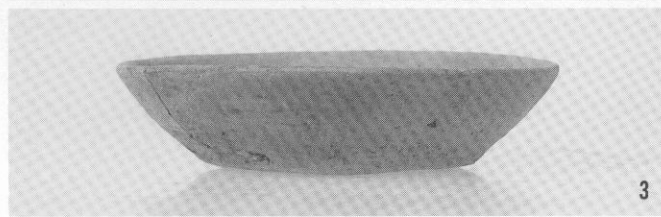
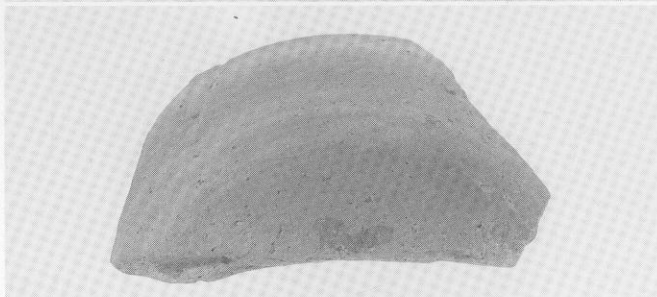
1



12



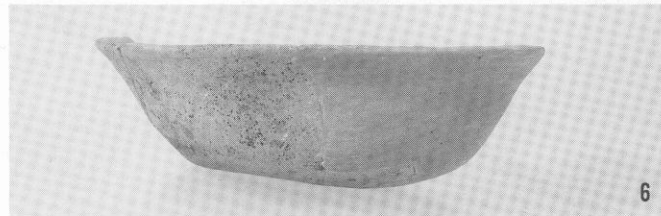
2



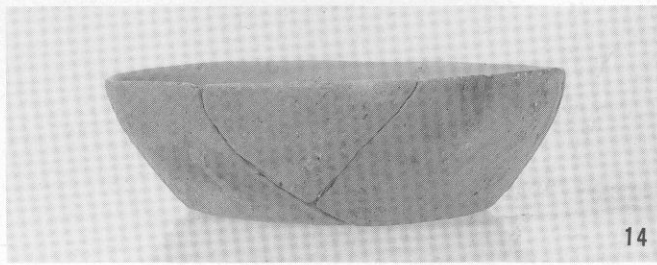
3



13



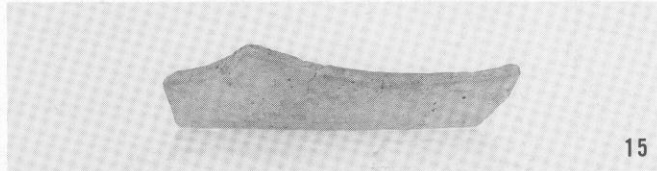
6



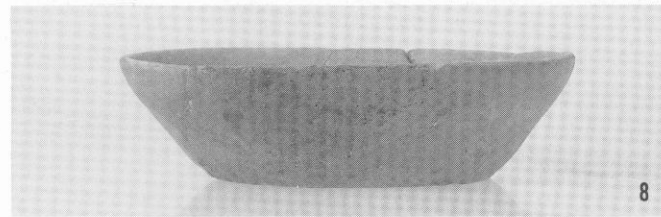
14



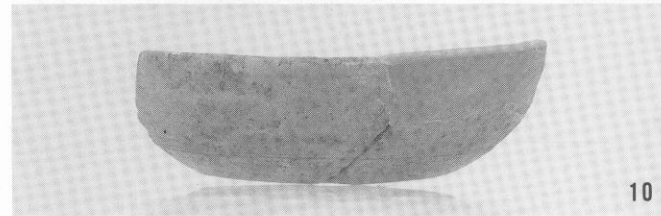
7



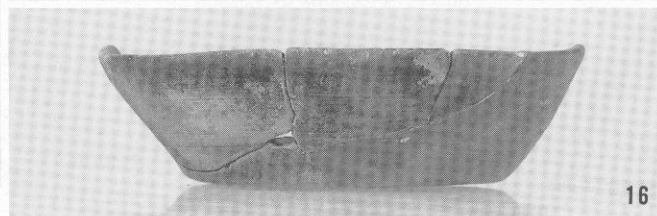
15



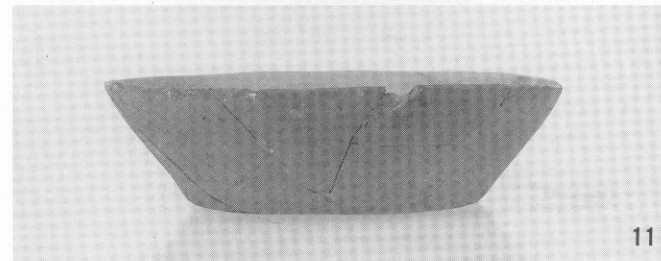
8



10

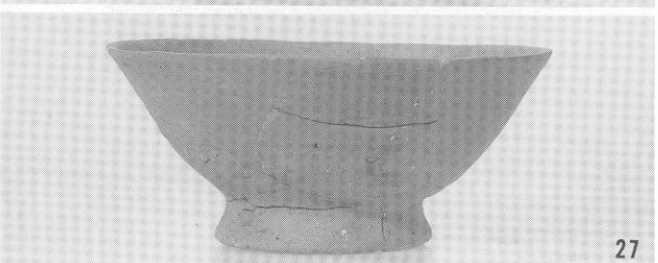
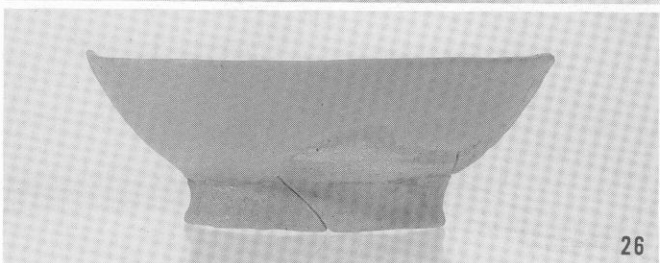
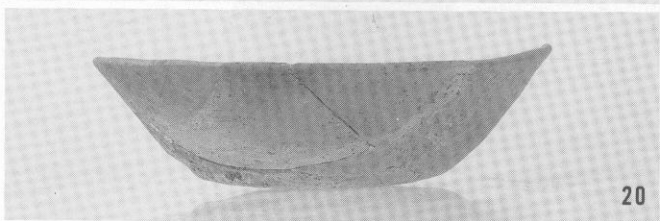
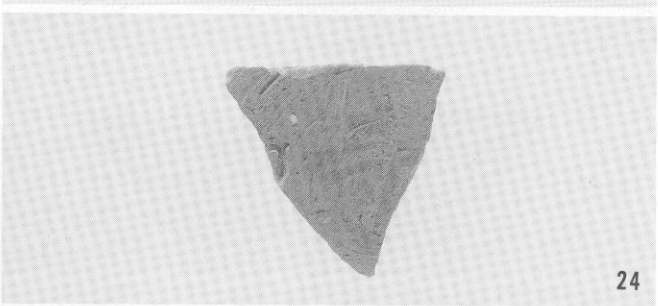
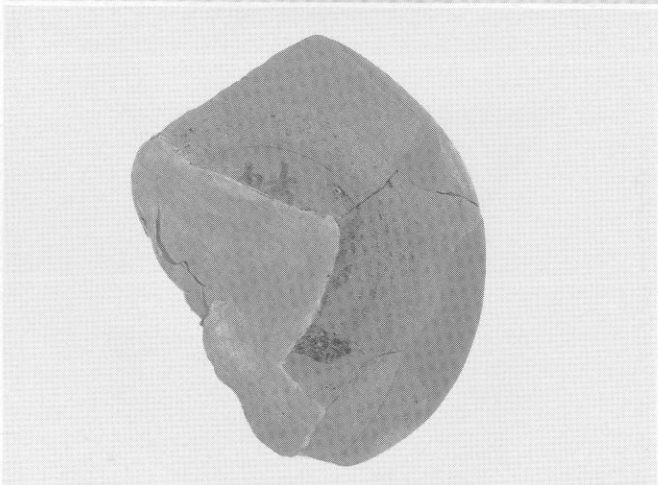
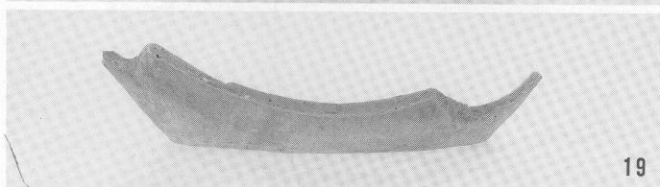
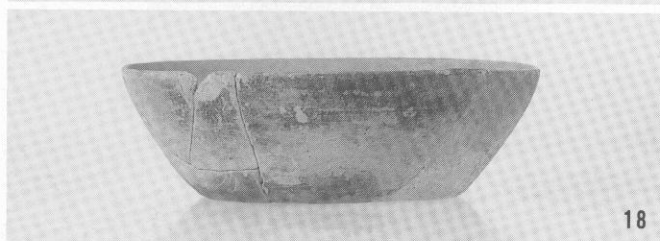
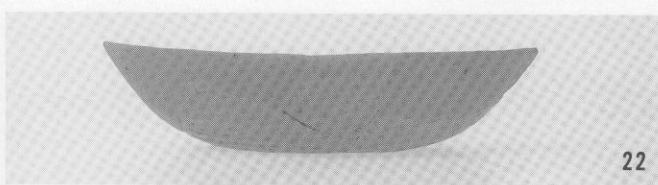
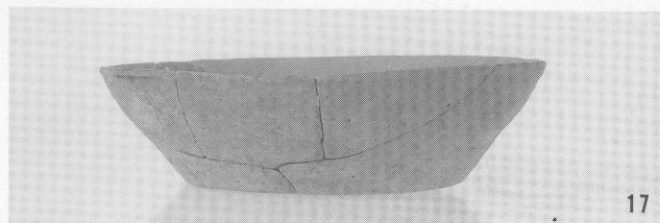


16



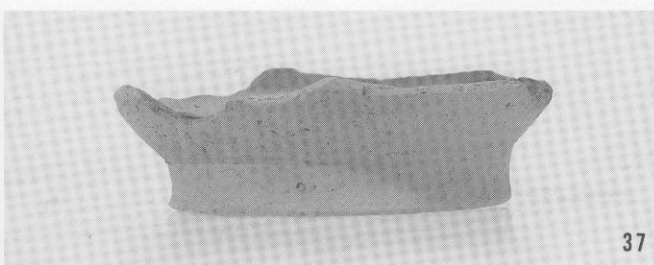
11

III·IV区SD50出土土器





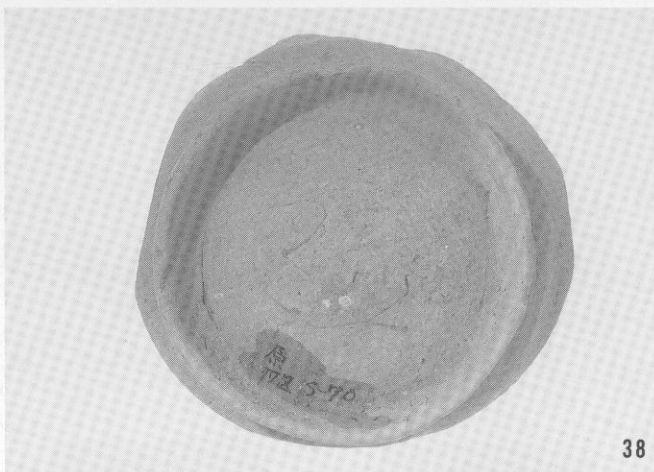
28



37



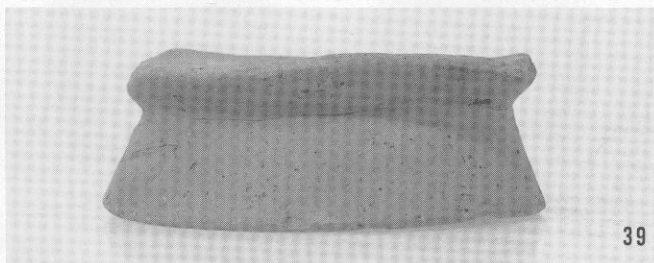
29



38



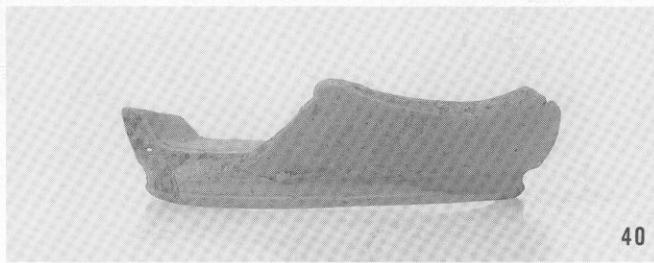
30



39



31



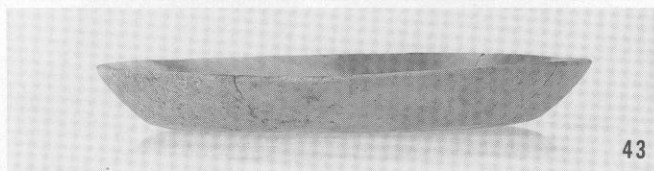
40



34



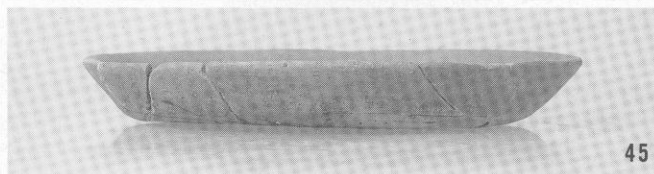
42



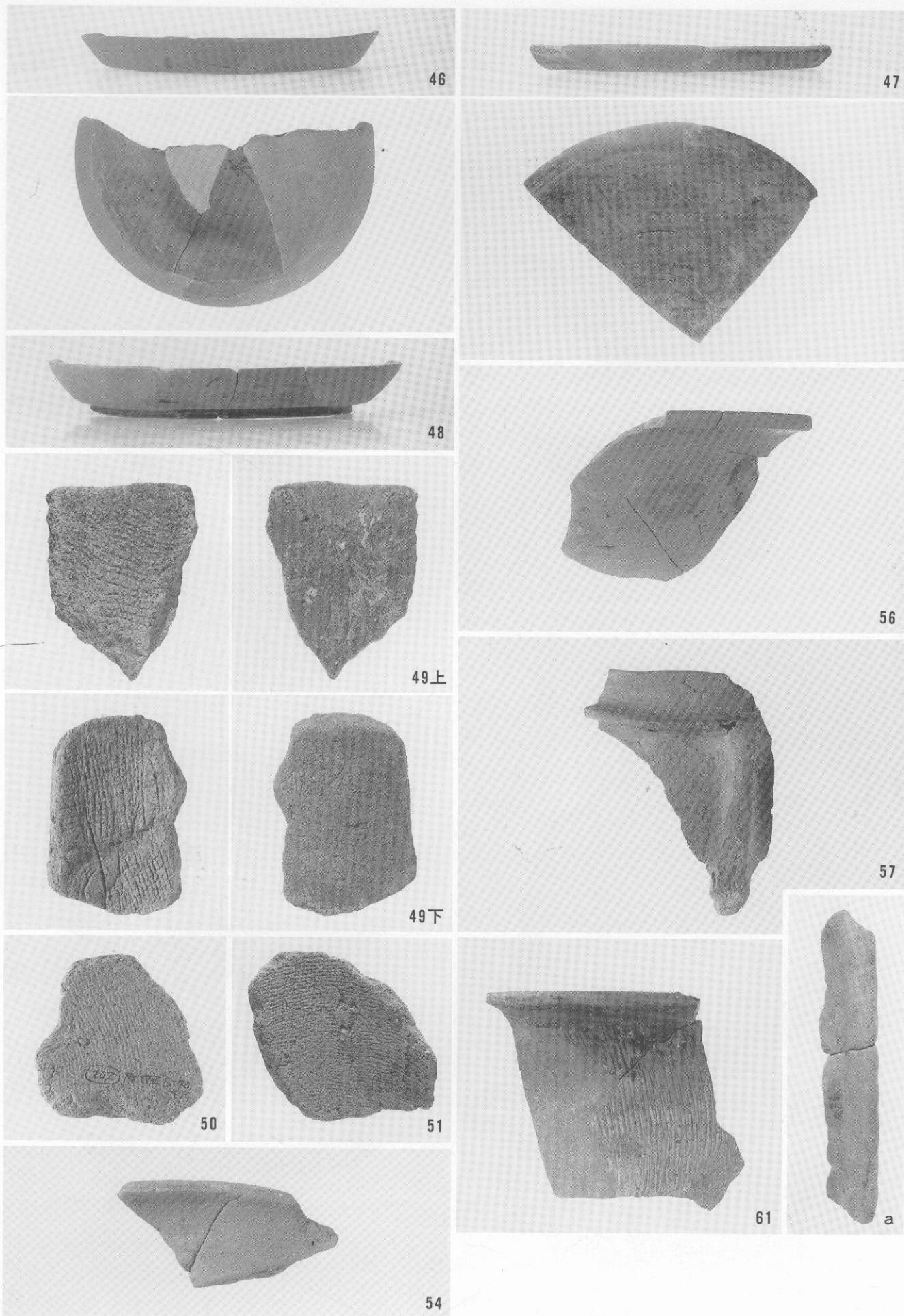
43



44



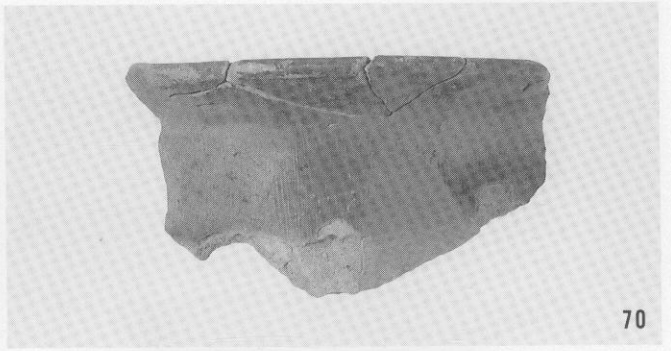
45



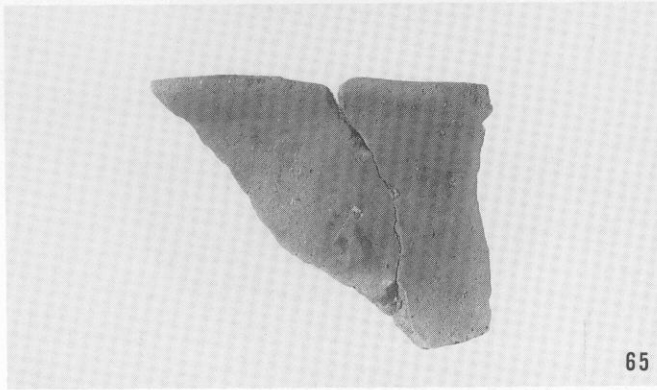
SD50出土土器



63



70



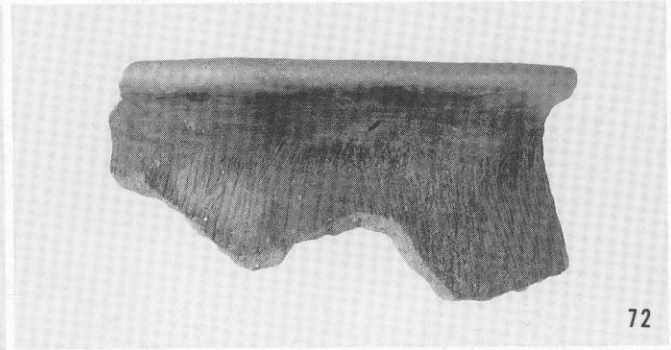
65



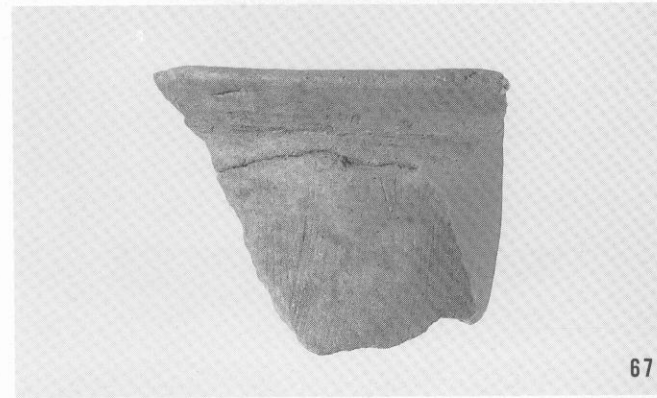
71



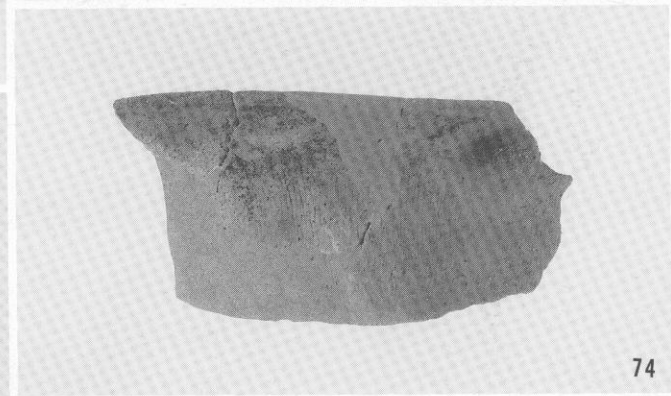
66



72



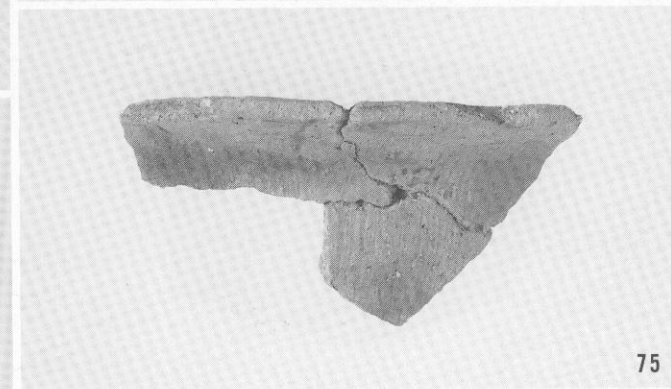
67



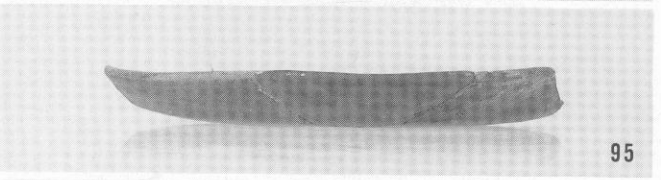
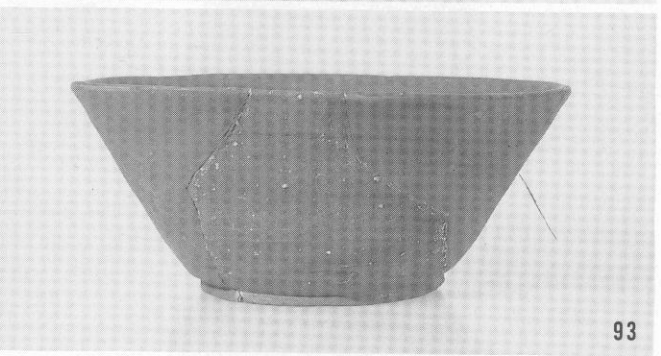
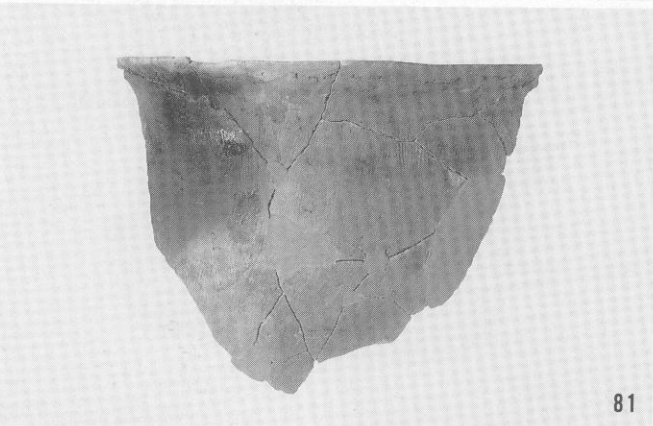
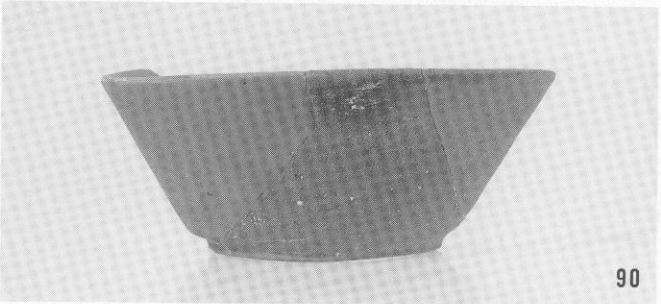
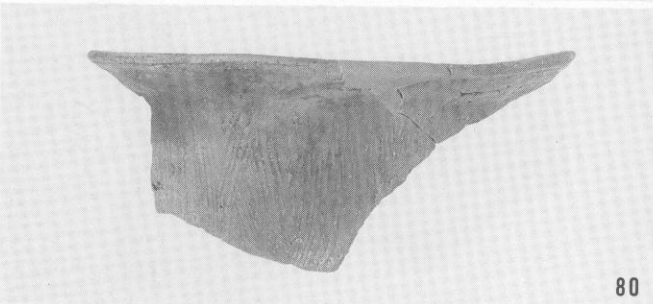
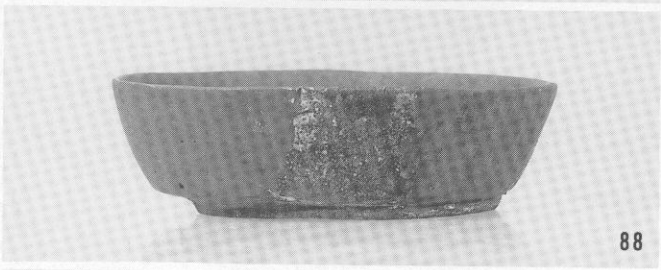
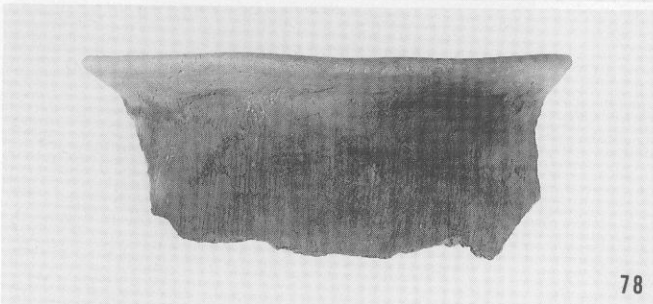
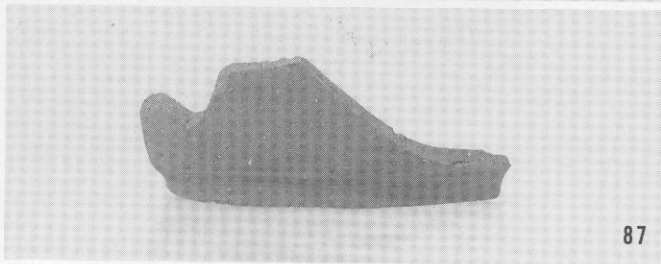
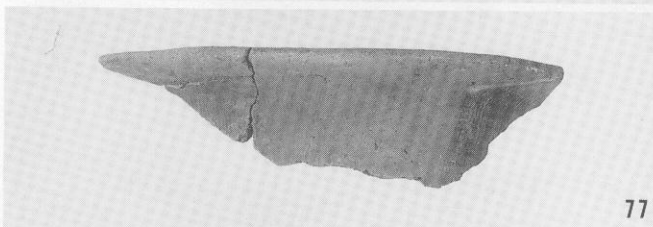
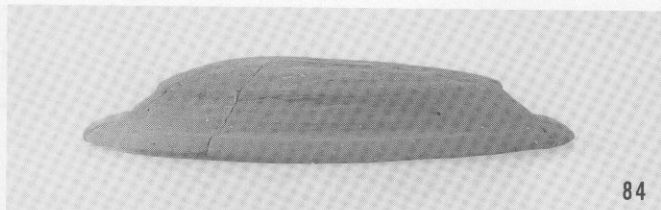
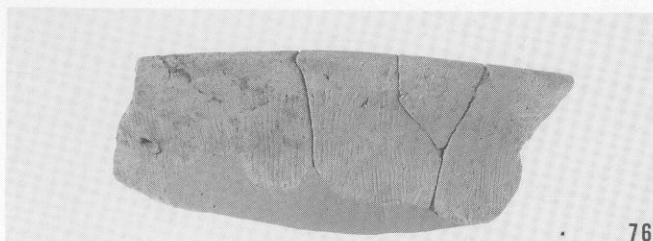
74



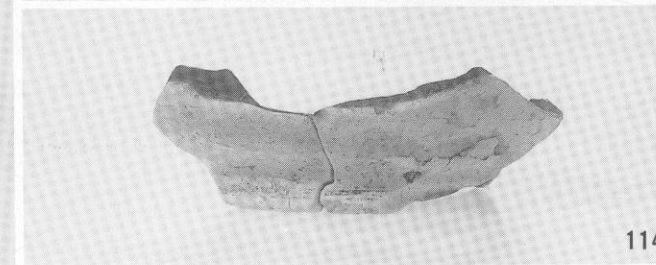
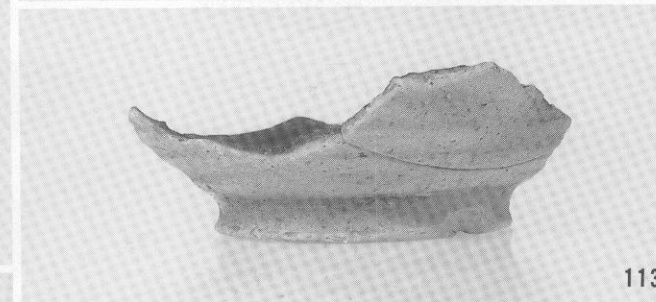
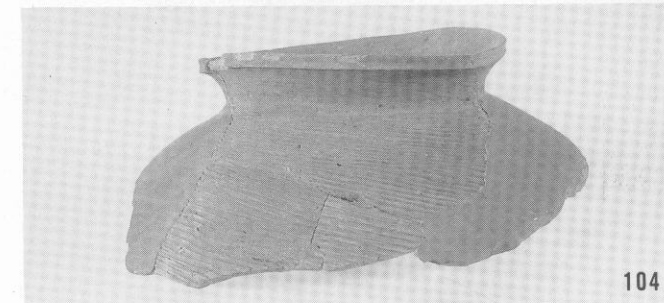
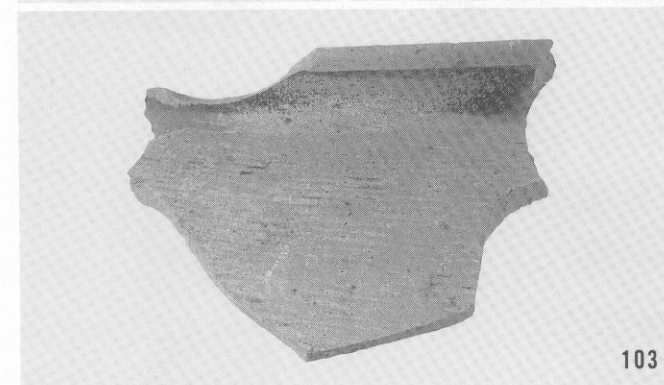
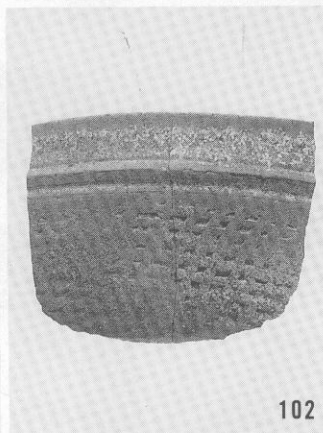
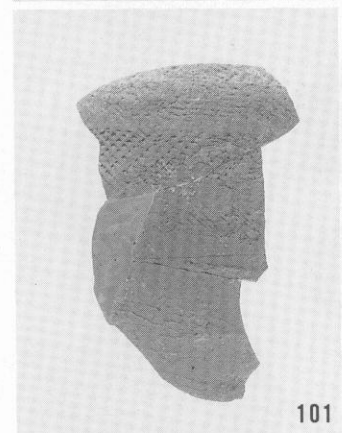
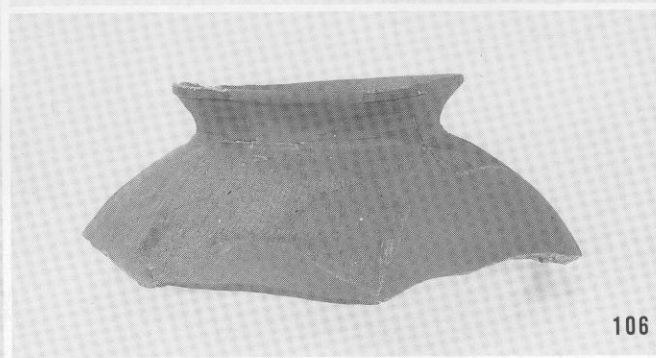
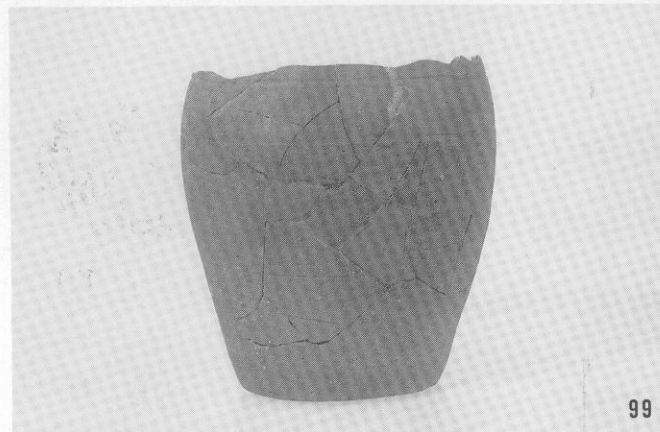
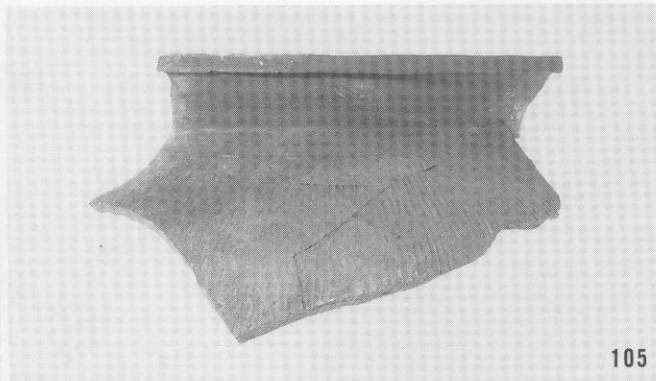
69



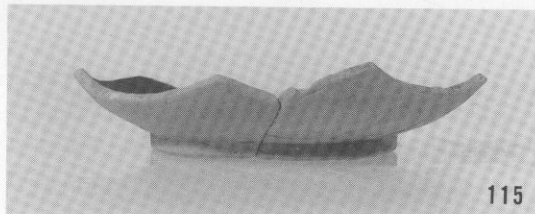
75



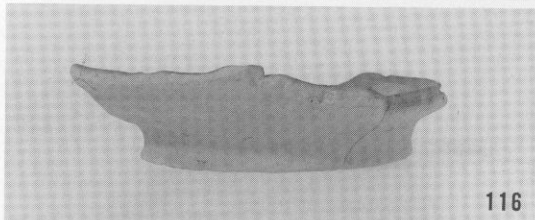
SD50出土土器



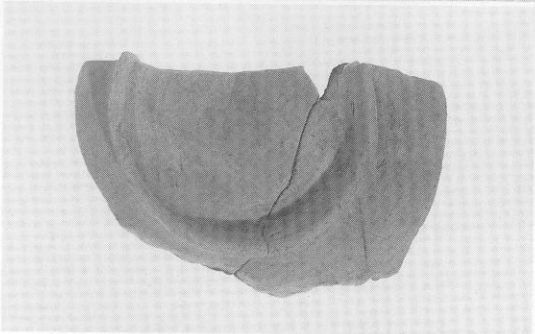
SD50出土土器



115



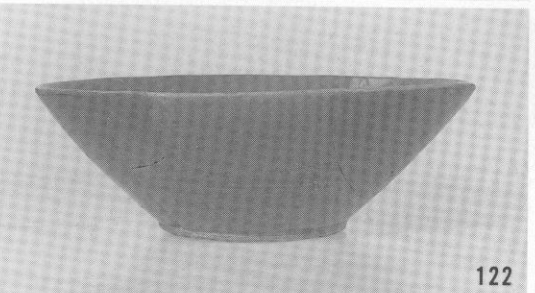
116



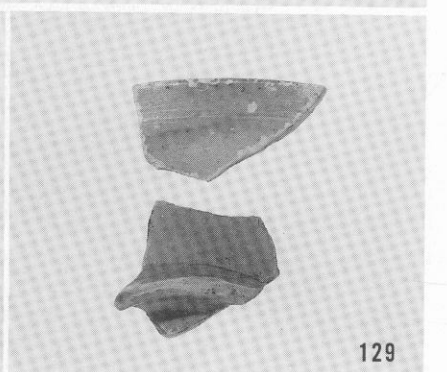
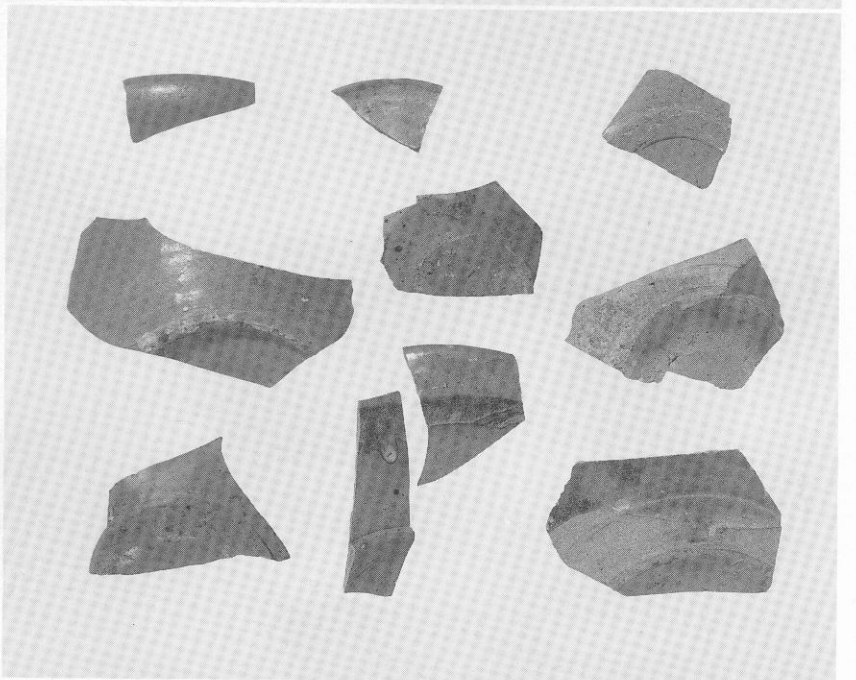
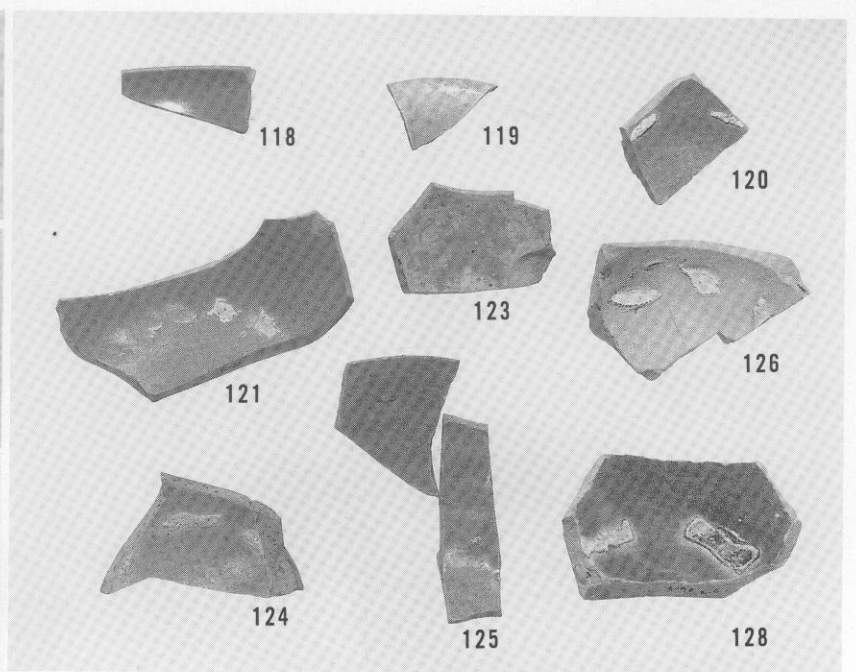
117



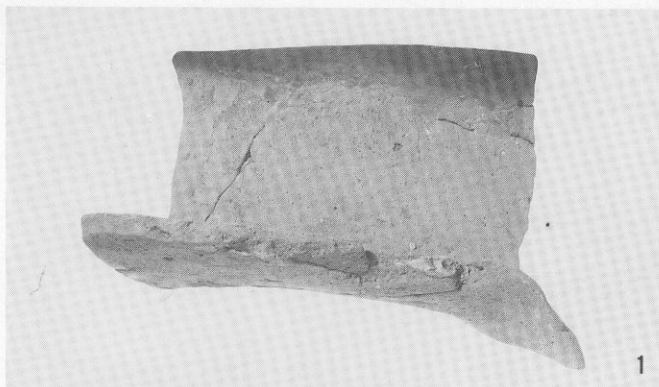
122



127



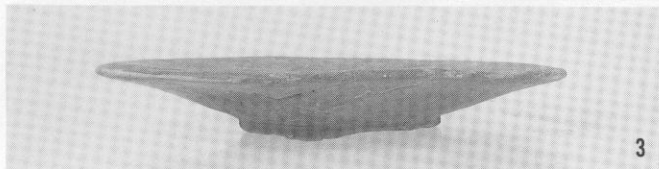
SD50出土土器・陶磁器



1



4



3



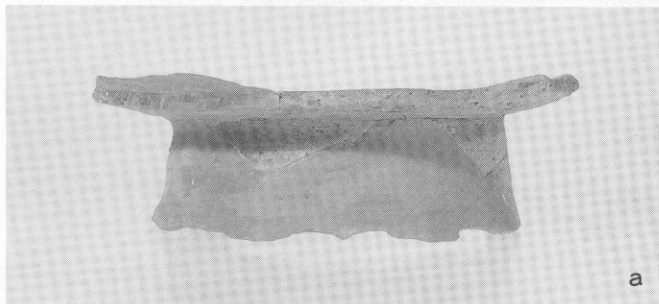
5



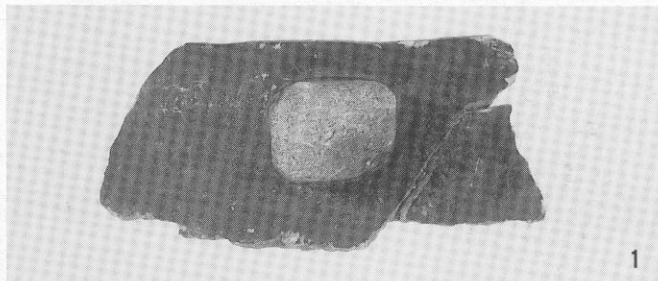
4



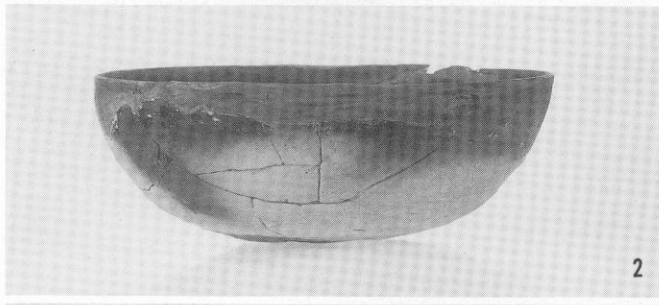
4



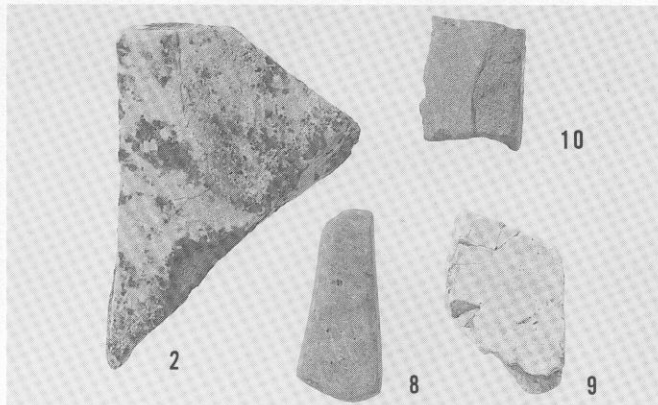
a



1



2



2

8

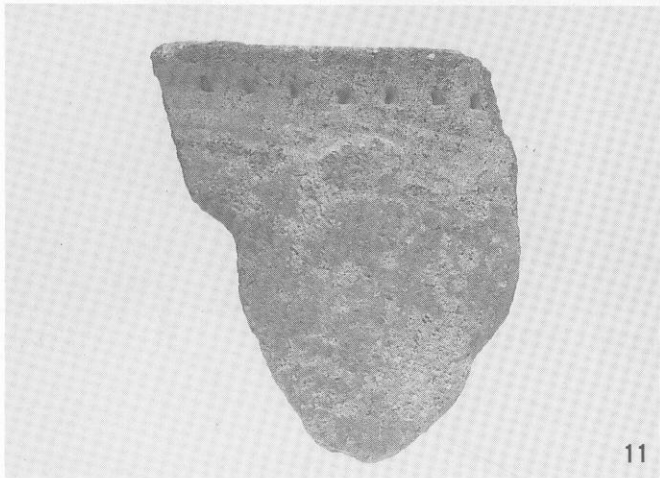
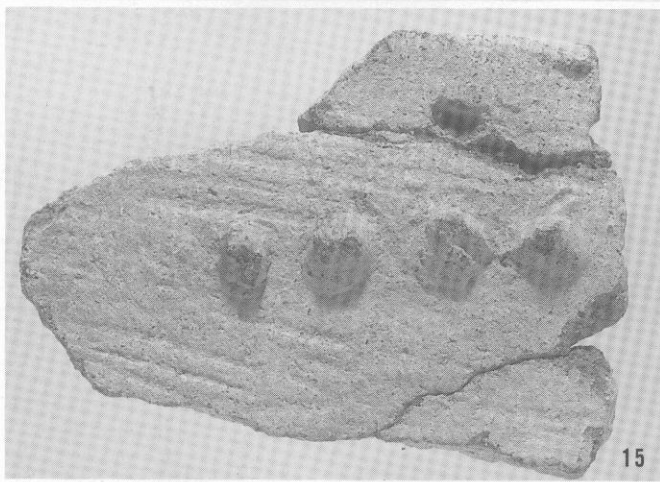
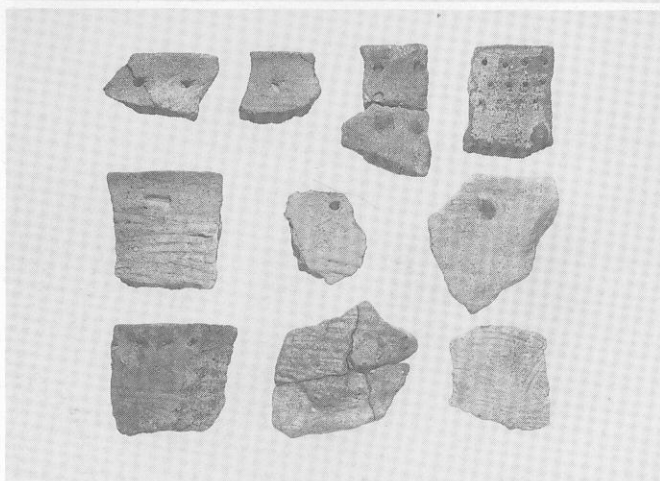
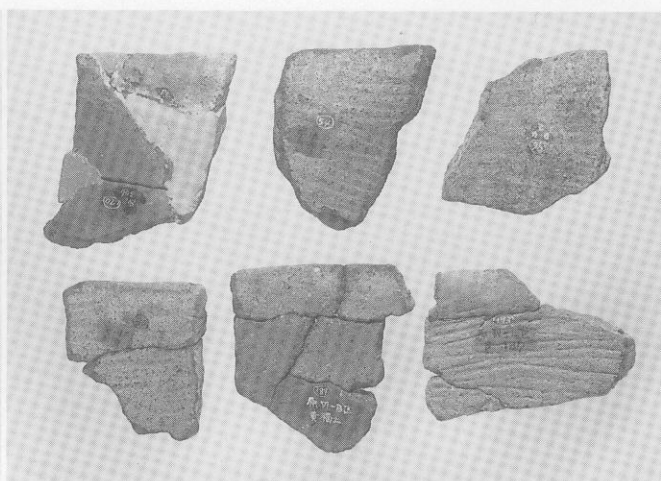
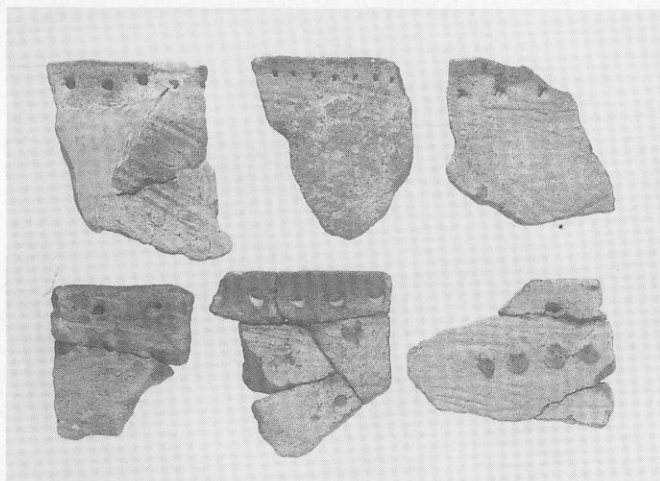
10

9

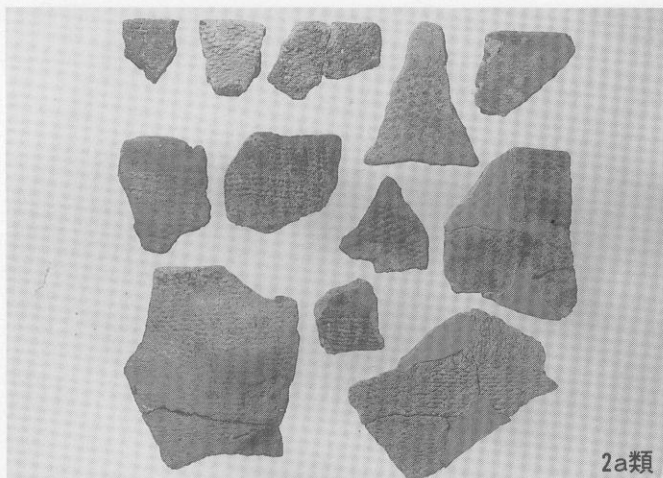


3

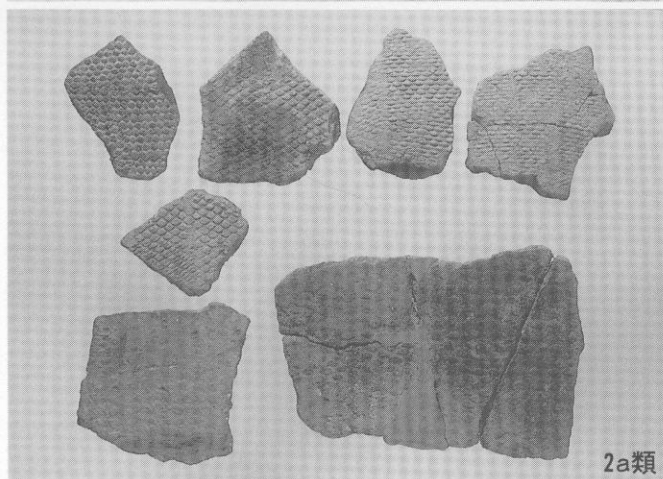
IV・V・VI区出土土器・石製品



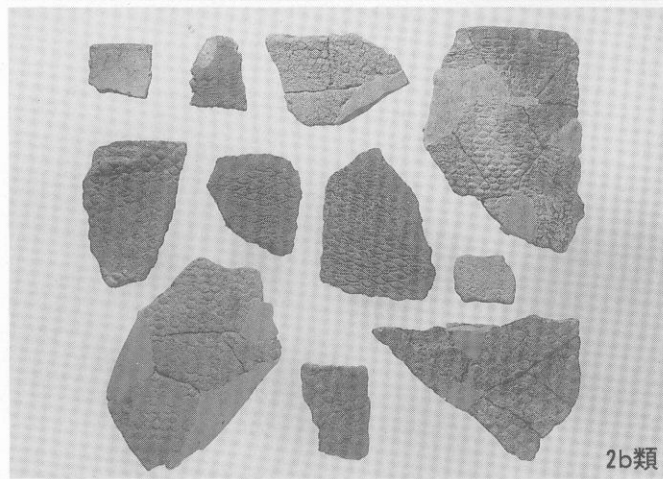
縄文土器 第1類



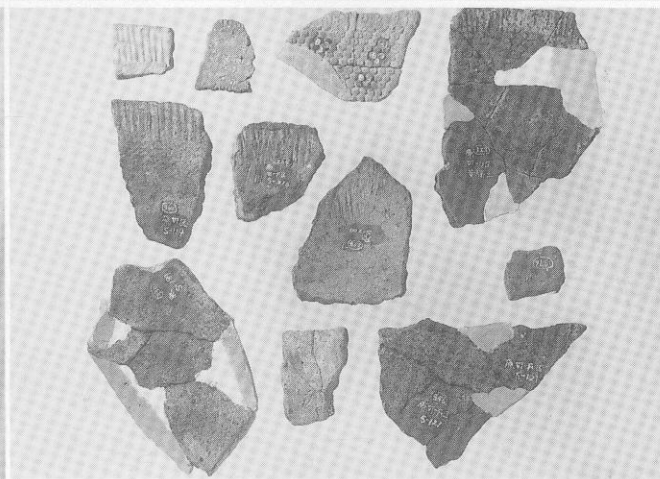
2a類



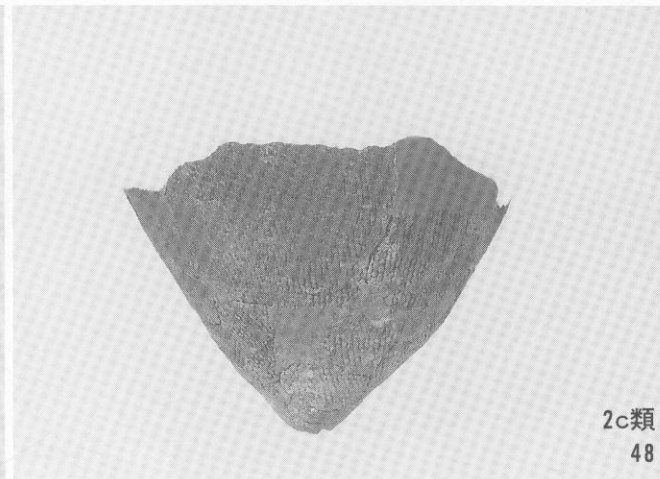
2a類



2b類

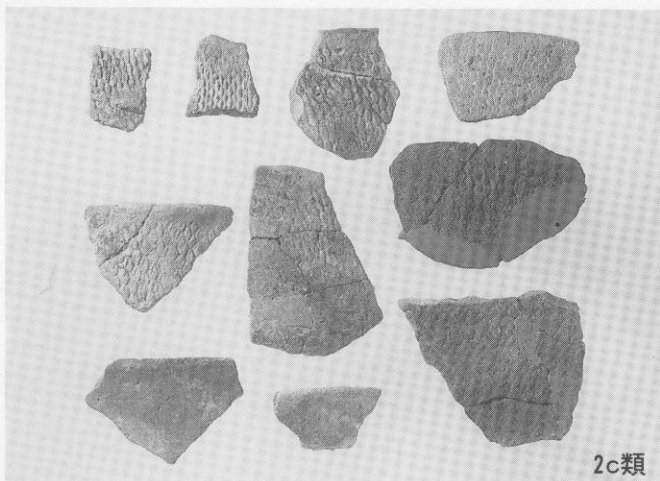


2a類
17

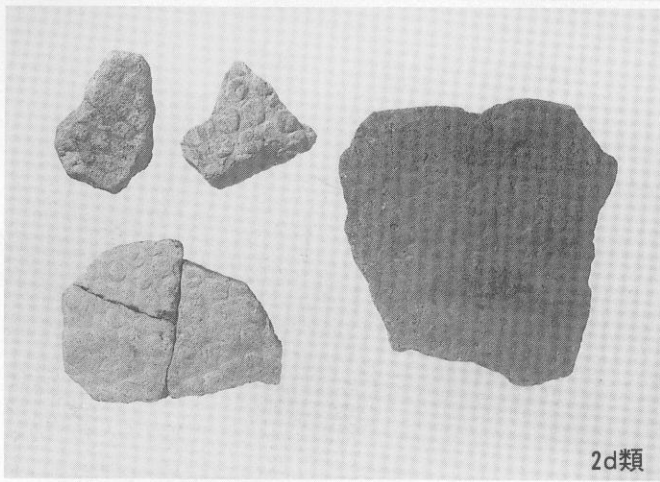
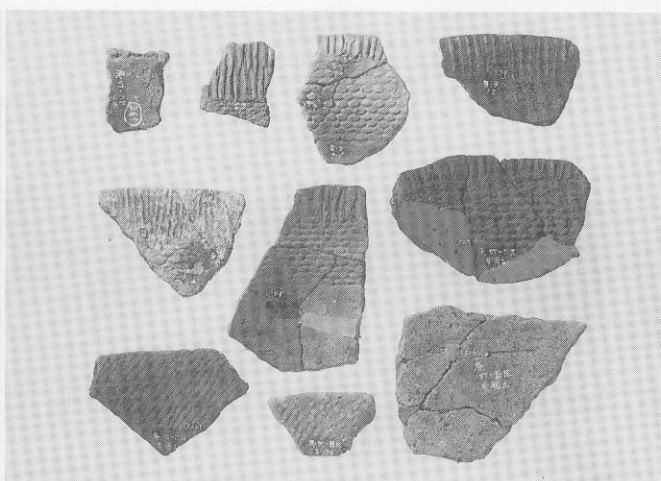


2c類
48

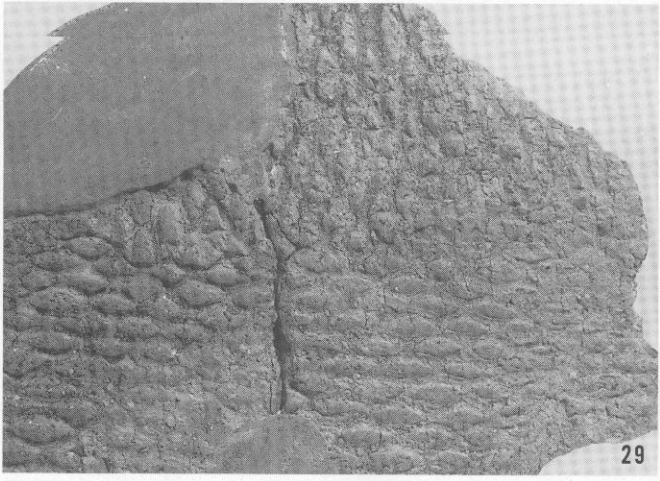
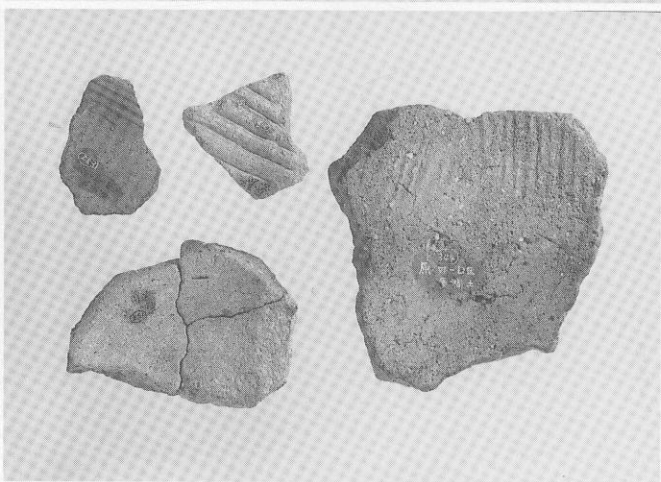
縄文土器 第2a・2b・2c類



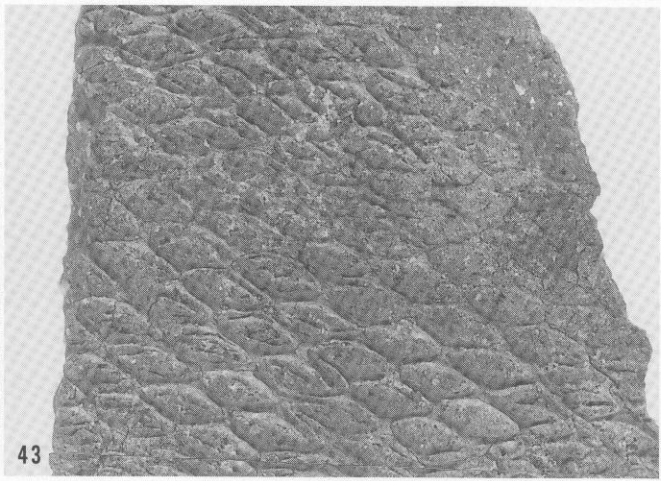
2c類



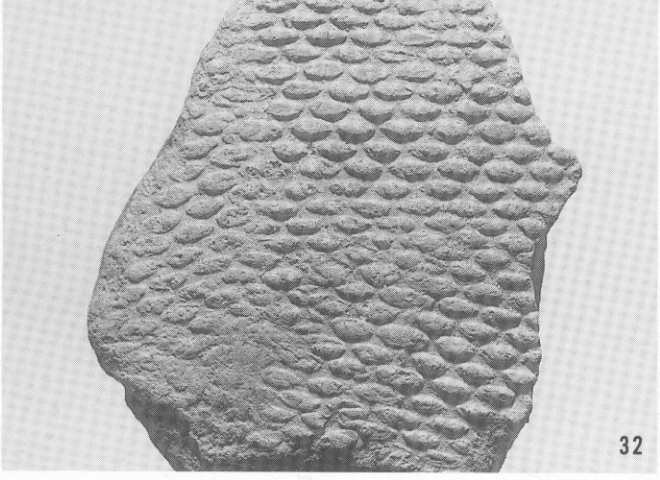
2d類



29



43

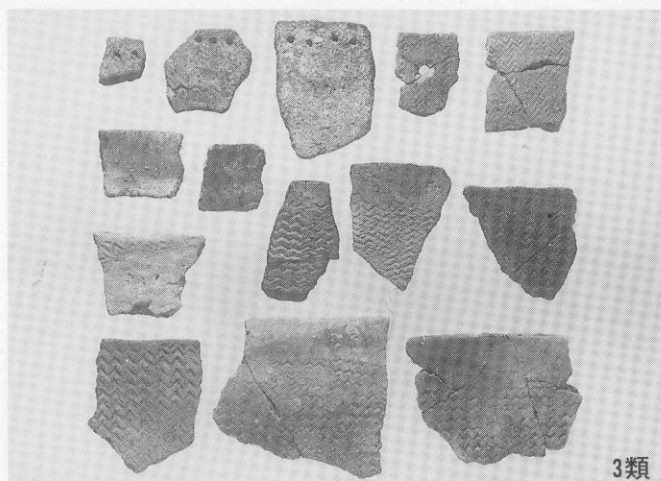


32

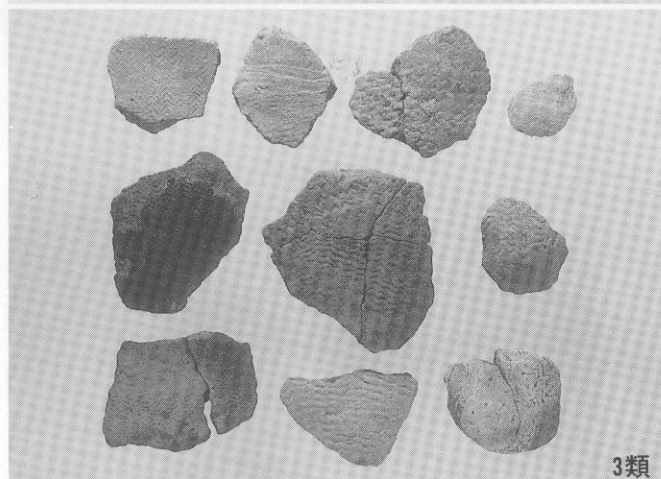
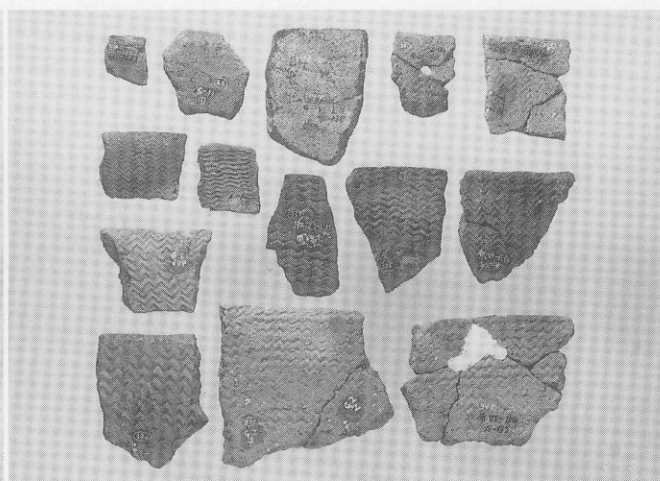


55

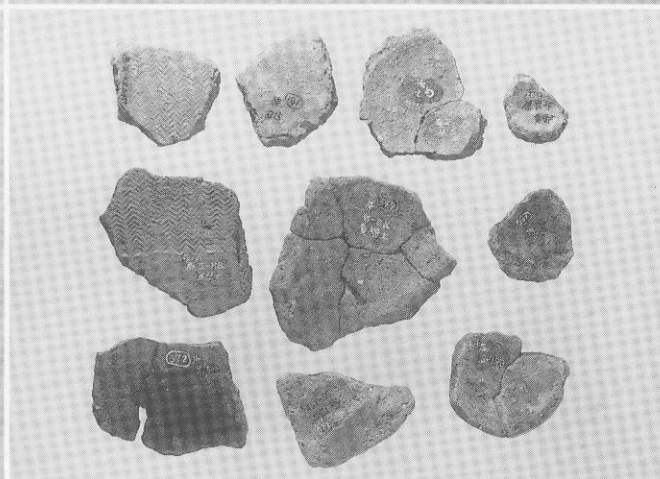
繩文土器 第2c・2d類



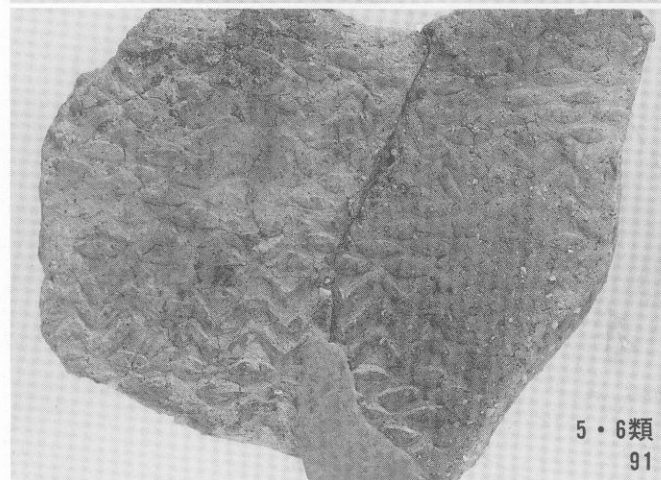
3類



3類



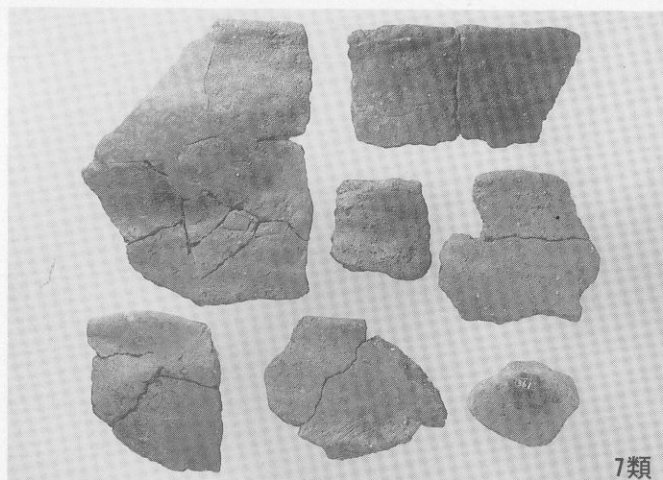
5・6類



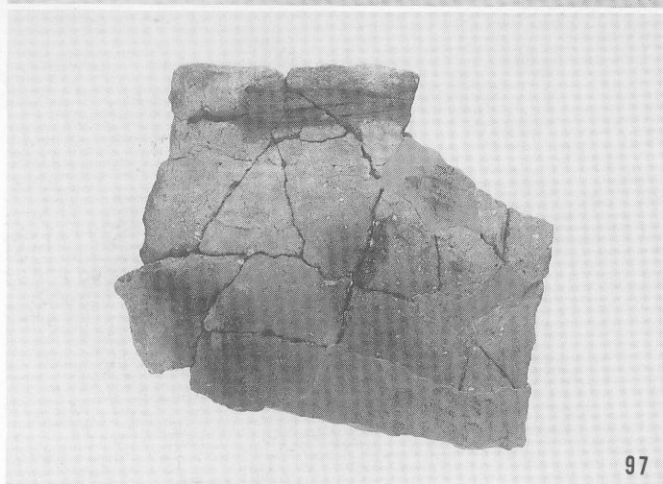
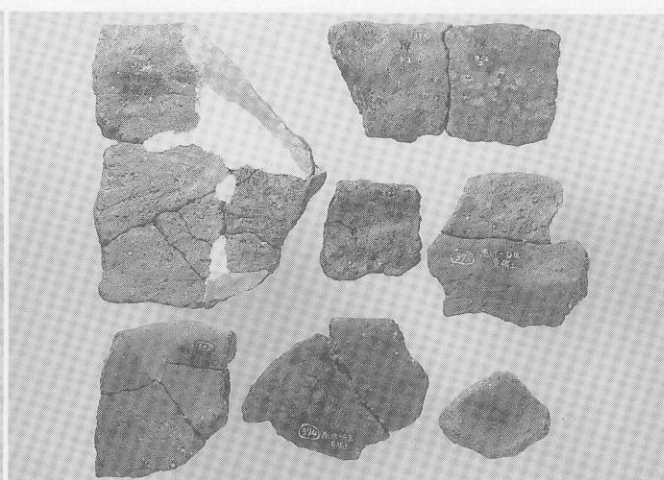
5・6類
91



91



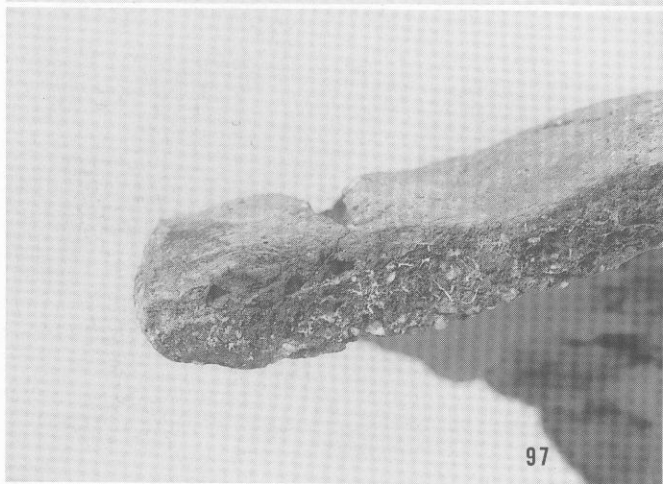
7類



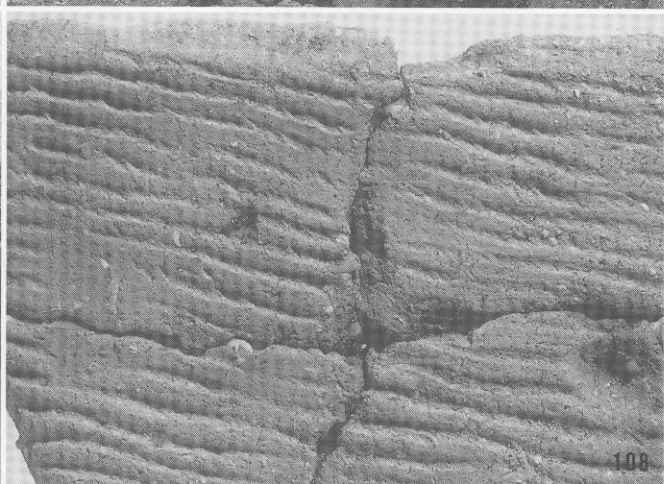
97



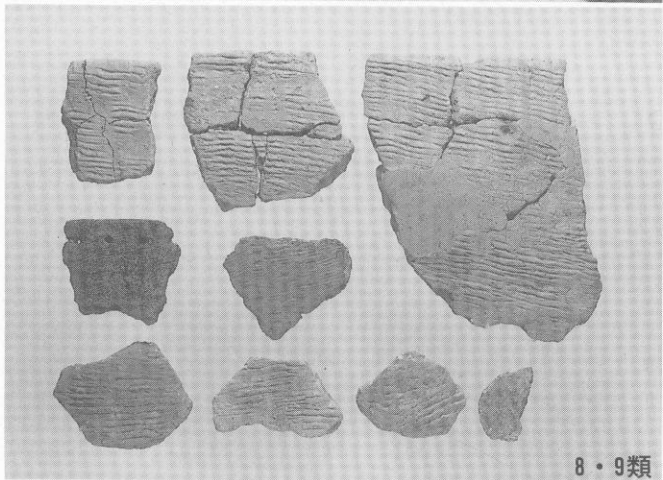
97



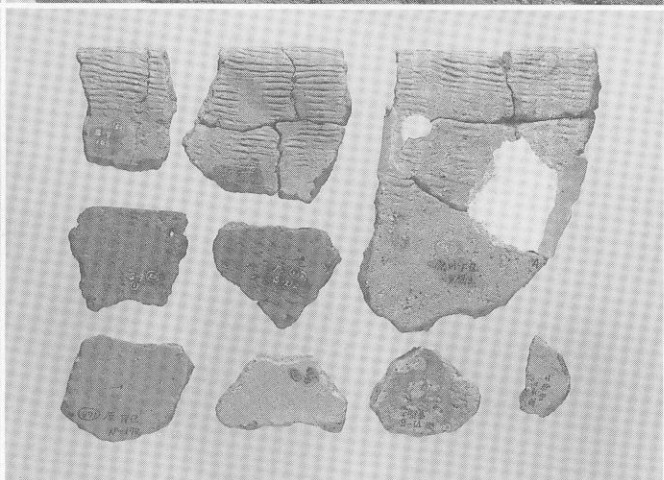
97



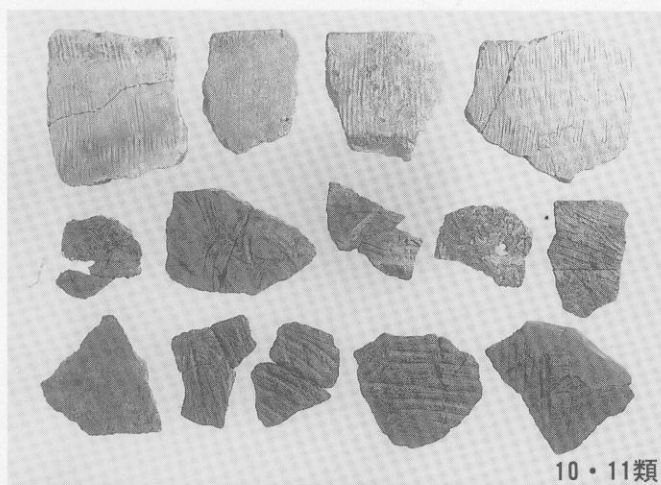
100



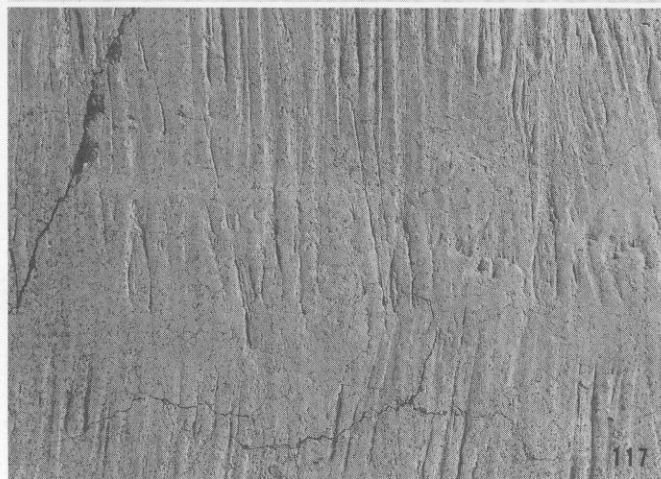
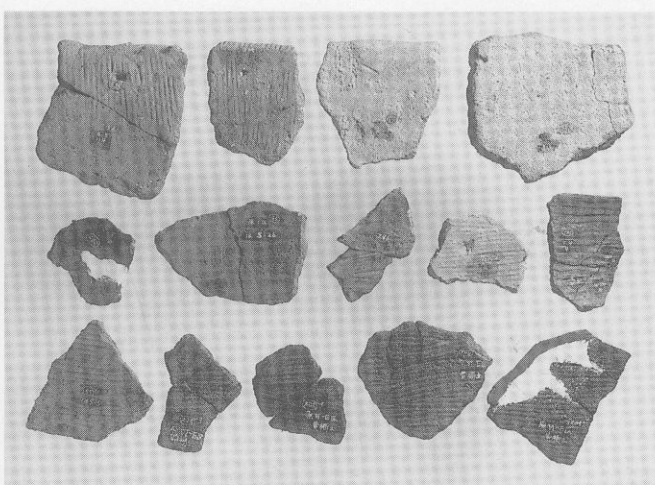
8・9類



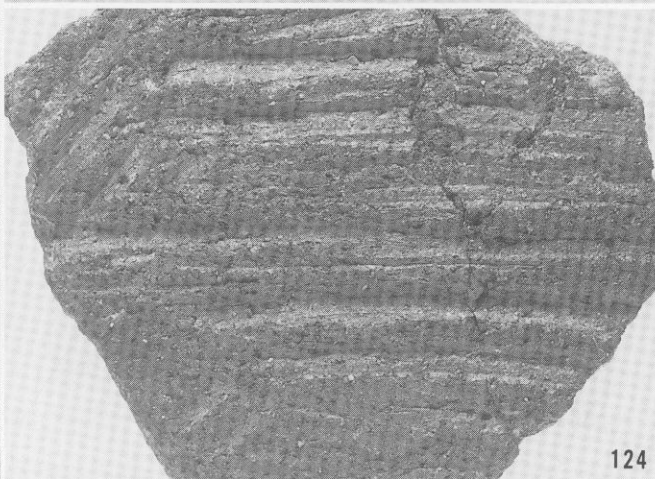
縄文土器 第7～9類



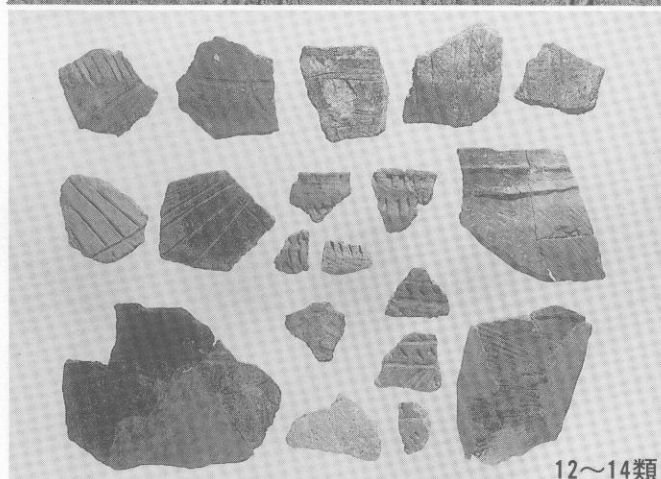
10・11類



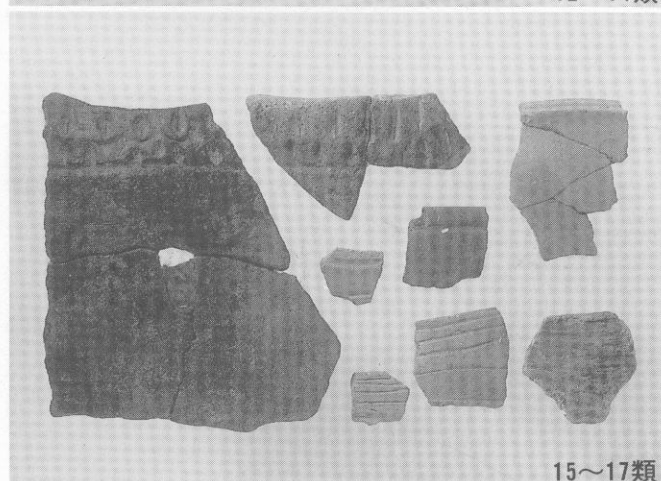
117



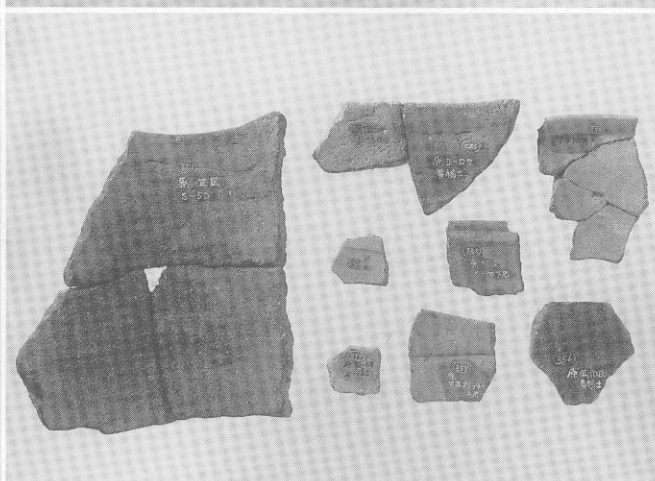
124

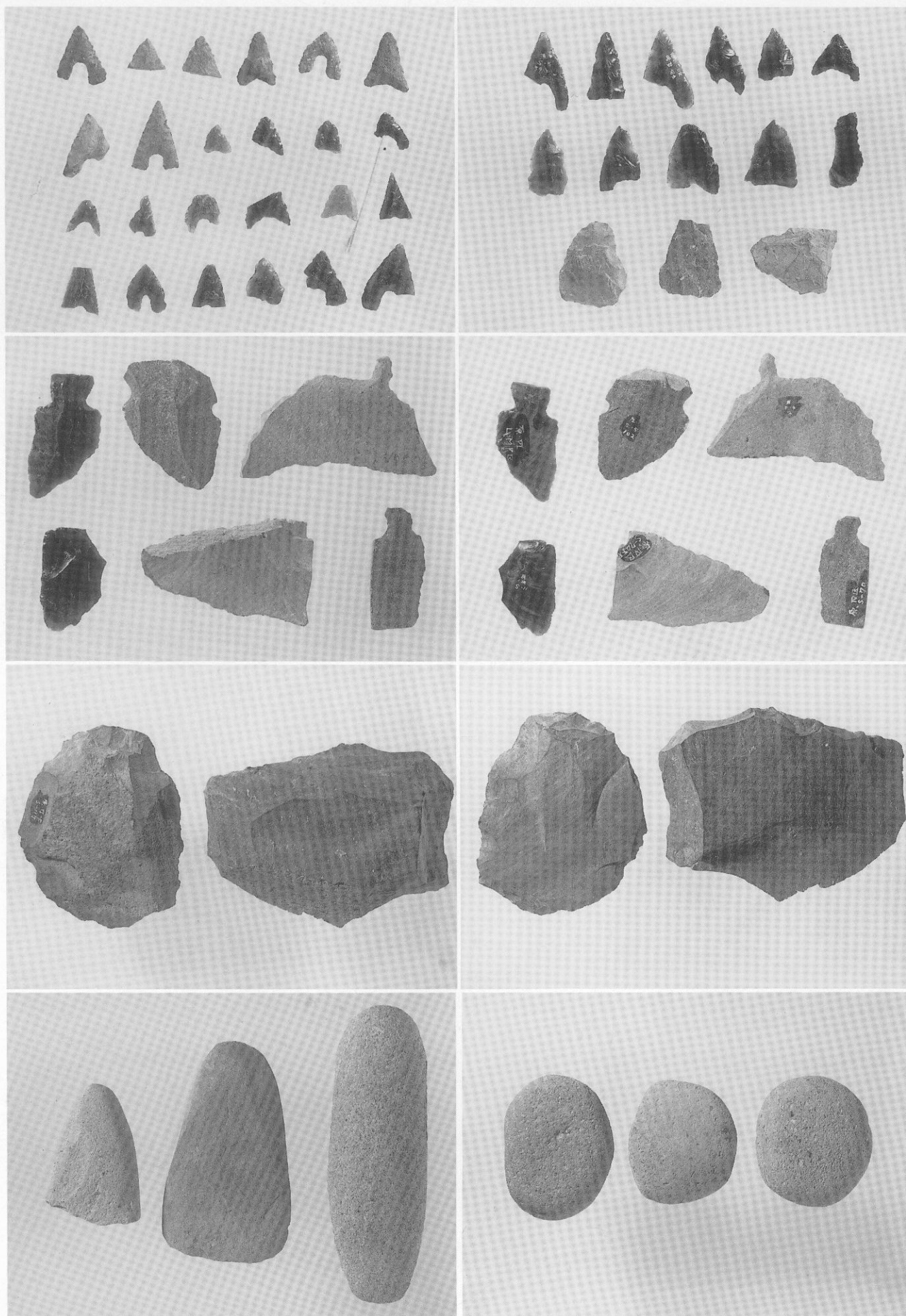


12~14類



15~17類





縄文時代の石器

報告書抄録

ふりがな	はるいせき						
書名	原遺跡						
副書名	県道筑紫野・古賀線関係埋蔵文化財調査報告						
巻次	1						
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第119集						
編著者名	赤司 善彦						
編集機関	福岡県教育委員会						
所在地	〒812福岡県福岡市博多区東公園7番7号 TEL092-651-1111(代)						
発行年月日	1994年 3月 31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
はる 原	福岡県筑紫野 市大字原	40217	33度 31分 10秒	130度 36分 44秒	19921027～ 19930423	5,000	県道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
はる 原	集落跡	縄文時代	石組炉 3 陥し穴 3 土壇 多数 包含層	草創期～晩期 } 押型文土器多数	宝満山神宮寺に関連		
	寺院	古代	堀立柱建物 2 溝 1	土器・陶磁器・石製品 瓦・墨書土器・銅製箸			

原 遺 跡

福岡県文化財調査報告書第119集

平成6年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 栄光印刷株式会社

福岡市東区松田1丁目9-30

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 H5	登録番号 11